文學士　齋藤清衞著

國文學の序說

四大國文學者の批判

東京　古今書院發行

序

廣島における文部省夏季講習會の席上で、わたくしが「五大國文學者」（紫式部、西行、兼好、芭蕉、漱石）といふ演題のもとに、貧しい研究の一端を講じてから、早くも四箇年に近い月日が過ぎてゐる。王朝時代、武家時代、南北朝時代、江戸幕府時代および現代の各時代から、環境の中にあつて自照の生活と表現を完うした代表的作家を、一名宛選出し、それら人々の個性の展開を叙することによつて、同時に時代思潮の流を遡らうといふのが、その時その講演の目的であつた。顧れば、當時、校門を出て未だ日淺く、學不足のわたくしの業として、その計劃があまりに大きくあまりに高きに過ぎてゐたことは今更省慮して、慙愧に堪へないことゝ信ずる次第である。

しかし、批評は一つの創作でなければならぬ――この一事は、その當時から、動きのないわたくしの一信念であつた。その際、わたくしは力限りに、わたくしの捉へ得た直觀そのまゝを公にした。しかも、月日と共に、またわたくしはその表現の中に、誤つた觀察や推論をしてゐることに氣付かされねばならなかつた。その度毎に、わたくしは顏を赧くした。どうしてそれを報償すべきかに思ひ惱んだ。しかし、やがてわたくしの心は喜悅の色を以て充たされた。それは何故であるか。

理由の第一は、わたし自身、わたしの生長を感得したからである。しかも、その上にわたくしを喜ばしたものは、わたくしの創造的法悅であつた。一たび、各文學者の生活が、眞面目さを以てわたくしの筆に上せられた時、すでに、わたしの描いたかれらの生活は、わたくしと無緣のものでなく、そのまゝわたくしの血肉に融け込んで來てゐた。かくてわたくしの生活は、それによつて、さまざまに彩られ得たのであつた。

今、こゝに、わたくしはその講演の內容に、補訂を加へて上梓し公にす

る。
　ひたすら、わたくしの獲た物を一般に頒ち、わたくしと他と喜びを共にしたいといふ念願からである。漱石論はこれを頁数の都合上本書から割愛した考證家は、なほ、本書中の叙事の疎漏を指的して批難を加へられるかもしれない。註釋家は、また、本書中の解釋の誤謬を發見して反問されるかもしれない。これら大方の情誼深い叱正はまた、わたくしの進んで、受けたいと望むところのものである。しかし、眞の評傳は、創作精神を俟つて始めて完成される――この持論だけは、わたくしのどうしても讓歩する餘地を持たない所である。わたくしは、この小著の中に、わたくしを生かしてゐる。それには何人でもないわたくし自身の姿が籠つてゐるからである。貧しい心のわたくしは、ルナンのキリスト傳や、メレヂコフスキのトルストイ論などを例證すること、それだけで冒瀆の行爲になりはしないかを怖れるのではあるが、つまりさうした評傳者の心持が今のわたくしにもある。たゞこの場合、わたくしを生かしたこの道が、讀者諸君を寸分でも共感せしめたなら、わ

たくしの喜びはこれに加へるものを知らないであらう。

拙著「國文學の本質」を公刊してから、一箇年の月日が過ぎた。されば本書は、わたくしの次男と呼ぶことが出來ようし、本年に於けるわたくしの心のモニユメントと見ることも出來よう。本書を題して「國文學の序說」となしたのも、この關係に出でた點が多いのである。前著に盛つたわたくしの藝術觀を、本書により、一層證認して下さる諸君があるならば、重ねて、鞭撻を賜はらんことを希つておく。なほ、前著に豫約しておいた國文學生活史の硏究も諸君の督勵と相俟つて遠からず完結され得るだらうと思ふ。

本書の刊行に際しては、再び、垣内松三氏の御手を煩はすところが甚だ多かつた。玆に記して、厚く謝意の一端を表する次第である。

大正十四年初春

齋藤淸衞しるす

國文學の序說目次

兼好

芭蕉

紫式部

紫式部、この一婦人の名はたゞちに、源氏物語を聯想せしめる。源氏物語、この一冊の書名はたゞちに、爛熟した平安朝時代と幽艶な戀愛文學を想起せしめるであらう。かくて世の人々の胸には紫式部といふ人名と、源氏物語といふ書名と、平安朝の幽艶な戀愛小說といふこの三つの言葉が、換言語(シノニム)であるかの如く響いてゐるやうである。まして、元祿時代の西鶴の作「好色一代男」と、この源氏物語とを竝稱して、わが文學史上の二大戀愛小說となし、閨秀作家紫式部と浮世草子作者西鶴とを、好一對として見るものさへあるやうに思はれる。言ふ如く、源氏物語は、一つの戀愛小說である。しかし、同時にそれが、好色一代男や好色五人女などゝ、甚だ、間隔のある戀愛小說であることを、私たちは、まづ以て銘記しておきたい。源氏は果して人々に精讀されてゐるか。世に、傑作名作と稱せられる作品で、却て、恣讀されてゐないものは古今東西しば〱ある。その中でも、源氏物語ほど高閣につらねられてゐる作物は他に無いと斷言していい。悲しいかな、この事實は、ます〱源氏物語の眞價を朧化せしめ、作者紫式部の偉大さを概念化せしめてゐるのではあるまいか。

英國文學史を繙いたものは、誰しも、リチャアドスンのパミラ(一七四〇年)が、小說の世界的開祖

として、その榮譽を擔つてゐるのを記憶してるであらう。佛國文學史家は、この說に異議を挾み、自國のプレヴォウやマアリイヴォの作品を始祖として擧げたけれど、かれらとても、十六世紀のものに過ぎない。しかも、パミラにしても、またプレヴォウ物にしても、小說の先驅者として果して、十分な價値があるかといふ問題になると、それは甚だ疑はしい。かれらより五百年餘の以前、東洋の一島國に紫式部の存したことに思ひ及べば、開祖などといふかれら文學史家の讃辭は如何にも片腹痛い。

源氏物語は、實に世界最古の小說である。しかも近代小說に比較して遜色のない大作である。それが一閨秀作歌の手によつて完成されたといふことは、世界文學史上、全くの奇蹟と評しても、過賞でない。しかも作者紫式部の人としての研究が、いまだにわが國に大成されてないのは、私たち日本人にとつて、何といふ寂寥さであらう、不滿なことであらう。こゝに、手掛りとしての史料の乏しい事實は、今更、如何にとも致し方はない。しかし、私たちは、この源氏物語や紫式部日記の中から、何とかして紫式部の心境を求め來り、大鏡や榮花物語等の歷史物、伊勢や宇都保等の物語物から材料を獲て、これに肉づけをさへ、かれ紫式部を髣髴せしめる像を作りあげることは出來ないであらうか。

あゝ、紫式部、その名があまりに一般化されてゐるに反し、その姿は極端に茫漠である、われ／＼に幻影をさへ思ひ描かしめない。わたくしは、かの女に憧憬れつつこれから、深山幽谷にその姿を尋ね入らうとするものである、しかしわたくしの探求も遂には水泡に歸して、先人の到つた以上に一歩

も踏み出し得ないかもしれない。すべての試策が、無暴の擧に終るかもしれない。それでも、僅かに出來上るかもしれない浮彫の一本の手、一本の蹠の習作にさへも、わたくしの全生命は籠るであらう。しかもこの力が、最後の扉の前でわたくしの倒れるまで、諸君を案内し得たら、どんなにわたくしは歡喜の情に慄ふてあらうか。わたくしは、涙にぬれた手て、諸君の手を硬く握り得るであらう。

もし、國文學史の第一隆興期を、萬葉集の中に求めるならば、その柿本人麻呂の生存してゐた持統文武兩帝の藤原朝時代は、あたかも西暦七世紀の末で、東ローマ帝國がサラセン族との交渉に惱んでゐた時代であつた。その世に、わが祖先がすでに萬葉集中の絶品を詠みえたといふことは、わたくしたちの、甚だ心強く思ふ點であるが、一方それら歌人の傳を詳かになしえないのは、甚だ遺憾とする所である。しかし、わたくしは敢て、人麻呂や赤人や旅人や家持の傳記を求め、その個性を描き出さうと望まないのは、どうした譯であらうか。

言ふ迄もなく、萬葉集には、ひろく國民性の反映があり、時代の空氣の浸潤があり、個人的主觀もさまざまに詠出されてゐる。さりながら人麻呂の長歌すら、われわれは、かれ自身の性格を度外視して、充分鑑賞し得てゐるやうに思ふ。ましてや、多くの相聞歌において一々作者の傳を究めずとも、一つの民族詩としてそれを味はひうるのでないか。かくて赤人や旅人の作には、それぞれ、その性格

と稱すべきものは出てゐるであらうが、萬葉集の歌は、纖細な個性の綾をいまだ、その中に織込んではゐない、また、ホーマーの叙事詩のやうに民族精神を充分歌つてはゐない、ただ、萬葉集は一國民詩の俤を持つてゐる。また、一大抒情詩集と言ふべき姿をのみ持つてゐる。

時世は、奈良朝から平安朝へと展開した。こゝに、第二の文學隆盛期とも見られる延喜時代が擡頭する。かの古今和歌集が勅撰されたのは、十世紀の末期に屬し、平安奠都より一百年餘を經、藤原氏の權勢はこゝに治定し、その政策も劃定してきた。偉才紀貫之が現はれて、勅撰第一集として恥づかしからざる古今集を撰進した事實の背後には、かゝる時代の影響が存する

萬葉集の歌は、粗樸、古今集の歌は、巧麗、かれには赤裸な眞情の流露があり、これには床しい風流の吟咏がある、かれは男性的、これは女性的――およそ古今調は、萬葉調と對立してゐて、また別種の趣致に富んでゐる。しかし、個性の顯現に乏しく、餘りに平板の調子に偏しすぎた點は、前說の萬葉調以上である。貫之と躬恒の距離の遠くないことは、人麻呂と赤人の比ではない。總じて歌は、古今調に及んで、いよ／＼平坦な抒情主義に墮してしまつた。

これは、單に、詩歌の上においてのことのみではない。その時代までの作として傳はつてゐる小說類や日記類のものにしても、一種の筋の上の味や漠とした心持だけは出てゐよう。しかし、作家の個性（インヂヴヒヂュアリチー）の表現においては、なほ絶無とさへこれを言ひたいのである。性格といへば、ほとんど、それ

は類性氣質(かたぎ)である。何等作家の俤が、作品の中に喰ひ入つてゐない。そこに自己が生かされてゐない。

しかるに十一世紀の初頭、文字通り破天荒の傑作源氏物語が顯出した。しかもその源氏物語は、表現された紫式部その人の相である。アンナ、カレニナの一字一句に行きわたつて トルストイの呼吸が感ぜられるやうに、源氏物語の隅々まで張りついてゐる作者の魂を見よ。それは二體同心とでも言ひたい。作物はそのまゝ作者の權化となつてゐる。

「作よりも、まづ人を」といふわたくしの國文學研究出立の門出において、人麻呂よりも貫之よりもこの一閒秀作家が、わたくしを捉へたことを、諸君はこゝに諒解して下さるであらう。これ、わたくしが、文學者の研究の第一人に紫式部を選んだ所以である。

泰西にあつては、あだかも、東ローマ帝國がいよ〳〵最隆盛期に入つた時期。支那においては太祖宋の國を建てゝ二世太宗の卽位を見た時期において、わが紫式部は、この國土にその生を享けたのであつた。紫式部の生年に關する確實な資料はこれを求め難いのであるが、大日本史の說によれば(逆算によつて)天延三年(皇紀一六三五)となり、安藤爲章の推定によれば、長保二三年の交(皇紀一六三七——一六三八)といふことになつてゐる。これらの說は、紫式部に關する種々の事實と殊更、矛盾を引きおこさないから、暫らく本章においてわたくしは大日本史の說によることにしよう。

つぎに、紫式部の履歴について、それも遺憾ながらこゝにほとんどこれを知ることが出來ない。假に天延三年説を採つて述べると、廿七歳の時（長保三年）夫、左衛門權佐宣孝を失なひ、卅一歳（寛弘二年）の頃、中宮のもとに出仕したが、とかく憂ひ氣味て、つねに里の方に住みがちであつた。中宮に、文集の樂府を御教へ奉つたとか、道長が式部に言ひ寄つたといふことなども出仕中の出來事なのである（現存の紫式部日記と稱するものは、寛弘五年七月から寛弘六年一月十五日までの斷續的記錄にすぎない）

式部がいつ出仕を辭したものか、また、出家したことが事實ならそれは何歳の時であつたか、これらに關しても何等考證すべき根據がない。これは式部研究に當つて誰しも望洋の嘆を繰更したところであらう。しかし、正傳の缺除といふ障碍が、殊に式部の生活研究において、それほど甚しい支障とならないことは、ましてもの慰めてある。それは、かの女が一人の詩人歌人でなく、小說家であつたからに外ならない。また、斷片とは言へ、極めて貴重な紫式部日記の中に、かの女自身の綿密な心跡を遺しておいてくれたからに外ならない。

紫式部の傳記に關する新しい史料の發見されない限り、永久に式部の少年時代の模樣、宣孝と婚姻した次第、源氏物語製作の年代、源氏以外かの女の創作に關する諸問題、晩年のかの女等――各項について明確な推斷を下すことは出來ない。さりながら、一度、源氏物語を通讀するものは、誰しも眼

前に髣髴として浮び出る作者紫式部の俤を認めずには居られまい。しかもその俤たるや、われ〳〵に迫つて來、さらに、われ〳〵に話しかけてくれる。そこからわれ〳〵は、式部の若い日の姿、老後の模樣さへも充分想像し得られるのではあるまいか。

まづ、わたくしは、この式部論において、かの女の環境から筆を進めて行くことにしよう。

紫式部の環境について、これを概說すれば、貴族的といふ一語が最も適應してゐるやうである。平民(下素)的、庶民的ならざる貴族的、高踏的の精神である。すなはち、紫式部の生存した社會そのものが貴族階級であり、かれらの態度が高踏的であり、かれらの時代が、貴族趣味の爛熟したものであつた。さてその時世相を要約して見ると、

一、かれら貴族は、名譽心の滿足のために、ひたすら全生命をも賭してゐた。

貴族的好尙は、いつの世としても變りはない。かれらには確實な生活の保證があり、糧を求めるためには、今更寸耗の勞力をも要しない。鎌足が藤原氏の基礎を築いてから、すでに三百五十年の歲月を經した當時、藤原氏一門の施政的階級と、一般の勞働階級との間には截然とした差別が成り立つた。施政階級者は官職相當の應酬に依つて、寢ながらにして納稅の分配に預ることが出來たのである。

しかし、生活難を知らなかつたかれらには、高位高官に對する不斷の野心と、榮譽を獲るがために、

日もこれ足らないほどの焦心さがあつた。しかも人才登用が行はれずして、ほとんど、情實によつてのみ採用も非免も行はれたために、官界は姦策と陰謀の巣窟であつて、到るところに嫉視怨恨憤懣傷心の叫のたえる暇がなかつた。

殊にも、最高官の交迭は、全官界を震駭せしめた。藤原氏にあつて攝政の先例を開いたのは良房である。かくて次々の攝政は、幼帝を冊立しては、その外戚者の榮譽を負うて、全政を裁量した。故に顯官にあるものゝ第一の望はまづ容貌秀麗の女を產むことである。つぎにはその女を后妃として入内せしめることであつた。さて皇子を生ましめ奉り春宮の外戚となり攝政に登ることがかれらの最後の目的であつたので、その遂行のためには、兄弟叔姪間の親和の道も同族互助すべき策もこれを捨てゝ省みなかつたのである。近く兼家は、兄の伊尹や兼通を凌いで最も榮え、紫式部の世には、兼家の長男道隆一派の權勢は、全然末子道長のために奪はれてゐた。榮花物語の「見はてぬ夢」の卷は兄弟墻に鬩ぐさまを描いて極めて周到である。しかし「浦々のわかれ」や「鳥邊野」の卷は、いかに道隆一人の失脚が、その一統の人々に脅威であつたかを細寫して、讀む者をしてそゞろ時弊を痛嘆せしめずにはおかない。源氏物語の筋にあつても、外戚權が三變する。それが、見られる通り、各派の人々にそれぞれ濃い陰翳の綾を織出してゐるのである。

紫式部は、御堂關白道長が皇后彰子の外戚として、一條帝と彰子皇后との御間柄については榮花物

語のかゞやく藤壺の巻を參照あれ）權勢並ぶものゝない時代、後宮に奉仕したので、いかに多くの女官が彰子の勢力下にあることを己が誇りとしてゐたかは、榮花物語の「かゞやく藤壺」中の「侍ふ人々『あなめでたや、この世のめでたき事には、只今の我等がまじらひをこそせめ』とぞいひ思ひける」といふ一節だけで充分釋明されるだらう。

しかし時を得て輝く者の背後には、運命に泣く中宮定子の如きがあり、その女房淸少納言の如きがあることを認めなければならない。しかもかゝる暗い運命がまた道長一派の上にも來るだらうといふことをも、誰が否定し得るであらうか。

この貴族的名譽心は、また、日常の諸生活に大きい影響を持つてゐる。すなはち、かれらにとつて己が行爲は、その正否の問題より、まづそれが物わらへになるか、ならないかゞ重大事であつた。源氏物語において感ずることは、婦人には、いまだ完全な貞操觀らしいものが生じなかつたことである。しかも、たゞ、かの女たちの怖れたところは他の思はくであつた。浮舟なども「下すなどの塵ばかりも聞きたらんにいと甚しからんと言ひゐたる心地おそろし」と、言つてる通り、匂宮に關係した身を薫大將に知られるより、むしろ世の噂にのぼる事を恐れてゐる。もつとも通信機關の絶無の時代であるが、貴族連の一身上の動作が、意外に早く臣下や庶民の噂に上つたことは、源氏物語に依つてこれを知り得られる。口さがない京童部は、武家時代も王朝時代もその點に變りなかつたものらしい。源氏

の君さへ、夢見を信ずるとては「人わらへ」を氣にし（須磨の卷）己が戀の果されないについて一交野の少將にさへ笑はれむ」とも獨言てゐるやうに、當時の人々の主眼としたところは、己が行ひを如何にして物わらひの種にならないやうにすべきかといふことであり、從つて如何にしてわが名聲をより高くすべきかといふ事が、一生の大目的であつた。

こゝに婦人の悲劇の大部分が、夫の地位を目あてに結婚するその淺はかな名譽心に兆してゐたことも當然であらう　源氏物語の東屋の卷で、浮舟の母がわが子に心から洩す述懷遺訓は、恐らくこの意味に苦い經驗を嘗めさせられた當時の女の等しく抱いた心であつたであらう。

二、次にかれら貴族の生活は、しば／＼戀愛三昧的のものであつた。

戀愛關係は、いつの世、いづれの處にも斷えず存してゐよう。しかも戀愛の諸相に、それ／＼時代的反映もあれば、個人的差異も現れてゐる。菟原少女を戀した奈良朝時代の二青年が、刄を交へ生命を賭さうとした眞劍さと、白金の目貫の太刀を佩いて、顏には粉飾をさへ施し、夜な／＼女房の局に戀を漁つてゐる平安朝貴公子の戲態との間には雲泥の差別がある。赫射姫をそれ／＼戀した五人の男子が、姫から與へられた難題を果さうとして失敗を演ずるといふ筋の竹取物語には、世相に對する皮肉觀が見えるではないか。一夫多妻の許されてゐた時に、好色の男が噂立つた美姫から美姫へと追うて、わがものと努めることは必然の現象であらう。うつぼ物語も一人の女性を繞る男性のことが骨子

になつてゐるが、かゝる戀の奪略戰は到る處に演じられたものらしい。源氏物語の中では、明石姫君や玉鬘などが、多くの男性によつて同時に愛を送られてゐる。

しかし、女の容貌に接せず、まして性格などの理解なくして單純な歌の贈答程度の知解で戀するといふのが、當時貴族の一般の風であつた。茲にその戀と呼ばれてゐるものゝ內容がいかなるものであるかは怖らく想見されるであらう。一つは結婚により權勢ある人を身に持つて、おのが昇進的野心を滿たさうといふもの、二は、緣族關係から我利を貪り獲ようとするもの、三には、たゞ競爭心からおのれを競爭の渦中に投じて女を手に收め、他をして羨望せしめようとするもの——およそかゝる不純の原因によるものがその戀愛と稱するものゝ大半であつて、相互の性格諒解による眞面目な戀愛關係は、千に一つもあり得なかつたのである。もし一女性に對する眞の愛情の發露されるならば、それは多く情を契つてから後のことであつた。

かゝる男子の間における女子の位置のみじめさは、ほゞ想像されうる。若い女子は、つねに男子の狩獵の的になつてゐたのである。たとへば名も知らぬ、まして見も知らぬ男から、

紅に匂ふはいづら白雪の枝もたはゝに降るかとも見る

と言ふやうな仄めかしの歌が贈られて來る。そこで贈歌に對して返歌をするのは、婦人の一つの禮儀となつてゐたので、

紅に匂ふが上の白雪は折りける人の袖かとぞ見る

と言ひ返す。それは男からの戀歌をとぼけて曲解したまゝ返したものである。かうしたことが男女の交際の始めとなるのであるが、男は、多くの場合女の歌の詠振と、字の巧拙以外に何等、女について深く知ることを得ない。それすら返歌が侍女によつて代作、代書されることがあるから多くは當てにもならなかつた。かくて、女は暫らくつれなづくりの返しを繰更えしてゐるとしても、その弱い心から、もし、一度その貞操を男に許してしまへば、こゝに女の尊嚴さは一擧に打崩されてしまふ。結婚後といへ女の宅に男が通つてくる風習の當時では、一度許した後、女はたゞ戰々兢々と夫の愛を繋がうとしてのみ專心する。世評を重視した當時の女は、捨てられるそのことより、むしろそのことが、笑へになることを恥としたのであつた。

しかも、數知れぬ歌の贈答の後、男がいよ〳〵相手に接近して見ると、相手が意外な醜女であつたといふことは決して珍しい事ではなかつた。源氏物語の末摘花の如きその適例である。從つて女の方が、男より數歳の年長である仲らひも少くなかつた。こゝに一度契つた限り、二夜と通はないといふやうな悲劇も頻出して來た。

あひ思はで離れぬる人を止めかねわが身は今ぞ消え果てぬめる。(伊勢物語廿二段)

といふ如き怨嗟は、哀れな女性の口からいく度か洩れ出た。　かつ横暴な男性の餌食になつて夫ある

身ながら、奪はれてゆく國經の妻（藤原時平のため）の如きに至つては、一層女性そのもゝ不憫さを思はしめられる。源氏物語中の、空蟬や藤壺や朧月夜內侍等が源氏の君と契を結ぶ經路は、讀むものをして餘りに女性の弱々しく抵抗性の無いことを痛ましめるのである。

貴族生活の無氣力さはかくて、かれらの中から、葛飾の乙女や茅渟の處女を奪つてしまつたが、その結果男の方は、男女關係をます／＼遊戯化せしめた。その事實は、在原業平（伊勢物語中の）や源氏の君が理想的の男性として視られてきたことで分る。「里び男」で無い「宮び男」の典型とされたことを以て想像出來る。すなはち、戀を漁り異性を狩ることは貴公子の特權であつたが、同時に、一度許した女に對して男は永久に見ついでやらなければならない、それが宮び男の宮び男たる所以である。伊勢物語の主人公が、白髮の老婆の思ひに對してもあはれを見せたことにつき、作者は「此の人（主人公）は、そのけじめ見せぬ心なんありける」と私かに賞揚してゐるではないか。このことは、たゞちに源氏の君が老典侍の戀をうけいれたこと、末摘花等醜婦をも見ついでゐた敍述を聯想さす。しかし、かゝる憐愍の中に、どうして燃え立つ眞の戀情が湧き得よう。どこまでも暇つぶしの遊びとしての男女關係、乃至權威獲得のため利用化された夫婦關係が、當時の戀愛の大半であつたのである。戀愛といふ事實が、當時いかに概念化されてゐたかは、戀歌と稱せられる一般の作がこれを立證してゐる。

行く水に數かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり。（古今集）

我が戀の數をかぞへば天の原曇りふたがり降る雨のごと（後撰集）

海も淺し山も程無しわが戀を何によそへて君にいはまし。（拾遺集）

三、つぎに、かれらの特性は萬事を裝飾化し、遊戲娛樂事に多くの時を費した事である。平安朝末期に至つて、中央政府の執るべき國務の範圍は、いよ／＼狹まつてきた。大寶令の制度が、元々唐制に則取つたゝめ小帝國にとつては規模の大にすぎるものがあつたのであるが、その後廢官、兼併、兼職等が行はれたとはいへ、なほ剩官が多かつた。加ふるに、藤氏の專橫と共に綱紀は紊亂を極めて、司法制度の如きもほとんど實施はされてゐなかつたものらしい。行政中複雜な地方問題も、莊田私有田は益々增加し、國守も遙任、受領のことが認められて、中央政府との有機的連絡は殊更薄いものになつてゐた。

こゝに、公卿殿上人、女御更衣と稱せられる徒が如何に終日閑暇で無爲に苦しんでゐたかは、その當時の日記の一頁を開いてみただけで想像が出來るだらう。その心持を、つれ／＼とかれらは稱へてゐる。紫式部日記・源氏物語は、門院の「つれ／＼おはしますに」一慰として奉つたものであつた。男子の生活もその倦怠さにおいて同樣である。しかし、かれらは、武士階級や庶民階級に比較して、その實力は失つてゐたといへ、いまだ偶像的崇拜の的となりえてゐたのである。かれらの位置、および、かれらが庶民より誅求した實力は、なほ以て臣下を頤使するに充分であつた。武士階級にも、いまだ、

公家階級に弓を引くだけの自信が生じて、ゐなかつた。しかし公家階級は、實力を持ち合さぬだけ、虛勢を保ち威嚴を張る必要を感じてゐた。これは自ら、虛飾と榮花の形となつて、かれらの生活に現はれてゐる。さうして當路の公家達は、任官、敍位、年中行事等わづかな職務時間外の無爲退屈な時を費すにこの方面に出口を見出だし得た。その中、年中行事や賀莚や祭祀佛事迄が純然たる興行的のものになり終つたこと諸記錄の載すとほりである。

朝儀には、元日節會、白馬節會、踏歌節會、端午節會、相撲節會といふやうに次を追うて節會が行はれ、賭弓、曲水宴、灌佛、乞巧奠、重陽宴、五節舞等の行事が連續し、更に卽位、大嘗會の特殊な儀式における仰々しさには、全く、甚しいものがあつた。その他祭祀においては諸社の行幸始、特にも賀茂祭は見物(みもの)として上下擧つて待つ處であり、石淸水の放生會もかれらに待たれた大行事の一つであつた。なほ佛事の方面では、數多い寺院においてつぎ〳〵に修法といひ、維摩會といひ、大乘會といひ、法華會といひ、また定例の法會の催さるゝ外、特に八講といひ三十講などいひ貴顯の寄せた特別法會が行はれた。閑暇に苦む貴族は、ひたすらかゝる催しを、指折り數へて待ちかまへてゐたのである。婦人もまた劣らじと物見車や物詣車をひき出させた。車の簾の下からは、出衣(いだしぎぬ)と言つて殊更に衣の端を出して虛飾を施した。しかもかゝる機會が、男女を接近せしめて戀の導きたらしめた例はあまねく諸書に見えてゐる。冠婚葬祭の諸儀では、出產(特に長男、また春宮に奉りうべき女子の生れた

時）元服のとかく過差にすぎてゐたことは、紫式部日記の彰子の皇子を生み奉つた折の記錄、源氏物語の源氏の君の元服の描寫等で、他の一般が想像出來るであらう。衣食住では、衣服に最も華美を盡したやうに考へられるが、菊合の器物が金銀の裝飾をこらしてある點を思ふと、工匠の手の入つた贅澤な器物も當時意外に多かつたものらしい。

また、歌舞遊戲は甚だ隆盛であつた。歌舞にあつては、神樂、催馬樂、東遊、風俗、朗詠などが唐樂と共に行はれ、遊戲においては歌合、香合、根合類の合物、韻ふたぎ、偏つぎ、蹴鞠、賭弓等到る處に行はれてゐる。やゝ後の時代に屬すれど、東三條殿で四十餘日の間毎夜、日の出る時刻まで遊び戲れたこともあつたのである。

しかしかゝる過差の行事、遊戲の催し方について、なほ「この世をばわが世とぞ思ふ」と詠んだ御堂關白の榮耀の生活に、幾分とも虛飾的氣分は無かつたであらうか　かれの心の中に、すでに大舞臺の旋りかけてゐるといふ如き不安の秋風は吹きそめてはゐなかつたらうか。

四、今一つ述べておきたいことは、文事を重視した結果、よろづの文學が熾んになつたことである。眞の文學は、太平の世と混沌たる世との差別なく、また、貴族階級と平民階級の差別なく、つねに到る處、存すべきものであるが、武事の少ない時代、有閑階級によつて遊戲的文學の流行を見た事實は、古今東西その轍を一にしてゐる。

平安朝時代は、藤原氏の威勢の基礎確立するに比例して、文運の發展も顯著になつて來てゐる。御堂關白の世はまさに百花の文運の艶美を競ふといふ盛況を將來した。しかしすべての文化が、貴族階級によつてなされ、貴族階級のために仕組まれ、貴族階級のものであつたといふことは言ふ迄もない。歌に後拾遺振りがあり、日記物に蜻蛉、和泉式部、紫、更科あり、隨筆物に枕草子といふ傑作がある。小説は源氏の榮名に蔽はれて他が顯はれない憾があるが、狹衣といひ濱松といひその他散佚して書名のみ傳はつてゐるものをあげるなら、當代の小説壇も想見に餘りあるであらう。かつ、その一般的趨勢は延喜時代に比して一頭地を拔いてゐる。一層、そこに才力の潑溂さが出てゐる。

さてこれは、詠歌についても感ぜられることではあるが、文學がいかにかれらの日常生活に缺くべからざるものであつたかが、まづ、かれらに注意される。殊に、歌はかれらの交際機關であつたといつてよい、これは、本居宣長が源氏物語論においても述べてゐる所であるが、かれらは絶えず自らの體驗をいかに和歌として表出すべきかに腐心してゐた。聲朗かに自作を吟詠し、書信の中には一二首の作を必ずかき加へた。名歌を印刷して弘布するといふ機關のない當時のおいて、撰集は殊更期待された。しかし、古今集中の四季の歌の吟詠心理を省慮してもすぐ分るやうに、叙景歌的のものの多くはある機會において、ある相手があつて作られたもので、かなり樂屋落ちに近いものである。すなはち主觀味が濃厚に出すぎてゐる。さらに換言すれば當時の生活狀況を諒解しなかつたら、作者の巧致

の存する所に思ひ及ばないと歌のねらひか會得され難いものが多い。

古の名歌をつねに記憶しておいて、ある場合にその一節をにほはして（歌、文、會話などの中に）おのれの知識を衒ふといふことは、時代と共に著しくなつた。

結び上げたるたいりの簾の端より、几帳の綻びに透きて見えければ、その事と心得て「我が涙をば玉に抜かむ」とうち誦し給へる伊勢の御も、かうこそはありけめとをかしう聞ゆるも、内の人は聞き知り顔に、さしいらへ給はむも謹ましうて「ものとはなしに」とか、貫之がこの世ながらの別れをだに、心細き筋にひきかけゝむをなど、實に故事ぞ人の心をのぶるたよりなりけるを、思ひ出で給ふ。

これは源氏の總角の巻の一節で、薫が宇治八宮との死別を悲しんでゐる所である。經驗する事毎にかく伊勢や貫之の古歌が聯想されるのは尋常のことであつた。後拾遺集中の詞書によれば、女房相模に對し「暮れゆくばかり」など言つて謎を掛ける色好みが居る。これは、拾遺集の「現にも夢にも人に逢ひあへば、暮れゆくばかり嬉しきはなし」といふ歌の意味を暗示せしめたのである。かくてこの時代から所謂、本歌取と稱する詠振の一體が激増して來た。何れも、貴族趣味的機巧の好尚からである。枕草子の作者の第一特色が、かゝる好尚を代表してゐることに、縷述することを要しない。當代の一條帝が、まづ、機智諧謔にたけていらせ給うた。中宮の彰子が、御懐胎のため、とかく夜間は寝

覺めがちであるのを、「いみじき宿直人と見え給へるに云々」などゝ宣うたことは榮花物語（はつ花の巻）に見えてゐる。道長ならびにその子十二人（中宮彰子もその內）の性格がすべて機敏であつた事は、大鏡に詳しいが、これは、かれらが、卽興的にキツトを發する貴族趣味を持ち合はしたことを主として指したものらしい。

なほ、當代の主要文學が閨秀作家の手になり、戀愛を主題としてゐることも、皆人の認めてゐるとほりである。後宮は、后妃女御更衣相互の競爭場裡と化してゐた。かつ入內した后妃の方々には、それ〴〵才媛の奉仕するがあつて、それらの間にも各〻材俊の程を競ふものがあつた。一條帝の皇后定子の方が淸少納言等を寵愛し給うたに對し、道長がわが子の中宮彰子に紫式部等を扈從せしめた如きはその著しい例にすぎない。

かゝる後宮の實情は、女性がおのれの才幹を發舒するに、それを無二の機會たらしめた。才媛の綺羅充滿して堂上花の如しとでもいふべきかゝる情況は、史上空前絶後のことに屬する。しかも、これには國文（當時の口語文）が、かれら女性の領界に歸せしめらた影響が絶大であつた。漢文をわが學とした男子は、かへつて、自由におのが思想感情を表出するを得ず、全く女性に一歩先んじられたのであつた。

五、最後に、上述の宮び的（非里び的）諸現象に、共通した貴族のもつ一思想に氣付かれる。すなはち「今めく」ことの尊重である。「古代めく」ことを蔑視する新精神の意識である。いかなる時代にあつても、新流行新様式といふものは存するであらうが、その顯著に現はれる時代と然らざる時代とがある。紫式部の時代はその新時代意識の最も著しい時世であつた。源氏物語を研べて見るに、今めかしいといふ形容が人々の一般的態度に對して用ひられてゐる點はいふ迄もなく（帚木卷、賢木卷等）話し振（空蟬卷）物腰（若紫卷）等巨細な點にわたつて用ひられ、その他、書體（若紫卷）音曲（帚木卷）建築（澪標卷）和歌（玉かつら卷）等にも用ひられて、その今めいたものが歡迎された。源氏物語のみならず、榮花物語の「見はてぬ夢」や「鳥邊野」の卷などにもこの語が重用されてゐることは、新様式がいかに時代を征伏したかを裏付けて居る。從つて、新時代に取り殘された人々は、社交を斷念し隱遁を餘儀なくされねばならぬ。源氏物語の常陸宮一家が、丁度それであつた。末摘花は古風女の代表者となつてゐる。宇治十帖において宇治の大宮が、匂の宮からの便りに碌々返歌をもしかねてゐるのは、保守教育をうけたわが身を恥ぢてゐるために外ならない。ひとへにはいからな匂の宮などに、古代めいた返事をして嘲笑をうけることを恐れてゐるのである。

以上は、紫式部時代について、わたくしの氣付いた世相の大略である。わが式部は、かゝる環境の中に、いかに個性を延ばし得てゐるか。

紫式部の俤において、まづ思ひ及ぼされる點は、かの女が如何に　創作家としての天分をその血の中に持つて生ひ出でたかである。

かの女の家系は、ほゞこれを詳かにすることが出來る。すなはち曾祖父兼輔、祖父の弟清正、叔父爲頼などは、父爲時と共に歌人であり、また詩人であつた。父爲時はもと、菅三品文時の弟子で、同僚の藤原孝道や源爲憲の中に、殊に才藻秀でゝゐたゝめ早く文章生にあげられ、式部丞や藏人辨にも登用されてゐた。かれが、越前の國守になつたことについては、今昔物語、古事談、十訓抄、今鏡等に逸話として載せられてある。すなはちその官を源國盛と相爭ひ、すでに國盛に任命をさへ見たのであつたが、爲時は悲しみにたへず、申文を女房につけて一條天皇に奉つた。その詞に「苦學冬夜紅涙盈レ巾除目春朝蒼天在レ眼」とあつたのに帝は甚だ御感激遊ばされて、道長に計り國盛を改めて爲時となされたといふことである。爲時はその後、越後守ともなつた。長子惟規が父に從つて下つたこと、同じく十訓抄中の逸話に見える。爲時の詠歌は、後拾遺集に三首、新古今集に一首傳はつてゐるのみであるが、何れも平懷の作で質實な態度を忍ばしめるものがある。傳によれば、かれは長和五年園城寺において出家を遂げた。

紫式部の母の出はこれを明らかになしがたい。常陸介藤原爲信女ともいふが、今一說の爲時姨雅

（清？正）女といふ說によれば爲時と同族といふことになる。

爲時には、紫式部の外、惟規、惟通、定暹の三子があつた。長兄惟規は歌人として後拾遺、金葉、千載、玉葉、風雅等勅撰集に自詠を傳へてゐる。かれの歌は、父の作に比すると幾分才氣が豊である。この惟規がいかに風流人であつたかは、「何となく花や紅葉を見る程に春と秋とを幾めぐりしつ」（風雅集）といふ如き遺詠でも知られるが、十訓抄の記す逸話は面白い。それは、かれが父に從つて越後に下る途中、重病に罹つて今は限りと見えたので、ある僧侶が、死後中有の旅で曠野をひとりゆく覺束なさをいひ、たゞちに淨土に參るべきことを語ると、惟規は「その野にも紅葉があり尾花がもとに虫が鳴くやうだつたら、かへつて、ゆつくら、歩いて見たいものだ」と返事したので、その法師は面喰つて逃げ去つたといふ。いかにも紫式部の兄弟の一人として非凡な性格を示してゐるではないか。

しからば、わが紫式部の天賦は如何。まづ、かの女の天性の、他の女房たちと類を異にしてゐた點を考へて見たい。それは、何よりかれが單に、和泉式部の如く歌人型の作家でなく、さりとて清少納言の如く才人型の作家でもなくて、かの女が終始觀照的態度の作家であつたといふことではあるまいか。それを、わたくしは、父爲時の持つ學者的稟賦に原據をおきたいのである。爲時が、自分の男子たちに漢學を教へてゐると、幼ない紫式部は傍でそれを聽きとりながら、大抵それを覺えてしまつた。

強記の點においもて、しば〳〵兄をもしのいだ。爲時は、この獨り娘の式部を寵愛すると共に、式部の男に生れ出なかつたことを殊に惜しんだといふことも父としてありさうに思はれる。(紫式部日記)また、式部は日本紀をよみ得たゝめに、同僚の女房たちから日本記局と仇名せられたことは、かの女の一般を說明してあまりあるが、道長が、式部を拔擢した主眼も、式部がかく博覽宏才の點にあつたものらしい。それで、式部は出仕中も、女房の中にあつて特別の扱をうけてゐる。宮中の局で、ひとり眞字文をよんでゐるやうな時もあつた。

女房集りて「お前はかくおはすれば御幸は少きなり、何條、女が眞字書を讀む、昔は、經讀むをだに人は制しき」と惡言いふ。(紫式部日記)

かくて式部は、女房の嫉視の中心になつたのである。中宮に文集の第三第四を御敎へ奉つたのも、他の同輩には隱れてゞあつた。「知りたらばいかに誹り侍らんものと、すべて世の中ことわざ繁く憂きものに侍りけり」と五月蠅い世評を嘆いてゐる。式部は、漢籍の中、史記を最も愛讀してゐたらしい。例の藺相如傳の「若膠柱而鼓瑟」の膠柱といふ如き故言、秦始皇本紀の趙高の故事等を自在に、日記中や源氏物語中に挿入してゐるのは、そのためだと思はれる。しかし、式部が漢學から獲た所は、かゝる文字的のものでなく、むしろ漢學のもつ鑑照的、批判的精神であつたことが考へられる。これは、かの女の素質と相俟つて、かの女を和泉式部や赤染衛門、相模等の如く歌人たらしめなかつた最

大理由てはあるまいか。

さりとて、かれ紫式部に、詩人的才能が無かつたとするのではない。かの女が、性來、箏曲に卓越して居つて、しば／＼音樂に沒頭していつたことに、紫式部家集によつても立證しうる。なほ、源氏物語中、音曲に關する精細な敍述、時處を得た巧な描寫は、かの女が如何に深く、音樂に理解を持つてゐたかを語つてくれる。つぎの一節は、宇治八宮に對する薫の言葉として挾まれたものであるが、立派に式部の音樂觀の一部を代表してゐるものである。

すべて誠にしか思う給へすてたるけにや侍らむ　自らの事にては、いかにも／＼深う思ひ知る方の侍らぬを、實にはかなき事なれど、聲にめづる心こそ背き難きことに侍りけれ。さかしう聖だつ迦葉も、さればや、立ちて舞ひ侍りけむ。

つぎは、式部の歌才である。人の言ふ如く式部の家集は、かれの源氏物語に比較されると、全くその見窄らしさを隱すことは出來まい。しかしこれは、物語を目安においてゐるからであつて、他の女流歌人に伍してこれを比較するならば、それが特に劣つてゐるといふことは言へないであらう。小說の中の假作とはいへ、源氏中の詠歌だけで、式部を第一流歌人となすべき資格はこれを十分認めてよい。當時、歌壇は多士儕々だと言つて、歌聖としてわれ／＼は果して誰を推擧することが出來るだらうか。順、元輔、能宣等すでに卒して居ない。われ／＼の腦裏に行成、齊信、輔信、公任等の名が浮び

出るであらうが、われ〳〵はかれらを才者乃至學究と呼ぶことが出來ても、文學歌學を以てかれらを許すのはいさゝか僭越に感ぜられる。紫式部の如く才藻富贍の歌人もかく舉げ來ると、その數は十指にも充たないかも知れない。

つぎに、當時の小說壇を一蔑して、紫式部の創作の心理に論及して行かう。

當時、學問と言ふと、それは必ず漢文學のことであり漢字學のことであつた。大寶令がこと〴〵く唐制の摸倣であつたやうに、男子は專ら、外來の學問を研讃しなければいけなかつた。故に、和歌を作らない人は、一生、假名文字を書かずとも用を足し得たかも知れなかつた程である。然るに、漢學尊重に對する反動思想、國粹趣味が程なく到來せずには置かなかつた。それは、後宮や貴族生活において女流の力の容認される風潮と提携して、假名文學の流行を將來したためであつた。すなはち、和歌文學は、歌物語を生み、歌物語は神秘傳說的小說を生み。神秘傳說的小說は人情小說を生むといふ經路を以て、平安朝後半期には多數の假名小說を見ることが出來た。時間的餘裕と生活の安定を得てゐる當時の人には、次々へと新作を轉寫して、かなり紫式部時代には、物語物(ものがたりもの)の普及もされてゐたらしい。紫式部日記には、中宮彰子が內裏に御還啓遊ばされる前に、新調の多くの册子に物語書を添へ書き寫すべき人々の許へ配布されたことが出てゐる。式部も一册御言付(いひつけ)をうけて轉寫したのであるがそのさまは思ひやられる。風葉集に見える古代物語の名で、散逸して傳はらないもの丶數、百七十五

種に及んでゐるのを想像しても、流布した物語の概數は分るであらう。されば源氏物語は突然に現はれた小說といふわけにはゆかない。なほ、紫式部が源氏以外に著述のあつたことさへも、日記中の口吻で推察することが出來るのである。

また小說一部の量の問題において、源氏物語以前の著として宇津保物語や落窪物語の如き大部のものがあつた。これらは、必ずしも源氏以上の長篇ではないけれど、その結構において些の遜色もない。宇津保物語なども、その適當な場面の描寫を、もつと細かくやつたら、たゞちに五十四帖には達し得るであらう。

なほ筋の運び方――これらについても、宇津保や落窪それ〴〵妙味を持つてゐる。それは、わが國人の漢作文力では到底及びもつかない所であつた。表現が何れも些の束縛をうけず、極めて自由に進んでゐることを知る。落窪の簡結で要を得た敍事法には、特に酒脫な味をさへこれを加味されてある。

しかもこれら諸作の中に、源氏物語を見出だすのは、恰も足柄箱根等群峯の間に巍然として聳ゆる富士を望見するに異らない。ここに想ひをはせしめると、誰しも紫式部の持つ豐かな天分を信ぜざるを得ないであらう。それはかの女の創作家、小說家としての偉大な天分である。かの女は、物語の中に人生を描き出した、かの女の眞面目な觀照の結果を表象した。源氏は、すでに傳奇的興味を超越して、鑑賞的作品の域に入つてゐるのである。

さて源氏物語製作の年代は如何。まづ寛弘五年より同六年までのかの女の日記中に、源氏物語に關する項が三ヶ所出てゐる。しかしこれをもつて、直ちにかの女の卅四五歳の時代までに、この物語が完成されてゐたものと卽斷するのはやゝ不用意である。むしろ、若菜の手前位までとか、宇治十帖の前位までとか、ともかくその大部分が出來上つてゐたことを認める方が穩當であらう。

夫宣孝の遠逝した時、かの女の膝下には隆光と、今ひとり賢子（後の大貳三位辨局、狹衣物語の作者と云ふ）といふ二人の遺子があつた。廿五六歳の身空で、この二人の遺子を養育する行末を想ふと、かの女にとつて夫との永別が限りもなく悲しいものに感ぜられたことは當然である。

見し人の烟となりし夕より名も睦じき鹽釜の浦

無常の波は遠慮なく多感な一女性の胸を浸していつたのであつた。それは、物語によく出てくるあはれな女の運命にも似た筋ではあるが、それにしては、あまりに痛々しい體驗であつた。

しかしこのショックが、やがてこの大創作着筆の近因をなしたのである。かりに式部が、宮仕へした年を、眞淵の推斷の如く、寛弘二年とするならば、それまで宣孝歿後五ヶ年の餘裕があつた。そしてその間に、源氏物語の前半が公にされて、それが道長の耳にも入り、かくて式部の存在も關白に認められたものではあるまいか。かつ、式部の父爲時は、道長に招かれてしば〳〵詩會に列してゐた關

係を想へば式部が道長の招致をうけることは、極めて自然の事である。

當時、新作物語が歡迎されて、それが相ついで現はれた。この時、創作的天分ある紫式部がどうして默してのみゐられよう。たゞこゝに、われ／＼をして、紫式部が男子として生れ出たときを假想せしめ（父爲時の希望の如く）また、夫宣孝の頽齡までの生存を假定せしめるならば、あるひは源氏物語ほどの大作を豫想することは難事であるかもしれない。ある傳者は、式部が長恨歌を愛誦してその感激の結果着筆したのであると推定し、ある傳者は、村上帝皇女大齋院が上東門院（彰子）に新作物語を望まれた際、門院の命をうけて式部が源氏に筆をつけたと述べてゐる。また、ある評家は、源氏物語は左傳を模して勸善懲惡を旨として書いたものと論じ、ある評家は、史記の筆意を學んで虛誕を旨として描いたものと議してゐる。紫式部が源氏を創作する動機竝びに態度の中に、かゝる片々とした事が幾分かの關係を持つてゐることは否定出來ない。しかし、長恨歌、門院の命令、左傳、史記なくとも、式部はやはり大作を完成したであらう。それは、抑へがたい創作本能が式部を湧かして源氏を創らしめた――かうした信念を、われ／＼は源氏からうけとり得るからである。大きい構想の中に、事件は巧妙に展開してゆき、何等の障碍なしに、作者が主觀をぐん／＼盛つてゆく手際は、到底、文集や史記の及び得るところではない。

しかし創作本能と一概に言つても、その根柢をなすものは　作者により様々である。紫式部のもつ最も顯著な創作家的素質は、やはり、鋭い感覺力と眞面目な省察とであつた。この二つの素質が、かの女の經驗をして深化せしめ、體驗化せしめて、鮮やかな表現性を獲得せしめたものである。

五官の内、まづ第一にかの女の視覺力である。その確實さは源氏に描かれた色感を聯想しただけで充分であらう。作者が女流だからでもあるが、衣服の色目に關する纖細な描寫は、全く古今稀れである。かの紫式部日記が服飾錄の感があるによつても、平常、式部が如何に、服色の調和といふことに微細な注意を拂つてゐたかゞ推察される。源氏物語の解釋に當つて服色のことがとかく疎んぜられがちであるのはいかにも殘念である。玉鬘の巻に、源氏の君と紫の上とが、贈物の衣裳類を適宜に、他の方々へ分配する所がある。全く、色の選擇によつてその人の性格に現はされるが、まして、その身に似合つた模様、調和を得た色のとりあはせ如何に依つて、各人の才幹のほどを定めることが出來る。いつも、人物と衣裳との關係について敏感であつた式部の用意には敬伏するより外ない。

なほ、かの女は、繪畫に對しても相當の鑑賞眼を持つてゐたが、それは、また鋭敏な視力を傍證するものである。日記の中にも、「唐繪を、をかしげに書きたるやうなり　とか「女繪のをかしきにいとよう似て云々」といふやうに、繪のことを引合に出してゐるが、源氏物語の帚木巻には立派な書論がある。また源氏の君は立派な書家に作られてゐるし、繪に關する繪合の巻といふ巻も物語の中にとら

れてある。
その他物語中の自然描寫はどれとして式部の視覺の敏感さを傍證しないものはない。實に巧いものである。
つぎに、式部の洗練された聽覺について考へるなら、まづ前說の音曲のことも參考にならう。つぎは紫式部日記の最初の一節である。
秋の氣配の立つまゝに、土御門殿の有樣、言はん方なくをかし。池の邊の梢ども、遣水の畔の草村、おのがじし色付きわたりつゝ、大方の空も艷なるに、持て囃やされて、不斷の御讀經の聲々、あはれ優りけり。やう／＼涼しき風の氣色にも、例の絕えせぬ水の音なひ、夜もすがら聞き紛はさる。
何といふデリケートな感受だらう。かの女は、初秋の感じと共に、御讀經の音感の推移してゆくのを聽き知つた。そして、終夜、靜かな音をしてさら／＼流れ下る遣水の奏でが、ともすれば、母屋の方から梢をぬけて聞こえてくる讀經の聲ともつれ／＼になつて區別の立たなくなるのに、耳を傾けてゐたのである。
源氏物語中に、かゝる微妙な描寫のつかはれてゐるのは決して珍しくない。橋姬卷で、薰大將が宇治の里から歸京しようとする曙、聞えてくるかの鐘聲の點景は、いかにも老練な技巧である。それは常々、かの女が、曙の鐘聲に對し如何に鋭い感じを抱いてゐたかを十分語つてくれてゐる。

第三に、嗅覺である。これは紫式部においてのみではないが、當時における香に對する感受力は甚だ敏感なものであつた。嗅覺は美感を成立せしめ難いと美學者は言つてゐるが、源氏物語に描かれた移り香だけは、たしかに一藝術を成してゐると言つてよい。後世、嗅覺も漸次劣へ、香合の遊戯なども名ばかりになつたのは、いかにも遺憾である。

源氏物語によれば、源氏の君など名香を用ひたゝめに、遙か遠方から源氏のゐることが人々に感知され、その移り香はしばらくの間、消えなかつた。正裝乃至戀人を尋ねてゆく時の衣服には、定めのやうに香を燻染めたことは源氏物語に見えてゐるとほりであるが、この物語からかゝる香に關する描寫を假に取り除いたとしたら、あとはどんなに物寂しいものとなるであらうか。

第四に、觸覺に關しては、巧妙な肉體美の描寫を見ることが出來る。元來、容貌の描寫についてはいかなる筆も惜まず、例へば薫の美を敍して「御さまかたちの仄かに見奉りしにさも命延ぶる心地し侍りしかな」(東屋の卷)とまで佳賞してゐるのであるから、軒端荻、空蟬、朧月夜內侍等一人として描寫の巧妙でないものはないが、胡蝶卷において、源氏の君が、玉鬘に對する愛欲感にひかれてゆく場面は、殊更、自然味に富んでゐる。そこには「つぶ〳〵」とか「こまやか」とかいふ形容詞が多い。

なほ、源氏物語中の女性描寫では、肉體描寫が性格をも表象してゐるものが少なくない。その用意の周到であることは、宇都保や落窪の到底伍しにくい點である。

これを總括するに、八百年前の作としてその官能描寫の優れてゐること、ともかく世界的に推賞すべきであらう。

つぎに、紫式部の眞面目な省察力といふことについては、さらに驚嘆すべきものが多い。この省察批判の精神力が、鋭い官能力と相俟つてかの女の創作家としての資格を完成しえたのである。紫式部日記は、さながら一冊の批判錄の體裁をなしてゐる。かの女が、つねに喧噪な界を嫌つて孤獨を愛したのも、一つは靜思と沈默とを求めたからである。橋姫卷に、宇治の宮が宇治川の鳴瀨の響のために冥想に耽りがたいことを悲しんでゐるが、それはそのまゝかの女の心であつたであらう。

日記の中に、かの女の漢籍を繙讀するのを女房たちが惡口言ふところがある。それを耳にしたかの女はむつとして辯解しようかともしたのであるが、その時もーことはたさもあり、よろづの事、人によりて異々なり」といふ冷靜な反省によつて、そのまゝ口を噤んでしまふ。

また、日記の中に、齋院に仕へてゐる中將の君が、中宮彰子方に仕へてゐる女房たちの批難をすることをかいてゐる。式部はこれを更に批評して、人間は誰も一得一失があるものだから、濫りに短所を指摘することは注意すべきことだと言ふ。しかも、その筆の下から、かの女自ら、和泉式部、匡衡衞門、淸少納言、左衞門の內侍等を爼上にのせて批評を加へてゐるのである。かの女の透徹した觀察の

前には、人々の本性が餘りにはつきり、恰も鏡に物の映るやうに展げられたのであつた。かの女自身、己が批判の態度を出過ぎたものとして氣付きつゝも、その鋭い眼識は、それを默過することを許さなかつたのである。(日記參照)かくて式部の積極的態度は、時に「などか必ずしも面にくゝ引入りたらんが賢こからむ」とそれをも肯定する語調に出てくるのであつた。

なほ、式部の觀察や經驗についてゞあるが、當時の婦人生活は極めて室内的であつたがために、その範圍は、はなはだ狹いものと考へられる。しかるに、かの女が、作中にかく迄廣く題材を消化して描寫しえた理由は、やはり、その觀察や經驗がそれまで批判の網を潜つてゐたからであらう。旅行とても、父に從つて北陸に行つたことの外、住吉詣や初瀨詣を一二度苑した位の程度のものにすぎまい。しかるに、到るところの光景を、あだかもその地の者のやうに描き出して、しかも正鵠を得てゐるわけは、記錄や實話から得た智識を完全に整理するだけの批判性があつたからである。式部日記を見よ。土御門殿(道長邸)が、皇子御誕生のため、ごつた返ししてゐる中に、式部が、いかにひとり何といふ冷靜さを保つて、萬事に纎細な觀察を加へてゐることであらう。書中に「日を止めつれば」云々といふ言葉が見えるが、まことに紙背に徹するやうな眼光で、かの女は些細なことにも研究的態度を失はずにゐたのである。男性同志間の事、宮庭生活のある部分など、經驗のない式部に、なみ/\の努力では分り得る筈がない。しかも、父や夫の語る片言や、在來の物語に敍べられた節々によつて、よ

く全般を窺ひ、わが物として物語中に描出したところが、式部の偉大な點である。一例を桐壺卷から求めるなら、かの命婦が勅命をうけて逝くなつた更衣の母親の侘住居を尋ねてゆく項は、何と言つても名文であるが、おそらく式部には未見の場面であつたらう。しかもかゝる場面を躍如として描き上げた手腕は、すべてかゝるかの女の素質を以て解釋するより外に方法はあるまい。つぎに、纖細優美な女性の描寫にしても、いかに綿密な表現をなし得たかは次の一例でも分るであらう。薫の見てゐる宇治の大宮と中宮との姿である。

まづ一人立ち出でゝ、几帳より差しのぞきて、この御供の人々の兎角行きちがひ、涼みあへるを見給ふなりけり。濃き鈍色の單衣に、萱草の袴のもてはやしたる、中々樣變りて花やかなりと見ゆるは着なし給へる人柄なンめり。帶、はかなげにしなして、珠數ひき隱して持給へり。いとそびやかに樣體をかしげなる人の髪桂に少し足らぬ程ならむと見えて、末まで塵の迷ひなく、艶々とこちたう美しげなり。傍目など、あならうたげと見えて、匂ひやかに柔かにおほどきたる氣配、女一宮もかうざまにぞおはすべきと、ほの見奉りしも思ひ比べられてうち歎かる。又、ゐざり出でて、かの障子はあらはにもこそあれ」と、見おこせ給へる用意、うち解けたらぬ樣して、由あらむと見ゆ、頭つきかんざしの程、今少し貴になまめかしき樣なり。「彼方に屏風も添へて立てて侍りつ。急ぎてしも、のぞき給はじ」と、若き人々何心なく言ふめり。「いみじうもあるへきわざかな」とて、後め

たげにゐざり入り給ふ程、氣高う心にくき氣配添ひて見ゆ。黑き給一襲、同じやうなる色合を著給へれど、これは懷しうなまめきて、あはれげに心苦しう覺ゆ。髮さばらかなる程に落ちたるなるべし。末少し細りて、色なりとかいふめる。翡翠だちていとをかしげに、絲をよりかけたるやうなり。紫の紙に書きたる經を、片手に持ち給へる手つき、かれよりも細さ優りて、瘠せ〳〵なるべし。立ちたりつる君も、障子口に居て、何事にかあらむ、こなたを見おこせて笑ひたる、いと愛敬づきたり。

つぎに、われ〳〵は源氏物語の中から式部の小說論をきくことが出來る。それは螢卷に記された小斷片にすぎないが、それは樣々な問題を研究者に提供する貴重な一節である。折から主人公源氏の君の六條の院では、五月雨のつれ〴〵に、方々は繪物語などのすさびで明し暮らしてゐる。たま〳〵玉鬘の君に、源氏の君が假構物語の價値を說明すると、姬君も私見を挾むといふ場面が出てくる。そこに藝術論が生ずるので、少し長いけれど抄錄して見ると、

「源」――かゝる世の故事ならでは、げに何をか紛るゝことなき徒然を慰めまし。さてもこの僞どもの中に、「げにさもあらむ」とあはれを見せ、つき〴〵しう續けたる、はた、はかなし事と知りながら、徒らに心動き、らうたげなる姬君の物思へる見るに、かた心附くかし。又、『いとあるまじき事か

な』と、見る〳〵おどろ〳〵しくとりなしけるが、目馴きて、靜かにまた聞く度ぞ惡(にく)けれど、ふとをかしき節あらはなるなどもあるべし。この頃幼き人の女房などに、時々讀ますするを立ち聞けば、物よく言ふものの世にあンべきかな。空言をよくしなれたる口付よりぞ、言ひ出だすらむと覺ゆれど、さしもあらじや」

と宣給へば

〔玉〕「げに僞りなれたる人や、樣々に酌み侍らむ。たゞいと誠とこそ思ひ給へられけれ」

と硯を押しやり給へば

〔源〕「こちなくも聞こえ貶(おと)してけるかな。神代より世にある事を記し置きけるなゝなり、日本紀などはたゞ片側ぞかし。これ等にこそみち〳〵しく詳しきことはあらめ」

とて笑ひ給ふ。

すなはち、史書よりも、かへつて小說の中に眞の人生の相が現はされ得るといふのである。實錄である筈の日本紀さへ結極、生の海の表面の波だけの記錄にすぎない。かたそばだけの敍事にすぎない。そこで、かへつて、假構的小說の中にこそ、讀者を動かす眞實性が含んでゐる。虛にして却て實この眞理を式部は、十分會得してゐたのである。源氏の君の文學論はさらに續いて

〔源〕「その人の上とて有りのまゝに言ひ出づることこそなけれ。善きも惡しきも、世に經る人の有

樣の見るにも飽かず聞くにも餘ることを、後の世にも言ひ傳へさせまほしき節々を、心に籠めがたくて言ひ置き始めたるなり。佳きさまに言ふとては、佳きことの限を選り出でて、人に隨はむとては又惡しきさまの珍しきことを取り集めたる、皆かたがたにつけたる、この世の外のことならずかし。他國の御門の才作り樣變れる、同じ大和の國のことなれど、昔今のに變るべし。深きこと淺きことの差別こそあらめ。ひたぶるに空言と言ひはてむも、ことの心違ひてなむありける。佛のいと美はしき心にて說き置き給へる御法も、方便といふことありて、悟りなき者はこゝかしこ違ふ疑ひを置きつべくなむ、方等經の中に多かれど、言ひもて行けば一つ胸に當りて、菩提と煩惱との隔たりなむこの人の善き惡しき許りのことは變りける。よく言へばすべて何事も空しからずなりぬや」と、物語をいとわざとの事に宣給ひなしつ。

こゝに描寫上の態度論と、文學の目的論が生ずる。「善きも惡しきも、世に經る人の有樣の云々」は、作者の體驗を指してゐる、道德的批判に捕はれない作者の人生における直接經驗である「後の世にも言ひ傳へさせまほしき節々を、心に籠めがたくて云々」は、かゝる直觀を、作者は表現せずには堪へられないとの意であらう。それはクローチェの直觀即表現の境地である。實に、創作における彼の女の確乎たる態度がその中に窺ひ得られるではないか。

なほ、こゝに寫實、非寫實の問題がある。これは、最初の「その人の上とて有りのまゝに言ひ出づ

ることこそなけれ」といふ一節と、中間の「佳きさまに言ふとては、佳きことの限りを選り出でて云々」といふ一節とて、かの女の態度がよく知られると思ふ。かの女がつねに現實の上に立脚し、架空を排除したことは、「この世の外のことならずかし」といふ結論でも分る。しかし、現實的といふことは、必ずしも寫實といふ意味ではなかつた。かの女は、この意味に唯美的耽美的傾向を示してゐる。かの女にとつて、創作の目的はある宇宙の美を表現することであつた。その手近い例は、かの女の日記中の用語の中にもある。すなはち、辨の宰相の美はしさを「物語の女の心地」と形容し、道長の態度の美を「物語に譽めたる男の心地」と說明してゐる。これは、物語（文學）をもつて美を巧妙に表はしたものであるとした考から出たものでなくて何であらう。全く、かの女は、源氏物語の中に樣々な美を表はした、しかも、かの女は現實の世界を行脚しつゝそこからそのすべてを拾ひ集めて來たのである。

　これはたゞちに源氏物語のモデル論を想起さすであらう。しかし、わたしは、「その人の上とて有りのまゝに言ひ出づることこそなけれ」の言葉通り、源氏物語にはモデルといふモデルは無いと言ひたい。西宮左大臣（源融）菅丞相（道眞）御堂關白（道長）等の事蹟は、部分的に主人公源氏の君の經歷、性格等を思はしめる點にあるけれど、何れもモデルとまではなつてゐないといひたい。わたくしはモデルといふ上は、そのモデルを「ありのまゝ」に寫して、主觀が先きに立つべきではないと考へる。强ひ

て言へば、初音卷あたりの源氏の君の描寫が、御堂關白をモデルにしたと位は言つていゝかも知れない。式部は、どこまでもこの大作を、かの女の頭で拵へてゐる。しかし如何なる作家といつても、三四十人の人物をかき分けるに、周圍の家族知人の性格に對する聯想なしに、それをやりおほすことは出來まい。その意味においては、源氏物語中の人物にはすべてモデルがあり、それは寫實であるといふに憚らない。

つぎに、文學の目的論に關するかの女の意見は如何。これは、地の文で總評して「いとわざとの事に宣給ひなしつ」と言つてるやうに、やゝ四角張りすぎてゐるが、文學を宗教に比較してゐる。さうして、創作を倫理宗教の方便と解釋してゐるが、それは、その時代の思想としての拒み難い結論ではあるまいか。源氏物語細流抄の著者や、源氏奧旨の論者の如く、勸善懲惡や、諷刺教戒を以て創作の動起と解釋するものは、實にこの一節の上に據つてゐる。しかし、これは源氏物語中に表はされた作者の人生觀、社會觀を以て、はつきりと源氏物語自らには、適應されてゐないことを知り得よう。すなはち、作者は道德や佛教を主眼とし、その方便のためにこの大作を完成したのではないことが諒解される。これらについては、さらに項を改めて研究することにしよう。

第一、紫式部の戀愛觀――

まづ、かうした問題から入つてゆくことにする。當時の貴族社會において、いかに戀愛が重んぜられたか、又、大體戀愛の特色はいかやうであつたかといふことは、すでに述べておいた。しかるに、紫式部は、初音の卷の終末に、かう述べてゐるのである。

——古への人は、まことに、賢き方や優れたることも多かりけん。情立つ筋は、この頃の人にえしも優らざりけんかし。

これを以てかの女の思想と解釋するなら、かの女はその時代の特色として、情立つ點を認めてゐることになる。しからば、この情立つといふ内容は如何に。大鏡に、道長が、幼時から他の兄弟と異なつてゐたことなど評した終りに、作者は、

入道殿は、あくまで情おはします御本性にて、必ず人の然思ふらむことをば、おしかへし懐しくもてなさせ給ふなり。

と、記してゐる。まづこれで、情あるといふことは、同情乃至、愛のある意味であることは分るが、愛の爭鬪である戀愛における當時の特色とでもいふものを式部は認めて居るであらうか。戀愛生活において、この點が殊に情立つてゐると指定して居るであらうか。遺憾ながら、この點については、日記にも物語にも觸れられてゐないのである。しかし、かの女の戀愛の理想的態度ともいふべきものは、自ら、物語の中に描き出されてゐる。つぎにそれを研究して見よう。

「世の中」といへば、多くの場合、男女情愛の世界をのみ指したほど、當時戀愛は重んぜられながら、しかもそれが男女相互の理解から出發してゐないことは、まづ悲しむべきことであつた。そこで、光源氏にしろ匂宮にしろ薫にしろ、その嫡妻は家柄、身分的には申分ないが、それが理解のない結婚であつたがために、かれらはその嫡妻に滿足し得ない。源氏の通うた女性の主なるものは、空蟬、軒端荻、六條御息所、夕顏、紫上、藤壺、末摘花、源內侍、朧月夜內侍、花散里、明石上、玉鬘、女三宮、中納言の君などであつた。作者は、源氏のかゝる好色癖について、無論「すゞろごとおぼしいらるゝのみなん罪深かりける」と、その點だけは源氏の惡癖と見なしてゐる。しかも、半面に於て女を狩り歩く男の心を怨してゐる作者の口吻が聞かれないであらうか。かの宇治の姫宮たちが、男とさへ聞けば、すぐ女を喰物にするかのやうに、怖れてゐるのは當時の實情だらうと思ふ。しかも、源氏の作者には、頭中將や匂宮などの好色をも、極めて大目に見てゐる態度が窺へるではないか。

　これは前にも述べたとほり當時は、男子の貞操觀といふものが、はなはだ薄弱な時代ではあつた。こゝに式部も他の女性と等しく、これを默認してゐるやうである。そうして情愛の理想的展開は、契情以前でなく、むしろ、きぬ〴〵の別れを知つてから以後の界にありとしてゐる。從つて、男子が多くの女性と情を通ずることは餘義ないとして、その場合、たとへ如何なる醜婦老女（源氏と交情のある末摘花や源內侍の如き）と緣ある身となつても、これらに對し永久、懇に顧るのが男子の義務であ

る。榮花物語にも、かゝる意味において、花山天皇とその御性質を異にし給うた村上天皇をつぎのやうに御賞嘆申してゐる。

村上などは、十、二十の女御、御息所おはせしかど、時あるもなき時も、なのめに情ありて、けざやかならず、もてなさせ給ひしかばこそありしか云々（花山の卷）

源氏の性格も全く、この意味では、理想的に描き出されてゐるといふべきである。源氏は、「自分のいつまでも變らぬ好色癖を省て、「なぞや、心づから今も昔もすゞろなる事にて、身を放らかすらむ」（明石の卷）と、自身あきれ氣味であるが、その最大原因は、眞面目過ぎた心持にあつた。帚木の卷の始めにも、源氏を「いといたく世を憚り、まめだち給ひける程に、なよびかにをかしき事は無くて、交野の少將には笑はれ給ひけんかし」と評してゐるほどで、同じく好色といつても、源氏には、交野少將的の浮氣沙汰のことはとても出來なかつた。さて、その眞面目立つ心には、およそ、二つの理由があつた。

一つは、花散里を尋ねた時、源氏は、「とり〳〵に捨て難き世かな。かゝるこそなか〳〵身も苦しけれ」と私かに思つてゐるが、すなはち、如何なる異性にもそれ〴〵趣ある點を觀取して、そこにある愛着をすてえない心である。（澪標の卷）

第二は、身を自分に許してくれた女に對する同情の心である。花散里の卷に源氏の心を「いかなる

につけても御心の暇なく、年月經ても苦しげなり。なほ、かやうに見しあたりの情は、過し給はぬにしても、なか／＼あまたの人の物思ひぐさなり」と述べてゐるが、その實例は、醜女末摘花についてさへ源氏が「さりとていかがはせん、我はさりとも心長う見立ててむ」といふ、むしろ同情の態度の中に現はれてゐる。（末摘花の卷）

第三は、世評の顧慮である。源氏が須磨に下りゆく際、紫の上に「常なき世に、人にも情無き者と心置れ果てんも、痛ほしうてなん」と語り、致仕左大臣その他の人々に暇乞に歩いてゐるが、源氏が世評を氣にして溫情を衒ひがちな態度は、到る所に描き出されてある。かの住吉詣の際、他の上達部たちの遊女を弄ぶのを卑しとして、源氏が「されど、いでやをかしき事も物のあはれも人柄こそあべけれ。なゝめなる事をだに少し淡き方によりぬるは、心止むる便りもなきものを」と考へるのも、一つはかうした心からであつたらう。（澪標の卷）

いとわかやかな心の源氏は、時に、頭中將との競爭心からのみ末摘花を得ようとし、また「さしもあるまじき事なれど、さすがにをかしう思されて」と朧月夜内侍の後を追うたのであるが、なほ「情ならぬ程に打ちいらへて、誠には亂れ給はぬ云々」（紅葉賀の卷）と作者が源氏を辯護する理由は、以上の諸態度に基づいてゐるのである。

源氏物語中、光源氏以外に、戀愛心理の比較的著明に描かれた人物は、宇治十帖の匂宮と薫とであ

らう。特に、薫の方は源氏物語中、個性の最も深刻に描かれた一人物であると言つてよい。かれは匂宮と對照的位置に配されてゐて、匂宮の方が、全然情熱的態度を持するに對し、薫の方は、理知的態度の人として表はされてゐる。匂宮が、薫の愛人浮舟を見初めると、はやくも、その浮舟への戀に、盲目になりきつて「我は月ごろ物思ひつるに惚れ果てにければ、人の抵捂かんも知らず、一向に思ひなりにたり」といひ、遂には「からのみ物を思はば更にえながらふまじき身なめりと心細さを添へて嘆き給ふ」と、狂的愛情の結果、文字通り「あをみ痩せ」て現心も無いのであつた（浮舟の巻）女は、かくも切ない胸中をづん／＼言つてくれる匂宮の殉情的態度にいつか、心をひかされてゆく。しかし、一面にはやはり、薫の生眞面目な情愛を忘れることは出來ない。匂宮の氣持は生一本であるだけ、例へば、それ迄卻けてゐた六の宮に對しても、左大臣と母后の斷つての勸めをうけると、また、その方にも全然靡いてゆくといふ輕薄さがあるのである。しかるに、薫が、宇治へ尋ねて來た時の樣子といへばかうである。

この人、はた、いと氣配殊に深く、なまめかしき樣して、久しかりつる程の怠りなど宣給ふも、言多からず。「戀し」「悲し」とおりたゝねど、常に相見ぬ戀の苦しさを、樣宜き程にうち宣給へる、いみじく言ふには勝りて、いとあはれと人の思ひぬべき樣をしめ給へる人柄なり。艶なる方はさる物にて、行末長く、人の頼みぬべき心配など、こよなく優り給へり。（中略）此の人に憂しと思はれ

て、忘れ給ひなん心細さは、いと深うしみぬべければ、思ひ亂れたる氣色を、二月頃に、こよなう物の心知り、ねび優りにけり。つれ／＼の住家の程に、思ひのこすことはあらじかしと見給ふも、心苦しければ、常よりも心止めて語らひ給ふ。（浮舟の巻）

かれは、浮舟を信じてさらに疑はない。つねに、無常の念を胸深くしめて、おのれの行爲の他を傷けることをのみ怖れてゐる。その消極的性格は、薫の現實生活をともすれば崩壞し去る。しかし、作者式部の氣持が、薫の中にぴつたり現はれ出てゐることは、讀者のたゞちに諾ふところであらう。式部は、源氏の場合と同じく、薫を決して理想化して描いてはゐない。しかし、この二人物を通じて、式部が、男子に何を求めてゐたかを推察することは、必ずしも不可能ではない。

さて、胡蝶の卷に、源氏が玉鬘に、戀をしかけた男子にいかに應ずべきか、その態度を悟し敎へてゐる處がある。玉鬘は、柏木などから戀歌を送られるけれど、いまだ何とも返歌をしないのである。そこで源氏が

右近（玉鬘の侍女――註）召し出でて、かように訪れ聞えん人をば、人選りして答などはせさせよ。好々しう、あざれがましき、今樣の事の便ないこと仕出でなどする、男の咎にしもあらぬことなり。我にて思ひしに、あな情無、怨めしうもと、その折にこそ無心なるにや、若しは目覺ましかるべき際は、けやけうなども覺えけれ、わざと深からで、花蝶につけたる便りごとは、心ねたう持てない

たる、中／＼心立つやうにもあり。又、さて忘れぬには、何の咎かはあらん、物の便り許りのなをざりごとに、口疾う心得たるも、さらで有りぬべかりける。後の難とありぬべきわざなり。

などゝ父親らしい戒めをなし、なほ、實例として玉鬘を戀してゐる兵部卿宮や髭黒には、如何に應接すべきかその方法を敎へる。この言葉は、まづ、この場合紫式部の思想と見て差支あるまい。こゝにおいて、いよ／＼前說を確證せしめる點は、人情本位の觀察である。醜女に對してさへ我を曲げて情をつゞけた點に、源氏の特色があつた。右近の姉を奪ひ合つた筑紫の二人の男は、野暮にも互に切りあつた。しかるに自分の戀人を次から次へと匂宮に奪はれながら、なほ、相手を傷けることを恐れ、沈黙をつゞけた點に、薫の特色があつた。薫の外に、止むない過失から匂宮に身を穢されたために、宇治河に身まで投げすてた點に、浮舟の特色がある。

その詳論に亘つては、次項の紫式部の女性觀の中に、今少し深く立ち入つて檢べることにして、こゝではそれを避けておく。

第二、紫式部の女性觀――

式部は、個性のことを本性と呼んでゐる。主人公源氏の本性の描寫は、多少漠とした嫌ひがあるが、これに比して、やはり婦人の方の表現は一般にうまくいつてゐる。各個性がよく描き分けられてある。

その上、總括的女性觀にも中々面白い觀察がある。

この方から先きに見てゆけば、源氏が、やはり、かの玉鬘がつれ〴〵のまゝに、物語や繪畫（何れも、戀愛に關したもの）を寫し弄ばれるのを見て、語る言葉ではあるが、

あなむつかし。女こそ物うるさからず、人に欺かれんと生れたるものなれ。こゝら（小說類を指す――註）の中に、眞はいと少なからんを、かつ知る〳〵かゝる虛事に心を移し計られ給ひて、あつかはしき五月雨がみの亂るゝも知らで書き給ふよ。（螢の卷）

女性特有の幻想的、浪漫的性格をちやんと明瞭に指的してゐるではないか。男性に欺かれるために生れた――とは、作者が源氏の口を借つて皮肉を言つたまでゞあらうが、そこに自ら、かの女の女性觀が窺はれるではないか。また、宇治八宮の、薰に思出の話を語る言葉の中には

此の頃の世は如何なりにたらん。宮中などにてかやうなる秋の月に、御前の御遊の折に候ひあひたる中に、物の上手と覺しき限り、とり〴〵に打ち合はせたる拍子などこと〳〵しきよりも、由有りと覺えある女御更衣の御局々の、おのがじしは挑ましく思ふ。うはべの情をかはすべかめるを、夜深きほどの人の氣濕りぬるに、心やましく掻い調べ、仄かに綻ろび出でたる物の音など、聞き所あるが多かりしかな。何事にも女は弄びのつまにしつべく物はかなきものから、人の心を動かす種になむあるべき。されば罪の深きにやあらむ。子の道の闇を思ひやるにも、男はいとしも親の心を亂

さずやあらむ。女は限りありて、言ふ甲斐なき方に思ひ捨つべきにも、猶ほいと心苦しかるべき。

（椎本の巻）

この言葉は、正しく徒然草中の兼好の女性觀を聯想せしめる。これは、女性の感傷味が、男性に對し如何に大きい魅惑であるか、また、女性の罪障は如何に深いものであるかといふことを、多少、佛説的に解釋したものである。かくて、式部にとつて、女性は、弱いものに運命づけられたものとしてのみ考へられてゐる。女性は、男性に對抗しうるだけの力を持たないものとして考へられてゐる。そこに、自ら女性なる式部には、どうにも出來ない空洞(うつろ)のやうな哀痛が纏つて來るのであつた。

そこに、かの女の描いた女が、いかに男性に對して弱々しいものとなつてゐるか。桐壺の更衣、空蟬、藤壺、花散里、宇治の大宮、宇治の中宮　すべてさうではないか。男性の暴力に對して、しひての反抗もなし得ず、朧月夜なども「情なくこはぐ／＼しうは見えじ」と源氏に身を許した結果は、罪の意識に苦しめられるだけである。槿院(あさがほ)は、ついに源氏の戀情をうけいれず、貞節を通した唯一人の女性になつてゐるが、かの女自ら「實に人の程のをかしきにも、哀れにも思し知らぬにはあらねど」とさへ告白してゐることを知る。そこにやはり弱味が潜在してゐる。浮舟のか弱く、あたかも影のやうに描き出されてゐるのも、式部の殊更、筆端を吟味した結果であらう。浮舟に、薫の眞實さを痛はしく思ひながら、わが身を告白する果斷を持たない。匂宮の「恨み給ひしさま、宣給ひしことども、

面かげにつと添ひて」と、たゞ戰いてゐる。すべてを「たゞ夢のやうにあきれて」ゐるのである。しかも作者は、その餘りに女らしい弱々しさに、無上の美を夢見てはゐないか。意志のない影の中に、特殊の趣を味つてゐるのではないか。

浮舟と相並んで可憐に描出された女に、源氏の思ひもの夕顏がある。しかし、夕顏にはなほ多少の意志があつた。玉鬘の巻にも「親なりし人（夕顏のこと——註）は、心なん有りがたきまでよかりし」と、夕顏の性格を賞してゐるが、作者は、浮舟と違つて、夕顏については殊にある個性を印象せしめようとしてゐる。さて帚木の巻に、頭中將が述懷的に述べた夕顏と、夕顏の巻に源氏の感懷した夕顏とを綜合して見るに、溫順（帚木卷　賴むにつけては怨めしと思ふ事もあらんと心ながら覺ゆる折〳〵も侍りしを、見知らぬ樣にて、久しき途絶えをも斯う稀かなる人とも思ひたらず）含羞（帚木卷——涙を漏らし落しても、いと恥しく恭ましげに紛らはし隱して）纎弱（夕顏卷——花やかならぬ姿、いとらうたげにあえかなる心地して、そこと取り立てゝ勝れたる事なけれど、細やかにたを〳〵として物打ち言ひたる氣配、あな心苦しと唯いとらうたく見ゆ）等が夕顏のもつ氣持であり、しかもそれが技巧的に現はれず、どこまでも自然のまゝに出てゐる點が特色をなしてゐる。すなはち、粗末な夕顏の住居では、その寢間にまで賤しい隣家の高い話聲がきこえてくる、一般の婦人であつたら、それを源氏に聞かすことをどんなに恥入るであらうか。しかも童心無邪氣の夕顏は、それをも知らず顏でゐ

るほどなのである。

長閑に、辛きも憂きも片腹痛きことも、思ひ入れたる樣ならで、我がもてなし有樣はいとあてはかに子めかしくて、又なくらうがはしき隣の用意なきを、如何なる事とも聞き知りたる樣ならねば、なかなか恥ぢかゞやかんよりは、罪許されてぞ見えける。（夕顏卷）

いはゞ世事に疎く、おひらか、のどやかで弱々しいのである。夕顏の卷に、源氏が夕顏の女房右近に、自分の好みの性質を語つてゐる。それも、次のやうに夕顏の性格そのまゝである。

はかなびたるこそ女はらうたけれ。賢しく人に靡かぬいと心づきなきわざなり。自ら、はかばかしくすくよかならぬ心ならひに、女は唯、柔らかにて、とり外しては人に欺かれぬべきが、さすがに物包みし、見ん人の心にて從はさんあはれにて、我が心のまゝに、とり直して見んに懷かしく覺ゆべき

どこ迄も、強くない本性である。男の切なるほだしに對して默し得ない優美さを持つ女である。

しかし、紫式部の描いた女性には、他の半面に、空蟬があり、藤壺があり、宇治の大宮の如きがあり、また、紫の上、明石の上、明石女御、女三の宮などの如きがある。古來、空蟬は式部自らをモデルにしたものであるといはれ、紫の上は、かの女の理想的女性と稱されてゐる。空蟬や藤壺や大宮な

どは、夕顔などの可憐な草花らしい感じあるに對し、美はしい常盤木でも見るやうな感じをおこさしてくれる。これに對し若菜の巻を見るに、紫の上を櫻の花、明石の上を五月待つ花橘、明石女御を咲きこぼれ出た藤花、女三宮は二月中程の青柳といふやうに、それ〳〵花柳に比較してゐるのも面白い。そこですぐ感ぜられることは、これらの人々が、桐壺の更衣、夕顔、浮舟などに比して、春や夏の花に比較せられたほど、一様の明るみを持つてゐる點であり、さらに、かれらの行ひに多少なりとも意志によつて、運命を開拓した跡の見える點である。夕顔、浮舟等に對しては、作者の、嘆美的、夢幻的、浪漫的好尚が現はれてゐるに對し、後者の人々においては、創造的、現實的、自我的意味における女性が出てゐる。さうして紫式部は、前者において自然的に顯現する女の美を認めたのであるが、そこにのみ住するには、かの女の批判的精神が到底これを許容しない。こゝにおいて、かの女は、すゝんで後者の如き様々な個性を創造した。更科日記の作者（孝標女）の様な若いロマンチストは、浮舟の一生を空想耽美すれ、それは、ついに夢幻を追ふものにすぎない。紫式部が、リヤリストの立場を本據としてゐることは、物語中の各女性の伏線として書かれた帚木の巻の女性論を一讀すればすぐ分る。かの所謂雨夜の品定めにおける結論を見よ。かの馬頭（うまのかみ）の望む婦人は、第一に、しつかりした女性であつた。男の甘言にすぐ靡くやうでは駄目だと言つてゐる。「あまり情に引こめられてとりなせばあだめく一やうではいけないといふのである。第二に、主婦的手腕を持つ女性であつた。」 狹き

家の内の主婦とすべき人一人を、思ひめぐらすに、足らはであしかるべき大事どもなん方々多かる」やうではいけないといふのである。第三は、他に對してどこまでの優雅な態度を失はぬ女性であつた。「總て萬づの事なだらか」を持つてゐてほしい。第四に、學才と趣味性を持つてゐる女性であつた。「餘りの故由（ゆゑよし）、心ばせ打添へたらんをば喜びに」するのである。源氏が乙女の卷で大宮に、やつぱり「女は、たゞ心ばせよりこそ世に用ゐらるゝものに侍りけれ」と、信念を語るが、それも正しく帚木の卷を裏書きするものである。式部が自分をモデルとしたといはれる空蟬は、全く、以上の意味で立派な女と言はなければならぬ。空蟬の容貌は、人並以下といつてよいかも知れぬ、また、良家の出でもなかつた。しかも終生、源氏の愛をつないだ理由は、何よりかの女の立派な心ばせであつた。また、醜女末摘花と同じやうに（末摘花の卷）、つねにきちんとしたかの女の身裝ひであつた。さうして、夫ある身で止むない係はりから、源氏と一夜の契を結んだけれど、その後は頑として源氏の要求をいれなかつた。さりとて空蟬は、源氏を怨み、憎むのでもなく、夫の歿後、薙髮してからは、源氏の六條院にひきとられて、平和な餘生を送つたのである。もちろん、そこに常盤木のやうな凜とした靜けさがある。しかし、かれの懊惱の跡には、爭はれぬ女性の弱さがある。ほんの一歩といふところで踏み止まつてゐる。それが恐ろしくなよびやかであり、いたいけである。法衣の姿となつて六條院の源氏を尋ねてゆく空蟬の態度は、かの玉鬘に語つた源氏の女性觀を實證して居るではないか。

紫の上は、十歳の時、源氏の許にひきとられて、源氏の理想通り養育された女である。そこでその性格描寫が、多少理想化されすぎた嫌ひがあるが、それも許すべきであらう。容蟬が、馬頭の理想の女の第一第二の二項目を特に滿足せしめてゐるに對し、この紫の上の特色は、第三第四の二項目をよく代表してゐる。一般に室内的であつた婦人の對人問題が、ほとんど一は夫（また戀人）、二は侍女に限られてゐたことは、物語の證するところである。さうして當時男性の多妻的情態にあつて、各女性間に嫉妬の情が交され、果ては、罵詈となり宿怨となり爭鬪となつて大問題を卷きおこしてゐることは、しばしば物語の主題をさへ構成してゐる。桐壺更衣と弘徽殿の女御の軋轢、源氏の愛をうけた六條御息所の怨靈などは、すべてこの點から生じた悲劇である。雨夜の品定の時、馬頭は、嫉妬心の強かつた指喰女の述懷などして、怨ずべき事をば、見知れる樣にほのめかし、恨むべからん節をも、憎からずかすめなさば、それにつけてあはれも勝りぬべし」と、要量を得た嫉妬のなほ、意味あることを述べてゐる。かの紫の上は、全くこの伏線によつて描出された理想的妬心のある女であつた。

いと、おほどかに美しうたをやぎ給へるものから、さすがに執ねき所つきて、物怨じし給へるが、なかなか愛敬つきて腹立ちなし給ふを、をかしう見所ありと思す。（澪標）

そこで源氏は、新しい戀人を得た時、それを必ずしも紫の上には隱し立てしてはおかない。自白すると、紫の上は腹を立てゝ、一時後向きなどして嫉むのであるが、かの女には源氏に對する理解があつた。

むしろ、男性に對する諒解と、女性についての自覺が伴つてゐた。結局、「らう／＼しくおほどかなるものから、おもりかにして用意ふかき」（藤原爲章の紫の上の評語）本性が現はれて、夫のすべてを許すのである。

紫の上に依つて聯想される女性は、源氏の正妻となつたが、源氏の愛顧をうけず六條御息所の怨靈にとりつかれて、憂死した葵上である。葵の上の重態のさま「いとをかしげなる人の痛う弱りそこなはれて、有るか無きかの氣色にて臥し給へる樣、いとらうたげに苦しげなり。御髮の亂れたる筋もなく、はら／＼と掛れる枕の程」を、源氏は「有難きまで見て、年頃何事を飽かぬ事ありて、思ひつらむと、怪しきまで打ち守られ給ふ」（葵の卷）のであるが、かく葵の上の容姿が端麗でありながら、なほ源氏が愛し得なかつた理由は唯一つある。それは葵の上が、紫の上と違つて、餘りに嚴肅端正で、嫉妬をさへ表はさなかつた點であつた。源氏が、雨夜の品定をおへて、葵にあひに行つた際も、大方のけしきの氣配も、けざやかに氣高く亂れたる所交らず」といふのが葵の上の態度なのである。（帚木の卷）換言すれば、女性の意味を自覺しない、女らしさがないといふのが、葵の上の最大短所であつた。紫の上は、源氏の愛する他の同性とも、かの女の優雅な氣性から、交際をもつゞけてゐる。葵の上には、さうした讓歩の點は寸分もなかつた。葵の上と六條御息所との關係であるが、作者はこれを敍述して「葵の上は物に情おくれて、すく／＼しき所つき給へる餘りに、かゝる仲合は情交すべきもの

とも思いたらぬ御心掟」を持たれたと言つてゐる。

つぎに第二の侍女や從者に對する態度であるが、紫の上の博大な愛情は、この上にも表はされてゐる。たゞ一例のみ擧げると、源氏がいよ〳〵罪をえて須磨に下つてゆく時である。源氏に仕へてきた女房たちは、わが主の紫の上の心の中に哀痛の情をよせ、つね〴〵より女主人の「懐かしうをかしき御有樣、忠實なる御心配も、思ひやり深き」方であるから、どうして仕を辭して去つて行かう。「退かで散るもなし」で、いつまでもとその許に仕へようとしたのであつた。

式部は、また、傲慢で侮蔑的の態度を持つ人を、甚だ悪いとしてゐる。式部日記中の右衞門の内侍とか、中將の君とかいふ女房はそれで、「すべて人をもどく方は安く、我が心を用ひんことは難かんべいわざを、さは思はで、先づ我賢しに人を無きになし、世を、空なる程に心のきはのみこそ見え現はるめれ」といふ樣に、ついには内心の卑劣さを見せるのである。かの帚木の巻にもまた「わが心得たる事ばかりを吝がじし心をやりて、人をば落しめ、かたはら痛きこと多かり」と、かゝる女について伏線をひいてゐるが、紫の上はこの點にまた、理想化されてゐることが分る。

さて第三項の條件については、この程度に端折つて、第四項の學才と趣味性の要求の意味を少し考へて見よう。こゝにいふ學才といふのは、むしろ、趣味會得の準備的のものであるから、女性と趣味性といふ問題を考へるだけで充分であらう。さうして馬頭の如き男性の、女性に趣味性を望む所以は、

夫の趣味生活に對する理解を期待するからに外ならない。品定めの宵、やはり、馬頭(うまのかみ)の述べた言葉の中に

一斜なるまじき人の後見(うしろみ)の方は、物の哀れ知り過ごし果敢なき序での情あり、をかしき方に進める方無くて宜かるべし――と見えたるに、又、まめ〳〵しき筋を立てて、耳挾みがちに、美相なき家刀自の一方に打ち解けたる後見ばかりをして、朝夕の出入につけても、公私の人のたゝずまひ、善き悪しき事の、目にも耳にも留まる有様を、疎き人にわざと打ち眞似ばんやは。近くて見ん人の、聞き分き知るべからんに語りも合はせばやと、打ちも笑まれ、涙も差含(さしぐ)み、若しは、あやなき公腹立たしく、心一つに思あまる事など多かるを、「何にかは聞かせん」と思へば、打ち背かれて、人知れぬ思出笑ひもせられ、「あはれ」とも、打ち獨言(ひとりごと)たるるに、「何事ぞ」など、あわつかに、差し仰ぎ居たらんは、いかがは口惜しからぬ。云々。

かうした家庭的悲劇は、現代にあつても珍らしくあるまい。こゝに到つて、相互の理解といふことが結婚の第一條件となる。物のあはれを感じる心、趣味を鑑賞するだけの豊かな性格――それは、いくら數人の子供の母となつた女にも、肝要である。身嗜みの心は、寸分持たず油切れた髪をぐる〳〵まきにして、夫が、美くしい眺めや、面白い小説の話をしても知らぬ顔をしてゐるやうな妻は、夫として全くやりきれない。

あはれを知る心　さう言つても、いたづらに、感情的であればいゝといふ意味ではない。趣味を鑑賞するだけの才　さう言つても、かど〱しく才振るのがいゝといふ意味ではない。「様よう、すべて人は、おいらかに少し心掟てのどやかに、おちゐぬるを元としてこそ、ゆゑもよしもをかしく後(うし)ろやすけれ」である。すなはち、感情と理性との適度の調和が第一要件となる。

當時、様々の新流行の行はれたことは、詳しく前説したとほりであるが、その「今めく」ものの大部は、無意味に「古代めく」ことを嗤ひ、ひたすら通人ぶる、風流ぶるに過ぎなかつた。紫式部は、當代では新進婦人の一人に相違なかつたけれど、さうした「今めく」態度を、はなはだ嫌つた。紫式部日記の中では、中宮彰子のもとに仕へる女房と、齋院方の女房との對照比較のかきぶりにも、それがよく現はれてゐる。すなはち、諸女房の批評の中「齋院に、中將の君といふ人侍るなり」云々といふ項目のところで、中宮の方の引込みがちなるに對し、齋院方の方が出しやばり氣味である。そこで、中宮方の女房は、とかく、「うもれたり」「用意なし」「子めきたり」物づつみす」或は「をかしきことなし」といふやうに惡評されるが、式部は、むしろ、反對な思想を抱いてゐる、齋院方の女房こそ「ざれ」すぎ、「まめだち」物はおせず」「かたは」であると式部は惡く思つてゐるのであつた。

清少納言は、よく紫式部と對照されるやうに、その性格もまことに裏腹である。式部日記の批評のとばしりは、この清少納言の上にも掛つて行つた。「清少納言こそ、したり顏に、いみじう侍りける人、

さぼかり賢しだち、眞字書きちらして侍る程も、よく見れば、まだいと堪へぬこと多かり。かく人に異ならんと思ひ好める人は、必ず見劣りし、行く末うたてのみ侍れば」云々と、その粋めく才幹に一矢を酬いてゐる。

紫式部が、一代の大閨秀作家となつたため、かの女を直接知らぬ女たちは、始め「いと艶に恥かしく、人に見えにくげに、側々しき樣して、物語好み、由めき、歌勝ちに、人を人とも思はず、ねたげに見落」すやうな傲慢な性質だらうと憎んだりした。しかし、面會して見ると「あやしき迄おいらかに、異人かと」思はれる程だつたことも、式部自ら日記中に、他人の話として記してゐる。この事實は、清少納言との趣味の相違を、もつとも雄辯に語つてゐるではないか。式部が、「好む風」すなはち藝術家ぶるといふやうな態度を、特に卑しとした敍述は、その他諸處にある。獨りで、月の美はしさに見とれることをさへ憚れてゐる心持は、却て、餘り卑屈ではないかといふ感じをさへ起さしめる。

かやうな式部の好尚は、源氏物語に散見するかの女の描畫論、作歌論の中にさへ、明確に現はれてゐる。式部は、小説において、おどろ／＼しき描寫、すなはち、アトラクチーブなものを第二にしてゐる。「帚木の巻」繪畫においても同樣で、眞價ある畫題とは、とかく、蓬萊山とか虎とか獅子といふやうな未見のものにある如く考へられがちであるが、それは誤謬である。眞に價あり、畫家の手腕の流露するものは眼前に見る山野の風景畫に越したものはない。昔にあつても同樣であるが、奇癖が見

え氣どつた筆法は暫し愛玩されるけれど、その美には悠久性が無い、際物的要素が多い、珍らしいといふ感じは、到底、永續し得ないものである。地味であつても着實といふことが、最も肝要である。美の本質は、その中にのみ宿り得る。

作歌にあつても、理屈はこれと同じである。上の句に、巧みに故事を詠み入れて、きざに歌つたものがあるが、これとて最初日には「達者だ、才氣がある」と賞美もしようが、長つゞきがしない。また、世の中には、返歌を書く暇もなく、大層忙しい節會か何かの日、殊更、頓智めいた歌を相手に贈つて、困らすやうな人がゐる。何もその日に限つたこともないのに、まあ一寸風流めいてかうした仕振をするのだらうが、それは、眞の風雅を理解しない人間と言ふべきだ。（帚木の巻）

すべて、かうした論法である。深く考察すれば、畫題論は、韓非子に依據があるらしく、すべてが式部の新說といふわけのものではないが、かうした點を、むしろ、紫式部の諸々の性格と統一的有機的のものとして考へて見たい。源氏物語の文章のもつリズムの特色も、この點に關係を持つてゐる。アストンは、多分 Ornate とかいふ形容を以て、豐かな詞遣ひ、細かな形容ある纏綿とした源氏の修辭を佳賞してゐたが、特に、かれが紫式部式と認めた點に氣付かれるものがある。源氏の文致は、大體、當時一般の口語であらう、しかも、かの殊更、迂餘曲折して、雅味纏綿としてゐる點は、紫式部のもつ個性的リズムの發露でなくて何であらう。これは、枕草紙の文致と比較すれば、さらに明らか

である。上述のやうな描畫論や作歌論に現れてゐる式部獨特の世界の、韻律的表現こそ、やはり、源氏の特色ある文致でなければならない。

第三、紫式部の厭世觀

藤原氏時代の最盛期と稱せられて來た一條、三條、後一條天皇の御代――それは、むしろ、貴族政治の爛熟時代と言つた方がよい、老いの心も忘れられると庶民から仰がれた豪奢の裏には、頽廢の氣配が横溢しつくしてゐた。天延二年、正暦四年、長德四年等における流行病、天元二年の内裏燒亡、大風、大地震（榮花物語）は餘義ない天災として考への外におくとしても、當時すでに無力の貴族に對し、武力がどんなに隱れた脅威であつたかは、當時の日記が立派に證明してゐる。式部の出生時代から三四十年間を鳥瞰しても、天元五年及び正暦三年兩度海賊蜂起して調庸の路を閉塞したこと、永觀二年、永延元年、永延二年、三度に亘つて、私かに兵仗を帶びる徒に對し發せられた禁令、永祚元年、長保二年における延暦寺と興福寺僧徒の濫行禁止、さては長德二年の高麗犯人事件等數件をその間に數へることが出來る。

　然らば、藤原一門の團結は果して充分であり得たか。これは前說したやうに、兄弟が、攝關や氏の長者を爭つて止まないといふ風で、人心は、ために寧日もあり得なかつた。式部の生誕の當時は、恰

も兼通兼家の兄弟の爭ひ、最も甚しかつた時であつたが、程なく弟の兼家はついに外戚の權をかち得ることが出來た。貞元二年兼通薨去により、遺子遺族の痛嘆する樣はまことに哀れで、榮花物語（花山の卷）に悉しいが、それは、丁度源氏物語中、右大臣の勢力が左大臣側を壓迫して、源氏の君が須磨に貶謫を受けて、出立する場面と一致してゐる。此れまで源氏に對し諂諛やまなかつた人々さへ今は右大臣の眼を怖れて、別離の挨拶にだにやつて來ない。「世の中は、味氣無きものかな」と、源氏は、わが身の變化を嘆くけれど、これを見た心ある人は、誰として倏忽變轉とした世の無常を觀ぜずには居られなかつたであらう。兼家の後には、その三子、道隆、道兼、道長に同樣な內爭がくりかへされた。かの道隆薨後、その子の伊周、隆家の貶謫は、また、源氏のそれを彷彿せしめてゐる。かくて末子、道長はよく隱忍自重して、權力を總收し、最後の勝利を得て「この世をばわが世とぞ思ふ」とさへ歌つたけれど、卓見あるものは、遠からず崩壞しゆく運命をどうして洞察せずに居よう。わが式部の如きも、終生その豫感の悲しみを胸底ふかく含めてゐた一人であつたであらう。

かの女の厭世觀――といつても、われ／＼は、まとまつたものを、何處にも求めることは出來ない。しかし、かの女の日記のすべての頁、物語のすべての卷にわたつて、かの女の內觀から滲み出る孤寥の姿を、われ／＼は認めずには居られないのである。あらゆる場合に洩れ出るかの女の感傷味を見逃すことは出來ないのである。

北へ行く雁の翅に言傳よ雲のうはがき掻きたえずして

これは、かの女が父に伴して越前に下る時、友との別れにたへず、詠んで贈つたものである。

若竹の生ひゆく末を祈るかな此の世を憂しと思ふものから

これは、愛兒の病に惱まされた時の詠歌である。

見し人の煙となりし夕より名も睦じき鹽竈の浦

無常の世は、遠慮なく知るべの人々を現實から奪ひ去つていつた。夫との死別は、それにしてもあまりに意外であり、式部の心を震蕩せしめた。眼前には父なき二人の遺子を見た。かの女は、遺子のあはれな運命を思へば思ふほど、子供に對する愛情の高まるのを覺えた。われわれは、源氏物語の至る所に、母性愛の深刻な描寫を見る。桐壺更衣の老母、紫上の祖母老尼、浮舟の母の描寫はその典型的のもの、かの明石入道の、わが娘明石上に對する切實な心持——むろんそれは母性愛には入らないが、「望み叶はねば海に入りて死にね」といふところは、紫式部のわが娘に抱いた感じを、そのまゝ寫し出したのではあるまいかと思はれる。

しかし、「人生はこと〴〵く悲哀である」といふ心持が、かの女にも諒解されて來た。その會得はかの女にどんなにか大きい慰めを齎してくれたらう。式部は、痛ましく、庶民の生活を想像した。源氏物語の夕顔の卷には、市民が世の不景氣を託つてゐるところがあるが、それは、搾取されるために生

れた庶民の永遠的怨恨でなければならない。須磨の巻には、源氏が佗住居のつれ〴〵に、漁夫と生活苦について相語るところがある。「浦に年経る様など問はせ給ふに、様々安げなき身の憂へを申す。そこはかと無く囀るも『心の行方は同じことなるかな』と、あはれに見給ふ」とある。かれら庶民階級に比較すれば、式部の宿業は、なほ、慰めるべきところが多かつた。かくて、かれは物語を著述したことから端なくも、道長に認められて宮仕へする身となつたのである。時に、式部はすでに卅歳前後の中年の身であつた。出仕の事實は、式部の生涯にあつて大きい變化であつたことは言ふまでもない。源氏物語の完成、現在紫式部日記の成立は、全くその結果なのである。

しかし、式部自身にとつて、この公仕がたゞちに悔恨の種とならうと、誰が豫想しえたらう。出仕の日の歌はすでに、次のやうであつた。

身の憂さは心の中に慕ひ來て今日九重に思ひ亂るる

わたくしには、それがむしろ式部の過度の内氣、消極性に因るとのみ考へられるけれど、式部のこれまで歩んで來た家庭の室内的生活と、新しく經驗する宮庭の女房生活とが、はなはだ懸隔のあるものであつたがためであることは爭はれまい。これまで異性には漸く几帳越しに應待する身であつたものが、舞臺上のやうな女房生活に出るには、少からぬ鐵面皮と勇氣とが必要だつた。不幸に、式部はこの場合それを持ち合はさなかつた。

から迄立ち出でんとは、思ひかけきやは。されど、目に見ずあさましきものは、人の心なりければ、
今より後の面無さは、只慣れに慣れすぎ、ひた面にならんも、事易しかしと、身の有様の夢の樣に
思ひ續けられて、有るまじき事にさへ、思ひかゝりて、ゆゝしく覺ゆれば、目止まることも、例の
なかりけり

と、日記の中に出仕當時の自らを述懷してゐる。

師走の二十九日に參る。始めて參りしも、今宵の事ぞかし。いみじくも夢路に惑はれしかなと、思
ひ出づれば、こよなく立ち慣れにけるも、疎ましの身の程やと覺ゆ

これは、寛弘五年の暮、最初出仕した日を追想し、わが態度がいかに出仕當時と變化したかに駭いた心持である。式部は、心と身との對立を考へた。精神と境遇との關係を考へた。さうして、自分の心持の段々大膽になり、態度の粗大となることを知る時、

數ならぬ心に身をば任せねど身に從ふは心なりけり
心だに如何なる身にか叶ふらん思ひしれども思ひしられず

と、やはり述懷せざるを得なかつた。

しかし、はては道長自身が、かの女に迫つて來た。それが、なほ、五節の時、物うく引込んでゐると、道長が來て「いざもろともに」とかの女を連れ出したり、几帳の上から一枝の女郎花を持つてさしのぞ

いてくる程度の時はよかつた、やがて「すき者と名にし立てれば見る人の折らで過ぐるはあらじとぞ思ふ」と、弱いかの女を籠絡しようと出て來た時、式部は、何より「すき者」などゝ噂せられる身を嘆かずには居られなかつた。ある夜も、式部が渡殿に寢てゐると、夜ふかく道長が來てその戸を叩いたのであるが、式部はついにその誘惑をも郤けることが出來た。かれに言ひ寄らうとする者は、道長のみではなかつた。ある月夜も、中宮大夫齊信が「格子のもと、とりさけよ」と、式部の局の前で責めあかしたといふやうに、戀を漁る誘拐の手は、しば／＼かの女を捕へようとしたのである。かくてかの女は、いよ／＼内氣になり、とかく里がちだつたのであらう。

これは、寛弘五年十一月、二三日暇をとつて里の家に歸つてゐた日の記述である。

見所も無き古里の木立を見るにも、物むつかしう思ひ亂れて、年比、徒然に眺め明かし暮らしつゝ、花鳥の色をも音をも、春秋に行交ふ空の氣色、月の影、霜雪を見て、その時來にけりと許り、思ひ分きつつ「如何にや如何に」と許り、行末の心細さは、遣方なきものから、果敢無き物語などに付けて、打ち語らふ人、同じ心なるは、あはれに書き交はし、少し氣遠き便りどもを、尋ねても言ひけるを、只此れを樣々にあへしらひ、そゞろごとに、徒然をば慰めつゝ、世にあるべき人數とは思はず乍ら、差し當りて「恥かし、甚じ」と思ひ知る方ばかり、逃れたりしを、さも殘せることなく、思ひ知る身の憂さかな。試みに、物語を取りて見れども、見し樣にも覺えず、あさましく、あはれ

なりし人の、語らひしあたりも、我れを如何に面(おも)なく心淺き者と、思ひ貶(おと)すらんと、押し計るに、それさへ、いと恥しくて、え訪れやらず。心にくからんと、思ひたる人は、大空にては文や散らすらんなど、疑はるべかめれば、いかでかは、我が心の内ある樣をも、深う押し計らんと、理(ことわ)りにていとあいなければ、中絶ゆとなければど、自(おのづか)ら、書き絶ゆるもあり、またすみ定まらずなりにたりとも、思ひやりつゝ、音なひくる人も、難(かた)うなどしつゝ、すべて、果敢なき事に觸れても、あらぬ世に來たる心地ぞ、こゝにてしも打ち優り物あはれなりける。

何といふ痛ましい寂寥に住む心であらう。それは、身を公のものにするものの、味はふ悲しみでなければならぬ。出仕前には、あれほど迄友愛を契つた人々の、わが仕類に原づくとはいへ一人去り二人去るその淋しさを味はねばならぬ。身は心を征伏する、しかし、世を厭ふ心の中にも、なほすべてを許しあふほどの深い愛情を要求する心のみはすてることが出來なかつた。かの女は、久し振、わが家に歸りながら、去つた友のことを考へると、空洞(うつろ)のやうなわが心をのみそこに見出だした。

改めて今日しも物の戀しきは身の憂さや交樣變りぬる。

もちろん、宮仕への同僚にも、自(おのづか)ら親しい友は出來た。「うきねせし水の上のみ戀しくて、鴨の上毛にさえぞ劣らぬ」と寢覺物語に歌をよくつた大納言の局は、その一人である。しかし、式部が衆口嫉視の中にあつたことは、「御前はかく「眞字よみて」おはすれば、御幸は少さなりに」と後言(しりうごと)いふ類の女

のあつたことで分る。そして五節にも「物うくて」出ないやうに、多數の人々の中にあつて、式部の心はいよ〳〵、沈默の底に沈んでいつた。

「人の中に交りては、言はまほしき事も侍れど、いでやと思ほえ、心得まじき人には、言ひて益なかるべし、物もどきうちし、我はと思へる人の前にては、五月蠅ければ、物言ふことも物憂く侍る

その時、式部はすでにひたすら、孤獨を愛するといふやうな病的な氣持になり到つて、中宮御産の騒ぎにさへ「その頃は、しめやかなることなし」と、それを厭ふべきこととしてゐる。

しかり。源氏物語は、いかに「物うき」心の人によつて滿たされてゐるだらう。寂寥をあるじとし、寂寥に住む人の心持が、物語全體に大きい陰翳を投げかけてゐることであらう。それは、かならず式部自らの心の反映でなければならぬ。宇治十帖は、この點において、前四十四帖に匹敵しうる重味が存してゐる譯である。

宇治の大宮、二宮の靑空のやうな淋しみは、薫の理念の桎に縛された性格的悲劇を、そのまゝ映したものである。薫には、その上、表面源氏の子ながら、實はさうでない事實を感知してからの運命的悲劇が纏はつてきてゐる（匂宮の巻—この二つのものは糾はつて、かれの現世生活を、一歩々々と闇の底にひきずつてゆくのである。まづ、總角の巻における薫が大君に對する愛熱と、異性をおそれ世を果敢なむ心から、これを受納れ得ない大君の惱みを見る。大君の性格は椎本の巻にも述べられたや

うに「けざやかに、いと物遠くすみたる樣には見え給はねど、今樣の若人達の樣に、艶氣にも、まてなさで、いと目安く長閑ならん心ばえならむとぞ、推し量られ給ふ人の御氣配」なのである、それは到底、戀の出來ない性格である、ここに、兩者が相互に、性愛を求めず、悲哀を求めてゐるのに氣付かれないだらうか。薫の戀については、「やう〳〵聖になりし心を、一節違へ初めて、樣々なる物思ふ人ともなるかな」「蜻蛉の卷」と、作者が注釋してゐるやうに、かれは、暗い星の下に生れた身を意識すると共に、これまですでに幾度か出家得道しようと志した人であつた「橋姫の卷、椎本の卷」。その厭世觀が、不思議な共鳴を見出だしたのが、この大君との戀ではなかつたか。しかし、まだ若い薫はその眞相を酌みとり得ないで、大君をのみ、いつ迄もつらい人にしてゐるのである。

つぎに、薫が見出だした愛の對象は、中君であつたが、中君はすでに、戀敵匂宮のものとなつてゐた。元來薫の内氣で生眞面目さは、同輩の物笑ひになる程で、帝さへも、かれに對しもつと打ちとけた態度を望まれるほどであつた。中君は、かつてより薫を信じ、現在の匂宮の多情な心を思ふについても、薫をいとしく思つてゐる。しかし、むしろかれの餘り理知的な性格を見て、戀の出來ない男とのみ思ふのであつた。寄生の卷に、薫が忍んで中君を尋ねてくる。さて又の日の夕つ方ぞ渡り給へる。人知れず、思ふ心添ひたれば、あいなく心使ひ痛うせられて、なよゝかなる御衣どもを、いとゞにほはし添へ給へるは、餘りおどろ〳〵しき迄あるに、丁子染めの扇の、持て馴らし給へる移り香などさ

へ、譬へん方なく目出度し」といふ扮装(いでたち)である。此れに對し、おそれながら中君も遠くから應待する

そこで

薫「いと遠くも侍るかな。まめやかに聞えさせ、受け給はらまほしき世の物語も侍るものを」と宣給へば、げにと覺して、少し身じろき寄り給ふ氣配を聞き給ふにも、ふと胸打ちつぶるれど、然りげなくいとゞしつめたる樣して、宮の御心配思はずに淺うおはしけりと覺しく、且つは言ひもうとめ、又慰めも旁々に靜々と聞え給ひつゝおはす。女君は、人の御怨めしさなどは、打ち出で語らひ聞こえ給ふべき事にもあらねば、只、世やは憂きなどの樣に思はせて、言少なに紛らはしつゝ、山里にあからさまに渡し給へと覺しく、いと懇ろに思ひて宣給ふ。

かく中君は、信ずる薫に、宇治への同伴をさへ、ほのめかし賴んで來る。この場合、薫は潔く承諾してしまへばいゝのであつた。しかし、薫の理念は、その一刹那例の冷たい光をさらけ出して來た。「少しも違ひめありて、心輕くもなど覺しものせんに、いと惡しう侍りなん」云々と言つて、匂宮の誤解を怖れるところに、中君とかれとの絆は、あはや斷たれてしまふ。

しかるに、相手の匂宮は、薫の漸くにしてわが者にした浮舟をさへ、無理非入に奪ひとる男ではなかつたか。薫は、早く浮舟を京の家に伴ひ來たなら、すべての悲劇は、未然に防がれたらう。「覺し立ちぬる限りは、あるまじき里迄も、尋ねさせ給ふ御樣よからぬ御本性」の匂宮の裏をかいて、浮舟の

母にも満足を與へ得たらう。しかし徒らな躊躇をしたのも、かれの冷たい理性の指し金のためであつた。

――わが爲めにも他人のもどき有るまじく、斜にてこそあらめ。俄かに、何人ぞ、何時よりなど聞き咎められんも、物騒しく、始めの心に違ふべし。又、宮の御敵の聞き覺さんことも、元の心をきは〳〵しうゐて離れ、昔を忘れ顔ならんも、いと本意なし、など覺し召し沈むるも、例のいとのどけさ過ぎたる心柄なるべし。（浮舟の巻）

始めの心に違ふべし」といふのは、薫が宇治に行き初めた事の、道心を求めるためであつたからの意である。かくて、この「のどけさ」すなはち躊躇逡巡の態度が、薫の戀のすべてを、闇の底にぶち投げてしまつた。

この薫の心持を、そのまゝ紫式部に押しあてゝ見るのは、決して不當ではあるまい。わたくしは、宇治十帖を讀むごとに、この點に、日記よりも家集よりも、紫式部の厭世觀と、その意味とをそのまゝ觀取し得るやうに思ふのである。しかし、わたくしは、ペンを、式部の宗教觀に移してゆかなければならぬ。

第四、紫式部の宗教觀――

華嚴經に「覺果知因、譬如蓮花方其吐花而果具蘂中」と見える。まことに、因果の理はそのもと深く、小乘、權大乘、實大乘の三乘を通じて、始めて明らかになるものである。それを四種に分ち、順現受業・順生受業・順後受業・順不定受業とする。詳述することはこゝに省くとして、台密何れとしてこれを度外視する宗派はなかつた。十界依正、六道輪廻の思想は、轉迷開悟、止惡修善を說く上に、かならず引用せられて來た。

しかし、離苦得樂の要求は、宗派により時代により同一轍といふ譯には行かない。たとへば、世の中ともすれば、いと騷しう人死になどす。さるは御門の御心も、いと美はしくおはしまし、殿の御政も惡しうもおはしまさねど、世の末になりぬればなゝめり。年毎に世の中心地おこりて、人もなくなり、哀なる事ども多かり。（榮花物語「はつ花」の卷）

これは寬弘三年の記事であるが、人死に云々のことは正曆年間の疫病大流行（大鏡「太政大臣道長」の條にくわし）等をさすのであらうが、この末世思想は、なほ遠因があるやうに思はれる。さうして、かうした不安さが、離苦得樂の要求を、その時代において濃厚ならしめた事實は否定し得られないだらう。といふのは、かの源信が、天台から出て往生要集を撰し、穢土厭離、淨土欣求の意味を說いたことも、末世觀念と到底無關係に考へられぬからである。（當時、式部は十歲前後であつた）

紫式部の厭世觀については、前項に概說したとほりである。かの女の兄は、定暹といひ阿闍梨にな

つたほどの天台の高僧であるが、その他の意味からもかの女が佛敎に結びつけられることは自然の事であらう。さうして、源氏物語を繙讀するに及んで、もつとも明確に印象される點は、徹底した因果論「さだめられしこと」の表示である。生死流轉、三世因果の理を信じ、立派な依報正報をうけようと望む。天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄の六道は、いまだ六凡の境界で、その中、苦樂相半ばしてゐるのがわれら人間の人間としてうけた果報である。しかし、同じく人間の中にも、その依報の程度は千差萬別であらう。

源氏物語に描かれた百數十人の人物、もちろん、一人としてこの宿命、この運命に對抗し得たものはなかつた。まづ男女の關係は、ことごとく「前の世にも御契や深かりけむ」「桐壺の卷」であつて、例へば、葵の上の危篤にあつても、源氏は、「大臣、宮などゝも深き契ある中は、巡りて絶えざんなれば、相見る程ありなむと思せ」「葵の卷」と、相慰めてゐるのである。また、匂宮が浮舟を戀し初めたのは、ふと風のために飜つた簾の隙から見初めたことにあつたけれど、これをも「逃れざりける宿世」と觀じてゐる「浮舟の卷」同じく、美貌も前世の因にあるとしてゐることは、源氏や薫や浮舟の形容において述べられてある。人の眼を驚かし、心を戰はせ給ふ、昔の世床しげなり」とは、紅葉賀において、恐ろしいほどまで美しく輝いた源氏の姿を賞した筆である。

なほ、因果の中には、現世の因が現世で果を生む所謂、順現受業といふものがある。源氏と藤壺の

道ならぬ關係が、源氏の情人女三宮と中納言の關係に依て現世の中に報ぜられ、源氏を貶謫したまうた朱雀院が、現世において御不幸にましました如き、物語中、顯著なその適例とすることが出來る。これらが式部の意識的構想であつたことは爭はれない。また、宿曜をみるといふ例の人相見のことが二三件出てくるが、それは、その人の享くべき依報を前以て透察する術の意味にすぎない。藤壺がまさに病逝しようとすると「空にも例に違へる月日星の光見え」(薄雲の巻)とあつて、天命は如何ともすることが出來ないことを語つてゐる。源氏も須磨貶謫の惱みを「とある事も、かゝる事も、前の世の報いにこそ侍るなれば、言ひもて行けば、唯自らの、怠りになん侍る」(須磨の巻)と、最後のあきらめに到達してゐる。この、あきらめは、そのまゝ式部の心持ではなかつたらうか。少くとも、さうした慰安は式部が求めてゐた心持であつたと言へよう。

しかし、現在の果を信ずることは、現在の因が、たゞちに未來の果を生みつゝあることを認めることになる。われ／＼は、懺悔によつて惡業を消滅しうるけれど、日本佛教は、それを餘り重んじない。日本佛教ははなはだ現實的傾向を持ち來つて、轉迷開悟の要求より、まづ立願祈禱によつて離苦得樂することを大切とした。これは、佛教渡來の時、百濟王の佛教の功德を説明してゐる言葉で分る如く、渡來佛教の特色でもあつたので、奈良に五宗、平安に新二派があつたが、何れもこの點には、一致してゐると言つてよい。所謂、祈禱佛教である。天台宗の如き智論を以て指南としてゐるものであるが、

四種相承（圓、密、禪、戒）といふやうな妥協的包擁的態度に出たゝめ、ついに台密とさへ稱せられるほど、平安朝中期以後は、加持祈禱の道場となり終つた。「女院（註――圓融院女御、道長の妹）には、年頃、法華經の御讀經あるに、又、始めさせ給ひて讀ませ給ふ。世の中の騷しさをいと怖ろしきものに思したり」（榮花物語「見はてぬ夢」の卷）といふ風に、現世利益のために、法華八講、何々講といふやうに、諸方の寺院に絕間ないほど、讀經が行はれて來たのである。

讀經についでは、精進祈禱が重んぜられた。伊周が筑紫へ流罪となつた時、木幡の父の墓から北野天神へと參詣していつたのは、無事歸還を精進祈禱するためだつたのである。道長が、御嶽精進を志し金峰山まで登つたのは、わが子彰子の安產を祈るためであつたのである。（榮花物語「はつ花」）祈禱の利益の顯著なことを信じてゐたことは、源氏物語中の挿話を以て察せられる。玉かつら及び浮舟に對する初瀨觀音の利益（玉かつらの卷と東屋の卷）や、明石上に對する住吉の神の利益（明石の卷）は、構想の上に離されがたい關係を持つてゐる。源氏が、頭中將の子の玉かつらを隱しておいたのを、表はしたのは、春日の神の冥罰を怖れたからであつた。（行幸の卷）

一般の病氣は、多く僧侶の加持によつて快癒された。世と共に迷信の增してゆく時、式部が、かゝる信仰を抱くことも自然としなければなるまい。源氏物語の中には、その他、陰陽五行說、夢合せ、物怪生靈の信仰などが篇の中に挾まれてゐる。頭中將は、玉かつらの行衞を夢で知り（螢の卷）、浮舟

の入水は、やはり老母によりて悟られた（浮舟の巻）。物怪生靈のことは源氏物語の大筋に變化を與へてゐること、こゝに述べるを要すまいが、かゝる迷信の行はれたことの事實であつたことは、史實の證するところで、榮花物語を開いても、冷泉女御超子の薨去は物怪のためでありとし（花山の巻）兼家は、女三宮の物怪に惱まされた（さまざまのよろこびの巻）また、正暦四年特に菅原道眞に對し太政大臣の贈位があつたのは、憂死した道眞の物怪を靜めるためだつたのである。

現世利益を求める第三目に出家といふ方法がある。この當時の出家には、流行的傾向さへ見える。一族の死にあつて出家するといふのは、そこに充分意味がある。しかし、延壽の爲出家する源氏物語中の左大臣の如き例が、甚だ多かつた（繪合の巻）婦人の尼になるも、物語中の空蟬、藤壺、宇治大君、浮舟の如きについては、同感される點が十分あるが、一時の失意失戀から遁世するものも少くなかつた。雨夜の品定め中に、馬の頭が、かうした輕卒な態度を批難してゐるが、これはやはり紫式部自身の思想であらう。

第四にあぐべき、かれらのとつた手段は、燗燒たる寺堂を建立し、莊嚴な法會を營むことであつた。藤原氏はその氏寺として、すでに、奈良に興福寺を持つてゐたけれど、資財あるものは爭つて私寺を建立し、あるひは、邸宅の一部を伽藍となした。基經の極樂寺、忠平の法性寺、師輔の楞嚴院、兼家の法興院、爲光の法住寺、道隆の積善寺、殊に道長の法成寺の如き、七堂伽藍金銀瑠璃を維織して、

その中では華美を極めた佛事供養が營まれ、ゆるやかな轉讀の諧調のひまひまには管絃の響、蝶鳥の舞歌がたゞよひ出た。さうして、現世得樂を重んじたかれ等は、かうした佛事によつて正報を得られるものと信じてゐたほど、いつか寺院の境內に淨土を夢想し、供養行事に極樂を幻覺するのであつた。大鏡に、庶民が、法成寺の善美、目を駭かす有樣に、極樂が世に現はれたと佳賞することが出てゐるが、源氏物語には、源氏が故院のために催した八講を、禪師が「いとかしこう生ける淨土の飾りに劣らず。嚴しう面白き事どもの限をなむし給ひつる。佛菩薩の變化の身にこそものし給ふめれ。五つの濁り深き世に、などて生れ給ひけむ」（蓬生の巻）と激賞するところがあり、また、かの六條院の莊嚴さを「生ける佛の御國と覺ゆ」（初音の巻）とさへ形容してゐる巻もある。全く、後世は、法興院が東三條殿の中にあり、法成寺が京極殿の中にあるといふ風で、私宅と寺院の境界さへ撤廢され、また仁和寺や醍醐寺なども寺院ながら、花の名所として、遊樂の界と化して來たのであつた。そこに人々は、紫雲は見なかつたけれど、心から現實淨土の法悅に陶醉し得たのである。源氏物語中の明石入道は、灯影のもとに源氏の君の琴をひいてゐる姿の艶美さに「後の世に願ひ得る所の有樣も思ふ給へらるゝ夜の樣かな」と、泣く〳〵めで（明石の巻）てゐるが、むしろ法成寺の萬燈會などには、すでに現實の中に淨土を建設しようとしたものであつた。この事實は、法成寺の扉繪、鳳凰堂の九品淨土圖などに依つても傍證され得るであらう。

以上は、藤原時代の佛教が如何に現世利益をその目的としてゐたかを、四項目に分けて概說したにすぎない。さうして、わたくしは、わが紫式部が、源氏物語に遺憾なく當代の佛教の情況を描いてゐることを見て來た。作中に描寫してる點を以て、それを、たゞちに式部の宗教觀と推定することの誤謬多いことは論ずるまでもない。しかし、式部が確かに、祈禱的信仰や生靈的迷信（もつとも、こと〳〵く迷信といふ譯にゆかないが）を抱いてゐた事實に、式部の宗教觀も、かなり時代的のものであつたことを斷定するのは、誤つてはゐなからう。

しかし、その以上、式部の懷抱してゐたものに、彌陀の信仰の存してゐたことを、わたくしはこゝに認める。すなはち、金堂供養の如き現世淨土の有様も、ついに、式部をしてその厭世觀を捨てしめ得なかつたのである。かの女は、梵唄の音の中にさへ、いよ〳〵現實の悲哀を感じた。絕美なものゝ中に、ます〳〵哀愁の宿るのを味はつた。そこにかの女は、現世の生活を捧げて、死後の得樂を思つたのである。それは、恐らく前說の往生要集の感化であつたらうと思ふ。傳說によれば、往生要集が一度公にされると、上下萬民、源信の德を慕ひ、圓融院皇后詮子は、源信をしてその主旨を圖解して奉らしめられたといふ事である。その說く所、聖道門（自力）の難行道をすて、專ら、淨土門（他力）の易行道により、彌陀の本願を信じ、その名號に歸依してその淨土に入らうといふのである。かれが、彌勒淨土、忉利天を捨てゝ、特に彌陀の淨土を選んだ所以は、そこに、聖衆來迎、蓮花初花等の十の

福樂を認めたからであつた。

さて源氏物語に描かれた出家する人々の心を見るに、それが必ずしも病災平癒、長壽延命のためばかりでないことに氣付かれよう。つぎには、源氏の君の出家するまでの道程を辿つていつて見ると、その厭世觀の最初に見えた卷は、葵である。すなはち、頭中將との物語らふと、しめりがちになつて「はて〳〵は哀れなる世を言ひ〳〵て打ち泣きなどし給へり」とある。つぎに、出家の望みを仄めかしたのは、正室葵上の死に遭つた時で、「憂しと思ひしみにし世も、すべて厭はしくなり給ひて、かゝる絆しだに添はざらましかば、願はしき樣にもなりなましと思すに」云々と、稚ない紫上に對する愛着のために、その志が鈍らされてゐる。賢木の卷の、父帝御崩御の際も、結極 樣々の御ほだし多かりで全うせられなかつた。源氏が雲林院に詣で天台の六十卷をよましめられた條には、來世往生の望みが、殊に、はつきり描かれてゐる。

「まし明け方の月影に、法師ばらの閼伽奉るとて、から〳〵と鳴らしつゝ、菊の花、濃き薄き紅葉など折り散らしたるも果敢なけれど、この方の營みは、この世も徒然ならず。後の世、はた、賴母しげなり。さて味氣なき身をもて惱むかな、など思し續け給ふ。」（賢木の卷）

しかし、源氏が眞に、現實の哀苦を感じたのは、須磨の生活であつただけ、須磨の生活において始めて「こまやかなる鈍色直衣、帶しどけなく打ち亂れ給へる御樣にて、釋迦牟尼佛弟子と名のりて、ゆる

〻かに讀み給へる、又世に知らず聞こゆ」とまことに道心者のやうな氣持になれ得てゐる。殊に、暴風雨の難は、源氏自ら、京の紫上に「世を思ひ離る〻心のみ勝り侍る」と音訪れをしたほどに、それによつて大きい動搖を心にうけてゐる。かくて明らかに出家の意向を洩らしたのは、若菜(下)の卷においてゞあるが、その時はなほ帝の御許しが出なかつた。その後、鈴虫の卷あたりで、その期待がいよ〳〵濃厚になりゆくところに、かれは、突然紫上の遠逝のうき目にあふ。それは「御法」の卷になつてゐるが、こ〻において、いよ〳〵彌陀の名號を稱へて出家する。源氏の淨土門信仰の態度がはつきりとそこに明示されてゐる。

さて、源氏の君が出家しようとしてかくたゆたふ心は、式部が、宮仕への身ながら出家しようとしてためらふ心持であつたものらしい。紫式部日記の一節に、

行幸近くなりぬとて、殿の内を、愈々みがかせ給ふ。世にも面白き菊の根を尋ねつ〻堀りて參る。色々移ろひたるも、黄なるが見所あるも、樣々に植ゑ立てたるを朝霧の絶間に見渡したるは、げに老いぬ御きぬべき心地するに、なぞやまして思ふ事の少しも、斜なる身ならましかば、好き〳〵しくもてなし、若やぎて、常なき世をも過してまし。目出度き事、面白き事も、見聞くにつけても、只思ひかけたりし心の、引く方のみ強くて物憂く、思はずに嘆かしき事の優るぞ、いと苦しき。(寛弘五年十一月の條)

寛弘五年といへば、式部は、いまだ卅四五歳である。かの女の厭世觀は、何故、かの女を出家道心の希望にまで引き入れたのであらうか。現世得樂のため、順現受業のための出家の多かつたことは、既に言つた。式部が、皆人のやうに現世的幸福を望んでゐないのは、いふまでもない。その翌年一月の日記の一節は、又、その希望がその頃ます／＼熱して來たことを語つてゐる。

如何に今は、事忌みし侍らじ。人は兎言ふとも角言ふとも、只阿彌陀佛にたゆみなく經を習ひ侍らん。世の厭はしき事は、凡て露許り心も止らずなりにて侍れば、聖にならんに、懈怠すべうも侍らず。唯ひた道に反きても、雲に上らぬ程のたゆたふべき樣なん侍るべかんなる。其れに休らひ侍るなり。年、はた宜き程になりもてまかる。痛う此れより老いぼれて、はた珍らにぞ經讀まず、心もいとゞたゆさ優り侍らんものを。心深き人眞似の樣に侍れど、今は只かゝる方の事をぞ思ひ給ふる。それ罪深き人は、又必ずしも叶ひ侍らじ。前の世知らるゝ事のみ多く侍れば、萬づにつけてぞ悲しう侍る。（この項、式部の娘どへ宛てた消息の紛れて日記中に入つたものか）

未だ卅五六歳の年歯、しかも一世の才媛として宮仕へをし、殊に關白道長の寵愛を被つてゐる身で、年はた宜き程と言ひ、自らを「罪深き人」と嘆き、「前の世知らるゝ事のみ多く」と愁ふるは、はなはだ、不可解である。かくて果して式部は、全然、現世を超越し死生の界を解脱し得たであらうか。傳說によれば、かの女は檀那院僧正の允可により、天台の一心三觀の血脈を傳へ得たとも言はれてゐる。

出家の年代についても樣々な憶測が下されてゐる。長元四年五十七歲で寂したといふ傳へを正しいとすれば、なほ、その後廿餘年生殘してゐた譯である。その間の消息の杳として知られ得ないて、式部を見なければならないことは、わたくしにとつて何といふ遺憾なことであるか。

しかし、こゝに敢て、わたくしの批判を許して戴けるなら——こゝにわたくしは、再び、橋姫の卷から源氏物語を遡つて行つて見たいのである。

宇治十帖において、式部の筆がいよ〳〵圓熟し、薰の描寫等の中に、最もよく作者の呼吸の聞かれることは、すでに論じておいた。さうして、薰の性格の基調が厭世的、宗敎的であることも言つたとほりであるが、かれの求めた信仰は如何なる性質のものであつたか。これを朧ろながら、わたくしは、橋姫の卷に、薰が宇治の宮を慕ふ氣持に知り得るのである。

聖だつ人、才ある法師などは、世に多かれども、あまり強々しう、氣遠げたる宿德の僧都、僧正の際は、世に暇なく生直にて、物の心を問ひあらはさむも、こと〳〵しく覺え給ふ。又その人ならぬ佛の御弟子の忌むことを、保つ許りの尊さはあれど、氣配卑しく言葉だみて、骨氣無げに物慣れたる、いと物しくて、晝は公事に暇無くなどしつつ、しめやかなる宵の程、氣近き御枕上などに召し

入れ、語らひ給ふにも、いと流石に物むづかしくなどいみあるを、いとあてに心苦しき樣して、宣給ひ出づる言の葉も、同じ佛の御教をも、耳近き譬ひに引きまぜ、いとこよなく深き御悟りにはあらねど、よき人は物の心を得給ふ方の、いとことに物し給うければ、漸う見馴れ奉り給ふ度毎に、常に見奉らまほしうて、暇無くなどして程經る時は、戀しう覺え給ふ。

薰が、師として大僧正よりも宇治の宮をと慕つた心持には、少くとも二つの理由があるやうである。一つは、かれが學究的信者でないこと、いま一つは、佛教に詩を求めてゐること。これは、宇治十帖に描かれた薰の一擧一動が、立派に實證してゐると言つてもよい。かれは幾度か出家を期しながら、やはりそのまゝ道心しうる人間ではなかつた。かれは理性の鏡にうつる現實界に、合法的調和的のある物を認めえてゐる。加ふるに、かれは詩心を持つてゐた。それは、かれを粘り强い情愛の人としたのみならず、大自然の中にひそむ幽玄な美を感得せしめた。穢土――その言葉は、現世を呼ぶに餘りに不適當である、かれの人生の行程は、まことに失敗の反覆であつたに係らず、かれの涙には甘味がある。かうまで薰の性格を結論することは、多少言ひすぎの嫌ひがあるかも知れないが、薰は浮舟と共に、紫式部の最も愛した人物の一人であることは言つてよい。薰は、かくて性格的破産をうけたが、しかも敗北の下で勝利を謳つてゐるではないか。(孝標女が、浮舟の生涯に憧憬を抱いた心もそこにある。)

つぎに、源氏君薨去のすぐ前を叙した幻の巻を再讀して見よう。哀愁に沈む源氏の君が、いよ〳〵その美はしさを見せてくれるやうに、悲哀を敍述するに及び、式部の筆がます〳〵冴え出てゐることは、一種の驚異である。紫の上の逝つた翌年の早春のことである。源氏は、紫の上の追憶に、全くうつゝなしの有様であつた。

入道の宮の渡り始め給へりし程、其の折はしも色には、更に出だし給はざりしかど、事に觸れつゝ、味氣なの業やと、思ひ給へりし氣色の哀れなりし中にも、雪降りたりし曉に立ち休らひて、我が身も冷え入る樣に覺えて、空の氣色激しかりしに、いと懷かしうおいらかなるものから、袖の痛う泣き濡し給へりけるを、引き隱して、迫めて紛はし給へりし程の用意などを、夜もすがら、夢にも、又は如何ならむ世にかと思し續けらる。曙にしも曹司に下るゝ女房なるべし、「甚じうも積もりにける雪哉」と言ふを、聞きつけ給へる、只其の折の心地するに、御傍の寂しきも言ふ方無く悲し。

浮世には雪消えなむと思ひつゝ思ひの外に猶ぞ程經る

例の紛はしには、御手水召して行ひ給ふ。埋みたる火起し出でて、御火桶まゐらす。中納言の君、中將の君など、御前近く御物語聞こゆ。云々

堪へない寂しさの中にも、月日は過ぎて、また、葵祭の時節になつたが、何の慰めもない。

中將の君、東面に假寢したるを、歩みおはして見給へれば、いとさゝやかにをかしき樣して、起き

上りたる面付花やかに匂ひたる顏もて隱して、少しふくだみたる髮の掛りなど、いとをかしげなり。紅の黃ばみたる氣添ひたる袴、萱草色の單衣、いと濃き鈍色に黑きなど、うるはしからず重りて、裳唐衣も脫ぎすべらしたりけるを、兎角引き掛けなどするに、葵を傍に置きたりけるを採り給ひて、「如何にとかや、此の名こそ忘れにけれ」と宣へば

さもこそはよるべの水にみ草ゐめ今日のかざしよ名さへ忘るる

と恥らひて聞こゆ、げに、いとほしくて、

大方は思ひ捨てゝし世なれども葵は猶ほや罪をかすべき

など一人許りは、思し果てぬ氣色なり。

五月雨の時節は、またなく淋しい。

五月雨は、いとゞ詠め暮らし給ふより外の事なく、さう〴〵しきに、十餘日の月、花やかに差出でたる雲間の珍しきに、大將の君御前に侍ひ給ふ。花橘の月影に、いと際やかに見ゆる薫も、追風懷かしければ、千世を鳴らせる聲もせなむと、待たるゝ程に、俄かに立出づる村雲の景色、いと生憎にておどろ〳〵しう降り來る雨に添ひて、ざと吹く風に燈籠も吹き惑はして、空暗き心地するに、窓を打つ聲など珍らしからぬ故事を、打ち誦じ給へる折からにや、妹が垣根におとなはせまほしき御聲なり。云々

如何に、人々の心持を表はすに、それは巧みに自然を拉し來り、點景してゐることであらうか。哀愁の描寫の巧妙な節々は、言ひ續くれば限りはないが、式部は、しば／＼蕭條たる秋景を、手際よく配してゐる。源氏は一風、野分だちて吹く夕暮に「逝くなつた紫の上を忍び、（御法の卷）夕霧は「峰の葛葉も心慌しう爭ひ散る紛れに、尊き讀經の聲かすかに、念佛などの聲ばかりして、人の氣配いと少な」い小野の里に悲しき戀を遂げんとし（夕霧の卷）眞木柱が、鬢黑と破鏡の歎を抱いて去り行かうとすれば、「御乳母ども差集ひて宣ひ歎く、日も暮れ、雪降りぬべき空の景色も、心細う見ゆる夕なり」（眞木柱の卷）と叙し、また、藤壺の死にあつた時、源氏は「秋の雨いと靜かに降りて、御前の前栽の色々亂れたる露の繁さに、古への事どもかき續け思し出でられて、御袖もぬれつゝ」日を送るのであつた（薄雲の卷）その他、秋の描寫は、源氏の貶謫された須磨に音訪れた秋風、桐壺更衣の老母の隱れ家を照らす秋の月――何れとして、哀調の高鳴りを覺えしめないものはない。すべてが「秋の頃ほひなれば、物のあはれ、とり重ねたる心地」（松風の卷）である。それから式部は、故意からか、夕顏、紫の上の祖母、葵の上等主要な人物の死を、すべて秋季のことゝしてゐる。もちろん、全編の中には新綠を背景にして哀愁を寫し出したものが二三無いではないが、それらの出來ばえは立派だとは言へない。

悲哀美――わたくしは、それを、式部の胸裏にはつきり意識するものである。さらに見よ。式部は、

病患に窶れた人々を如何に美はしく描いてゐるか。源氏は、喪服を着て美を增し、罪を惱んで一層美を加へ（花散里の巻）病んでます／＼美はしかつた（須磨の巻）藤壺も懐胎のため窶れて、常より美はしく（若紫の巻）紫の上も祖母を失つて、悲しんで一層可憐に見えた（若紫の巻）源氏の戀人、空蟬はついに源氏をすてゝ、夫と共に、任地に下る。源氏は思ひ亂れた心で、やつと書を認めて空蟬に送る。その書の「御手も、うちわなゝかるゝに亂れ書き給へる、いとゞ美しげなり」と、亂筆の中にも美を認める點は、上述の悲哀美と相共鳴する點であらう。シェリーが、雲雀の歌の中で「美しき、極みの歌に、悲しさの、極みの想、籠るとぞ知れ」と、詠んだのは必ずしも、悲哀の價値を述べたのではないが、この場合、思ひ合はされる句である。さらに、「悲哀の背後には、常に悲哀がある。快樂と違つて、苦惱は、何等の假面をも冠つてゐない」と、藝術における悲哀美を高調して論じたワイルドがある。かれの、ド・プロファンダを見ると、「悲哀には、深刻強烈な現實性がある」とも、「藝術における眞とは、一事物それ自身の融和であり、又は、そのまゝ、思想の表現されたものであり、靈は肉の化身、又、肉は靈の化身でなければならぬ。この意味に、世に悲哀に優る眞實は無い」とも、書かれてある。かくて、ワイルドは、宗教を一藝術と見做し、キリストを大藝術家と推賞した。

　こゝに、ワイルドの思想の當否を論ずる暇はない。しかし、紫式部にとつても、釋迦牟尼佛は、美の權化と考へられなかつたらうか。少くとも、源氏物語に描かれた佛、法、僧の諸相は、宗教を說くた

めてなく、美を深めるために取材されたものではなかつたらうか。「巻々に、佛の道の事を多くかけるも、その理をしらしめむとにはあらず、たゞそのすぢにつきての、あはれを見せたるものなり。もし此佛の道の道理をしらさむためならば、かならず、源氏の君の、老の世のおとろへのさまをもかき、終りをもかくべきわざなるに、此君の事は、衰へのさまをも、終りをもかゝず、たゞよき事のかぎりにてやみぬる、これをもて、盛者必衰などいふ理をしらせたるにはあらざることをしるべし」と、斷定を下したのは、本居宣長である。まことに、式部が多少でも説法の心を抱いてゐたなら、幻の巻の後に、源氏の出家後を描き、宗教説話位、挾むのが必然であつたらう。

否、かゝる宗教の美化的態度のみならず、進んで、わたくしは、式部の戀愛美論の口吻をも、聽き知るのである。これは、源氏が、わが子夕霧の美貌を見て、落葉の宮との戀を認めるといふ場面であつて

かの事（註――夕霧と宮との關係）は、聞こしめしたれど、何かは聞き顔にもと覺いて、唯打ちまもり給へるに、いと目出度く清らに、此の頃こそ、ねびまさり給へる御盛りなめれ。さる様の好事し給ふとも、人のもどくべき様もし給はず、鬼神も罪許しつべく、鮮かに、物清げに、若う盛りに、匂ひを散らし給へり。物思ひ知らぬ若人の程に、はた、おはせず。片端なる所無う、ねび整のほり給へる、理ぞかし。女にて、などか賞でざらむ。鏡を見ても、などか傲らざらむと、我が子ながら

も思す。（夕霧の卷）

青春美、戀愛美が、道德宗教を乘りこえて、ぐん／＼映發せしめられてゐるではないか。若人の戀するのは、青春における特權であるといふ感じを與へられる。われ／＼は、もつと端的な例を、柏木に對する讃美の語で證することが出來る。柏木とは、源氏の室、女三の宮と情を通じた、さきの薫の實父なのである。作者は、各人の口を借つて、柏木の卷、橫笛の卷、鈴虫の卷に柏木の愛情を追憶せしめてゐるが、その一つには、「高きも下れるも、惜しみあたらしがらぬは無きも、うべ／＼しき方はさるものにて、怪しう情を立てたる人にて、物し給ひければ、さしもあるまじき、公人、女房などの、年古めきたるどもさへ、戀ひ悲しび聞ゆる」（柏木の卷）とまであるが、われ／＼は、「情あるものは戀をする」といふ結論をそこに見出だし得る。柏木の性格の大基模に理想的にされたもの、すなはち、主人公の光源氏に外あるまい。式部は、光源氏の性格に、大きい美を創造したのである。戀愛美を創造したのである。

——その人（末摘花——註）は、未だ、世にやおはすらむとばかり思し出づる折もあれど、尋ね給ふべき御志も急がでありふるに、年かはりぬ。四月許りに、花散里を思ひ出で聞え給ひて、忍びて對の上（紫の上——註）に御暇聞えて出で給ふ。日頃降りつる名殘の雨少し灑ぎてをかしき程に、月射し出でたり。昔の御步行思し出でられて、艶なる程の夕月夜に、道の程、萬づの事思し出でて

おはするに、形も無く荒れたる家の木立茂く、森の様なるを過ぎ給ふ。大きなる松に藤の咲き掛りて月影に靡きたる、風につきてさと匂ふが懐しく、そこはかと無き薫りなり。橘に代りてをかしければ、さし出で給へるに、柳も痛うしだりて、築土も障らねば亂れ伏したり。見し心地する木立かなと思すは、早う此の宮なりけり。いと哀れにて押し止めさせ給ふ。（蓬生の巻）

醜女ではあるが、なほ、源氏が見すて得ないで、この末摘花を音訪れる心地も、さこそと描寫されてゐるではないか。

雨の打ち降りたる名殘の、いと物しめやかなる夕つ方、御前の若楓、柏木などの、青やかに繁り合ひたるが、何となく心地よげなる空を見出だし給ひて、和して又清しと誦じ給ひて、先づ此の姫君（玉鬘――註）の御様の、匂ひやかげさを、思し出でられて、例の忍びやかに渡り給へり。手習などして、打ち解け給へりけるを、起き上り給ひて、恥らひ給へる、顔の色合ひ、いとをかし。柔和なる氣配の、ふと昔（玉鬘の母夕顔のこと――註）思し出でらるゝにも忍び難くて、「見初め奉りしは、いとかうしも覺え給はずと思ひしを、怪しう只それかと思ひ紛へらるゝ折々こそあれ（云々）」とて、涙ぐみ給へり。（胡蝶の巻）

源氏が、玉鬘によつて、思ひ出の夕顔を忍び、玉鬘に對して、たゞならぬ愛着を深めて行く心持が、こゝにも巧みに描かれてゐるではないか。

（落葉の宮の——註）障子を押さへ給へるは、いと物はかなきためなれど、（夕霧は——註）引きも開けず。「かばかりのけじめをと、強ひて思さるらむこそあはれなれ」と打笑ひて、うたて心の儘なる様にもあらず。人の御有様の、懐しうあてに艶い給へること、さは言へど特に見ゆ。世と共に物を思ひ給ふけにや、痩せ〳〵にあえかなる心地して、打ち解け給へる儘の御袖のあたりもなよびかに、氣近うしみたる匂など、取り集めてらうたげに柔かなる心地し給へり。風いと心細う更けゆく夜の氣色、虫の音鹿の鳴く音も、瀧の音も一つに亂れて、艶なる程なれば、唯ありのあはつけ人だに、寢覺しぬべき空の氣色を、格子もさながら、入り方の月の山の端近き程、止めがたう物あはれなり。

（夕霧の巻）

これは、わが子ながら源氏の嘆賞したかの夕霧に、漸く芽生え出た青春の惱みを寫したものである。一般に、全篇を通じて、女の心持を説きふせる男の態度が、いつも纖細微妙な筆致で描かれてゐるやうである。

（亡き父の喪に服せる宇治の中の君は——註）濃き鈍色の單衣に、萱草の袴の持てはやしたる、中々様變りて、花やかなりと見ゆるは、著なし給へる人柄なゝめり。帯はかなげにしなして、珠數引き隱して持給へり。いとそびやかに様體をかしげなる人の髮、袿に少し足らぬ程ならむと見えて、末迄塵の迷ひ無く、艶々とこちたう美しげなり。傍目などあならうたげに見えて、匂ひやかに柔かに、

おほどきたる氣配、女一宮もかう樣にぞおはすべきと、仄見奉りしも思ひ較べられてうち歎かる。又、ゐざり出でて、「かの障子はあらはにこそあれ」と、見おこせ給へる用意、打ち解けたらぬ樣して、由あらむと覺ゆ。頭つき髮ざしの程、今少しあてになまめかしき樣なり。(椎本の卷)

これは、薫が、中宮を隙間見した時の、中宮の描寫である。この時、中宮は匂宮に參ることに定まり、薫は大宮のみならず、中宮をもわがものとすることが出來ず、かゝる美しい姿を見るにも、いよ〳〵物思ひを募らすばかりであつた。ともかく、「花やか」「はかなげ」「そびやか」「らうたげ」「匂ひやか」「柔か」「おほどき」「打ちとけたらぬ」「由あらむ」「あて」「なまめかしき」など、修飾語の用ひ方を見よ。薫は、たま〳〵宇治に出かけたある機會に、大宮の休んでゐる場所に近づいた。しかし、大宮の拒絕に對して、薫の理性は、その以上望みを遂げしめない。

秋の夜の氣配は、かゝらぬ所だに、自らあはれ多かるを、まして峯の嵐も籬の蟲も、心細げにのみ聞きわたさる。常無き世の御物語に、時々さし答へ給へる樣、いと見所多く目安し。いぎたなかりつる人々は、かうなりけりと氣色とりて皆入りぬ。宮、宣給ひし樣など思し出づるに、實に長らへば、心の外にかくあるまじき事も、見るべき業こそはと、物のみ悲しうて、水の音に流れそふ心地し給ふ。はかなく明け方になりけり。御供の人々起きて、聲作り、馬どもの嘶ゆるをも、旅の宿のあるやうなど、人の語る思しやられて、をかしう覺さる。光見えつる方の障子を押し開け給ひて、

空のあはれなるを諸共に見給ふ。女も少しゐざり出て給へるに、程もなき軒の近きなれば、忍の露もやう／＼光り見えもて行く。互に、いと艶なる様形共を「何とはなくて、唯、斯様に月をも花をも、同じ心に弄び、はかなき世の有様を聞こえ合はせてなむ、過ぐさま欲しき」と、いと懐しき様して語らひ聞こえ給へば、漸々怖しさも慰みて、「斯ういとはしたなからで、物隔てゝなど聞こえば、誠に心の隔ては更にあるまじくらむ」と答へ給ふ。明くなりゆき、群鳥の立ちさまよふ羽風近う聞こゆ、夜深き朝の鐘の音、かすかに響く。（總角の巻）

何と、幽艶な表現ではないか。一夜中まんぢりともせず、戀人と向ひ合つてゐながら、嬉しい言葉一つ與へられず、そのまゝ靜かな朝を迎へた薫の、重い心がそのまゝ窺ひ得られるではないか。しかし、そこに戀愛美のある相が、漂渺としてゐることをも見逃すことは出來ない。

こゝに、再び、前說した式部の戀愛觀と女性觀とを想起して頂きたい。わたくしは、その場合、かの女の態度を、はなはだ、不徹底なるものゝやうに結論せざるを得なかつたことを、諸君も注意されたであらう。思へば、式部は、ついに思想の人でないのである。われ／＼は、かの女の戀愛觀や女性觀において、わづかにかの女の傾向を知り得るに過ぎないのだ。

紫式部は、情趣的の性格を持つてゐた。かの女は、生活の意義を、人間の理性や意思の中より、む

しろ、より多く、感情の中に求めた。そこに、かの女が、宗教生活、倫理生活より、より藝術生活を送り得たことも肯定することが出來る。藝術生活、すなはち、宣長の縷述した「物のあはれ」を知る生活である。純情さのためには、「鬼神も罪許し」「虎、狼だにも泣き」「空の景色さへ見知り顔」なので、實に純一無垢な境地だと、式部は、語る。「物のあはれを知らぬことの惡しき」「物のあはれ、知り顔作りて、情見せむとすることの惡しき」「物のあはれを知り過ごすことの惡しき」云々の詳細に、亘つては、すべてこれを、宣長の所論（「玉のをぐし」二の巻）に讓つておくことに對し、諸君の御諒察を乞うておく。

　要するに、かれ式部は、世界的小說作家であると共に、文學生活の上に一大體系を附與した文聖として、悠久に追慕さるべき大きい光である。燃えてつきない火群である。

西行

西行、西行法師、この法名は、いかに懷かしい氣持を、いまのわたくしの心の中に傳へてくれることであらう。否、わたくしは、その感じを、わたくし一人と言ひ切りたくない。日本民族として血をうけついだ總ての心の中に、さうした共鳴を認めうる。共感を斷じうる。西行――この短かい音感に、古來、わが民族は、恰も、青白い月光によつて一樣に色づけられる夜の萬象の如く、如何に同じ聯想と、同じ心象を抱いて來たことであらうか。それほど、西行の名は民衆的に滲透してゐる。普遍化されてゐるのである。

紫式部、その名は、まづ王朝時代の才媛として記憶づけられてゐ、兼好法師、その名は、やがて南北朝時代の旋毛曲りの隱遁者として印象づけられてゐる。芭蕉――この人名において、多くの諸君は、溫雅高德の一俳聖を、ただちに聯想するだらうと思ふ。しかるに西行の名において、われ〳〵は一自然歌人を想起すると共に、何げなく「西行さん」と呼んで見たい懷かしい人、出家姿の漂泊者を思ひ

描かないだらうか。曠野のたゞ中を、菅笠傾けてとぼ〳〵とゆく頼りなげな法師姿——それは、一般の人々が觀ずる西行の相ではあるまいか。

しかし、眞の西行はどんな人間であつたか。果して、かく民衆の心に幻影化された通りの法師であつたか。そこに疑問がある。わたくしは、本章において、西行が一道心となつて、死んでゆく迄、背負つていつた人間性、それを、出來るだけあらはに、捉へて見たいのである。

紫式部が、他界してから、約九十年の歲月を經した元永元年といふ年に、わが西行は、宮廷仕官の一武人の次男として生をこの世に享けて出た。(この生年は、台記や百練抄の說に基くものであるが、異說である他の吾妻鏡、撰集抄などの記す所は、史料の價値の上から信じ難い。)俗名は、佐藤義清。(憲淸とも、則淸とも)

さて台記(藤原賴長の日記)に、「家富年若心無欲」扶桑隱逸傳に、「最精弓馬」と、西行の少年時代を語つてゐる點から、最初に、問題とされてくるものは、當時の武人生活の實情である。まことに、西行の人生における第一步は、寵兒としての武人といふことであり、一面、終生を貫いての性格の基調が武の點にあつたと言つて差支無いのである。

すでに、紫式部の棲んだ世界の環境を述べた所で言つて置いた通り、延喜、天暦の善政として仰がれた時代は、やがて藤原時代の滅亡を語る前驅であつたのである。頽癈の禍根は、とほく奈良朝にも逆上られるであらうが、その禍根が慈雨を吸つて將に地上に芽出す迄に至つたのは、平安朝中期の諸政の結果であつた。藤氏の權力を倒壞せしめた勢力に二方面ある。一は、地方における武人の勢力、他は、京洛附近の寺院の勢力。この二大勢力を紓暢せしめるに至つた藤原氏の政策上の禍根を摘發して見ると、およそつぎの諸項を掲げ得るであらう。

第一は、言ふ迄も無い點であるが、皇室に對し外戚權の陋使である。大鏡が、藤原氏の榮花を描いて、文德天皇から筆を起したので知られる樣に、藤原氏の政治上專制力の整備化されたのは、清和天皇御卽位と共に、良房の攝政の職についたに始まる。徒らに幼帝冊立の策を弄して、下民に專政を強ふる獨斷政治である。見よ、清和天皇は九歲にて御卽位、卅一歲御讓位。陽成天皇は九歲卽位、十七歲御讓位。宇多天皇は廿一歲御卽位、卅一歲御讓位。醍醐天皇は十三歲御卽位。四十六歲御讓位。朱雀天皇は八歲御卽位、廿四歲御讓位。村上天皇は廿一歲御卽位、四十二歲御崩御。冷泉天皇は十八歲御卽位、廿二歲御讓位。圓融天皇は十一歲御卽位、廿六歲御讓位。花山天皇は十七歲御卽位、十九歲御讓位。一條天皇は七歲御卽位——といふ實情であつて、醍醐天皇と村上天皇の御在位の御寶算四十歲を御越し給うた如きその中に特例をなしてゐるのである。

枕草子を讀んだものは、かならず、十餘歳にましまず一條天皇と定子中宮との御仲合を、美はしく見奉るであらうが、藤氏の專擅と、互に、女子を宮廷にいれて外戚的權威を恣にしようとする醜惡な心の人々を想見せずには居られまい。さうした秕政の果てには、後三條天皇の如き御英邁な君の出で給うて、改革の第一歩を御展きになるであらうとは、容易に豫見せられ得たことではないか。

第二は、藤原氏の排他的政策である。天智天皇を御輔翼申して、改新の效を遂げた鎌足の功跡には、よく後世その子孫をして廟堂に參與せしめるだけの遺徳があつた點は疑ひない。さりとて、諸他の八百萬神の子孫たる神別、皇祖皇宗の子孫たる皇別の勢力を、そこに無視することは出來ない。同じく一氏族專擅の政を執るにしても、氏長たるものは、つねに他氏族の感情を阻害することなく抱擁するだけの寛才を必要とする。もちろん、最初こそ在原業平をして暗い運命について泣かしめ、菅原道眞を巧みに太宰權帥に貶し、源高明をして出家せしめる程度の悲劇に依て、私權を固め得たらうけれど、それは永久的のものではなかつた。藤原氏一族が、道眞の怨靈の祟りを感じて、北野神社を建立した心の裏には、すでに無暴な獨斷に對しての畏怖の念が高まつてゐたのである。

第三は、同氏族內の鬪爭、特にも官位の爭奪の醜態である。血族關係に依ておのれの地位を保持しようといふ小策を弄する北家系のものは、同じく藤氏といへ、南家、式家、京家のものは、これを疎外し、また同じく北家の中でも、氏の長者の位置を得たものは、異腹の兄弟を排し、とかく不過な地

位の者はその從兄弟に反するといふ風で、その汚らはしい內訌は當時の記錄、いな大鏡、榮花物語などにさへ書きつくされてゐるとほりである。

第四に、最も重要な點は、京師中心の政策である。すなはち、地方政治輕視の方策である。その由來を求めるなら、奈良朝の施政の中にあるであらうが、無定見の唐制模倣の精神は、無內容の形式主義をのみ執らしめた。その當時の記錄、たとへば百練抄などにも、地方の施政狀態は、ほとんど覗ふことが出來ない。官記的のものでも、國守の交代の記錄以上に、その施政如何には及んでゐない。諸物語にも見えるやうに、種々な情實、贈賄等の結果、國守に任官され赴任すると、四ヶ年の任期間に能ふ限の誅求を慾にし、退官後と雖も、十ヶ年の生活費が優に殘されたといふ有樣である。こゝに脫稅についての巧妙な手段も講ぜられ、貧困を極めた民は流浪して盜賊を働く、さらに海賊となつて沿岸を荒すことは、仁明文德諸帝の昔より史上に見えてゐる。

これも藤氏の他氏排斥の結果であるが、特に源氏平氏等皇別で賜姓の子孫は、地方官として地方に下つたまゝ、歸京せず各地に蟠居してその勢力を布植した。かれらは、自然の要求として、武力を練磨した。とくに東北方面には、先住民族の子孫で性來好戰的な武技、射御に秀でたものがあつて、その甚大な影響を被つた。かくて紊亂に紊亂を重ねてゆく地方政治の中に、つねに最後の勝利を獲得するものは、鬪爭に當つて實力を保有するかれらであつて、驅出しの受領ではなかつた。王朝末期、す

なはち後朱雀、後冷泉天皇の御代以後、如何に、諸々の事件が地方中心に醸し出されてゐるか。御堂關白の法成寺を創立する時、あなたでは地方の豪族並びに無賴の徒の問題が蜂起して、すでに宥收し難い有様に立ち至つてゐたのである。

こゝに特に、地方問題をして複雜化せしめたものは、莊園制度であつた。その起原は、奈良朝時代の賜田や功田といふがごとき免租地、乃至特殊開拓地の制度に由來するけれど、その弊の增大するに至つた點は、ひたすら經濟的壓迫による自然的結果と見るべきであらう。すなはち、開墾田の增加であつて、これらの中には豪族が部下を指揮して開かしめたものが多く、所有者は不輸租田として橫暴を恣まゝにした。かくて、公田をも、巧みに私田に併合して税を免れる徒も出で來り、國庫の收入はいよ／＼減少するのみ。かつ、不輸租田すなはち莊園地の住民は、上に豪族乃至公家を戴くために、一般住民に對し專橫を極めるといふ風であり、莊園地相互の間に鬪着の絕える暇はなかつた。

第五は、寺院の勢力興起である。これも由來を尋ねると、聖武天皇の佛敎御崇拜の時代に起原を求められるであらうが、われ／＼は、最澄・空海兩大師の方策の中に、著しい點を認めうるのである。神寺田は、もとより免租地であつたが、宗敎上の勢力を利用して、最大な墾田を持つたのも社寺であつた。かつ、寺院がいよ／＼宮廷の信仰を獲て、加持祈禱的の迷信界に關することもその業とするに及んで、その放縱さは地方の豪族にもすぎ、勢力も、相匹敵するものがあつた。實に、藤原末期から戰

國時代に及ぶわが歴史は、公武の兩勢力以外に、寺院の勢力を度外視して說き難い程になつてゐる。すなはち、東大寺領の伊賀國員辨莊の莊界につき國使が檢察に出かけた時、莊民が國使を射落し、馬鞍を奪つたといふ如き些事は昔の夢で、無賴の徒は招かれるまゝに僧兵となつて惡事を働らき、嗷訴、濫行をなして宸襟を痛ましめるに及んだのである。

かくて、武備の必要は、漸く公家の間にも論ぜられるに及んだ。しかし、一度柔弱な間に身を沈めた公卿殿上人の輩が、どうして勇ましく兵馬倥偬の界に身を提し得よう。六衞府の名はあるが、その官人は鳴弦こそすれ、强敵に立ち向ふ膽力を有さなかつた。頭の中將と官は呼ばるれど、藏人頭が本職で、近衞中將の方は名譽丈の兼官にすぎない。大江山の鬼を平げたといふ源賴光の武譚、高麗の賊を激退せしめた鎭西武士の勇名を聞くだに、身を慄はしたかれらである。

道長の薨去した翌年平忠常が謀叛を企てた時の如き、檢非違使が討伐に出かけたけれど、眞に討伐の效を奏したのは、當時甲斐守の源賴信（賴光の弟）であつた。かくて天喜四五年の交、陸奧の安倍賴時、安倍貞任の反亂を企てた際も、朝廷は、源賴義（賴信の子）をして追討せしめるより外なかつた。かくて賴義が、陸奧守としての任を果し、康平七年凱旋した際、いかに驚異と讃嘆の目を以て公家がかれを迎へたかは、想像するに餘りがある。

その後、延久元年における大和の山賊致親の追捕、承暦三年の美濃の亂の討平、永保元年の園城寺凶徒の捕縛、寛治元年の淸原武衡の討伐、寛治七年の出羽の賊平諸妙の處罰、康和三年對馬守源義親の鎭西を刧掠したに對しての征討、天仁二年の、源義明父子が近江において叛逆した折の追討等、何れとして、源平兩氏の武將の手によらないのはなかつた。源氏では、義家、爲義の英傑あり、平家にも正盛、忠盛等があつて、檢非違使の官は、專らこれら武將の當る所となつたのである。藤原一門の者が百官諸司の役についた昔日の俤は既になく、堀河天皇御卽位と共に、白河上皇の、院中においてなほ、御在位の時に變らず御親政なるに及び、藤氏專擅の政も一蹴されてしまつた。宮中に、瀧口の武士のあつた如く、院中には北面の武士が設けられた。武術は、いよ〳〵時代に必須のものとなり、藤氏の末流の中にも、射御の術を極める者さへ漸う出て來つた。ことにも、京師の中に群盜が横行し、あるは皇居に放火し（康平二年）あるは奪略を恣にする（永久二年）時世相において、武衞の兵の袖手傍觀が許されようぞ。また、度重なる僧徒の嗷訴——興福寺、熊野寺、延暦寺等——に對しても、京師の地は武裝を要求したのである。

顧れば、道長が法成寺の工を起してから、わづか、數十年の年月を經したのみ。甘夢をのみ貪るかれに、この僅かな年月の間にこの變化衰頽の來ようなどと、どうして豫想され得たであらうか。頂上に登る時間は長く要するであらうが、下りゆく時間は短かい。波動を構成し、リズムを作つて世相は

移動するといふけれど、その言に謬誤はない。さうして、わが西行は、かゝる轉向時代の渦中におい
て、生の第一歩を踏み出さなければならなかつたのであつた。そこに、まづ、かれが經した數奇の運
命の第一歩がある。

西行、すなはち佐藤義淸の家系は、藤原氏の出であつた。尊卑分脈によるに、鎌足から十六世の子孫になつてゐるが、義淸の九世の先祖は、かの有名な俵藤太秀郷である。秀郷の父、村雄はもと〳〵下野權大掾で東國武士の間に武を練つた者であつたが、秀郷も下野掾押領使に命ぜられたほど、武將としての聞えが高かつた。かれが、平貞盛と共に平將門を誅しえたこと、近江において百足退治の傳說を殘したのも故あることとて、その子孫は、藤原氏ながらも衞府の官人として任官して來た。義淸の曾祖父から佐藤氏を名乘つたのであるが、祖父の季淸、父の康淸、共に衞門大夫であり、兄の仲淸は内舍人で攝政の隨身であつた。上述のやうに、武勇の重視せられる時代において、佐藤一門の幸運は想ひやることが出來る。藤原頼長が、佐藤氏を「一家富」と言つた消息も自ら諒解されるであらう。一般に、武家は富有でありえたやうである。かつ、傳記は不詳であるが、義淸の母は、監物源淸經女だといふ事であるから、母系からも武人の血をうけてゐることが知られる。父康淸が、武人の女を娶つた事實に徵しても、義淸が如何なる環境の中に養育されたかゞ想像されるであらう。「年若心無欲」と、頼

長の記したことも、一々當然だと肯かれる。かれの理想は、祖先の秀郷の武や、源の頼光の勇であつたであらう。

義清の六歳の年の七月（保安四年）の事である。延暦寺の僧兵が、例の日吉の神輿を奉じて大擧入京し、平忠盛を訴へて來た。當時京師における武將の花形は、この忠盛と源爲義とであつた。しかし、忠盛には隱岐の流人源義親を討伐する外、功名もあつたけれど、かれは寧ろ才幹に長けた人物で、巧みに白河法皇及び鳥羽天皇の寵を一身に集めてゐた。かうした點から、僧徒の嗷訴問題も惹起したのではあつたが、かれは爲義と力を併せて、これを卻け得たのである。六歳の義清の眼にも、かゝる京洛の騷擾が何等かの意味を以て映じ出されたであらう。かく寺院は寺院相互に鬪爭をつゞけ、延暦寺の僧徒の如き再度も、園城寺に攻め入つてこれを燒き拂つてゐる。興福寺と、延暦寺は言ふ迄もなく、反目を繰更してゐた。

かゝる間に、平忠盛は巧みに立廻り、大治四年三月（義清十二歳の年）及び保延元年四月（義清十八歳）の兩度において、山陽南海西海の海賊を追捕して功名を立て、長承元年三月（義清十三歳）には、卅三間堂を鳥羽上皇のために創建し奉つて居る。白河法皇の御信任を如何に博したかは、かれが法皇護衛の任を命ぜられ法皇の寵姬祇園女御を賜はつた一事で推斷することが出來る。ともかく、かれ忠盛は、刑部卿に昇進し、遂に武家の出で昇殿をも許される榮達を見たので、源爲義の到底、進ん

で角逐し得る相手ではなかつた。

少年の義清の心にも、忠盛は色々の意味をもつて寫つたに相違ない。殊にも義清は、下北面の一武士として鳥羽院に仕候しうる身となつたのだから。撰集抄に、この時代のかれを「人に萬優れて露ばかりも思ひおとされじと思ひ侍りしかば、九夏三伏の暑きにも汗をのごひて、ひねもすに庭中にかしこまるを事とし云々」と記してゐるが、生眞面目なかれは、當時いかにもその通りだつたらうと思ふ。眞實さと熱意――この二つは、武士的精神の基調をなしてゐたのである。（撰集抄は假託の書である）

十訓抄の第八、可堪忍于諸事事の中にまた、つぎの様な逸話が加へられてある。

西行法師、男なりける時、かなしうしけるむすめの、三つ四つ計りなりけるが、重くわづらひて、限りなりける比、院の北面の者ども、弓射て遊びあへりけるに、いざなはれて、心ならずのゝしりくらしけるに、郎等男の走り來て、耳に物をさゝやきければ、心しらぬ人は、何とも思ひいれず。西住法師未だ男にて、源次兵衛尉とてありけるに、目を見合はせて「此の事こそ既に」と打ちいひて、人にも知らせず、さりげなくて、聊かの氣色もかはらでゐたりし、ありがたき心なりとぞ、西住後に人に語りける。

十訓抄中の記事もそのまゝ信ぜられないことは、殘念な事であるが、わたくしは、廿歳前後の義清の性格の中に、かうした一面をはつきり認めるのである。上皇は、もう四十歳を越してゐた平忠盛の敍

才と武勇とを賞美された。同時に、まだ廿歳になるかならない佐藤義清を、特に寵愛された。これは、法勝寺八講などに上皇が護衛として義清を召し行かれたといふ如き傳說の外に、西行が上皇に奉つてゐる歌などで實證されうると思ふ。かれが、ありたけの熱心を籠めて、今や射術の練技中である、そこに召使の者が來て、愛子の重患の報知を耳に囁く。しかし義清は「さりげなくて、聊かの氣色もかはらで」衆中に、射術をつゞけた。いふ迄もなく、胸中は不安の念に燃えたぎつてゐたに相違ない。しかし、かれの强い意志はよくこれを抑へ込んで顏色にすら現はさない――そこに己が子の戰死するのを見て、顏笑む武士の精神と共鳴するものがある。その場合、自抑の心なく、「そりや大變だ」と、いそ〳〵召使と共に病兒の家に歸つてゆく者あれば、それは情に脆い人間である。恰も法顯三藏の如き大德者さへ、印度に渡つた時、故國を思つて泣いたといふ話のやうに、さうした情の弱々しさにもわれ〳〵は美はしさを認める。しかし秋霜の如き强志の中に、われ〳〵は美を感得されないだらうか。如何なるものにも、盲目となりそれを溺愛することの出來なかつたのが、義清の性格のやうである。かれは、歌道に熱中した、また自然に對する愛着もこれをすて得なかつた。しかし、かれは多くの新古今集的歌人の如く詩心に惑溺もしなかつたし、また、いかに月花の美を觀じたとてその官能美に沈潜はしなかつた。

わたくしは、こゝで一先づ飜て、當時の院中仙洞の模樣を概見したい。

三代の天皇に亘り、四十餘年間院中に政を聽き給うた白河法皇の御崩御になつたのは、義淸十二歲の時、すなはち大治四年七月の事に屬してゐる。時恰も、崇德天皇御在位中であつたが、御父君鳥羽上皇が、院政を繼がれることとなつた。藤原忠通は、同年關白となつてゐるが、政治上の權力においては、昔日の關白の俤すら現はし得無かつたことは說明を要しない。

そもそも院政の意義を考へるのに、その由來は後三條天皇の藤原氏の橫暴を抑制するために、形式的に帝位を白河天皇に御讓りあつて、院中において自由に實力を御發揮なさらうとし給うたに始まる。いはゞ、舊來の攝政權の新たな形に推移しただけのものである。もつとも內裏の外に仙洞が獨立したゝめに、すべてが二重になるのは止むを得なかつた。詔勅に對して院宣あり、內の殿上に對し院の殿上あり、瀧口の武士に對し北面の武士があるといふ樣に。かつ、天下の大事はすべて院宣を以て處決されたので、宮廷は閑暇多く、わづかに改元、節會、敍任等行はれるのみに過ぎなかつた。特に鳥羽上皇の如き百般につき豪奢にわたらせ給うた院政にあつては、官人すら內裏に仕へるより院に奉公することを譽れとする傾きがあつた。義淸は、かゝる時代北面の武士として仕官してゐたのである。鳥羽上皇は、まづ長承元年に新制十四樣を定められた。同三年に京師の條路を改修し給ひ、更に鳥羽殿修築の工事を起し給ひ、外に法勝寺、得長壽院等創建された寺院も少なくない。かつ、上皇は學問藝

術方面の御造詣も深かつた。天下は、兵燹四方におこり劍戟の衢に化しようする前兆の中に、上皇は、華美に院政をつづけ給はれた。かの堅く紙を張つた塗烏帽子や、錦の直垂など用ひられる樣になつたのもこの時代に由來するので、これには源有仁等の言を容れられた上皇の御好尚があつた譯である。（もちろん、武士が一般富有であつたにもよるが）上皇は、また、自ら催馬樂を歌ひ給ひ、笛を吹き給うた。御製和歌の勅撰集中に傳へられるもの八首

宇治前太政大臣京極の家の御幸の日よませ給ひける

春霞たちかへるべき空ぞなき花の匂にこゝろとまりて（金葉集）

わづらはせ給うける時鳥羽殿にて時鳥の鳴きけるをきかせ給うてよませ給うける

常よりもむつまじきかな時鳥しての山路のともと思へば（千載集）

五十の御賀過ぎて又のとしの春鳥羽殿の櫻のさかりに御前の花を御らんじてよませ給うける

心あらば匂を添へよ櫻ばな後の春をはたれか見るべき（同）

人に遣はしける

いかばかり嬉しからまし諸共にこひらるゝ身を苦しかりせば（新古今集）

鳥羽殿にて花のちりがたなるを御覽じて後三條内大臣に
　給はせける
惜めども常ならぬ世の花なれば今のこのみを西に求めむ（同）

これら四五首の中にも、幾分か鳥羽殿における優雅な御暮らしが忍ばれ得ようと思ふ。結構莊大な鳥羽殿では、當時益々熾んになつて來た歌合的の歌會も試みられたであらう。例の西行物語などにある鳥羽殿の障子の畫讚歌を奉つて功名を博し、上皇から名劍朝日丸をうけたなど、全然後人の僞傳であるけれど、それら詩歌管絃の逸遊の間に、歌才豐かな義淸がしば〳〵召し出されたことだけは、疑ふことの出來ない事實であらう。

歌人としての西行――それは、ある場合西行のすべてを語る事も出來る。それほど、國文學史における西行の位置は高い、功績は著しい。後世の追慕を集め、當代の異彩だと賞讃されてゐる。まことに、かれの歌才は本質的の如く觀ぜられる。

こゝに、わたくしは、かれの父祖と、かれの周圍を考へて見よう。しかるに、歌人としての天賦を、かれの一族中に見出だす史料の存しないのは、この場合いかにも遺憾である。紫式部の父は學者としての名を傳へ、兼好の兄も佛學に通達した人として名を殘してゐる。しかるに、義淸の一族には、前にも後にも才學の人は無く、かれは恰も彗星の如く輝いてゐるのである。當代の歌壇が、衰微の時

期にあつたことは、義清の十歳の年（大治二年）撰進された金葉和歌集、廿七歳の年（天養元年）撰進された詞花和歌集が、八代集中でも、最も貧弱である點で概觀される。義清がその當時、特に師事したとか影響を被つた樣な歌人は、ひとりも無いのであつた。

ともかく、武人としての義清の生立ちの半面には、また歌人として多才で幸福な方向の存したこと、及びそれをかれ自身が意識してゐたであらう、といふ事を斷言するに憚からない。

かつ、かれには家に愛する妻子があつた。

しかも、上皇にかくも寵遇の深かつたこの一北面武士、佐藤義清は、年僅かに廿三歳にして、不意に出家したのであつた。靑道心になつたのであつた。かれは、

惜しむとて惜しまれぬべきこの世かは身をすてゝこそ身をも助けめ（玉葉集）

と、上皇に御暇を申し、妻子を家にすておいて、東山の知人の坊で出家得道したのであつた。

出家、出家、

迷ひを主じとする俗界の人にとつて、この義清の場合の如き出家程、如何やうにも勝手に解釋されるものはない。

外見幸福に見える一靑年の遁世、しかし身の幸福などゝいふ事が、血氣な當人にどうして會得され

得よう。かれは、たゞ若氣の至りて出家したまでだ。例へば、傳說通りに同族で氣のあつた友の憲康（憲保とも）が、頓死したゝめ、突然人生の無常を觀じて前後の考へもなく世を捨てたまでだ。後には、今更還俗も出來ず、さりとて山住みも出來ないで京洛の畔をうろつき周つてゐたのみである」と、かう評し去つて仕舞つても、そこに多少とも肯かれる點が無いでもない。

また「かれの出家は、あらぬ戀愛の結果らしい。上皇の后に待賢門院といふ方があつたが、そこに出入した義淸はそこの女房堀川と相思の中になつた。堀川は、才媛で堀川集にも

黑髮の別れを惜しみ蛬虫（きりぎりす）枕の下に亂れ鳴く哉

湧き返り岩間の水のいはゞやと思ふ心をいかで洩らさむ

よそふべき方も知られぬ戀なればいかにいひてか漏しそむべき

長からん心も知らず黑髮の亂れて今朝は物をこそ思へ

などゝいふ樣な妖婉な自作を遺してゐる女房であるが、妻子ある義淸は自責の念の爲めその戀を遂げることが出來なかつた。熱情で、生一本のかれは、煩悶に煩悶を重ねた末出家したのである。結極、かれの捨身は、若い心の戀に由來したものにすぎない。『何事につけてか世をばいとふべき憂かりし人ぞ今日は嬉しき』といふのもその述懷である」。さう批判を下す人があるとしても、或はさうでもあつたかと同意されるであらう。

また、人あつて、西行の出離遁世などしかく大きい問題ではない。見よ、御堂關白すら晩年入道となつて讀經に日を暮らしてゐたではないか。晩かれ早かれ、當時の人が出家することは當然視されてゐた。叡山の如きは、市中より却て俗流紛々で、出家者は俗人以上に名利を爭奪し、享樂をなしえてゐる。歌人には、俊成定家に見るやうに、殊に出家する者が多かつた。撰集抄を見れば

　妻子をふり捨てゝ面白き處々をも拜み、山々寺々をも修行し侍るは、中々に賴母しくぞ侍るべき、

　もとより世になれば、望もなし、望なければ恨もなし云々

とある樣に、かれも極く氣輕い動機から出家したまでゞある。俗界と出家界とを雲泥の差ある別界視したのは、他の時代の事で、當時はさうでなかつた。――と、かう反説をあげるならば、その言葉にも多少の意味を認めざるを得まい。

　さて、他に充分の史料を持たないわたくしはこの場合、ひたすらに、かれの歌集に賴つて、そこにかれの眞實意をうけとるより外に道を知らない。しかし、さりとて、わたくしは必ずしも悲觀しないのである。たゞに記錄的な史料の端くれより、いかに、卅一文字のかれの歌が有意義であるかを思ふ。そこには、僞らうとしても僞り得ない作者の本然の相そのまゝが浮び上つてゐるではないか。

　濃い灰色の霧に取りかこまれたやうな憂鬱、頭の中に重い鉛を詰めこめられたやうな壓迫――さう

した居たたまれない周圍から、多少でも、煩悶者を救つてくれる道にどんな世界があるであらうか。積極的でなく、消極的にでも逃れ去るにどんな世界があるであらうか。すなはち、

第一　氣分陶醉

第二　官能陶醉

第三　捨身遁世

第四　欣求淨土

これらが、その主要な方向だとわたくしには思はれる。この四方面は、各個人の氣質に基いて、各々が獨立する場合もあるし、錯綜する場合もあらう。いふ迄もなく、第一第二は藝術、古典（古書研究や、有職故實趣味等）自然、戀愛等に陶醉を求めてゆく者、第三第四は宗敎へ逃避する人々を指したものである。さうして、われ〳〵は、それら全部を彩る世紀末的氣分をそこに感得せしめられる。

こゝで平安朝末期の大體の色調もその例に洩れてゐないと言ひたいのである。しかしわたくしは、たゞちにわが義淸をこの公式に當てはむべきか、否かを速斷したくない。それまでに、もつとわたくしは豫備的材料を吟味すべき務めがあるから。

第一は、氣分陶醉を求めて、現世苦を忘却の淵に潜めようとする人々、それは炳として、この時代

から顯著になつたことが知られる。それが貴族階級において著しいことは言ふ迄もないことであるが、遊戯氣分、尙古氣分、唯美氣分等を、その特色としてあげることが出來る。

亂世における遊戯耽溺——これを以て、公家を無暴とのみ嘲弄したくない。かうした事實は、すべて世紀末現象の一つであつて、それは、現世苦を餘り強く味はされた人の餘儀ない逃げ場なのだ、貧乏人の自暴酒なのだ。公家階級の斷末魔における自棄的態度なのだ。京洛の地は屢〻山賊の横行する時代となつたのみか、ある海賊は、宮中に放火迄した末世となつたのである。僧徒は嗷訴を繰返へすのみか、上皇をさへ呪咀しようとする亂世なのである。如何に無神經な公家ありとするも、娯樂のために公事を假裝行列と化せしめ、晏如たり得るであらうか。かれらは、どこまでも己れの地位名譽に執着を持つ。しかし執着を抱けば抱く程、己れたちの階級の末路は近づいて來てゐるのである。かれらは、平忠盛の殿上したことを嫉み、平清盛を高平太などゝ嘲笑してのみ居られなくなつてゐた。その間にも、かれらは、なほ年中行事をいよ〳〵遊戯化せしめ（辨内侍日記や增鏡參照）管絃や蹴鞠にのみ浮身を窶してゐた。（梁塵秘抄、實躬卿記參照）かうした遊戯は、公家が武家に對して盾突く最後の器なのだ。庶民が棧敷を造り、樹に登り、公家の遊戯に見惚れる時、公家は、わづかに空洞に向つたそうな心の痛みを忘却することが出來たのである。この傾向が鎌倉時代に及んでいよ〳〵濃厚になつたことは、史實の明らかに實證する處である。

次に、尙古氣分においても同樣である。それは、將に崩壞せようとする貴族文化に對する無量の愛着に原因する。かれらは、明日來らうとする世界と、遠い延喜天曆の治政とを比較して、徒に過去の幻影を描いて、それに住しようとする。當來の方角から己が眼を避けしめて、過去の夢の中に惑溺しようとする。そこには、整つた法令がある、美しい文學がある、優雅な日常生活がある、しかもそれらの幻覺は、容易にかれらの亂された心を奪つてくれる。有職學、古書研究、秘傳的和歌、題詠和歌等の諸現象は、それを證する確實な材料となつてゐる。

かの大江匡房の江家次第廿一卷は縉紳の取りて模階とする處であり、園槐記、春玉鈔の著者なる源有仁については、これまた前說した通りである。古書研究は、古歌解釋（現存中、もつとも古い隆源口傳）古語解釋（綺語抄、和歌童蒙抄）萬葉研究（藤原通俊、大江匡房、大江佐國、源國信等）歌學（俊賴口傳、奧儀抄、袋草子等）書目研究（和歌現在書目錄等）解題（萬葉集目錄、古今集目錄等）など、いろ〳〵の方向をとつて、その色彩が現はれてゐる。源氏物語さへ、すでに歌人に依つて研究的によまれてゐたことは、俊成の正治奏狀によつて認めることが出來る。すべてこれらの現象は當時において、勃然として熾んになつたところのものであつた。

和歌祕傳や歌學口授の傾向も、かの有職趣味に類してゐる。萬葉集時代の人麿赤人ならぬ延喜時代の歌人をさへ神聖視するに及ぶ、「一卷に千々の黃金をこめたれば人こそなけれ聲は殘れり」とは、惠

慶法師の貫之集を讃へて詠んだものであるが、和歌に關する古人の辭は、金玉の響の如く後人を痲痺せしめた。解釋法、詠歌法の上に、自ら祕傳が作られて、その傳綬を得ることに無上の誇りと、自足を感じたことも推察されよう。こゝに、歌學といふ如き詩歌に關する修辭學が生じ、一層かゝる趨勢を紓暢せしめて居る。

次に、唯美的氣分を歌の世界と自然愛の世界との二方面に分けて考へて見よう。

歌の生命とするところがわれ／＼の直觀で得た所をそのまゝ表はした點にあること說明を要しない。しかし、それは氣分藝術的偏向を現はす時、著しい變體を示してくるのである。それは、一種耽美的唯美的傾向を現はすと共に非現實美の尊重を來らしめる。わが和歌史において、この色彩の最も豊かに示されたのは、いはずもがな、新古今集においてゞあるが、その前驅ともいふべきものを、早く金葉、詞花、千載諸集の時代に認めることが出來るのである。すべてが、外向的から內向的へ移つてゐる。藤原顯季が、自宅に源俊頼等を招いて人麿影供をなした如きは、他面においてよく當時の歌壇の特質を說明するものである。

一、歌合の流行――歌人を左右に分けて各自その詠歌を番ひ、その優劣を定める。それはそれ丈で遊戲と言つてよい。萬葉集時代、古今集時代にも未だ見ない事柄なのだ。それが年を追うて流行して來たが、心の隱れ家として歌人には恰好な界だつたのである。時に神社の社頭で行ひ、多氣宮歌合、

西宮歌合の如き」また、故人の作を合せて勝負を決せしめ（前十五番歌合）漢詩と歌とを合はせしめるなど（詩歌合せ）その方法にも様々ある。それが如何に流行したかは、群書類從の歌合部を見わたしただけで、誰にも納得されよう。

二、題詠、本歌取、釋敎歌の流行――つぎに、この特色をあげることが出來る。題詠は、拾遺集、後拾遺集と順次に增加して來たけれど、いまだこの時代ほど甚だしくはなかつた。（なほ、定家の明月記參照）本歌取の詠歌心理も、題詠と相通ずる點がある。例へば、古今集中の歌「春の日の光にあたる我なれど頭の雪となるぞわびしき」といふ一首を基として、その模倣でなくさりとて全然新奇な作でない特殊の世界を作り出して詠出する、「年つもる頭の雪は大空の光にあたる今日ぞうれしき」――これは伊勢の詠んだものであるが、かやうに歌を仕立てるのは、ほとんど技巧といふ點に負うてゐる。釋敎歌なども、ある意味で、句題和歌、結題和歌と言ひうるであらう。これらはそれ〴〵特色はあるにしても、詠歌を技巧化し遊戲化して、その氣分を弄んでゐる事實は誰にも爭はれない。

三、漢詩味の詠歌の增加――平安朝時代に文選、白氏文集、唐詩などの愛讀されたことは、今更、繰返すを要さぬが、愛玩の理由が、それらの美辭麗句であり、氣分の上にあつたことは首肯されることである。故に上述の句題和歌にせよ、詩歌合せにせよ、いよ〳〵和歌と漢詩とを接近せしめたが、その結果は、漢詩中の措辭を巧みに利用するとか、その遒勁味をとり入れてある氣分を釀出せしめる

かといふ極めて技巧的、氣分的のものたらしめた。それは一層、歌人をして歌の世界に沈潜することを要求する結果を生んだ。一例をとれば、白氏文集中の「青黛畫眉々細長」云々を題材として

さりともとかくまゆずみの徒らに心細くも老にけるかな

と、上陽人の末路を詠む如きは、一種の詠史歌的のものであるが、そこにも頓呼法をしば〳〵用ひ、てにをはを省略し、名詞止の作を多く作るなど、漢詩味の浸潤を爭ふことは出來ない。

思ひきや雲井の月をよそに見て心の闇に惑ふべしとは――忠盛

ほとゝぎす心も空にあくがれて夜離がちなる深山べの里――孝善

時しもあれ秋古里にきて見れば庭は野べともなりにけるかな――公任

これらには超現實的遊樂的世界の香味豊かである。「長恨歌の心を詠める」といふ様な歌さへも詞花集に出てゐる。その他一般に詩會の行はれたことは、明月記などに載する所である。

四、纎巧な修辭の發達――古今集と新古今集、この二大歌集の比較において、すべての讀者の頭を最初にうつ所は、まづ、後者における纎巧な修辭の發達であらう。新古今集中作者の、一段と高く身を構へてこれ見よとばかり詠み出してゐるのを舞臺上の動きと見るなら、古今集中の歌は、偶然出會つて立ち話する程度のものである。金葉、詞花の撰進された時代は、まさに、新古今集の大成を見ようとする橋渡しの途中であつて、いまだ磨きを受けてはゐないが、あらゆる修辭の使用は、その間に見るこ

とが出來る。

風吹けば波の綾織る池水に糸引き添ふる岸の青柳――源雅兼

これは、艶麗な辭句を使用した一例である。

風をいたみ岩打つ波のおのれのみ砕けてものを思ふころかな――源重之

これは比喩の巧みな例とすべきか。

朝な／＼鹿のしがらむ萩の枝の末葉の露のありがたの世や

これは四句まですべてが、五句の序をなしてゐる珍らしい詠み振である。

今日よりはたつ夏衣うすくともあつしとのみや思ひわたらむ――增基

かうした緣語と掛詞とで出來た全然技巧歌も少なくない。

忘られぬ人の中には忘れぬを待つらむ人の中に待つやは

これらは、委細な內容を巧妙に詠んだといふより、徒らに辭句を弄したものと評されても致し方はあるまい。

秋の夜の月に心のひまぞなき出づるを待つと入るを惜しむと

この下の句は、對句をなしてゐる一例である。

要するに、技巧が歌において重視されると、詠歌といふ事實は、抒情叙事といふ世界から、技藝とい

ふ界に入つてくる。それは、遊樂、翫賞のためには幸福な傾向であらう。後冷泉天皇が、天喜四年に群臣に歌題を賜つて、歌を献ぜしめ中殿（清涼殿）で披講する例を開かれた中殿御會と稱するものゝ如き、堀河百首に始めを開いたといふ百首歌の題を豫め定めてこれを詠出し貴人に献上する如き、ある遊樂三昧を度外視して諒解出來ぬ當時特殊の現象だと思ふ。

文學愛と竝稱さるべきは自然に對する愛である。自然美は、官能的に享受さるべきを普通とするが、自然美の氣分化されたことも、この時代の大きい特色と見なすべきである。現實生活に對する倦怠者、競爭場裡における敗北者、また人生觀における運命論者に、どうして、綾織る自然の色彩、妙樂的自然の音色を、感覺的に感受する餘裕があらう。古今集に詠ぜられた自然が、萬葉集の自然に比して、はなはだ、主觀的であることは誰しも肯定することであるが、しかも、自然味は却て、萬葉集より遍滿的である。深く滲透してゐる。それは矛盾の樣で、決してさうで無い。見よ、後撰、拾遺の諸集の哀傷、戀、雜の歌などの材料が、如何に多く自然から取られてゐるか。しかも、その自然は全く無色であり、無音であつて、餘りに概念的のものである。金葉、詞花以後の諸集には、これらの集に比して、幾分感覺的自然が加味されて來たとはいへ、なほ、歌人が套習的態度をすてゝ、ありのまゝに自然美を感受してゐるやうには思はれぬ。結極、自然の氣分化である。自然の與へてくれる慰安の享受

である。恰も、文學の世界に陶醉を求めていつた樣に、かれらはまた自然の中に熟睡を貪つてしまつたのである。

第二、つぎに官能陶醉の傾向について蒦見を與へて見よう。精神的悶えを忘却するために、氣分や夢幻の世界を求めて滿足される人は、いまだ、その惱みの深からぬものが多い。苦痛が高潮して自暴自棄を生み出すと、强烈な官能的刺撃を求めて、身心をすべて耽溺して省なくなる。特に、近代文化の中には、さうした色彩がもつとも著しい。それは、むしろ病的といつてよい。酒、女、强烈な色彩――さうした官能的刺撃の中にのみ、やうやく自己の住居を求めて頽廢的生活を送る。

平安朝末期の史料からは、さうした社會相の存したことを明確に考證することは出來ない。デカダンスとなるには、なほ、現世の與へる惱みも淺かつたのであらう。また、信仰を持ちえたかれらの多數は、信の世界に逃避安住することも出來たのであらう。しかし、ただ、贅澤な生活、given費の生活は、上述の官能的惑溺の一面であると見て差支へない。御堂關白逝いて、再び、かれに優る榮華を繰更えす淸華はなかつた。しかし、莊園の亂脈は、いよ〳〵舊公家や地方豪族をして、贅澤三昧を恣にせしめた。平泉における藤原秀衡等の榮耀は、必ずしもその特例ではない。

第三に、宗敎の救濟についてゞあるが、その前わたくしは、當時の宗敎界の輪廓をもつと明確に述べておく必要があらう。それを基として、義淸の敏感な心に映じた一般的世相の問題に深く話を移し

て行かなければならない。

義清の生れた一百年前の宗教狀態については、前章において、かなり詳しく述べておいた。さて鳥羽上皇の院政時代の宗教を、概括すれば、その延長であつて未だ改革の實はあげられてゐないといふ一點に歸するのであるが、なほ、多少史實を主として說明を加へておきたい點もある。

まづ當時の寺院の內情を、やゝ深く檢べて見ると、延曆寺は、創立の當初から京城皇居の鎭護保全の抱負を持續してゐる。しかるに、廣汎な寺田を私有し、僧兵を貯へ、隱然として大領主の觀を呈して、俗界に大勢力を有してゐることは、これ迄概說して來た點であつた。應和の頃、延曆寺の僧良源は、兵を蓄して祇園寺を攻略し、高言して曰く「季世澆薄なれば人々僧法を輕んず、故に兵力を藉らざれば佛法を護すべからず」と。かれ良源の徒が僧兵の始源だと言はれてゐる。學僧と相竝べて諸寺に衆徒（僧兵）を置いたことは、亂世に當つて止み難い事情だとはいへ、その辯疏は、結極曲論に終るべきである。叡山は、文字通り惡僧の集合所であり、有利な地位と富力とを以て、かれら衆徒は俗慾を滿足しえたのであつた。天台座主の地位さへ、名譽欲を滿たす目的と化してしまつた。かつて三善淸行も言つてゐる如く、天下の者半ばは僧侶となつた有樣で、俗界で意を得ない公家は出家して、法界における成功を望んだのである。これは山門に限らず、寺門においても南都においてもすべて一樣であつた。かつ、かれらは武家階級の社會化されると共に、その性來的の迷信を利用して、いよ〳〵

祈禱修法をもつて、かれら民意を籠絡してしまつた。

この時代に寺院の建立せられた數は、實に、數百に及んでゐる。しかも先きにも説いたやうに、白河法皇は、白河殿内に法勝寺阿彌陀堂を、鳥羽上皇は、鳥羽殿内に勝光明院安樂壽院を、後白河法皇は、御所法住寺内に蓮華王院（六條殿の方には長講堂）を、建立されてゐるやうに、公家貴族は私邸を寺院にあてるものが、續々と增して來た。これには、經濟的理由をも伴つてはゐたが、やはり因果應報を畏れての結果と見てよい。遊戯に耽り、詩歌に遊び、古典趣味に醉つてゐても、それは永續的のものではない。かれらは、眼を覺まされると同時に、外に矢叫びの音、身に迫る不安の氣を感ぜずには居られなかつた。如何に、釋尊の妙經を讀誦するその口が善男を罵り、袈裟持つ手が善女を斬らうとも、佛德は佛德に變りない。かれらの最後の安住地は、宗教界の中にあつた。

しかし、宗教の眞實意が、長く放漫な生活を繰更して來た公家達に會得されよう筈がない。貴族の愁眉を手つ取り早く癒してくれるものは、寺を造り、佛像を彫り、經を書くことにあつた。しかも豐富な資財を投じて、一流の工人に目もあやな阿彌陀堂を建立し、卷木の料紙に金泥書きの經卷を作り上げる處に、前項で述べたある官能欲の滿足をもなしえたのである。その實例は幾らもあるであらう。

しかし、生命の宗教を渇仰する者にとつては、かうした宗教界に對し、己が怨嗟を發せずには居られなかつた。また自ら、比叡山や高野山にある身であるなら、天台や眞言の學的佛教で生新な改革は

望まれないとしても、さらに單身山林深く分け入り、第二の發心を志さずには堪へられなかつた。この時代、さうした人がだん〳〵と增して來たのである。

なほ、これら名刹の中で、眞言宗の寺院だけは、幾分趣を異にしてゐた。すなはち遠くは、高野山の修禪の靈域から、近くは、本宗根本の道場と定められた東寺、宇多法皇益信の灌頂を受け給うて名ある仁和寺の諸寺である。もちろん、何れも如來自內證の秘密法門といふ宗旨の特色から、天台宗に劣らぬ加持祈禱を重んじ、蒼生の現世福利を立てたけれど、この宗派は一種貴族化して、叡山の如き俗化は、これを見なかつたのである。眞言僧には、東山や西山、乃至北山あたりに、なほよく時世の俗臭にしまずに、戒律を守りつゞけたものが多少とも居たのである。鎌倉時代の明惠上人の如き、やはりかうした人々の間にあつて、佛法再興の志を興したのでもあらう。いな、もつと手近い人をさすなら、淨土宗の開祖、源空上人の生誕は、西行十六歲の年に相當してゐるし、增譽、眞基、容觀坊、見佛、靜圓、寶日、永眼、貞範といふ如き高僧は、その時代と遠からぬ世に何れも第二の發心をかち得て在體無礙の境に入り得た人々であつたのである。

第四項として前揭した欣求淨土の望みを完うし得た人々こそ、これらの發心者であつた。この間の關係については、紫式部論でかなり詳說したから、省略するが、われ〳〵は、西行の遁世において、同じく、この道程を辿り得るのである。出家々々と口にしながら、容易にそれを遂げ得なかつた式部、

廿三歳の若齢にあつて突如として緇衣に依て身を包み得た西行、（しかも終生、法聖の名を得なかつた西行）— この對照に、われ〳〵は西行の西行たる面目を把握されはしないか。

　　世にあらじとおもひける比、東山にて、人々霞に
　よせて思ひをのべけるに

空になる心は春の霞にて世にあらじとも思ひ立つかな（山家集）

こゝには、出家前、世に反かうとした覺悟の芽生が覗はれる。

　おなじ心をよみける

世を厭ふ名をだにもさは止め置きて數ならぬ身の思ひ出にせん（山家集）

果敢ない己が運命を泌み〴〵味はつてゐる。己が身心は空虛である。もし多少でも自己といふものがあれば、消極的厭世の氣持のみ。

世の中を思へばなべて散る花の我身をさてもいづちかはせむ（山家集）

世の中を夢と見る〳〵はかなくも尙ほ驚かぬわが心かな（山家集）

夢の世の中といふことを、概念として抱くことは出來よう。しかし、それを直觀して捨身することは西行にとつてもやはり容易ではなかつた。

諸共に我をも具して散りね花浮世をいとふ心ある身ぞ（異本山家集）

いつの世に長き眠りの夢さめて驚くことのあらむとすらむ（山家集）

これら、未だ断然とした處置に出るほどのかれの決意を現はしてゐない。生ぬるい處が見える。

さらぬだに世のはかなさを思ふ身に鵺鳴きわたる明ぼのの空（異本山家集追而書加）

世の憂さに一方ならず浮かれゆく心さだめよ秋の夜の月（山家集）（續後撰集）

捨つとならば浮世をいとふしるしあらん我には曇れ秋の空の月（山家集）

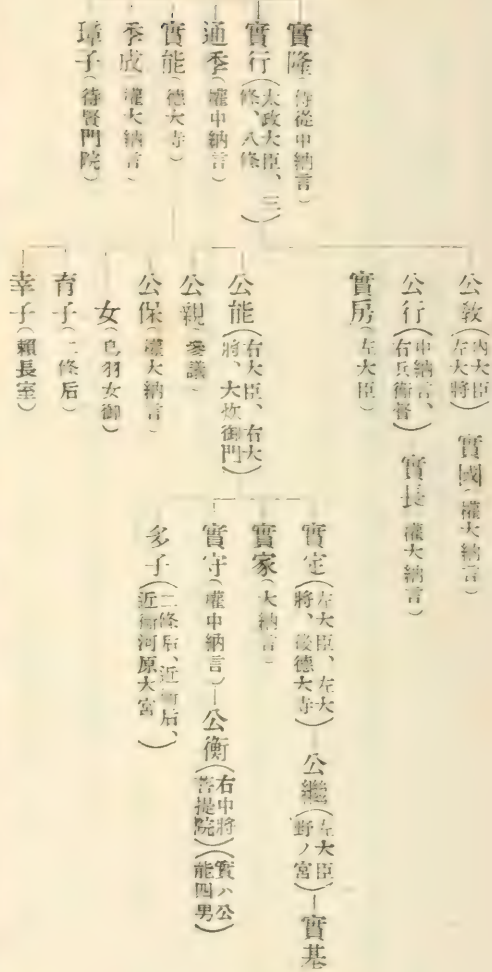
これらに、われ／＼は、悶えに悶えを重ねて疲憊しきつたかれの聲をきいてゐるのではあるいまか。しかし、かれの逡巡狐疑も、程なく、かれの英斷に依つて救助された。かれは、ほどなく捨身遁世の人であつた。たゞ、かれの圓頂が、そのまゝかれの心の平和、煩惱の解脱を意味しないことは、かれにとつて、餘りに痛ましいことなのであつた。

さて、かれの出家の誘因を知るに、つぎの一事項だけはあげるに憚からない。一言これを盡せば、西行の恩寵ふかい鳥羽上皇と、崇德天皇との御父子間の御暗鬪である。

そも／＼鳥羽上皇には、御寵愛を被つた數人の后や女御その他御內變がおはしました。いまこれを表示すると

鳥羽天皇
　┣崇德天皇━重仁親王
　┃　信縁女
　┣後白河天皇
　┣覺性法親王（天台座主）
德大寺公實　璋子（待賢門院）
　┣統子内親王（上西門院・前齋院）
藤原長實　得子（美福門院）
　┣近衛天皇（體仁親王）
紀光清　女
　┣覺快法親王（天台座主）

暗雲は、美福門院の御腹に、保延五年（西行廿二歳の年）體仁親王の御生誕があつてその年の八月その立太子式の行はれた時に起因する。重仁親王を後繼にと考へ居給うた崇德天皇の御悲嘆は想像するも餘りあるが、體仁親王の御卽位の問題は、一面、崇德天皇の御外戚である德大寺家の浮沈に係はるのであつた。しかるに、西行は、崇德天皇の御知遇をも忝うして、德大寺一家の人々とは特に昵近の關係である。西行の痛心は、思ふにもあまりあつた。翌保延六年（西行出家の年）には、局勢、いよ〱危機に、迫つて來た。今、德大寺家及び周圍の系圖をあげて見ると

公實
- 實隆（侍從中納言）
- 實行（太政大臣、三條、八條）
  - 公教（內大臣、右大將）— 實國（權大納言）
  - 公行（中納言、右兵衛督）— 實長（權大納言）
  - 實房（左大臣）
- 通季（權中納言）
- 實能（德大寺）
  - 公能（右大臣、右大將、大炊御門）
    - 實定（左大臣、左大將、後德大寺）— 公繼（左大臣、野ノ宮）— 實基
    - 實家（大納言）
    - 實守（權中納言）— 公衡（右中將、菩提院）（實ハ公能四男）
    - 多子（二條后、近衛后、近衛河原大宮）
  - 公親（參議）
  - 公保（權大納言）
  - 女（鳥羽女御）
  - 育子（二條后）
  - 幸子（賴長室）
- 季成（權大納言）
- 璋子（待賢門院）

德大寺と呼ぶは、公實の五男實能からのことで、それが、京都衣笠山に德大寺を建立したに由來してゐる。見る如く、この一門は、近衛天皇（體仁親王）御天年にて御崩御のため、後白川天皇御卽位となり、再び外戚として權威を持つことは出來たが、ついに、かの鳥羽上皇、崇德上皇御二方間の宿憂は、保元の大亂を勃發せしめるに至つたのである。かうした不祥事は、いかに素直な心を持つ西行に暗翳を投げたかは想像せられ得よう。だん／＼とかれの心に根ざして來る憂鬱の一部には、確かにかうした環境の力を度外視することは出來ない。

さて、一法師となり終つてからの、わが西行の生活は如何に。かれの餘生は、建久元年二月、すなはち源頼朝が天下を統一して、鎌倉に幕府を開いた年、七十三歳の高齢で寂する迄、正に五十年間の出家生活であつた。

凡そ物の心を知りしよりこの方、四十年(よそぢ)あまりの春秋を送れる間に、世の不思議を見ることやゝ度々になりぬ

とは、方丈記の作者の感懐であるが、西行のこの五十年間もそれと同じく、時世の大過渡期に相當してゐたので、かゝる世に生を享けた西行の奇しき運命の程を察知せずには居られない。

百錬抄によれば、保延六年十月十五日とあるがその曉、わが西行はいよ〳〵出離の志を達し得た。西行といふ法名の外、かれを圓位（圓意とも）大寶房（大本房とも）などとも呼ぶ。近侍の下部が、主を思ふあまりに、西行と同時に出家したといふ傳へは確說である。その下部の法名を西住と（西往ともある）呼び、主の行脚に際して、影の如く伴れそひ、たえず伴侶となつて、四國、西國の方を巡路した。

柴の庵(いほ)ときくは賤しき名なれども世に頼母しき住居なりけり（山家集）

この歌は、家集の言葉書きによると、東山の阿彌陀房上人の庵で詠んだ由であるが、俗傳の如くそこで得道してそのまゝの歌を詠んだものかも知れない。餘り平懐にすぎてはゐるが、それも宿意を遂げ

た後に來た反動的靜穩さのためであらう。

鳥羽院に出家のいとま申すとてよめる

惜しむとて惜しまれぬべきこの世かは身をすてゝこそ身をも助けめ（追而書加玉葉集）

世をのがれける折、ゆかりなりける人の許へ、いひおくりける

世の中をそむき果てぬといひおかん思ひしるべき人はなくとも（異本山家集）

侍從大納言成通のもとへ後の世の事おどろかし申したりける返り事に

驚かす君によりてぞ長き夜の久しき夢はさむべかりける（山家集）

返し

おどろかぬ心なりせば世の中を夢ぞと語る甲斐なからまし（山家集）

これら何れの作に就ても、われ〳〵は、あまりに落付切つた、いはゞ凡庸にすぎた西行の姿を感知せずには居られない。靑道心の胸の中は、もつと波打つて居るべきではないか。決然として宿意を果し遂げ得た當座の心理としては――さうとも考へられないではない。しかし、これには當時における出家生活と俗人生活との間に、さしたる區別の存しなかつた一面をも考ふべきである。西行も出家すると直ちに、例の管笠と錫杖の行脚姿に變つた譯ではなかつた。その一年は、靜かに東山の一坊に暮ら

したのであつて、京から音訪れて來た友と共に述懷の歌をも詠じてゐる（異本山家集詞書による）

年くれしそのいとなみは忘られてあらぬさまなる急ぎをぞする（異本山家集）

昔おもふ庭に浮木をつみおきて見し世にも似ぬ年のくれかな（山家集）

何れも、緇衣をまとふ身となつた以後、生活の上に變動をうけて暫しそれを味つてゐる氣持である。そこに熱意がない。

世をのがれて東山に侍るころ白川の花盛に人さそひければまかり歸りけるに昔おもひ出て

散るを見て歸る心や櫻花昔にかはるしるしなるらん（異本山家集）

閑ならんとおもひ侍けるころ花見に人々詣で來りければ

花見にと群れつゝ人の來るのみぞあたら櫻の咎にぞありける（追而加書）

これらの諸作、或ひは永治元年のものかとも思はれる。

西行五十年の生活。廿三歲の靑年僧侶が卅歲時代、四十歲時代、五十歲時代と年經るにつれてその性格に推移展開のあつたことは、些の疑惑をも要しない。もし、西行研究者にとつて、その變化成長の跡が辿られるものなら、いかばかり喜こぶべきことであらう。しかるに遺憾ながら、家集以外に何物をも遺してくれなかつた西行に對して、こゝに何等の手がゝりも無い。しかも家集中の歌の配列に

は、年序的の傾向はすこしも發見されない。のみならず、流布本の家集即ち六家集本山家集は、澤山の誤謬を傳へてゐるのであつて、その一千數百首のものにも更に吟味を加へる必要さへある。

しかも、確實な西行の歌の、歌としての價値は、永久に不變であらう。それは、人間西行そのまゝの聲である、眞情の訴へである、否、西行そのものである。われ〳〵は、たとへその作全部について、それが如何なる時、如何なる場合に詠出されたかを知り得ないかも知れぬ。廿歳時代の作と、七十歳時代の作とを一纒めにして觀賞してゐるかもしれない。戰亂の最中に詠んだ歌と、世の靜平の時に詠んだ歌とを同じ目で見てゐるかも知れない。しかしあらゆる環境を切り捨てたつて介はないのだ。佳いものは何處までも佳い、たゞそれだけなのだ。

しかし、こゝに、物語（散文）によつて我を表象した紫式部と卅一文字の短歌（韻文）によつて自己を表現した西行との比較は、人としての兩文學者の傾向を、明確に指示してくれてゐるではないか。その間に、評價の高下を限定することは不可能である。われ〳〵は、兩者の間に只、素質の方向別だけをのみ認める。次にわたくしの列擧してゆく西行の特質はこれを、式部のそれと對比することにより、諸君はいよ〳〵、散文型の文學者と詩人型の文學者との間の大きい徑庭を認めてくるであらう。

第一、意志と苦行の人、西行について先づ考へて見たい、わたくしは、本章の前篇で、西行の性格

の重要特色として武士的精神をあげておいた。もし、西行にして遁世後、一乞食坊主として京洛の巷に歌を口荒んで終つたのみであつたら、われ〳〵はかれに依て果して何物を與へられ得たらう。しかしかれは、決して一能因法師として終つた人間でなかつた。況んや、一業平で終るべき人でもなかつた。かれの出家は、或は、世にありふれた形を以て仕遂げられたかも知れない。かれの出家後二三年の生活は、最小生活の試練、孤獨生活の苦練の程度で終つたかも知れない。しかし、かれはさうした消極的試練の中にのみに安住し得る人間では無かつたのである。

圓位法師が詠ませける百首の歌の中に旅の歌とて詠める

岩ねふみ峰の椎柴折りしきて雲に宿かる夕暮の空

この歌は、千載集羈旅の部に見える寂蓮法師の作である。西行の知己寂蓮が、西行の苦行の様をこの中に詠み込んだものである。

人間の五濁盛り熾つて天變地妖竝び起るといふ時、人は却つて易行道につく。世を擧つて一機一縁の小事を事とし、ひたすら後世の安樂のみ願ふ。他力本願の觀念は、いよ〳〵民心に迎合される。かうした間に、歌人西行の自力的意志を見得ることは、意外のこととすべきではあるまいか。西行は、まづ進んで熊野詣や大峰入の難行を選んだのであつた。

待ちきつる屋上の櫻咲きにけり荒くおろすな三栖の山風（異本山家集）

と、かれは道々吟行しつゝ、まづ那智に辿りついた。

散らで待てと都の花を思はまし春歸るべき我身なりせば（山家集）

とは、詞書通りに那智觀音堂に花咲く春を籠りながら京の知人に送つた詠である、那智神社の奥に入ると一の瀧、二の瀧、三の瀧の三大瀑布がある。一の瀧の上、花山法皇御庵趾といふのは、かつて法皇が庵をこゝに結ばれて「木の下を住家とすれば自ら花見る人になりぬべき哉」とも歌を殘された處で、西行は、法皇の數奇な御運命とその櫻木を見て

木のもとに住みけん跡を見つるかな那智の高ねの花を尋ねて（追而加書）

とも古を忍び申した。わたくしは、これらの詠吟に漸く高調してゆく西行の心を思ひ知るのである。

身に積もる言葉の罪も洗はれて心澄みけり三重の瀧（追而加書）

などゝ三の瀧を見た時、三業の罪を灑ぐといふ如き觀念歌も口吟された。同じ時に、また

雲消ゆる那智の高根の月たけて光をぬける瀧の白糸（追而加書）

熊野にはかくて、後年幾度も修業詣でをしたことは、夏、かれが熊野に詣でたことを載せてゐる著聞集や、「夏熊野へ參りけるに云々」などの家集の詞書でも推測出來る。

松が根の岩田の岸の夕涼み君があれなと思ほゆるかな（異本山家集）

等、自詠も殘つてゐる。

大峰入の冒險も、古今著聞集等に從へば再度までこれを試みたやうである。實に大和から紀伊に連る深山幽谷を跋渉することは文字通り冒險であつて常人の到底なし能はぬ修業である。そも／＼岩木の間に起臥して難行を積むは役小角を開祖とする修驗道の執る所で、僧、聖寶大峰を拓くに及び、修驗者のこゝに入り來る者が多かつた。始めもつぱら眞言修驗では吉野金峰山から入山したのであるが、後、天台修驗の興されると共に、熊野から入山する一派をも生じた。さて、西行も、最初は熊野入山の道をとつたのであつた。

立昇る月のあたりに雲消えて光り重ぬる七越の峰（山家集）

七越の峰は熊野本宮附近の峠であつて、そこから吉野に出る迄の路程にあたつてゐる古屋、千種が岳、東屋岳、轉法輪山、小池、神仙、行者蹄り、稚兒淵、笙の岩屋、伯母が峰、小篠、蟻の門渡等の名、山家集中に散見する所である。

月すめば谷こそ雲は沈むめれ嶺ふき拂ふ風に敷かれて（山家集）

深き山に住みける月を見ざりせば思ひ出もなきわが身ならまし（異本山家集）

折しも十月で、神仙宿の月の眺めは、殊更かれの心を捕へた。大峰入中の遺詠は、ほとんど幽谷中の月を詠じたものと言つていゝが、かゝる境地における月の印象は特に深いものがあつたらしい。行者蹄りといふ地名は、稚兒を伴つた行者の別け入る途中、稚兒の命絶えたためにむなしく行者獨り引返

したといふ逸話に因るのださうで、その邊りの險岨さも思ひ知られよう。

屛風にや心を立てゝ思ひけん行者は歸り稚兒は止まりぬ（追而加書）

と、西行は詠嘆してゐるが、その歌中の屛風といふも屛風立と云ふ難所を指したものである。また、行尊が千日籠の願を立てながら「草の庵など露けしと思ひけん洩らぬ岩屋も袖はぬれけり」と苦行を訴へてゐる笙の岩屋も、その北方に當つてゐる。

著聞集によれば、西行の峰入は宗南坊行宗の案內によつたもので、西行は、宿意を行宗の結緣で果し得たのであつた。しかるに行宗は、西行を修驗道の行法通り嚴格に責めたゝめに、さすがの西行も艱苦の程を泣いて訴へた所、行宗に悟される所あつてその苦行を耐へ忍び、一度ならず再度も大峰入を決行したとある。西行の性向の上から、わたくしは、その逸傳を實話として信じたいのである。

その他、西行の行脚した大きい旅といへば、東國に一度、四國に一度、奥州に一度と三度を數へることが出來るが、何れとして忍苦の精神の籠つてゐないものはない。かれは、悔恨に泣きつゝひたすらに己が弱さを鞭打つた。靜かな庵中の暮しの方がいかばかり安易であつたかは、いふまでもない。しかしかれの強い自己凝視は、自己の妥協的態度を見捨ておかなかつたのだ。

さてもこは如何はすべき世の中にあるにもあらずなきにしもなし（山家集）

かく、かれは遁世そのものゝ意義に疑惑を持つた。

現をも現とさらに思はねば夢をも夢と何か思はむ（山家集）

何といふ暗澹とした生そのものの自覺であらう。しかも

捨てゝ後は紛れし方は覺えぬを心のみをば世にあらせける（山家集）

かく、現實の蠱惑はかれを強く押し捉へてしまつたのだ。

栞せで尚ほ山深く分け入らむ憂き事聞かぬ所ありやと（異本山家集）

かうした孤獨欲が、一層の深山より、又遠い旅にかれを誘ひ出して行く。現代と異なる古への旅、しかも行脚の旅が如何に、心身共に惱ましいものであるかは、現代の者の想像を許さぬ所であらう。

鈴鹿山浮世をよそに振捨てゝ如何になりゆくわが身なるらむ（異本山家集）

不安、苦痛、煩悶、しかもかれは、強い力にひきずられながら、なほ山を越え海を渉るのだつた。

嵐吹く峰の木の葉に誘はれて何ち浮かるゝ心なるらむ（異本山家集）

かれは旅から旅へと幻遊する自己を傍觀しながら、かく旅中から都の大納言成通へかき贈つてゐる。

波近き磯の松の根枕にてうら悲しきは今宵のみかは（山家集）

雪ふれば野路も山路も埋もれて遠近知らぬ旅の空かな（山家集）

都にて月を哀れと思ひしは數より外のすさびなりけり（異本山家集）

これらの懊惱は未だ幾分詠嘆の程度である。しかもなほ、

安藝のさる浦にとまりし時

波の音を心にかけて明かすかな苫洩る月の影を友にて（異本山家集）

二見の浦にて月のさはやかなりけるに

思ひきや二見の浦の月を見て明け暮れ袖に浪かけんとは（追而加書）

駿河國、久能の山寺にて月を見てよみける

涙のみかきくらさるゝ旅なれや、さやかに見よと月はすめども（山家集）

旅にまかりけるに、入相を聞きて

思へたゞ暮れぬと聞きし鐘の音は都にてだに悲しきものを（山家集）

旅の心を

旅ねする嶺の嵐に傳ひきてあはれなりける鐘の音かな（山家集）

かくも、悲しき月影にぬれ、哀れな鐘聲をも耳にしなければならなかつたのであつた。

さて西行の旅中における逸話の樣々は、多くの書に散見してゐる。しかし何れも眞僞の疑はしいものである。その中、最も妙味深い物語は、天龍渡の事と、賴朝接見の事との二つだらうと思ふ。後者は、東鑑に明記された話でまづ疑を挾む餘地がないが、前者の物語をもわたくしは實説として認めたい。西行寂滅後八十餘年、かの阿佛尼が鎌倉に下つた日記（十六夜日記）にも「廿三日天龍渡といふ。

舟に乗るに西行の昔も思ひ出でられいと心細し」と記してゐるのは、必ずこの逸話を指したに相違無いからである。まづこの方から話してゆくことにしよう。

西行はこの東國旅行にも例によつて西住を伴としてゐた。恰も二人が渡舟で河を渡らうとする時、遲れて來た一武士が坐席のないため西行を下船せしめて自ら乘らうとしたが、渡しの習ひ、西行はこれに對し知らぬ風を裝つてゐた。と、その武士は、寄り來つて、船から西行を引きおろしたのみか、散々理不順にも毆りかゝつて來た。しかも西行は打たれるまゝに、これを忍從してゐた。その樣を見た西住、主人が未だ北面の武士として無双の勇あつたことを思ひつゝも、泣き沈むより外はない。しかるに、弟子の悲嘆を振返り見た西行は、これを慰めようとしないのみか、その女々しさを叱つた上に、「今更、昔のことをかれこれ言つても仕方がないではないか。そんな弱氣のお前との同伴を俺は御免被る」と言つて、西住をそのまゝ、京に追ひ返したといふ――逸話の筋は大略これまでである。

無暴な亂打に對して唇を嚙みしめて耐へ忍んでゐる一法師の姿、主の侮辱を己が恥と考へて怨みに泣く弟子の姿――しかも、主を思うて憂ひ悲しむ弟子の心を、却て女々しいと言つて我武者らに都に追返してしまふ西行の一徹の心持、何といふ緊張した場面であらう。主に叱咤されてすご〳〵と心なくも歸り行く西住の後姿――それはやがて、西行の心に、悔恨に近いある閃めきを點じて來たかもしれない。また茫々たる野路を伴侶なしにゆくわが姿に、かれは潮のよせくるやうな寂寥を抱いたかも

しれない。しかし西行は、打擲をうけた傷の痛みを覺えながら、西住の不心得を戒め得た自我の强さについて、ある滿足の情をも斷ち得なかつたであらう。

行脚、かう誰しも一口にいふ。しかし、西行と芭蕉とを比較しても、その行脚は全然別樣のものであつたことが知られる。芭蕉の旅は、一には俳心修行の要求もあつたが、他に蕉風弘布の目的があつた。弟子の家から弟子の家へと辿りゆきつゝ、かれらの暖かい親昵の中に到る所、所謂風流の日々を過ごしえたのだ。天龍と程遠からぬ富士川畔で捨子を見た時も袂から食ひ物投げて、「猿を聞く人捨子に秋の風いかに」と呟きつゝ過ぎ去るかれなのであつた。しかるに、富士を仰いだ西行は、

風に靡く富士の煙の空に消えて行方も知らぬわが思ひかな(山家集)

と、苦行の中にさへなほ薄志な自己をかへりみて詠嘆する痛ましさを持つてゐた。

東國修行の時ある山寺に暫らく侍りて

山高み岩ねを占むる柴の戸に暫しもさらば世を逃ればや(追而加書)

と、旅途にさへなほ人無き山を求めてやまないかれなのであつた。

第二の逸話は、東鑑の文治二年の項目に見えてゐる。時、西行はすでに六十九歲の高齡であつたが、東大寺再建勸進(この寺は治承四年平中將重衡の兵のため一炬の煙となり終つた)のため奥州にある同族藤原秀衡の喜捨を受ける依囑をうけ、東路を下つたのであつた。小夜の中山を越えながら

年たけて復た越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山（異本山家集）

と、再び、海道を下りゆく數奇なる運命を詠んだ。かれが、頼朝の引接を受けたのは、八月十五日の夜のことで、時しも義仲、義經の叛逆も水泡に歸せしめ得た頼朝の心には、光耀と滿足の情が溢れて居た。東鑑によれば、頼朝の接見は弓馬の道と歌道とに關しての疑問からであつた。「西行申云、弓馬事者、在俗之當初、憖雖傳家風、保延三年八月遁世之時、秀鄉朝臣以來九代嫡家相承兵法燒失、依爲罪業因、其事曾以不殘留心底皆忘却了。詠哥者、對花月動感之折節、僅作卅一字許也、全不知奥旨。然者是彼無所欲報申云々。然而恩問不等閑之間於弓馬事者具以申之、即令俊兼記置其詞給、終被專終夜云々。」と、その夜の狀況が、書中に明らかに傳へられてゐる、西行は結極、大頼朝を前に置いて、武道の講義を速記者づきで述べた譯である。六十九歳の世捨法師、勸進のために關東に下つたこの一行脚者の口から武道の講義が出るとは、何と意外なシーンであらう。西行が、頼朝から銀作りの猫を貰つて門前の遊嬰兒に投げてやつたといふ逸話は、その翌日午時に、かれが頼朝の館を辭した折の事である。この話は、聽く者をして餘りに無理解な頼朝の態度を思はせないでもない。いかにそれが名工の珍品であらうと、行脚者の一法師に銀製の猫が何にならう。しかし一歩退いて考へるに、終夜弓馬の道を談じたといふその西行の態度そのものが、既に矛盾として考へられるではないか。西行研究家は、これまで西行その者を餘りに聖淨視し、幻想化して來てゐるのではあるまいか――わ

たくしは、茲においてこの疑惑を一層深くするものである。頼朝の眼中には、當時、しば／＼關東に下つて來た公家の遁世的歌人としてのみの西行がある。一夜快諾した紀念にもと贈つたのが、この名工の手になる銀猫ではなかつたらうか。かゝる器物に、西行の好尙のないことは言はずもがなであつた。かれが門前の子供に與へたことも、それ迄のことで、たゞ武家仲間に珍話としてそれが喧傳された迄の事であつたらう。

武人西行――西行の名に冠するわたくしのこの言葉は、こゝに、いよ／＼根據のあるものとして首肯せられるてはないか。先きに紫式部を論ずるや、わたくしは、縷々と貴族的生活と貴族的精神を說明しなければならなかつた。今や、潜勢的武人の勢力は、地上に延び出たのである。その間約一百年、何といふ時代の變轉であらう。さうして、人としての式部は王朝時代を環境としてのみ存在しうる、人としての西行は源平時代を背景としてのみ成長しうる――こゝに、環境が人に及ぼす大きい示唆がある。しかし、一時代の相は、それ自身孤立するものでなく、前時代を下積みとしてのみ形成される。時代の人も、所詮、前時代の人と次の時代の人とを繫ぐ一連鎖にすぎない。われ／＼は、西行の中にも、いかに多くの式部を見出し得るであらう。

第二に、わたくしは人間同志間の愛憎の情における、西行の心境を考へて見なければならない。

西行遁世の原因、それは、史料の出て來ない限り永久に不明であり、西行研究者にとつて大きい謎でなければならぬ。しかし、わたくしは、こゝにその主因を、愛欲の惱の中にあつたとしたい。それはこの場合、餘りな獨斷に過ぎて居るであらうか。つぎに、わたくしの試みる巨細な闡明に、暫らく諸君の耳を借して戴きたい。西行と德大寺との一家との關係については前述しておいた。山家集の中において、西行と和歌の贈答などに依り、昵近してゐたらしく思はれる人々の名を揭げて見ると、勝命、宮の法印（覺性法親王）西忍、淨蓮とは主として法の上の交はりであり、俊忠、俊成、定家、家隆、俊惠、慈圓、靜忍、家成、（中御門覺雅）などとは、主として歌道の上の交はりであり、侍從大納言成通、藤原爲忠、大原三寂（寂念、寂然、寂超）とはやゝ私交深く、その他に、德大寺一族及びその女房達の名を見ることが出來る。

こゝに時世の推移を概說するに、崇德天皇の不本意ながらも、美福門院出の近衞天皇に御讓位なつたのは永治元年春のことであつた。上皇の御母君待賢門院はその翌年剃髮し給うたが、更にその翌々年（久安元年、西行二十八歲）御崩御になつた。當時、朝廷では關白忠通と氏長者左大臣賴長とが兄弟ながら反目を續けてゐた。久壽二年（西行卅八歲の年）近衞天皇が寶算僅かに十七歲で御崩御。御弟後白河天皇御卽位の事は、いよ〳〵崇德上皇の御憤懣を增さしめ、翌保元元年鳥羽法皇御崩御と共に、上皇は賴長を計らひ御謀叛をおこし給ふたのである。結果は、誰も知る如く、賴長の死去、上皇の讃

岐御遷御に依て落着はしたが、頼長の舅であり、待賢門院の兄なる德大寺實能はをめ〳〵その結果辭官をもせなかつたのみか、却て頼長の後を襲うて左大臣に昇官したのである。しかし程もなく德大寺一族には不祥事が續出した。翌保元二年の實能及びその室薨去、實行（實能の兄）太政大臣辭職、永曆元年（西行四十三歳の年）の公敎（實行の子）の薨去、上西門院（待賢門院の腹）の御出家、その翌應保元年の右大臣公能（實能の子）の薨去、應保二年の實行の薨去、　次々におこる悲報を、西行は、高野や京にあつて耳に入れなければならなかつた。特にも、長寛二年（西行四十七歳の年）、御愛顧を忝うした崇德上皇が讃岐の土と化し給うたことを聞いた時、西行には如何ばかり感慨に堪へないものがあつたであらう。

亡き人を數ふる秋の夜もすがらしほるゝ袖や鳥部野の露（異本山家集）

かくて仁安二年（西行五十歳の年）こそ、高平太とかつて仇名された平清盛が、太政大臣の榮職についた時で、藤氏の威力は、既にその形骸をも止めかねた哀れな狀況となつてゐた。當時、德大寺家には、公能の子に實定、實家、實守、公衡の四人があつたが漸く納言の職に齷齪してゐる有樣で、更に昔日の俤すら求め難い。硬骨な西行にとつて、舊主なる實定が清盛の頤使に甘んじて官位に戀々としてゐるそのことが、如何に不面目なものとして感ぜられたかは言ふ迄もない。西行が、實定の父公能に、出家の程を勸めた心持も全くこの心から出たものである。

西行と實定兄弟との關係に就ては古今著聞集（宿執第二十三――卷十五）に詳しい。西行が、實定の、わが家の屋根に、鳶を止まらせぬため繩を張つてゐたのを見てから、實定の邸に出入することを止めたことは、徒然草にも引用されてある。舊主を疎んじた眞因が、そんな些細な理由のみでなくして、前述の如き實定の態度に對する不服にあつたことは勿論であらう。なほ、西行は、實定の次弟實家についても、その北の方の態度に慊らずして遂に實家をも尋ねてゆかなかつた。第三男家守は夭死した。四男公衡は、縹のしろうらの狩衣を着、織物の指貫ふみくゝんで庭の櫻に見惚れるといふ優人であつたゝめ、西行ひそかにかれを德大寺の眞の後繼者と慕つて常々尋ねてゐたが、藏人頭を成經や宗頼ふぜいの者に越されながら、恥だて出家する樣子もなく、官位に執着を斷たなかつたため、狷介にも、またかれは公衡と交はりを絕つた――以上は、著聞集に記す所の西行逸說の梗概である。

世を遁れ身をすてたれども、心は猶ほ昔に變らず、だて／＼しかりけるなり

と、著聞集の作者はその文の最後に西行の性行の上に頂門の一針をさしてゐる。思へば、五十餘歲の出家者として餘りな狹量さでゐる。餘りにも伊達々々しすぎてゐる。もつと宏量であるべきではあるまいか。しかし、六十九歲の老軀を以て弓馬の道を征夷大將軍源賴朝に講じたかれを想起すれば、この伊達氣も彼にとつてあながち不自然でもない。かれの率直な氣質は、憎惡の心持を抑へておくことを許さなかつた。愛憎を直ちに行爲に現はす子供の樣に、ともすればそれがあらはに爆發した。

西行と文覺上人との面談については、撰集抄とか、(それから採つたらしい)井蛙抄・水蛙眼目などに見えるのみで、直ちにこれを信ずることは出來ないが、文覺上人が最初西行の態度を憎んで、折あらば頭を打割つてくれるなど言つたことも、所詮、西行の奇骨が然らしめた所ではあるまいか。どこ迄も表裏のないかれの純直さが他人の罵りを買つたのではあるまいか。

強く他人を憎みうる人間、何處迄も憎惡に燃える人間――かゝる人々が半面において、如何ばかり熱い抱愛に飢えてゐるかは、くだ／＼しい說明を必要としない。神祕愛、絕對愛は別として、われわれ人間の經驗する愛情は、必ず憎惡の心を伴なつてゐることを知る。これは何といふ人生の悲しい矛盾であらう。

修行して遠くまかりける折、人の思ひ隔てたる樣なることの
侍りければ

よしさらば幾重ともなく山越えてやがても人に隔てられなん(山家集)

行脚から歸京して見ると、友人が自分を疎遠にするので、それ程ならいつその事、再び立返つて深山に籠つてしまはうといふのが、この歌の內容である。何といふ反撥性の裸出だらう。

これも高野から京に出て來た時、覺堅阿闍梨が知らぬ樣をしてゐたために、菊の花につけて

汲みてなど心通はゞ訪はざらん出でたるものをきくの下水(山家集)

と、不滿を諷刺して言ひおくつた。

かくて、かれは庵に籠りながらも、如何ばかり友なつかしい心持に惱みつくしたことであつたらう。

淋しさに絶えたる人の又もあれな庵竝べん冬の山里（異本山家集）

雪しのぐ庵の妻を差し添へて跡求めて來ん人を止めん（山家集）

哀れ知りて誰か分け來ん山里の雪降り埋む庭の夕暮（山家集）

訪へな君夕暮になる夜の雪を跡なきよりは哀れならまし（山家集）

何と、人間らしい眞情がすみ〴〵まで流露して居ることか。

しかし寂寥は、必ずしも庵の冬のみではなかつた。

君來ずば霞に今日も暮れなまし花待ちかぬる物語りせよ（山家集）

香を求めん人をこそ待て山里の垣ねの梅の散らぬ限りは（山家集）

諸共に影を並ぶる人もあれや月の洩りくる笹の庵に（山家集）

霜冴ゆる庭の木の葉を踏み分けて月は見るやと問ふ人もがな（異本山家集）

自（おのづか）ら言はぬをも訪ふ人やあると休らふ程に年の暮れぬる（追而加書）

この中、最後の歌は、友人に贈つたものとの詞書であるが、待つ友は尋ね來らず、年の暮の早くも訪れ來た悲しみ――西行の怨みもさこそと想像されるではないか。

吉野山やがて出でじと思ふ身を花ちりなばと人や待つらむ（山家集）

己れを待つてくれる友を考へるかれは、また、友を待つてゐる悲しいかれ自身でなければならぬ。かくて寂寥に徹しつゝ、素直に赤裸にそれを咏出したところに、絶えしなく懐かしい西行の俤がある。

こゝには、崇徳上皇竝びに成通、寂然（大原三寂の一人）との關係を大略、贈答歌に依て覗つて見ることだけに止めよう。

西行は、これ迄も縷述したやうに待賢門院系統の方々に恩顧を被つてゐたけれど、また、近衛天皇や後白河天皇に對して、新院と區別申しあげることはなかつた。かれは、近衛天皇の御陵にも詣でゝ歌を詠んでをり、二條天皇の御跡をも訪うて居り、美福門院の御骨の高野に届いた時も弔歌を詠じてゐる。まして、鳥羽法皇が保元元年御崩御の節は、偶〻高野から京に上つてゐたのではあつたが、御葬申した安樂壽院に參り御通夜申しあげた程であつた。（山家集竝に著聞集に悉し）

さて保元の戰亂の結果、崇徳上皇は仁和寺に御渡りなつて、恰も北院の寛遍法務の坊に入り給うた時、西行は明るい月の夜、上皇の御許を尋ねて行つて涙にくれてゐる。

かゝる世に影も變らず澄む月を見るわが身さへ恨めしきかな（山家集）

しかし西行の方を以てしては、今更何とも致し樣もない。上皇は、歌道において殊に西行寂然たちの保護者であらせられた。

言の葉の情絶へにし折節にありあふ身こそ悲しかりけれ(山家集)

とは、上皇の讃岐御遷御のことをきいて、嘆きつゝ西行の寂然に贈つた歌である。

世の中をそむく便りや無からまし憂き折節に君が合はずは(山家集)

淺ましや如何なる故の報にてかゝる事しもある世なるらん(山家集)

永らへて遂に棲むべき都かは此の世はよしやとてもかくても(山家集)

幻の夢を現に見る人は目も合はせでや夜を明かすらん(山家集)

その日より落つる涙を形見にて思ひ忘るゝ時のまぞなき(山家集)

かく様々の機會に、西行は歌を以て上皇を御慰め申してゐる。また、上皇に仕へ申してゐる女房が如何に西行を便りにしてゐたかは、つぎの西行に贈つた歌で想像され得よう。

いとゞしく憂きにつけても頼むかな契りし道のしるべたがふな(追而加書)

かゝりける涙に沈む身のうさを君ならで又誰か浮べん(山家集)

かくて上皇は、長寛二年御寶算四十六で配所に御崩御なつたため、西行は永久に拜謁の機を逸して、その後四年(仁安三年冬)その御舊跡松山をわざ〳〵尋ねてゐる。

松山の波に流れて來し舟のやがて空しくなりにけるかな(異本山家集)

松山の波の景色は變らじを形無く君はなりましにけり(山家集)

よしや君昔の玉の床とても斯からん後は何にかはせん　――白峰御陵に參りて（異本山家集）

侍從大納言藤原成通は、詩歌管絃蹴鞠の各道にかけての達人であつた外、風姿特に美であつて、他の善行を聞けば眼に涙するといふ高德者であつた。西行との交りは、かれの出家以前よりで、成通が西行の出家を耳にした時も

　おどろかす君によりてぞ長き夜の久しき夢は醒むべかりける

と言ひ贈つてゐる。西行の返歌は次の樣であつた。

　おどろかぬ心なりせば世の中を夢とぞ語る甲斐なからまし

その他兩人の關係を示すと

　　秋遠く修行し侍りける道より侍從大納言成通のもとへ申しおくり侍ける

嵐吹く峰の木の葉に誘はれて何地(いづち)うかるゝ心なるらん（異本山家集）

　　かへし

何となく落つる木の葉も吹く風に散り行く方は知られやはせぬ（異本山家集）

　　侍從大納言入道はかなくなりて宵曉につとめする僧各々歸りける日、申しおくりける

行き散らん今日の別を思ふにも更に歎きは添ふ心地する（山家集）

かへし

臥し沈む身には心のあらばこそ更に歎きも添ふ心地せめ（山家集）

たぐひなき昔の人のかたみには君をのみこそ頼みましけれ（山家集）

かく西行は、遁世しても、決して孤寥の人ではなかつた。

所謂大原三寂は、皇太后宮大進藤原爲忠の三子、爲業（寂念）賴業（寂然）爲隆（寂超）が、出家して大原に籠居したのを指すので、三子の母は、待賢門院の一女房であつた。かうした關係から、また、歌友として、西行は三寂に睦み大原にも往來し、ことに中の寂然を親しくした。崇德上皇の御還御のため歌道の衰へたことを、相共に嘆いたことは上述したが、寂然も上皇を御慕ひ申して讃岐を訪れてゐる。

寂然はまた高野に西行を尋ねたこともあつた。その時西行の作、

なれ來にし都もうとくなりはてゝ悲しさ添ふる秋の暮れかな（異本山家集）

寂然高野に詣で立歸りて大原より遣はしける

隔てこしその年月もあるものを名殘多かる嶺の朝霧（山家集）

かへし

したはれし名殘をこそはながめつれ立ち歸りにし嶺の朝霧（山家集）

寂然紅葉の盛りに高野に詣で出でにける又の年の花の折に申し遣はしける

紅葉見し高根の嶺の花ざかり頼めし人の待たるゝやなぞ（山家集）

かへし

共に見し嶺の紅葉のかひなれや花の折にも思ひ出でける（山家集）

その他西行が、高野から大原の生活を思つて送つた歌が十一首あり、兄寂念の傍なくなつた時送つた歌が五首ある外、なほ西住のみまかつた時換した贈答歌が兩人の間にある。兩人の親交の狀は、これらで充分見ることが出來よう。

訪へかしな情は人の身のためを憂き我とても心やはなき（山家集）

この歌には、詞書がないから、誰に贈つたものかは、知る限りでないが、「憂き我とても心やはなき」――その語の如く、捨身しても、西行は、到底人間的情愛を共に、失なふには堪へ得られなかつた。

西行と女性、これはまた、大きく興味深い問題である。けれど、現在迄の西行研究にては遺憾ながら思摩憶測以上に、これを出す方法が無い。あるひは恐ある御息所に、かれが戀し奉つたといひ（源平盛衰記、雨中物語、淨瑠璃十二段草紙等）あるひは待賢門院女房堀川局と關係を結んだといふ、何れも確說ではない

待賢門院の女房には、この堀川局の他、中納言局、兵衛局（堀川局の妹）二位局（信西の室）帥の局などあつたが何れも西行と交はりがあつた。門院の御崩御と共に、堀川と中納言は尼となつて西山に棲み、兵衛局は上西門院（待賢門院の御腹）に再仕してゐる。
これらの女房の中、堀川局が最も才媛であつたらしいことは種々の方面から推斷出來る。堀川は神祇伯顯仲の女で、かつて齋院にも奉仕してゐたので前齋院六條とも呼ばれた女房である。

長からん心も知らず黑髮の亂れて今朝は物をこそ思へ

堀川の作として最も喧傳されてゐるこの詠に、いかにも多感なかの女の面影が忍ばれるではないか。その他

黑髮の別れを惜しみきりぐす枕の下に亂れ鳴くかな
湧き返り岩間の水のいはゞやと思ふ心をいかで洩らさむ
よそふべき方も知られぬ戀なれば如何に言ひてか洩らしそむべき

等、堀川集中の遺詠で、これらによつて情熱的のかの女を想像することは謬まつてはゐまい。その堀川は、また源賴政とも交りのあつたことが知られる。
門院が久安元年八月に御崩御になつた後、かの女は一週忌の間、喪に服した。西行との間にその翌春歌の贈答がある。

尋ぬとも風のつてにも聞かじかし花と散りにし君が行衛を　　西行（異本山家集）

吹く風の行衛知らする物ならば花と散るにも遅れざらまし　――堀川局（異本山家集）

堀川局のめぐりには、たゞ悲しい運命のうめきがあるのみ。

また、かの局が仁和寺に住んでゐる頃、西行は尋ねることを約束しながら、ある月の夜も知らず顔に、寺の前を過ぎ行つたから、局はかう言ひ贈つた。

西へ行くしるべと頼む月影の空だのめこそ甲斐なかりけれ（山家集）

西行は、すなはち、返歌して

さし入らで雲間を分けし月影はまたぬ氣色(けしき)やそらに見えけん（追而加書）

その他、兩人の間にはつぎの樣な贈答もある。

此の世にて語らひおかん時鳥しての山路のしるべともなれ　　堀川局（異本山家集）

ほとゝぎす鳴く〳〵こそは語らはめしての山路に君し隱らば　――西行（異本山家集）

西行と兵衛局との贈答歌も二ヶ所に見えるけれど、何れも待賢門院御在世の昔を忍んで詠みかはしたものだけのものである。

これらの外、女性の名の山家集に出づるもの、院の少納言局、院の小侍從、三河内侍、二條院女房六角局等あるが、何れも西行との關係は、時にふれた歌の贈答だけのものに過ぎない。

山家集類題によれば、戀部に屬するもの、二百五十六首を數へることが出來る。なほ、雜部中にも戀歌が混じてゐるので、西行作の戀歌は、すべてゞ三百首に餘るであらう。それには出家以前の作も多少見えるやうである。しかし、その中の戀歌百首（奥州下向の時、藤原秀衡の依囑で詠んだものと傳へらる）でも分るし、題詠的のものでも考へられるやうに、多くはたゞ戀歌として詠んだまでゞある。吉野を知らない歌人が、想像を以て吉野の櫻を詠出して詩の世界に適遊するやうに、戀を持たない遁世者や老人が戀歌を詠んで、その氣分に遊ぶといふ傾向は、千載集、新古今集時代に及んでいよ〳〵著しくなつた。さりながら、結極それは遊戯だけのもので、體驗の表出ではない。そこにどうして氣韻の躍動が求められ得よう、韻律の止揚を感得され得よう。後世の勅撰集の戀部が、無味乾燥なもので、型にはまり何等生命の香味を持つてゐないのは、すべてかうした理由に基いてゐる。

しかるに西行の戀歌（題詠的の物を除く）、それは何といふ生新な節奏と眞實の味に溢れてゐることであらう。そこには戯作らしい隙は寸分無い。それは張りつめた氣持そのまゝの投出である。血のにじみ出る樣な緊張さに充ちてゐる。しかし、今更わたくしはこの點を以て、出家後のかれが更に、異性に對する戀の經驗を持つたのかといふ樣な疑問を提出しようとするのではない。かれが、成通や寂然に對する熱い友情――それは思慕の點において立派に戀の心に變る所がない、異性に對すると同性に對すると、つまり、この點は同じではないか。全くかれは、息の根の止まる迄愛欲の情を心の底か

ら捨て去ることが出來なかつたのである。かれにはいつでも他を戀し得る精力の持ち合はせがあつた。まして、出家前の戀愛の經驗が、かれの記憶の世界に、まざ／＼と浮び上つて來るのだつた。かれはそしてつねにその追憶から解放され得なかつた。友愛の高調する際も勝手にそれがこの記憶の世界に結びついて、かれの戀歌、題詠的戀歌にも、それらの脈動がそのまゝに織込まれて來るのだつた。

ともすれば月すむ空にあくがるゝ心の果てを知るよしもがな（山家集）

數ならぬ心の咎になし果てじ知らせてこそは身をも恨みめ（異本山家集）

うち向ふその希望(あらまし)の面影を眞(まこと)になして見るよしもがな（山家集）

何となくさすがに惜しき命かなあり經ば人や思ひしるとて（異本）

かきくらす涙の雨の足繁みさかりに物の嘆かしきかな（異本）

さはと言ひて衣返して打ち伏せど眼のあはばやは夢もみるべき（山家集）

よしさらば涙の池に身をよして心の儘に月を宿さん（異本）

さる程の契りは何にありながら行かぬ心の苦しきやなぞ（山家集）

花を見る心はよそに隔りて身につきたるは君がおもかげ（山家集）

一方に亂るともなき我戀や風定まらぬ野邊の刈萱（山家集）

知らざりき雲井のよそに見し月の影を袂に宿すべしとは（異本）

戀する情は、前をと思ひ、後をと考へ、右に、左にと焦燥を重ねてゆくのみて、寸時の心の穏やかになる暇がない。

人は憂し嘆きは露も慰まずさはこは如何すべき思ぞ（異本）

會ふことの無くて止みぬるものならば今見よ世にもありやはつると（山家集）

日に添へて怨みはいとゞ大海の豐かなりける我涙かな（異本）

わりなしな袖に涙のみつまゝに命をのみといとふ心は（山家集）

身を知れば人の咎とは思はぬに恨み顏にもぬるゝ袖かな（異本）

おのづからあり經ばとこそ思ひつれ賴みなくなるわが命かな（山家集）

哀れ〳〵此の世はよしやさもあらばあれ來む世もかくや苦しかるべき（異本）

我のみぞ我心をばいとほしむあはれむ人の無きにつけても（山家集）

それにしても、この失戀の惱みは何といふ痛ましさだらう。哀れ悲しき極みであらう。

待ちかねて獨りはふせどしきたえの枕並ぶるあらましぞする（山家集）

相見ては訪はれぬ憂さぞ忘れぬる嬉しきをのみ先づ思ふ間に（山家集）

後朝

今朝よりぞ人の心は辛からで明け離れゆく空を眺むる（追而加書）

かへるあしたの時雨

ことつけて今朝の別れはやすらはむ時雨をさへや袖にかくべき（異本）

會ふ迄の命もがなと思ひしは悔しかりける我が心かな（異本）

氣色（けしき）をば怪（あや）めて人の咎むともうちまかせてはいはじとぞ思ふ（山家集）

さりこそは人目思はずなりはてめあな樣憎（さまにく）の袖の氣色や（山家集）

假寝（うたたね）の夢を厭ひし床（とこ）の上の今朝いかばかり起きうかるらん（山家集）

君慕ふ心の内はちごめきて涙脆（もろ）にもなるわが身かな（山家集）

一度契りを結んだ後は、さても、また惱みの增しに增しゆくことよ。かれは更に詠ひつゞける。

いひ立てゝ怨みば如何に辛からん思へば憂（う）しや人の心は（山家集）

更に又結ぼほれ行く心哉解けなばとこそ思ひしかども（山家集）

憂き身知る心にも似ぬ涙哉恨みむとしても思はぬものを（山家集）

我ればかり物思ふ人や又もあると唐（もろこし）までも尋ねてしがな（山家集）

物思へどかゝらぬ人もあるものを哀なりける身の契りかな（異本）

わが煩惱を傍觀するほどのおちつきを得ても、なほ全然煩惱から脫却し得ることは容易ではなかつた。

何とこには數まへられぬ身の程に人を恨むる心ありけん（山家集）

何せむにつれなかりしを恨みけん逢はずはかゝる思ひせましや（山家集）

會ふことを夢なりけりと思ひ分く心の今朝は恨めしきかな（山家集）

とにかくに厭はまほしき世なれども君が住むにも引かれぬるかな（異本山家集）

これも皆昔の事と言ひながらなど物思ふ契りなりけん（山家集）

この作の如きをも、單に空想の詠出とは、誰しも言斷出來難いであらう。

廿三歳で斷然、俗界を離脱しようとした彼。さうして、二三年は京洛の地を去りかねて、西山や東山あたりの庵に起き臥してゐた彼。煩惱を解脱し得ぬ苦しみに修行の旅に出で立つたが京を忘れかねた彼――そのかれにしても、これらの作の如何に大膽な自己告白であるかを、一面わたくしは思ふ。さるにても、かくまでも己を告白せざるを得なかつたかれの眞面目さに思ひ至つて、更に新しい尊敬の情を感ぜざるを得ないではないか。

しかし、これらがわが西行のすべてゞないことは言ふ迄もない。かれはいつか高野の奥にも住みつき得るやうになつてゐた。さうして、不可思議な煩惱の海を、靜かに眺め味はふ餘裕を持つことが出來る人であつた。そこは、かの紫式部の素質として持つてゐた世界である。二人の文學者は、自照の地で互に握手する。融和して共に頰笑む。

第三、自然愛に於ける西行。 人間愛について、われ〳〵の愛を奪ふものは、自然美に對する愛着心であらう。大空の美しさ、起伏する丘陵の美しさ、蜿々と流れる長江の美はしさ、日の出の美はしさ、雲間ぬふ月の美はしさ、花の様々の姿したる美はしさ――思ひ盡きないのは、まことに自然の持つてゐる美の泉である。あゝ美くしい――かうわれ〳〵は幾度か讃美の叫びをあげてやまない。しかし、思ふに百人の者の中、幾人が眞に自然の美を體驗し得てゐるであらうか。同じ野邊に咲く一輪の花を見て賞美したとしても、色を主として愛するもの、形態を主として賞でるもの、趣を主として佳とするもの等、その主眼とする點に相違があるし、一幼兒の見る眼と詩人の觀る眼と宗教家の見る眼とは、それ〳〵異ることをも免れ得ない。

西行の自然愛、世にかれ程、自然を愛した詩人が、またとあるであらうか。かれは近代の畫家や彫刻家の樣に色彩感や線感の鋭どさは持ち合はしてゐなかつた。しかしかれの熱愛は、形態を押し破つて中味に喰ひ入つてゐたのだ。自然の核心につつ込んで居たのだ。自然の形相は、月となり花となり、山となり河となつて千差萬別である。しかしその差別相を貫いた普遍的な美が、森羅萬象に含まれてゐる。西行の感じはそこを捕へてゐる。西行の歌には、月と花とを嘆美したものが最も多い、否、大分を占めてゐると言つてよい。しかもその月は月、花は花とのみあつてそれ以上でない。それを例へば、一生竹ばかり描いてゐる畫家のやうで、近代人の形相を欲求する眼には、いかにも物足らないか

も知れない。しかし、西行にとつては、櫻、梅、桃などゝ花樣々の變種を愛したのでもなければ、櫻の花瓣、蘂の形、枝の張り工合など各樣の形を愛したのでもなかつたのだ。かれはこの意味に色盲であつた。かれの欲求した所は、まづ「さくら」といふ言葉だつた。それから「さくらの咲き出す時節」といふことだつた。「櫻が咲きさうだ」といふことだつた。更に「櫻が咲き出た」といふことだつた。なほ、「櫻が散りかゝつた」といふ折の感じだつた。「もう散つてしまつた」といつて詠嘆するそのことだつた。すなはち肉眼に訴へる官能的櫻はどうでもよかつた。かれには氣分が第一だつた。その氣分には、生命觀、宗教觀、藝術觀などが押集まつて來てある幽玄風雅な世界を拵へあげてゐた。西行はその氣分の海で、憧憬、三昧、悔恨の刹那々々を繰更えしつゝ游泳してゐた。

今更に春を忘るゝ花もあらじ思ひのどめて今日も暮さん（異本）

何と童心稚氣がそのまゝに表はされてゐる歌であらう。しかし西行にあつてはそれがそのまゝに許されてゐる。西行は、しば〳〵吉野に籠つた、それには「一筋に思ひ入りなん吉野山又あらばこそ人も誘はめ」といふ如き遁世の志からでもあつたが、「山人よ吉野の奧にしるべせよ花も尋ねん又思ひあり」で櫻花に對する止むに止まれぬ煩惱のためでもあつた。

何となく春になりぬと聞く日より心にかゝるみ吉野の里（異本）

吉野山雲をばかりに尋ね入りて心にかけし花を見るかな（異本）

吉野山梢の花を見し日より心は身にも添はずなりにき（異本）

吉野山花を長閑に見ましやは憂きが嬉しき我が身なりけり（山家集）

吉野山去年の栞の道かへて未だ見ぬ方の花や尋ねん（山家集）

これらの諸詠は、吉野における西行の生活を語るに充分であらう。かれが花に對する心持は、すでに賞美といふ如き對立的關係から遙かに離れてゐる。花は、愛人知己の暖かい胸と同じやうに、彷徨つてゐるかれの心の古里である。絶えしない漂泊の心の暫らくの安息所である。しかしそこは遂に一時の安息所たるにすぎない。すべては永久に流轉移動する、心の花はやがて散つてゆく。かれは、わが胸から遠ざかつてゆく戀人を追驅けるやうに、散りゆく花を半狂的な、露骨な執念を以て追ひかけるのである。

櫻咲く四方の山邊を兼ぬるまに長閑に花を見ぬ心地する（山家集）

花見ればそのいはれとは無けれども心の內ぞ苦しかりける（山家集）

あはれ我多くの春の花を見て染めおく心誰にゆづらむ（山家集）

思へ只花の無からむ木の下に何を蔭にて我が身すみなむ（異本）

春風の花を散らすと見る夢は醒めても胸の騷ぐなりけり（山家集）

何といふ偉大なる迷ひであらう。

覺束な春の心の花にのみ何れの年か浮かれ初めけむ（山家集）

何といふ執着さであらう。この心持は、年老いても、さらに變る所がなかつた。

年を經て待つも惜しむも山櫻花に心を盡すなりけり（追而加書）

花を待つ心こそ猶昔なれ春には疎くなりにしものを（山家集）

老苞に何をかせましこの春の花まちつけぬ我が身なりせば（異本）

月を詠んだ西行の歌は、花を詠んだものに優るとも劣りはしない。しかし春は一年に一度の契りである。月は秋こそよけれといふが、春の朧月、夏の涼月、またそれ〳〵の趣を持つてゐて、四時にその契が絶えない。かつ、月光の澄徹、光耀の美には、到底浮世のものとしも思ひ難い純淨味がある。

隈も無き月の光に誘はれて幾雲井迄行く心ぞも（異本）

影冴えて誠に月の明き夜は心も空に浮びてぞ住む（山家集）

行方なく月に心のすみ〳〵て果ては如何にかならんとすらん（異本）

わが身を離れて昇りたつ美を追ふ魂はこれを如何にともしようが無い。

うちつけに又來ん秋の今宵迄月故惜しくなる命かな（異本）

厭ふ世も月澄む秋になりぬれば長らへずばと思ふなるかな（異本）

來ん世にもかゝる月をし見るべくは命を惜しむ人なからまし（山家集）

かれの愛欲の情は、限なく燃え立つて、さらにその上に友情をも求めて、ゆくのであつた。

嬉しきに友にあふべき契ありて月に心の誘はれにけり

なほ、

願はくは花の本にて春死なむその二月の望月の頃

もうかうした強い執心に至つては、却て純乎として朗らかに燃える、人間本性に萌した炎(ほのほ)としてのみすべてが輝き出る。

異性を戀ひ、友を慕うて止(や)みない心。それと、花月を愛慕する心と、大觀すれば何れも愛欲の上に變りはない。自然は只、人のそれの如く意識を有たないため、意欲に伴なふ惱みが少ないことは考へ得られよう。しかし、西行の狂熱的態度に至つては、さらに、兩者の間に差別がない。しかも、情愛と自然愛との交錯してすゝむ心においてをやである。

西行は、散りゆく花、缺けゆく月に無限の愛着苦を感ずると共に、己が執心を反省して自責するといふ二重の苦惱を味ははなければならなかつた。

花に染む心はいかで殘りけむ捨て果てゝきと思ふ我が身に　（異本）

と、捨身の心に、執念くも染み來る花の相が、かれを惱ますと共に、月はまた同じ悶の種となる。

木の葉散れば月に心ぞあくがるゝ深山がくれに棲まんと思ふに（山家集）

さらぬだに浮かれて物を思ふ身に心を誘ふ秋の夜の月（山家集）

捨てゝ出でし浮世に月のすまであれなさらば心の止まざらまし（異本）

世の憂さに一方ならずうかれゆく心定めよ秋の夜の月（山家集）

しかし、煩惱卽菩提といふことが、かうした世界に觀ぜられないだらうか。歌の内容通り、自然の美は西行の生涯を通じて煩惱の種子だつたに相違ない。しかし、煩惱を抱いてその重さに躊躇としてゐる彼、その彼の傍には菩提道が平行して走つてゐたのではあるまいか。

思ひ返す悟りや今日は無からまし花に染めおく色なかりせば（山家集）

月の色に心を淸く染めましや都を出でぬ我が身なりせば（山家集）

これらの追憶の作は、必ずしも概念を並べ立てたものではあるまいと思ふ。

「思ひ返す、悟りや今日は無からまし――」自然美に對する煩惱的愛執が、かれにとつてやがて卽菩提の道であつた、このプロセスは、再び、西行に紫式部を對比せしめる。わたくしは、取り立てゝ式部の自然觀を說かなかつたけれど、これは、式部の悶えの中に、自然美が大きい關係を持つて來ないからである。式部は自然を凝視した。しかし、自然美はかの女を蠱惑し得なかつた。式部の心は、つねに人の問題の上にのみ係はつてゐた。

しかるに、自然を切り離して西行を觀ることは出來ない。それは、當時の文人に通じた特色で、西行は、最もよく、かゝる時代の特色を表はし得たのであつた。

第四、藝術愛に於ける西行。世に三大美がある、戀愛・自然・藝術。かうした觀じ方には、また捨てることの出來ない卓見さがある。わたくしは、これ迄前二者を中心としての西行の生活を說いて來た。西行の藝術愛、すなはち歌道に對する愛着、それは、前二者と立派に對立し得てゐるものである。

しかし、捨身修行の身にとつて、歌に執することの許されがたいことは、かれにも早く分つてゐた。それは、出家當座のことであつた。寂蓮から百首歌を詠むやうすゝめられた時、かれは、それを斷つてゐる。しかるに、かれは熊野詣の途中、不思議な夢を見た。それは夢の中に熊野の別當湛快が現はれて、「何事も衰へゆけどこの道こそ世の末も變らぬ物はあれ云々」と、歌德を口說いて居る。西行はその夢から醒め出て、歌道の意義深いことを始めて悟り、一度斷念した百首歌を更に作り、奥に次の歌を添へて寂蓮に送つてやつた。それが山家集に出てゐる。

末の世に此の情のみ變らずと見し夢なくば他處にきかまし（追而加書）

この歌は一向映えないし夢斷判もやゝ滑稽に感ぜられるが、これにはなほ、當時の歌壇を窺つてみる必要がある。

當時の宗教界は、なるほど本質的方面の墮落はあつたといへ、何と言つても、なほそれは大きい勢力であつた。各流各派が分立してゐたゝめ、そこにローマの法王廳といふ工合に統裁力はなかつたが、すべて殆んど、朝政の干渉外に立ち得て、武力を擁し、一大學府であり、醫療から加持祈禱方面をも手に收めてゐたゝめ、政治・經濟・道德・藝術は、こと〴〵く宗教的色彩を加味してゐた。藝術は、その窮極において宗教と吻合するのとは異なつた意味で、當時の歌道が佛教のために方便視されたことも止み難い趨勢であつた。勅撰集にも釋教部がこゝに設けられて、法華經の語句などの飜案歌が麗々しく加へられ、雜部などにも何とか僧都といふやうな僧侶の無常歌が多く選入された。

しかし、短詩形の和歌は、他の文學と異なつて、さうした表現に不適であることはいふ迄も無い。大和物語系統の短話集、小說、戰記物語等が、盡く法話文學となつて行く間に、和歌のみ獨自の藝術境を開拓していつた。勿論和歌が可憐な抒情味を捨てゝいつたことは、まづ免れがたい。しかも佛教が、積極的愛の生活を稱導する基督教などゝ異なつて、信者をして不斷に、自然の默示に耳を傾かしめるやうに導いていつた。この自然たるや、渾々と湧き出る情緒の泉としてでなくて、宇宙の本體としてゞあつたのだ。その自然は官能の對象としての自然でなく、無常心の反映としての自然であつたのだ。されば自然は玲瓏として輝いてはゐたが、如何にも靜かで冷たい。歌人は、目や耳によつて色彩や音聲をそのまゝ感じようとしないで、これに對し心眼と心耳をのみ開いた。新興歌壇の中心者俊

成は、深夜燈火をかすかにして直衣烏帽子姿で桐火桶を抱いたまゝ句案に耽つた。さうしたかれの氣分の中から

又や見む交野のみ野の櫻狩花の雪散る春の曙

岩走る水の白玉數見えて清瀧川にすめる月影

夕されば野邊の秋風身に沁みて鶉鳴くなり深草の里

などゝ吉野や清瀧や深草の里の歌も詠出されたのである。かつこれらの名歌は、いかにも客觀的叙景歌の様であるが、今少し内在律に耳を傾けるならば、そこに作爲の跡が歴然と浮び出てくるであらう。幽玄歌と稱されるものは、皆かうした巧妙を極めたモザイックなのである。しかし、そのモザイックが滅裂せずにムードを保ち得る所以は、前述の心眼心耳の基調をなしてゐる哀趣があるからである。無常觀があるからである。その趣、その觀は時に作爲の跡を消してしまふ迄にモザイックに浸潤してゐる。しかし、そこに個性的閃めきは乏しい。甲の歌と乙の歌の差別は、個性上の差別でなく、たゞ巧拙の別としてのみ考へ得られる。

西行はかうした人々の中にあつて歌を詠んだ。かれの交友としてあげた俊成・定家・家隆・俊惠・慈圓・靜忍・家成などは、ほとんど歌席においてのみの交はり丈けのやうに思はれる。さうして、人間美に對し自然美に對し人一倍の執念をすてえなかつた西行に、歌道においてもその道に人數倍の溺愛を感じ

たのであつた。第二の愛人として自然を娶つた西行は、自作の歌を更に愛子の如く撫愛してゐた。

わが歌の勅撰和歌集に選入される光榮は、當時、歌人にとつて高位高官を與へられるにも增して名譽であつた。西行も撰集のある都度、それがためにわが心を時めかした。

しかしこゝに一つ不可解な點がある。天養元年六月に、崇德上皇の宣旨に基き第六勅撰集である詞花集が藤原顯輔によつて撰進された。時に西行はすでに廿七歳である（一說にこの集は仁平年間奏上されたともいふ、然れば西行は卅四五歳）かつ宣旨は上皇から出て居り、かた〳〵西行の作も撰入さるべきである。しかるに西行の歌が一首も採られてゐない。この集は一體にのみ偏しすぎたとの批難もあつたが、さりとて歌人西行の名が（撰集抄中の逸話の如く）高く擴がつてゐたのなら、一二首だけでも撰入されないといふ理由はあるまい。然るに、次集からは、千載に十八首、新古今に九十四首、新勅撰に十四首の割合に採擇されてゐる。こゝに、西行の傑作の大部分が三四十歳以後に詠まれたものとして推斷することは、早計であらうか。勿論、院に奉仕中すでに才幹を現はした歌は多かつたであらうが、結極それは、技巧に優れただけのものではなかつたのだらうか。例へば「いつしかも春來にけりと津の國の難波の浦をかすみこめたり」の作などを「難波わたりに年越に侍けるに春立つ心をよみける」といふ詞書を以て、直ちに方違ひと解し出家前の作と斷ずる如きあまりに危險ではあるまいか。

藤原俊成が次の勅撰集撰進につき院宣をうけたのは、壽永二年（西行六十六歲）で、その業の終つたのが文治三年（西行七十歲）、その間五星霜の月日がある。例の「鴫立澤」の西行の作についての採否の逸話は、この折の事で古今著聞集や今物語等に傳へられてゐる。千載集が大體出來上つたことを西行が耳にした時、西行は丁度奧羽への行脚の途中にあつた。かれは、その前、俊成から自家集を出す樣にと言はれて、「花ならぬ言の葉なれど自ら色もやあると君拾はなむ」と言ひ贈つてもあつたことを思ひだし、自分のどの作が選ばれ、また何首位入れられたかなど知りたくてたまらなかつた。特にかれの希望は、

心無き身にも哀れは知られけり鴫立澤の秋の夕暮

といふ以前、關東旅行に來て、大磯と小磯との間にあたつてゐる鴫立澤で詠んだ歌をぜひ採つて貰ひたかつた。さうしてかれはそのことを知るために態々道をひつかへして來たが、折から京から下つて來たさる歌人（井蛙抄には登蓮と見える）が、鴫立澤の詠の選入されてないことを言つてくれたので、卧かはず失望した西行はそのまゝ東北への旅をつゞけたといふことである。それを耳にした刹那、例の西行が抱いた少さい不滿、少さい憤り――それが、わたくしの心にもそつくり感ぜられるやうである。六十九歲の老人の憤懣、しかしそれはおきに消え去つて、西行は脚絆を締めかへながら海道筋をそのまゝ辿つて行つたであらう。

なほ、西行が自作に執着を持つた例として、俊成及び定家判の自作歌合に關した話がある。著聞集(第六和歌部)をそのまゝ引用すると

圓位上人、昔より自ら詠みおきて侍る歌を抄出して、卅六番につがひて、御裳濯歌合と名づけて、いろ〳〵の色紙をつぎて、慈鎮和尚に清書を申し、俊成卿に判の詞を書かせけり。又一卷をば宮河歌合と名づけて、是も同じく番につがひて定家卿の五位侍從にて侍りける時、判ぜさせけり。諸國修業の時も笈に入れて身を離たざりけるを、家隆卿のいまだ若くて坊城侍從とて寂蓮が聟にて同宿したりけるに、尋ね行きて言ひけるは、「圓位は往生の期既に近づき侍りぬ。この歌合は愚詠を集めたれども秘藏のものなり。末代に貴殿ばかりの歌よみはあるまじきなり。思ふ所侍れば附屬し奉るなり」と言ひて、二卷の歌合を授けけり。げにゆゝしくぞ秘藏したりける云々

なほ、御裳濯歌合の表紙には

藤波を御裳濯川にせき入れて百枝の松にかゝれとぞ思ふ

藤波も御裳濯川の末なれば下枝も掛けよ松のもと葉に

といふ西行と俊成との贈答歌などが書きつけられてゐたことも同じくその著聞集に見えてゐる。

歌人としての西行、――それにしても、わたくしは、武の西行、愛の人西行を最初に說いて、この大きい問題を餘りに後廻しにしたのではなかつたらうか。また、歌聖をとくために、徒らにその環境を

說いて、委曲にすぎはしなかつたらうか。

しかし、なほ、わたくしはこれでも遠慮して來たのである。躊躇して來たのである。もしわたくしの望みが許されるならば、わたくしは、西行の歌を觀賞する前に、西行の信仰について檢べておきたい。さうして最後の舞臺の上に、歌人西行を登せたいのである。

西行の歌とて、こゝに改めていふ迄もない。これ迄しば〳〵かれの自詠として引用して來た和歌がことごとく西行の歌なのである。しかも、この場合わたくしは、なほ立歸つて「西行の歌」と、新しく口荒まざるを得ない。何故であるか　歌は、西行の個性においてもつと根本的位置を持つてゐる今までわたくしの語つて來たことの一つとして西行の個性を表はさないものはないが、歌の世界はもつと深く西行を表象し得てゐる。西行と歌とは全く一體なのである。その兩者の關係は、紙の表裏にも譬へられようし、もつと進んで炭と火との關係にも比べられるであらう。西行から歌をとり去つて、跡に殘る物は、もぬけの殼に過ぎまい。これは決して誇張の言葉ではない。かれの歌の中に、かれの武骨な心、情愛、信仰のことごとくが泌みこんでゐるのである。

さて諸集に西行の作として傳へられたものの總計は約一千八百五十餘首に及ぶ。古來一個人の詠歌として傳へられたものではまづ多い方である。しかし出家後五十年間の全收獲としては決して多作ではない。本納歌合にしても御裳濯歌合、宮河歌合と共に十社あつたと傳へられてゐるが、八社丈の歌

合は湮滅して傳はらないが、そんな理由からかも知れない。ともかく西行が拙作として捨てた作のあることは別として、現存の外になほ多少とも作のあつたことだけは言ひ得よう。西行は、それほど一面に輕く易々と歌を吐いてゐる。

しかしこゝに立止まつて、かれの家集を一つ一つ詠んで行けば、やはりかれの佳作と見るべき歌は、その何分の一かであることが分る。模倣的なもの、時流的のもの、秀句的純技巧的のものといふ樣に、かなりの多數が、やくざな歌である。然れば、こゝにわたくしは歌人西行といふ言葉を、潔よく取消すべきであるか。それは到底出來ない。後に芭蕉の句作を批評する場合にも持出すことであらうが、一體、和歌や俳句の如き詩形の文學の實狀において、その吟詠の盡くが、正しい直觀の表現であり、隙間がないといふことがありうるものだらうか。もと／＼直觀といひ主觀の燃燒といひ、それは絕對的のものでなく、どこ迄も相對的比較的のものである。未熟時代の惡作、偶〻作つた技巧歌を盡く何等かの方法で抹殺してしまへば別問題であるが、さうでない限り作者の試作欲から成つた素描が後世に殘ることは免れ難い事だらう、

のみならず、作者的良心といつても、人間の心理は、もつと複雜的のものである。ことに歌會、句會といふ背景なしに考へられない當時の歌壇俳壇には、一種の道場的仕合(しあひ)を度外視することは出來ない、競爭的精神は明らかに不純なものである、ありのままのものではない。しかし、それが更に、眞

の直觀的表現の前提、指導となつたこともこゝに否定出來まい。人の心からは永遠に遊戯性を取り去ることが出來ないものである。短詩形の文學には、殊にさうした傾斜が認められる。西行にもあれば芭蕉にもある。萬葉集に傳へられた人麿の歌は僅かであるが、かれはその中のある歌のみならず、傳へられない多數の中に多くの凡作をもしたであらう。

そこで、わたくしの結論として言ひたい點は、つぎの二項に歸する。一、家の集中に拙作の混入することは、當然止み難い事情である（特に、それが後人の編輯の時は一層である）本居宣長が西行も歌作りといつた批難も、その拙作においては甘受しなければならない。二、西行の拙作、芭蕉の拙句、それは何處迄も拙劣に相違ないが、われ〳〵は短詩形の特質の上から、一首の歌句を獨立的に見ると共に、この場合作者を背景において有機的に考へる親切心を必要とする。換言すればトルストイの「復活」を觀賞するに、トルストイの人格や他の作品を參照する必要があらうが、それよりも西行の作を觀賞するにより多く、西行の個性、山家集を必要とすると言ひたいのである。それは、所謂唯美的、藝術至上的傾向の人々には承認されないかも知れないが、これは觀賞における實際であり、特に短詩形的のものに必須の點だと思ふ。

しかるに和歌史上の事實は甚だしくこれを裏切つてゐる。まづ萬葉集や古今集に多い歌の詞書を除いて行つた傾向がその一つ。つぎに一つの家集を以て歌を論ぜず、何百人といふ歌人から數首宛選ん

だ撰集（古今集とか新古今集とか）を、軌準として歌人を論じたこと。最後に作歌の心理といふことを全然沒却して歌を考へたこと——この點は、ひいて現歌壇の衰頽の大原因をなしてゐると言つてよい。背景環境を度外視しても佳作は佳作だとも言はれもしようが、短詩形のものを味はふに然るべき雰圍氣を要することは否定されない。山家集中の拙作、それが不思議にも多角的な西行の種々相を浮び出さしめて、より多き價値を他の作に與へてゐることをわたくしは認めざるを得ない。

しかし、こゝに極めて意外な問題がある。それは西行自身の詠まうとした理想的歌體についてゞある。こゝにまづ、かれの自讃歌十首をあげて見るに、

吉野山櫻が枝に雪散りて花遲げなる年にもあるかな
眺むとて花にもいたく馴れぬれば散る別れこそ悲しかりけれ
あはれ如何に草葉の露のこぼるらん秋風立ちぬ宮城野の原
月見ばと契りおきてし故里の人もや今宵袖濡らすらん
きり〴〵す夜寒に秋のなるまゝに弱るか聲の遠ざかりゆく
津の國の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風渡るなり
年たけて復た越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山
風に靡く富士の煙の空に消えて行方も知らぬ我が思ひかな

山里に浮世厭はん友もがな悔やしく過ぎし昔語らん

吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらん

どうしたものだらうか。これらは、所謂西行の名歌として世に喧傳されたのかも知れないが、千八百首中の指折の十首選としては餘りにあつけないではないか。わたくしにはこの内の七八首迄は、全然二流所の作であるとしか考へられない。しかも、西行がかうした歌風を目的としてゐたらしいことは、例の俊成及び定家判の歌合でも傍證され得る。（もつともこの歌合に自信の作のみ採つたとは明言出來ないけれど）

御裳濯河歌合をまづあげて見よう。その一番と二番は、伊勢神宮に關した作だから特別として

三番　左

押しなべて花の盛りになりにけり山の端毎にかゝる白雲

右

秋は只今宵一夜の名なりけり同じ雲居に月は澄めども

四番　左

なべてならぬ四方の山邊の花は皆吉野よりこそ種はとりけめ

右

秋になれば雲居のかげのさかふるは月の桂に枝やさすらん

五番　左

思ひ返す悟りや今日は無からまし花に染めをく色なかりせば

右

身に泌みて哀しらする風よりも月にぞ秋の色は見えける

つぎに宮河歌合の例をあげて見よう。一番はおいて、

二番　左

來る春は峰に霞を先き立てゝ谷のかけひを傳ふなりけり

右

分きて今日逢阪山の霞めるは立ちおくれたる春や越ゆらん

三番　左

若菜つむ野邊の霞ぞ哀なる昔を遠く隔つと思へば

右

若菜生る春野の守に我なりて浮世を人につみしらせばや

四番　左

古巣うとく谷の鶯なりはてば我や代りて鳴かんとすらん

右

色にしみ香も懐しき梅が香に折しもあれや鶯の聲

これら諸作の價値如何。かの自讃歌十首はなほ拙くとも二流の値は充分あつた。しかるにこれら歌合から拾つたものゝ大部は、何といふ時流的のものであらう。所謂秀句めいたもののみではないか。かれは何故に、かゝる歌合を作つて、俊成や定家の判を乞うたのか。またそれを後生大事に篋の中に終身收めてゐたのか。かれは、千載集に十八首選入された喜こびを味はつたであらうけれど、眞に、かれ自身を歌つた作の値を知らずに逝つたのではあるまいか。

しかしこゝに、これを「しかり」と決定することはいくらか早計の嫌ひがある。これには愚祕抄（下ノ五）にある西行の逸話が、多少の參考にならう。

歌を詠まん時、あからさまにも座正しからで詠むこと勿れ。自由にて詠み習ひぬれば、いかにも晴れの時詠まれず。西行は毎度、歌を詠まん時は、緣行道して嘯きよみけるが故に、先年仙洞にて、老若の勝負の御歌合、當座なりしに、「西行出だすな、立て籠めて詠ませよ」と勅諚ありき。げにもと覺えて侍りしか。されば其の時はさまで秀逸と覺しき歌なかりき。

眞否の問題は別として、如何にも西行にふさはしい逸話ではないか。かれは常々、山野の中にあり、自然と一體となつて、歌を詠出する。かれはその瞬間において眞に幸福であり、純一である。歌合においての如く、相手に勝たうといふ心もなければ、晴の座においての如く制約も感じない。さればこそ、前述の如き歌道に對する熱愛も持ち得たのである。

しかし、わが西行も、容易に社會から、名譽から超脱することは出來難かつた。時世の暗翳は、かれの胸中にも入り込んでゐた。本歌取の作がはやれば、かれ西行も物眞似をしたし、題詠、百首詠が催されるとまたその仲間入りをした。晴の座にも出入し、千載集に「心なき身にも」の自作が入らなかつたとぷり〳〵怒りもした。もし人あつて、かゝる西行の一面を叱責するなら、遠く西行の作は湮滅して現代に傳はらなかつたであらう。俗流の中に立つ藝術家の妥協的苦衷は古今東西その規を等しうしてゐる。

さて、いよ〳〵つぎに、西行の和歌の價値を決定すべき場合に立ち到つた。

これは西行の作のみに限らないが、その作全部を、表現における實の甘みと、綾の巧みさとの二方面に分け得ることが出來るであらう。西行の歌の實の甘みとは如何。すなはち、それは思想とか着想とかでなく、實に淸爽的自然さとその煌々とした純澄さにある。

それは、セザンヌの繪畫の樣に、何物の模倣でもなく、また何者の追隨をも許さない獨自的のもの

である。西行の前に西行なく、西行の後に西行が無い。恰もセザンヌの手法を追つた畫家は無數にあつたらうが、セザンヌの鋭い觀照力を持つた人は、遂に一人も出て居ないと同樣に。

俊頼が後には釋阿、西行、俊惠なり。姿殊にあらぬ體なり（中略）西行は面白くて而も心殊に深くてあはれなる、あり難く出來難き方も、共に相兼ねて見ゆ。生得の歌人と覺ゆ。これに依りて朧氣の人の眞似びなんとすべき歌にあらず。不可說の上手なり。

と、後鳥羽院が、その「御口傳」の中に遺し給うた御言葉は、要を得た批判である。新古今集に選入された歌數から見ても西行は、歌人中の筆頭であつた。かれの歌調の追隨者が多く出たことは、恐らく現代の啄木歌調におけるよりも、なほ以上であつたかも知れない。順德院は、また西行の跡を學ぶべきを宣給ひ「ただ詞を飾らずしてふつ〳〵と言ひたるが聞きよきなり」（八雲御抄）と評されたが、これは後世いふ平淡主義、無味主義をさしてゐる。しかし西行の特色はそれだけに止まつてゐない。平淡さはかれの表面だけのもので、かれの歌の內部にはそれと共に清爽味と純澄味とがある。

——西行上人の樣を學ばんことは、其の人ならでは、非器の輩の努々叶ふまじき樣にも侍り。眞似損ぜば、世に平懷にも又かたはら痛くも聞ゆべき

と、更に愚秘抄の作者が評した語は正しい。啄木の歌は、遂に啄木と同じく體驗を得たものでなければ、成功しないと同轍である。

しかし、自然的の味といふ點から見て、西行の作の中にも他の模倣しうる拙作もある。たゞ、その中に到底他の追隨を許さない光つた佳作を傳へ得た處に、西行の歌人西行たる所以が存してゐる。それを論外にしては西行の價値は分らない。古來西行々々と稱しつゝも、西行を諒解し得なかつた歌人の群は、西行の作すべてを佳作と考へようとしてゐたのであつた。わたくしは、宣長をさへその群の中に見出さなければならないことを悲しむものである。

水底に深き碧の色見えて風に波よる川柳かな（山家集）

なか〳〵に風の押すにぞ亂れける雨に濡れたる青柳の糸（山家集）

初花の開け始むる梢よりそばへて風の渡るなるかな（異本）

眞菅生ふる荒田に水をまかすれば嬉し顔にもなく鳴蛙かな（異本）

小笹敷く古里小野の道の跡を又澤になす五月雨の頃（山家集）

旅人の分くる夏野の草繁み葉末に菅の小笠はづれて（異本）

夕立の晴るれば月ぞ宿りける玉搖り据うる蓮の浮葉に（異本）

分けて出づる庭しもやがて野邊なれば萩のさかりを我が物に見る（山家集）

池の面に影をさやかに映しもて水鏡する女郎花かな（山家集）

何事をいかにと思ふとなけれども袂乾かぬ秋の夕暮（追而加書）

僅かなる庭の小草の白露を求めて宿る秋の夜の月（山家集）

荒れわたる草の庵に洩る月を袖にうつして眺めつるかな（山家集）

月はなほ夜な〳〵毎に宿るべしわが結びおく草の庵に（山家集）

横雲の風に別るゝ東雲に山飛びこゆる初雁の聲（異本）

蛬夜寒になるを告げ顔に枕のもとに來つゝ鳴くなり（山家集）

霜冴ゆる庭の木の葉を踏み分けて月は見るやと訪ふ人もがな（異本）

嵐吹く嶺の木の間をわけ來つる谷の清水に宿る月影（山家集）

玉垣は朱も綠も埋もれて雪面白き松の尾の山（山家集）

瀬戸渡る棚無し小舟心せよ霰亂るゝ旋風横ぎる（異本）

淡路潟礒わの千鳥聲しげし瀬戸の鹽風さえまさる夜は（山家集）

以上、かりに四季の部類から廿首を選出したものを見よ。何れも彩りの乏しいものでは無いか。觀照のまゝが、ただ素純に歌はれてゐる。前說した西行の自然愛、すなはち花を慕ひ月を待つ情緒のはつきり歌はれた作などに比すると、そこに、何とも言へない静かさがある。しかも所謂新古今調などに

よく見る硬張つた感じはすこしもない。寂味が爽かにすき〳〵と出てゐる。なに、愛誦すべき句は、己が庵を詠んだものの中に多い。

鶯の聲ぞ霞に洩れてくる人目乏しき春の山里（異本）
鶯は我を巣守に頼みてや谷の外へは出でゝ行くらむ（山家集）
谷の間に獨りぞ松は立てりける我のみ友は無きかと思へば（異本）
わが園の岡べに立てる一つ松を友と見つゝも老にけるかな（山家集）
春雨の軒垂れこむる徒然に人に知られぬ程の住家か（山家集）

尋ね來て言訪ふ人も無き宿に木の間の月の影ぞさし入る（山家集）
月ならでさし入る影もなきまゝに暮るゝ嬉しき秋の山里（山家集）
眺むるに慰むことはなけれども月を友にて明かす頃かな（山家集）
曉の嵐にたぐふ鐘の音も心の底にこたへてぞ聽く（異本）
立寄りて隣訪ふべき垣にそひ隙なく生ゆる八重葎かな（山家集）

自ら音する人も無かりけり山めぐりする時雨ならでは（山家集）
嵐のみ時々窓を訪れて明けぬる空の名殘をぞ思ふ（山家集）
寢覺めする人の心を侘びしめて時雨るゝ音は悲しかりけり（山家集）
道も無し宿は木の葉に埋もれぬまだきせさする冬籠りかな（山家集）
降り積る雪を友にて春迄は日を送るべき深山邊の里（山家集）

かゝる境地は、これをたゞたましひの冴えに待つのみ。「訪ふ人も思ひたえたる山里の寂しさなくば住みうからまし」といふ徹した寂寥からのみ觀じ得られる界である。「人知らでつひの住家に憑るべき山の奥にもとまり初めぬる」といふ最後の治定の地を得た氣持から、眺められ得る相である。靜穩の祕奥である、しかもなほすら／＼とした清爽味を失はない。歌に捕はれてゐない、濶達とした態度がそのまゝ韻律化されてゐる。鋼鐵の樣に、寂寥味がぴいんと反撥しさうである。西行は如何なる場合にも他に捕はれない、盲目にならない。

庵の生活に較べると、旅にある方が心が搖ぎやすい。周圍の變化にもよるであらうが、まづ生活そのものが全然異なつたものになる。しかし、澄み切つたかれの心持は、さうした場合にも容易に崩れなかつた。

越え來つる都隔つる山さへに果ては霞に消えにけるかな（山家集）

都近き小野大原を思ひ出づる柴の煙のあはれなるかな——下野にて（山家集）

菫咲く横野の茅花生ひぬれば思ひ〱に人通ふなり——上野にて（追而加書）

常よりも心細くぞ思ほゆる旅の空にて年の暮れぬる　陸奥にて（山家集）

夕されや檜原の嶺を越えゆけば凄く聞ゆる山鳩の聲——紀伊にて（追而加書）

旅寢する嶺の嵐につたひきてあはれなりける鐘の音かな（山家集）

千鳥鳴く繪島の浦にすむ月を波に映して見る今宵かな——淡路にて（追而加書）

何れも、愛誦してやみ難い絶品ではないか。些しの嫌味すらそこには無い。プラチナの光のやうな感じのみがある。それは、源氏物語中に散見する抒情的叙景の妙趣をも聯想せしめる。

これは曾呂利の狂歌咄にも出てゐるが、醒睡笑に次の様な短話が載つてゐる。

西行法師修行の時、津の國七瀬の河にて麥粉を喰ふとて頻りにむせられけるを、馬上より侍の見つけ

この河は七瀬の河ときくものをお僧を見ればむせ（六瀬）わたるかな

時に西行の返歌

この河は七瀬の河ときくものを召したる馬はやせ（八瀬）わたるかな

生眞面目に思へる西行には、かく一面に甚だ洒脱な點があつた。この逸話は、たゞに狂歌的機智を持ちあはしたかれを語るに過ぎないけれど、かれの和歌にあつては充分童心として、はたユーモアーとして、この氣分の表現されてゐるのを見得る。古今集中に、われ／＼は既に、遍昭法師やその子素性法師の如きユーモリストを持つてゐる。否、編者紀貫之自身も、ある意味にユーモリストであつた。しかし、われ／＼がかれらに、ユーモリストとしてなほ不足を感ずる點は、情味の缺乏である。ともすれば、滑稽だけのものに墮しがちな點である。

　西行の出家した年、恰かも鳥羽僧正が寂して居る。鳥羽僧正の畫は、鳥羽繪の元祖をなすもので、誰も知るやうにそれは極めて洒脱味に富んでゐる。わたくしは、鳥羽僧正が出、曉月が出て、平安朝末期の藝術の上に瓢逸的新鮮味の加はつて來たことを、西行の一生と思ひ合して、必ずしも偶然でないとしたいのである。藝術は一方には、土佐繪となり新古今調となつて重厚味を傳へると共に、他方にかく輕妙な一派を出さしめた。こゝには、急激な時世の變化がある、人々の心に點ぜられた暗い運命觀がある。矢叫びがある、劍戟がある。さうして強い意思と信念とを以て難局を乗り越し、時世を達觀し得た人々の心に萌した氣持はまづこの瓢逸さではなかつたらうか。

　時代の轉囘を目のあたり感じた歌人に、平安朝の初期在原業平がある、末期に鴨長明がある。しか

るに多感な兩人は、周圍に演ぜられた怖ろしい悲劇の壓迫下に流浪の身となり、隱者の身と近ならざるを得なかつのである。意力の乏しいかれらには、時代を超越する志操が缺けてゐた。しかも、同じ運命にありながら、また同じ鋭敏な感受性を持ちながら、なほよく、涙に溺れなかつた歌人は、わが西行であつたらう。

承安三年（西行五十六歳）淸盛が經が島を築き、和田岬築港の大供養を行つた時、西行は出かけてそれに加はつてゐる。安元元年（西行五十八歳）鳥羽院皇女の命をうけ高野東別所に蓮華乘院を建立してゐた大義房兼宗の中途で寂した際も、西行は餘業を自らひきついでそれを完成し奉つてゐる。文治二年（西行六十九歳）東大寺再建勸進の際も、西行は依賴をうけて東北旅行に出かけていつた。

かく西行の晚年は、成年時代に比して寧ろ世間的であり、活動的のものとなつてゐる。しかし、西行を眞に解する者は、誰かこれを以て西行の妥協的態度となし、墮落した結果であると言ひ得よう。むしろそこに、西行の本質と見なすべき潑溂さが出て來たのである。煌々と輝く氣質が溢れ出たのである。

こゝに疑念を挾むものは、いかなるものよりも、まづ山家集を繙いて、その中の張り切つたリズムを感得されよ。

思へ只花の無からん木の下に何を陰にてわが身住みなん（異本）

如何でかは散らであれとも思ふべき暫と慕ふ情知れ花（異本）

心得つ只一筋に今よりは花を惜しまで風を厭はん（山家集）

たゞ花一つに對してすら、かくかれの緊張さは横溢した。かゝるかれにして、始めて洒脱の境界にも立ち得たことが理解される。

いざ今年、散れと櫻を語らはむなか／＼さらば風やをしむと（山家集）

宵の間の露にしほれて女郎花有明の月のかげに戯る（山家集）

まづ、これらは、遍昭、素性の態度と餘り違からぬものであらう。しかし、「いざ今年」と詠み始め、「かげに戯る」と言ひ切つた氣持には、兩歌人に見られぬ朗らかさが見えてゐる。氣取つた感じは少しもない。

嘆けとて月やは物を思はするかこち顏なる我が涙かな（異本）

あはれわが多くの春の花を見て染めおく心誰に讓らん（山家集）

消え返り暮待つ程ぞしをれぬにおきつる人は露ならねども（山家集）

浮世をばあらればあるにまかせつゝ心よいたく物よ思ひそ（山家集）

あくがるゝ心はさてや山櫻散りなむ後や身に歸るべき（異本）

花見にと群れつゝ人の來るのみぞあたら櫻の咎にはありける（追而加書）

里慣るゝ黄昏時の子規きかず顔にて又名のらせむ（異本）

引きかへて花見の春は夜はなく月見む秋は晝なからなむ（異本）

かうした心持は、源氏物語において、われ／＼の到底求め難いものであつた。單純な滑稽や機智は、深刻な個性を通ずる時、可笑味となつて生れ出る。西行の作は、このことを實證してゐる。

第五、信仰の人西行。これは、西行論の最後の問題、最も重大な問題、解決難の問題かも知れない。全く、緇衣をまとつた西行の姿が、わたくしの心に雲に聳ゆる雪山の如く映る時がある。その境地は、到底、わたくしの樣な無信仰者の覬覦を許されない神祕的世界かも知れない。しかしながら、なほ、時にそれは極く近い境地で、ふつとそのまゝわが心の中にも映り得るやうな姿として、わたくしに觀ぜられるのも、結極、幻想の一種にすぎないのであらうか。覺束ない足取ながら、わたくしは、その閃影を捕捉しなければならぬ。

さらに想へば、西行の一生そのものが、いかに時代の大推移を象徴してゐることであらう。「凡そ物の心を知りしよりこのかた、四十あまりの春秋を送れる間に世の不思議を見ること度々になりぬ」と言つた長明に增して、西行の體驗はなほ一層大きい。また、甚だ深い。

何事も變りゆく世の中に同じ影にも澄める月かな（異本）

かうした傍観的なおちつきを得るまでには、かれは限しられぬ人生の曲折を經なければならなかつたのだ。

わたくしは、更に、かれの様々の時、様々の場合に詠んだ作をしみ〴〵した氣持で思ひ浮べて來る。

野邊によりて茂き淺茅を分け入れば君が住みける礎の跡(山家集)

これや見し昔住みける宿ならん蓬の露に月のかゝれる(山家集)

他人の家とわが家との別ちもなく亂世は、すべてを破壊してゆく。ましてや治承四年には福原遷都といふ如き、未曾有の事變が持ち上つてきた。

露しげく淺茅繁れる野となりてありし都は見し心地せぬ(山家集)

雲の上や古き都になりにけりすむらん月の影はかはらで(山家集)

保元・平治・源頼政の叛亂と相續く戰ひは犠牲者を限りなく生み出す。

世の中を思へばなべて散る花の我が身をさてもいづちかはせん(山家集)

年月をいかでわが身に送りけむ昨日の人も今日は逝き世に(異本)

心なき人すら、無常觀を抱かずには居られないほどのあさましき世相である。

天台宗の教理の中に淨土欣求の觀念の萌したことは紫式部論の中で述べておいた。その後良忍上人があつた。上人は天治元年(西行七歳)の交、京都に念佛の功德を遊説し、禁裡に念佛會を營み鳥羽

上皇その他に大きい感化を齎した。かの淨土宗の祖師法然の生誕は、恰も西行十六歲の年に相當してゐる。しかも、法然が、惠心の「往生要集」などより開悟した念佛爲本の敎義は、法成寺の金堂供養を觀て茫然と現世に淨土の幻を描いてゐる氣持とは、甚だ遠いものであつた。すなはち、惠心の言つた樣に、不淨、苦相、無常相こそ現世の實相であつて、かゝる穢土的現世を厭離して亡後の往生極樂を望見する所に念佛の意味があるのである。法然は、この場合、特に、彌陀の本願をつよく身に觀ずる法悅を說き、これに對する感謝の方面をも說いたために、惠心の敎義に一層の深味を帶ばしめた。かくてかれの「撰擇集（せんじやくしふ）」は、純粹に淨土宗確立を裏づけ得たのであつた。

法然の弟子に親鸞があつた。淨土眞宗を開きその結果更に鎌倉から室町時代に及んで淨土思想の普及に驚くべきものがあつた。

こゝにも西行が、法然等の淨土敎の影響をうけた點はこれを免れ得ない。

しかるに西行の傳記は、かれと高野山との關係の最も深甚であることを語つてゐる。家集の詞書によつても、かれは、高野山と京都との間を幾度も往復してゐた。かの

栞せてなほ山深く分け入らむ憂き事きかぬ所ありやと

といふ作も、高野から友に送つたものである。待賢門院の女房達が出家して隱棲した仁和寺、鳥羽院

皇女の命によつて西行の建立した蓮華乘院、西行の四國旅行に暫く止錫した讃岐善通寺、また西行の臨終の地となつた河内の弘川寺――これから何れとして眞言宗の寺院でないものはない。

住むことは所柄ぞと言ひ乍高野は物の哀れなるべき（山家集）

高野にこもりたりける頃草の庵に花のちりつみければ

散る花の庵の上を吹くならば風入るまじく周圍かこはむ（山家集）

と詠んだかれの氣持にも、高野山に對する親炙の念が出てゐる。

こゝに眞言宗に、弘法大師以後の名僧と稱された覺鑁といふ高僧があつた。覺鑁が傳法院を高野の一角に建てゝ德望天下に普き時、西行は未だ廿歳前後であつたが、西行が出家後高野に登つた理由に、この覺鑁（興教大師）の影響を忘れることは出來まい。かつ當時の眞言宗を見るに、源信と時を同じうした深覺は、高野に餘生を送つて念佛を事としたと言はれ、下つて、明算、良禪は當時、高野山における淨土思想の普及者として名高い人々だつた。その門下には、一方源空の說を奉じた者すら出て來た。もつて覺鑁も甚だ時代の流を享け得てゐたことを推測出來るであらう。

西行は、仁安二年（五十歳の年）旅行を思ひ立つて加茂の御神に暫しの暇乞ひをしてから四國に向つた。それには崇德上皇の白峰御陵に詣でて

よしや君昔の玉の床とてもかゝらむ後は何にかはせむ（異本）

と斷魂を御慰め申しようとの目的と、今一つは眞言の開祖弘法大師の遺跡を遍歷してその遺德を心深く滲ましめたいといふ考との二つの目的があつたらしい。この旅は前後四五年もかゝつてゐる。

今よりは厭はじ命あればこそかゝる住居のあはれをも知れ（異本）

折しもあれ嬉しくも雪の埋むかな來籠りなんと思ふ山路を（異本）

とも歌つてゐるほど、その旅には樂みしい心持をつゞけてゆくことが出來た。

元來惠心の淨土敎の骨子は、往生極樂を求める樣々の方法の中から大菩提心、護三業、深信、至誠、常念佛及び願の六を抜出し大要を定めた點にある。この六事を敎理上から究明すれば樣々の問題を生ずるであらうが、深信・至誠・常念を以て念佛行善を果し、護三業にて止善を遂げ、大菩提心と願を以てその兩善を往生に轉向しようとするその行き方は、西行の修行法と一味相通ずる所ではなからうか。西行は、疑ひなく終生、大菩提心と願とを重んじて念佛をつゞけて行つてゐる。

西行はまた、兼好や芭蕉の樣に、神を崇敬した。殊に伊勢神宮には幾度か參詣したらしく、神宮の畔のそこやこゝに庵を結んでゐたこともある。

高野山を住み憂かれて後、伊勢國二見浦の山寺に侍りけるに大神宮の御山をば神路山と申す、大日の垂跡を思ひて詠み侍りける

深く入りて神路の奥を尋ぬれば又上もなき峰の松風（追而加書）

といふ様な詞書き通り、かれにも習合神道の信仰があつた。内宮は胎藏界の大日、その玉垣・水垣・荒垣は正に四重の曼陀羅であると思はれた。外宮は金剛界の大日、これまた安養淨土へ往生する導師と考へられた。

初春を隈なく照らす影を見て月にまづ知る御裳濯の岸（追而加書）

岩戸あけし天つ命の其の上（かみ）に櫻を誰か植ゑ始めけん（追而加書）

神風に心安くぞまかせつる櫻の宮の花の盛りを　　櫻の宮にて（追而加書）

かうした叙景的のもの以外に

何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ（山家集）

宮柱下つ岩根に敷き立てゝ露も曇らぬ日の御影かな（追而加書）

神路山月さやかなる甲斐ありて天の下をば照らすなりけり（追而加書）

榊葉に心をかけんゆふしでの思へば神も佛なりけり（追而加書）

の如き神を詠んだ觀念的の作もある。その間、神官と歌會を催したり、都の知るべに歌を送つたりしてゐる。弟子の蓮阿と二見が浦に庵を結んでゐたといふも、神宮と程近い地であつたためではあるまいか。「日本は神國だ、佛法の佛法となるは皆わが神の力、王法の王法となるも神力の擁護にある。一

天の主、萬乘の寶位と仰ぎ奉る天子は、恭くも伊勢大神の御流れであり、藤氏の長者天下の攝政といつかれ給ふも、春日明神の御末に當つてゐられる―といふ如き、極めてシムプルな尊崇の念と、信仰とを持つてゐた點も、あながち否定されまい。山家集中の神祇十首の如きも、套習的のものと言へばそれ迄であるが、かうした觀念的の詠そのものが却て、かれと尊神の心との關係を語つてゐるのではあるまいか。

その他に、歌神住吉に詣でての作、熊野の神を讃へた作などがあり、加茂の神はこれを特に尊崇してゐたものらしく、その附近に庵を結んでゐたこともあり、四國旅行に立つ時には、「かしこまるしでの淚のかゝるかな又いつかはと思ふ心に」と暇乞の歌を奉納さへしてゐる。

欣求淨土の觀念――わたくしは、これを基本としてこゝ迄、淨土宗、眞言宗、神道などが、西行と係はる所を述べて來た。更に、わたくしは、かれを往生極樂の信念を抱き得た修行者と斷じようと思ふ。

それは、自ら西方淨土への往生を意味する西行といふ法名を持ち、弟子にも西住といふ法名をつけしめた事實に徵しても、明確な批判であらう。歌の中にも、つぎの樣なものがある。

西を待つ心に藤のかけてこそ其の紫の雲を思はめ（山家集）

山の端に隠るゝ月を眺むれば我も心の西に入るかな（山家集）

西へ行く月をや他處に思ふらむ心に入らぬ人のためには（追而加書）

入日さす山のあなたは知らねども心をぞかねて送り置きつる（異本）

夢醒むる鐘の響に打ちそへて十度の御名を稱へつるかな（異本）

慈母の膝を求める嬰兒のやうにかれは西方を望む。「十度の御名を稱へつるかな」そこには少しの溷濁の念すら感ぜられぬ。しかし、今のわたくしに、なほ西行を以て、佛學における高德などゝ想像しかねる理由は、たゞわたくし一個の氣持にのみよるのであらうか。西行が覺鑁や法然の餘德をうけて、精神修行の末、大悟徹底した大出家と考へられないのは、わたくし一人の偏見であらうか。つねぐ\、世に僧正とか法師とか呼ばれる高僧よりも、西行の方が、より深い正覺者であり、人間的宗敎道の實現者と考へようとするわたくしの禮讃は、やはり迷ひの心からなのだらうか。

深草元政上人の西行傳の中には、つぎの樣な一句があるさうである。

西行嘗曰、和歌者禪定之修業也。又曰、我由二和歌一得二佛法一也

すべての物が佛敎的色彩と佛敎的影響をおびて來た時代、歌道を佛道の方便と考へる如きは、決して異とするに足りない。西行にあらずとも、國行朝臣とか永縁僧正なども、和歌に依て信仰を深め得たといふ逸話のあつた時代なのであるから。

しかし、この場合わたくしは、それを次の如く言ひたい。西行は、念佛修行者と同じやうに、歌を詠みながらも禪定の修業の出來た人であつたと。詠出した對象は、花月を出でなかつたかも知れないが、その刹那のたましひは、彌陀の名號を稱する心にも似て澄み切つてゐた。かつ、輝き出てゐた。

牡鹿鳴く小倉の山の裾近み唯獨りすむ我が心かな（山家集）

小倉山の山麓の淋しい淋しい草庵のくらし、しかし寂寥は、すでにかれを驅つて狂暴には導かない。「唯ひとりすむ我がこゝろかな」――それは、草庵の生活を嚙みしめて味はひ盡した純法悅の境ではあるまいか。

訪ふ人も思ひ絕えたる山里の寂しさ無くば住み憂からまし（異本）

人生の眞味は、遂に孤寥の中にある、寂寞の内にある。愛もこゝ迄深化されてこそ始めてその意味を發輝しうるであらう。「寂しさ無くば住みうからまし」――さうである。それは決して消極的態度から生み出されたものでは無い。崇高な肯定の賜物である。

吉野山花を長閑に見ましやは憂きが嬉しき我が身なりけり（山家集）

徒らに外に外にと求めた心は、たちまちに内化して行つた。以前、寂寥に大きい意味を見出だしたかれは、憂愁の中に、なほ一層の大きい法悦を知るやうになつた。

小山田の庵近く鳴く鹿の音に驚かされて驚かすかな（異本）

山家の生活は、こゝに極めて自然らしいものになつてきてゐる。動物と人間の差別は、すでにとり去られて、兩者は共に大自然の中に融合してしまつてゐる。そのリズムもそのまゝによく出てゐるではないか。

世を捨てゝ谷底に棲む人見よと峰の木の間を出づる月影（山家集）

朗々たる月光が、かつては煩惱の泉であつたこともあつた。しかし、月の光りは靜かに西行の心に近づいて來た。月は眞如の相を、谷底にすむ人の心の中にも示顯する。

波高き芦屋の沖を歸る舟の事無くて世を過ぎんと思ふ（山家集）

果敢なしな千年思ひし昔をも夢の中にて過ぎにける世は（山家集）

月にいかで昔の事を語らせて影に添ひつゝ立ちも離れじ（山家集）

これらは何とした靜寂に包まれた世界であらう。永遠の行脚者が、ふと振返つて積雪の野に殘した己

が足跡を眺めた刹那、詠嘆したそのまゝの聲のやうに。

待たれつる入相の鐘の音すなり明日もや生らば聞かんとすらむ（異本）

呉竹の今幾度か起き臥して庵の窓をあげおろすべき（山家集）

散ると見て又咲く花のにほひにも後れ先立つ例ありけり（異本）

いつか我昔の人と言はるべき重なる年を送り迎へて（山家集）

死は、萬人の上に殘りなく落ちくる事實、しかし秋枯れはてた木も春には芽吹く。人間の生死もすべて、そのやうに自然。

うら／＼と死なむずるなと思ひとけば心のやがてさぞと答ふる（山家集）

その折の蓬がもとの枕にもかくこそ虫の音にはむつれめ（異本）

跡忍ぶ人にさへ又別るべきその日をかねて知る涙かな（山家集）

これらの心境は決して厭世ではない。その涙も、世の悲哀のための涙ではない。生死の境を超越した物心一如の涅槃の世界に見る憂はしみであり涙である。

しかし猶ほ、こゝに佇立して、更に晩年の西行の心境を窺ひたい。源頼朝に向つて弓矢の道を說い

た六十九歳の西行、御裳濯歌合を後生大事に笈に入れて奥州下りを志した七十歳の西行、宮河歌合に定家の判を得て、弘川寺の病床にありながら頰笑んだ七十二歳の西行、また、定家からの「君はまづ浮世の夢はさめぬとも思ひあはせむ後の春秋」といふ歌に、「春秋を君思ひ出でば我は又月と花とを眺めおかなん」となほ花月への愛着を以て答へた西行、――その傑たるや決して親鸞、道元、日蓮の見せてくれた相ではなかつた。兩者の間にはかなりの距離がある。西行はかつて

浮かれ出づる心は身にも叶はねば如何なりとても如何にかはせむ（山家集）

捨てゝ後は紛れし方は覺えぬを心のみをば世にあらせける（山家集）

と、斷ち難き煩惱を赤裸に詠出し得る人であつた。また、

淺く出でし心の水や湛ふらむすみゆくまゝに深くなるかな（異本）

と、道心の逐年に深まりゆく心境（歌題による）を、詠出するかれでもあつた。否、

我無くば此の里人や秋深き露を袂にかけて忍ばむ（山家集）

とさへ、己れを慕うてやまない庵近くの里人を思うて、口荒む程のかれでもあつた。

しかも、日蓮の心境と離れた處に西行の毅然として立つ事を認めるわたくしが、西行僧都、西行上人などの敬稱を以てかれを呼ぶよりも、かれに對して歌人西行といふ呼名の如何にふさはしいかを思ふのは、わたくし一個の感じからであらうか。「渠や遂に自我を沒却して廣大なる自然と冥合すること能

はず、いつまでも己と世とを對立せしめて世は卽ち己なることを思はずーと西行を論じたのは、藤岡作太郎博士だつた。歌人西行と呼ぶわたくしながらも、この批判に接する時やはりそれを反暴しようとするそれも、結極わたくしの主觀からのみであらうか。

眞鸞、道元、日蓮――易行道をとる人、難行道を步む人、悟脫の峰に登るには様〻の路程があらう。わが西行の步み登つた地點、それは果してこれと同じい峰ではなかつたのだらうか。眞鸞と西行との立つた地點は、しかく隔つてゐるのだらうか。最後にわたくしは、潔くこれを否定するものである。(ここに、諸君が、折あらば西行の定家に歌判依賴について送つた書信を一讀されることを望んでおかう。)

建久元年、西行は七十三歲の年齡を迎へた。かれは前年來、河內の弘川寺に、その老衰の身を橫たへてゐた。その二月十六日、わが歌人西行は病軀つのつて、遂に眠るが如くその寺において遠逝した。かれは、かつて、

願はくは花の本にて春死なむその二月の望月の頃

といつたが、その期待どほり折しも寺庭には、花が音もなく一片二片ひら〳〵と散つて居つた。(もつとも歿年、寂した土地、これらについては異說があつて必ずしも一定してゐない)

兼　好

西行の寂した後鳥羽天皇の建久元年から、土御門・順德・仲恭・後堀河・四條・後嵯峨・後深草・龜山の八帝の御代を經た後宇多帝の時代、弘安六年（弘安五年說もある）のこと、治部少輔であつた卜部兼顯に、第三番目の男子が生れた。それが、わたくしのつねに敬愛してやまない兼好であつた。建久からこの弘安までは、約一百年間、僅か一世紀に相當する年數、しかも、その間における政治、宗敎、社會上における變化——それは實に甚大なものであつた。わが文化史上、大化改新以後見ることの出來ない程の大變動が、その時代を契機として起つて來て、舞臺は一廻轉したのである。

賴朝が六十六箇國の總追捕使となつたのは、あたかも西行の入寂した年であり、その翌々年には鎌倉幕府と稱する、千數百年來の政治組織に大革命が實現された。時に、京都には、關白兼實があつたが、われ〳〵は御堂關白の俤をすでにその何處に忍ぶことが出來るであらうか。平淸盛二十數年前武家の身として太政大臣の榮職を極め橫暴の限りを盡したけれど、その六波羅の役所は京洛の中にあつ

たゝめに、なほ、組織の上に大革新を遂げることを得なかつた。鎌倉において頼朝は薨じた。しかしそれがために幕府における動搖は寸分無かつたのみか、新武家政治の基礎はその後も日に月に固まつていつた。承久元年實朝の弑殺されると共に源氏將軍の後繼者は斷たれたけれども、かへつて、これも北條執權の基礎を强固にするに過ぎなかつた。承久の亂における皇室の御不詳事、後嵯峨法皇の兩統（持明院統及び大覺寺統）迭立の御遺詔の如き、何れとして貴族の勢力失墜に原因をもたないものはない。弘安四年（兼好の生年の前々年）は人も知る元兵の大襲來の年であるが、北條時宗の沈勇、部下の豪毅よく大軍を鏖殺したことは、まづ、貴族に對し武家の勝利を世人に確認せしめたものだと言つていゝ。兼好は、その間に、一右京大夫の孫、一治部少輔の子、一民部大輔の弟として生を享けたのである。かれの環境たる公家階級には、その以後永く灰色の空氣が纏ひつづけてゐた。

　かくて、政治組織の革新は、到るところ社會狀態の上に、大きい影響を印していつた。デモクラシーの思想の現代に跡づけたものとは性質は違ふけれど、新階級の勃興には到るところに價値轉換の悲劇が起つて來た。天台眞言的舊宗教が、時流に不適切なものとなりきつたのもその一事實である。武士道と稱せられる新規範が、武家及その他の階級にまで迎へられてきたこともその一結果である。さて淨土宗を開いた源空は、一時土佐に流されたけれども、欣求淨土の思想は、眞鸞に淨土眞宗を起さしめ、恰も野火の燃え移るやうに稱名の聲は、全國に普及していつた。榮西と道元の開祖となつた新

宗教禪宗兩派が、また武士の信仰を集めて鎌倉中心に流布して、わが民族の上に新精神を齎したことは特筆すべきことである。なほ、われ〳〵は、こゝに日蓮の出現を度外視することは出來ない。それは、漸く圓熟しかけて來た國民精神の曙光と見るべきものであつた。傳統を破壞し、習性を放棄し、たゞ己が信念の教示によつて、素手のまゝ生命力に透徹しようとする要求―それは貴族階級破滅の空氣の中に、先覺者のみ抱いたものであつたが、かくて遂にはそれがすべての階級に亘つて行つた。

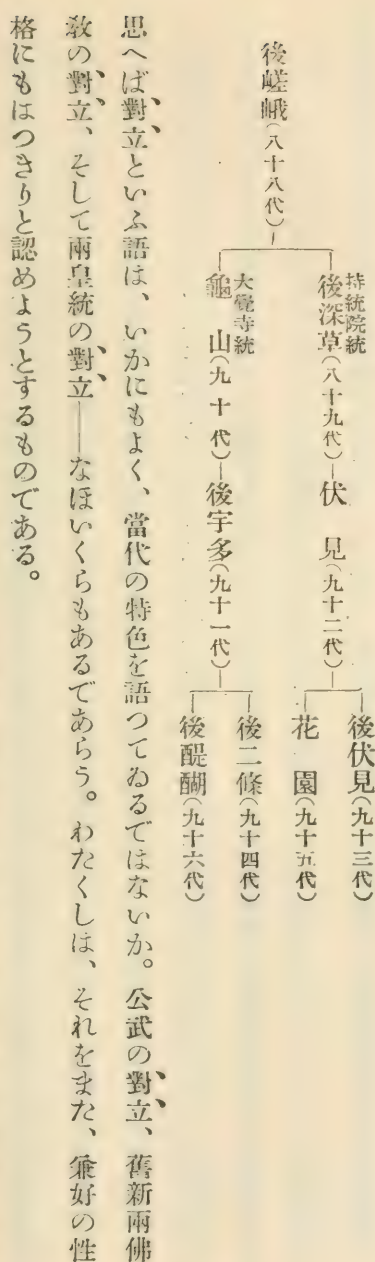
さて卜部兼好の家柄は、代々神祇職であつた。仲哀天皇の世、その先祖に龜卜に長けてゐた命があつて、始めてこの卜部氏といふ姓を賜はつたのである。紫式部のゐた時代、その子孫に卜部兼延といふ神祇伯があつた。この名の兼といふ文字は、帝の御諱である懷仁の、かねの訓音を賜はつたものである。それかため兼好といふやうに、その直系の者には盡く、兼といふ文字を使つて命名された。なほ、兼延以來、京都の吉田神社に關係してゐた結果、吉田兼好などと吉田氏を以て呼ばれるやうにもなつてゐた。要するに、兼好の祖父は次男であつたゝめに神祇大副の職はつげなかつたけれど兼好には宗教家の血液が入つてゐる。當時、神佛合體の巧みに實現された世であつたから、神官と雖も、佛學を窮めるものも多かつた。尊卑分脈を見ると、兼好の長兄は、慈遍大僧正と言ふ高德である。しかも神道に關する神風和記といふやうな著を、南朝の後村上天皇に撰進してゐる。何れにせよ、卜部家は、宗教竝びに文史に緣のある家系だと斷じてよい。母系に就ては、紫式部や西行の場合のやうに今

竝べる便がこゝに無い。

兼好の遺著としては、いふ迄もなく第一に徒然草、つぎに兼好法師集（類従二五六）また、顯基中納言記などをあげることが出來る。徒然草　と、かう思ひ見る時に、私には自ら、西行と芭蕉の姿が思ひ浮べられる。のみならず、多くの追慕者を現代に持つてゐる西行と芭蕉とに比して、あまりに投げ捨てられたまゝの兼好の著述に就て考へ及ばざるを得ない。否、徒然草は、山家集や芭蕉句集に比して、より廣く地方の書架に備へられてあるかも分らない。しかし、もし徒然草の行文が、國文の入門的のものでなかつたと假定したらどうだらう。私は、わづか廿歳前後の青年の手に、徒然草の載せられてあることは、しば〳〵認めるけれど、いまだ、成年の人の徒然草を座右に備へて愛讀する者を餘り耳にしない。かの政界の後藤新平男が、徒然草を愛讀書の中に數へてゐたのさへ、私には却てある奇異に感ぜさせられる程であつた。しかし、徒然草は到底、青年輩に玩味され得るごとき隨筆ではないのである。兼好が、西行や芭蕉と並べられて、追慕されないといふことには、無論他に充分の理由もある。しかし、わたくしはとりあへず、成年の人々に再度この徒然草の味讀を御すゝめしたい。兼好の遺作は、はたして西行の歌や、芭蕉の句に比して劣つてゐるだらうか、はたまた、兼好の人格は、西行・芭蕉に比して低劣であるだらうか――それをその機會に再考して頂きたいのである。

兼好生誕の翌年には、時宗が卒して、後には、僅か十四歳の貞時が執權を繼がねばならなかつた。この以後、北條氏の施政も昔日の俤を失つて來たけれど、一方、朝廷においても兩統迭立の定めが設けられ、この兩統間の御內訌は、朝廷の威力をいよ／＼衰へしめた。つぎにこれを御系圖で表はして見ると、

- 後嵯峨（八十八代）
  - 持明院統 後深草（八十九代）— 伏見（九十二代）
    - 後伏見（九十三代）
    - 花園（九十五代）
  - 大覺寺統 龜山（九十代）— 後宇多（九十一代）
    - 後二條（九十四代）
    - 後醍醐（九十六代）

思へば對立といふ語は、いかにもよく、當代の特色を語つてゐるではないか。公武の對立、舊新兩佛敎の對立、そして兩皇統の對立——なほいくらもあるであらう。わたくしは、それをまた、兼好の性格にもはつきりと認めようとするものである。

あたかも、兼好六歳の時、（正應元年）には、大覺寺統の後宇多帝の御後繼として、持明院統の伏見天皇が御卽位されてゐる。當時の朝廷は多端であつた。その年の十月の如き、鎌倉の親王將軍、惟康親王が、貞時のために逐はれて京都に歸り給ひ、翌年三月には、淺原爲賴が徒らに禁中に亂入して來た。更に、その翌々年には興福寺の僧徒が神木を奉じて嗷訴するといふやうな事件迄勃發した。これ

を以て世の亂脉思ふべきであるが、兼好は、その後程遠からず、一瀧口として宮中に奉仕する身となつたのである。兼好が一生における出發點は、弓箭を帶する一武士としてゞあつたこと、かの西行の運命に似てゐる。

當時二條河原に、つぎの樣な時世を摘發した落首があつた。

このころ都に　はやるもの。夜討、強盜、謀綸旨。召人、早馬、虛騷動。生頸、還俗、自由出家。俄大名、迷者。安堵、恩賞、虛軍。本領はなるゝ訴訟人。文書入れたる細葛。追從、讒人、禪律僧。下剋上する成出者。器用の堪否沙汰もなく。漏るゝ人なき決斷所、着つけぬ冠、上の衣。持ちもならはぬ笏持ちて。內裡まじはり珍らしや。賢者がほなる傳奏は。我も〳〵と見ゆれども。巧なりける詐は。愚なるにや劣るらん。田舍美物に飽きみちて。俎板烏帽子ゆがめつゝ。氣色めきたる京侍。たそがれ時に成りぬれば。浮かれてありく色好。いくそばくぞや數しれず。內裏をがみと名付けたる。人の妻鞆のうかれめは。よその見るめも心地あし。（下略）

この引用は、これだけでは未だその季半にも及んでゐないけれど、一句一句味はつて見ると、實に巧く時代相を把んで俎上にしてゐる。兼好時代の背景が、手にとるやうに出てゐるではないか。

しかし、自ら俵藤太秀鄕の九代目の子孫を以て任じ、台記の筆者をして、以二重代勇士一仕二法皇一と書

かしめた西行とかれとの間には、大分の隔りがあつた。傳へによれば、西行は廿歳餘で、檢非違使の要職をすでに法皇から與へられようとしたのであつたのに、わが兼好は廿七歳の時、兄と共に神詠部類十五卷を編した功勞を以て、漸く左兵衛尉をかち得たのである。時世は、武力を要求した。しかし、武人としての兼好の前半生は、極めて平凡で、あながちに花々しいものではなかつたらしい。

人の才能は、書明らかにして、聖の敎を知れるを第一とす。次には、手書く事、旨とする事は無くとも是を習ふべし。學問に便りあらむ爲めなり。」次に醫術を習ふべし。身を養ひ人を助け、忠孝の務めも醫にあらずば有るべからず。」次に弓射、馬に乘る事、六藝に出せり。必ず是を伺ふべし。文武醫の道、まことに缺けては有るべからず。これを學ばむをば、徒らなる人と云ふべからず。」次に、食は人の天なり。よく味を調へ知れる人、大なる德とすべし。」次に細工、萬づに要多し。」この外の事ども、多能は君子の恥づる所なり。詩歌に巧に、絲竹に妙なるは、幽玄の道、君臣これを重くすといへども、今の世に、これを以ちて世を治むる事、漸く愚かなるに似たり。金はすぐれたれども、鐵の益多きに如かざるが如し（百廿二段）

これは、徒然草中の一節で、また徒然草中にあつては、武力を謳歌した唯一の文である。兼好の本心が武力を讚美し得なかつたことは、何れの點からも立證出來るけれど、かく世は亂れに亂れ、皇室は兩派に分れ給ふて、互に干戈を交へられる世相を眼前にしては、かれにも、武力が最後の解決者で

はないかと思ひ見る刹那があつたのである。

今の世に、これ(文政)を以ちて世を治むる事、漸く愚かなるに似たりとは、兼好の方寸に閃いた瞬間的の迷蒙であつたかも知れないが、そこに糸の綻びの如くにも亂れた時代をまた思はせられざるを得ない。

永仁六年、兼好の十六歳の時、伏見天皇は、皇子なる後伏見天皇に御譲位あつた。かく持明院統が御重位し給ふた事は、大覺寺統である宇多上皇の御憤りを買はずにはすまなかつた。かくて上皇が關東を御詰責し給うた結果、御伏見天皇は、御在位わづか四年未滿にして御二條天皇(上皇の皇子持明院統後深草上皇の皇女遊義門院の出)に御譲位をなし給ふたのである。この御代の間ひきつゞいて、上皇は院政を執り給うた。時の人臣たる者、一天萬乘の君に對し奉り、尊崇の念に變りある筈はないとはいへ、かくの如き不自然な御譲位、迭立に、己が心の暗くなりゆくを禁じ得なかつたことも無理ではあるまい。その後、鎌倉幕府の基礎も、やゝ崩壞の兆を現はして、公武の間に漲る暗雲は、いよ〳〵濃厚になり到つた。

兼好の心には、時に、太刀のはをいよ〳〵利ぐべき秋であると、自ら、鼓舞激勵する如き省慮も閃めたではあらうが、かれの本性は、また、しば〳〵その中心點から逸しがちであつた。兼好の傳記者は、かれが左兵衛尉であつた時、宮中萩戸附近において怪鳥を射止めたといふ、かの義清が郎等のことで

源爲義に喰つてかゝつたといふ傳說以上、剛膽勇壯な逸話を傳へてくれてゐる。思へば、武家興起の世となつて百數十年を經した時代、一武人として朝廷に仕侍した兼好に、この位の武勇譚があつたとして、別に賞すべきことでもあるまい。しかし、かれの夢寐の間にも通つてきた世界は、泰平安逸であり、風流韻事を能とし、灯影洩れる彼方の殿舍には琴曲の調べがきかれ、此方の局には、雙六・圍碁を遊ぶ女房達のあるが如き延喜・天曆の古ではなかつたであらうか。

かれの長兄は、何故、出家して菩提道に入つたかといふことはこゝに分らない、しかし、兄弟ことごとく武事に疎く文筆に緣があつて風雅の世界に入り得たといふことだけは言ひ得られる。

かく、兼好の胸に、文武の對立がまづ最初に生じたのであつた。

われ〳〵は、西行の生立ちを考へる時、パトロンとしての後鳥羽上皇を忘れることは出來ない。詩歌管絃の風流事が、しば〳〵弄れた鳥羽の離宮を度外視することは出來ない。西行の詩心は、恰も和らかい土と暖かい水とを與へられた若草の如く、その雰圍氣の中で、すく〳〵と生長し得たのであつた。

兼好に、後宇多上皇のいませられたことは、西行に後鳥羽上皇のあらせられた關係にやゝ近い。後宇多上皇は後三條天皇以來の明君と仰がれ、父帝、龜山天皇に劣らず宏覽博識、佛典の奥義を極めさ

せられ、かつ後鳥羽帝の如く殊に韻事に御趣味を有せられ給うた。新後撰集以下、勅撰和歌集に上皇の御製の傳へられるもの、實に百三十六首に及んでゐる。後伏見天皇の、後二條天皇に御讓位あると同時に、院內に御政治を執り給ひ、更に持明院統の花園天皇に繼いで後宇多上皇の第二皇子、後醍醐天皇の御卽位と共に再び院政を布かれ、前後三度に亘つて、上皇は朝政を見そなはし給うた。もつとも、德治二年（兼好廿五歲）上皇は御落飾あつたのでその後は法皇としてゞはあつたけれど。

　かくて兼好は、後宇多上皇御院政中は、六位藏人（？）あるひは、北面として上皇に御近侍申し上げた。兼好は、當時、廿歲を出たばかりであり、上皇の方は、兼好より十六歲の御年長にましました。そこで御英明な上皇は、兼好のもつ資才を觀取されて御採用なつたのであらう。しかし、兼好が若くして上皇の御愛顧を被つて幸運であつたといふ傳紀者の說に、私は首肯しかねるのである。かれは、推察されてゐる程に寵兒では無かつたのではあるまいか。

　さりながら徒然草を讀むに當つて、兼好が院に御仕へ申した時代の事の髣髴される段が少なくない。それは、兼好一生の思ひ出を作つた時代であり、また、兼好にとつて最も花やかな日であつたらうと思はれる。

　　後宇多院より、よめる歌どもめされ侍りけるに奉るとて

　　　僧正道我に申しつかはし侍りける

人知れず朽果てぬべき言の葉の天つ空まで風にちるらん

と續千載集編纂のために、歌を上皇に奉つたこともあつたのである。かれがかゝる間に文學的素養を積みえたことは、容易に首肯されよう。

和歌こそ、なほをかしき物なれ。あやしの賤、山賤の所作も言ひ出づれば、おもしろく、怖ろしき猪も「臥猪の床」と云へば、優しくなりぬ。

此の頃の歌は、一節をかしく言ひ叶へたりと見ゆるはあれど、古き歌どもの樣に、如何にぞや。言葉の外にあはれに、けしき覺ゆるは無し。

貫之が「糸に縒る物ならなくに」と言へるは、古今集の中の歌屑とかや言傳へけれど、今の世の人の詠みぬべき言柄とは見えず。其の世の歌には姿、詞この類のみ多し。此の歌に限りて、かく言ひ立てられたるも知り難し。（中略）

歌の道のみ、古に變らぬなどいふ事もあれど、いさや今も詠み合へる同じ詞、歌枕も、昔の人の詠めるは更に同じものにあらず。安く、素直にして姿も清げに、あはれも深く見ゆ（十四段）

さて兼好は、徒然草の中で、かく時代の歌風について批難の辭を並べてゐる。兼好が、和歌において、頓阿・淨辨・慶雲と共に、四天王の榮譽を受けてゐたことは皆人の知る通りで、かれが人々の賞讚

の的となつてゐたほどもそれで分るであらう。しかし、まづこゝに疑惑を抱かされる點は、徒然草中にかれの詠歌の無いことである。いかに徒然草、着筆の態度が「東關紀行」の如き紀行文や「讃岐典侍日記」の如き日記文とは異なるにせよ、二百四十餘段の間に自作の歌が多少とも挿入さるべきではあるまいか。なほ、徒然草の言葉が多く人生批評の上に費やされたにせよ。歌論義、歌學の尊重された時代の和歌四天王の一人として、もつと筆觸が詠歌の方面にわれしらず滑つて行くべきではあるまいか。なほまた、兼好がこの隨筆を物した時代は、かれの齡も五十歳に近く、すでに韻律的情緒の波の影を潜めた時代とはいへ、かれが當時の和歌に大きい生命を認めてゐたのなら、追憶的にももつと多く歌話を持ち出すのが當然ではあるまいか。しかるに書中には、只、百卅七段に歌題について數行を費してゐるのみである。兼好法師集の中に、傳へられたかれの作は二百八十餘首に及ぶ。それは、頓阿の草菴集の如く立派な家集の體裁をなしてはゐないが、一家の集としてそれでも歌數の少ない方ではない。慶運の集にしろ、寂然の集にしろ、歌數においては兼好法師集と大同小異である。家集以外の遺詠はもちろん問題外としてゝしかし、勅撰集にとられたものは六集にわたり計十六首にすぎないのは何故であるか。そこでかれの詠作の價値について、私は、それを徒然草に比して餘りの不出來であつたと、先づ斷じたいのである。かれの歌は、環境のためだとしても、あまり平淡であつた。徒然草の文は、多く枯淡なリズムを持つてはゐるけれど、折にその平野の端に突兀としか稜指が現はれく

る。また、時に清水迸る流れも見えてくる。そこには、變化もあれば、抑揚もある。徒然草が、意味内容を別にして妙趣を湛へ、讀者を巧に誘つてゆく魅力のある所以は、やはりこのリズムのためだと言つてよい。然らば兼好の若い時代の歌に、またそれに相當したリズムが出づべきである。しかもそれが無い。兼好の廿二歳の時（嘉元二年）大覺寺派によつて新後撰集が撰進されたが、兼好の作はいまだ一首もそれにとられなかつた。かれが卅七歳の時、爲世の撰進した續千載集にわづか一首だけ選入された。義清の青年歌人としてその譽高かつたものと比して、それは餘りの相違ではないか。これについて、わたくしはつぎの二ヶ條をその理由としてあげておきたい。

一、新古今調において行きつまつた歌壇は、傳統を墨守するのみで未だ活路を見出さなかつた上に、一方擬古派が徒らに高稱されてゐた。

一、かれの個性は、歌人としてよりも思索家、宗教家として展開していつた。

先づ、前者の方から所見を述べて行かう。

藝術的であり、技巧的であり、保守的であることは、前述したやうに新古今調の遺していつた特色であつた。藝術的であつたことには、現實生活の外廓に氣分を釀出せしめ、それに陶酔を求めるに急で、所詮、詠歌に於ける新鮮味は失なはれざるを得なかつた。技巧的であつたことは、詩歌といふものを、

とかくに皮相的のものとし、内生命の強烈な表示となさしめず、萎縮した不具的のものに墮落せしめずにはおかなかつた。保守的といふことは、說明する迄もなく詩歌のすなほな發達を阻止して、いたづらに[illegible]歌を尊重し、放恣で自由な表現を抑壓せざるを得なかつたのである。藤原定家の三人の孫、爲氏・爲教・爲相が、分裂して和歌の三師範家（爲氏――二條家、爲教――京極家、爲相――冷泉家）を立てたのにも、他に理由はあるが、歌風の行きつまつた事實が大原因をなしてゐる。しかも、二條家の歌人は大覺寺統に、京極家の歌人は持明院統に各〻御關係申し上げ、二條家の手で撰進した勅撰集（續拾遺集・新後撰集・續千載・續後拾遺集等）には、京極家の歌人の作を殆んど採らず、反對に、京極家の手で撰進乃至、校合された勅撰集（玉葉集・風雅集）には、二條家の歌人の作を載せないといふ措置に到つては、餘りに卑屈な態度だと言はずには居られない。

　京極家の歌風の、やゝ斬新にして氣魄の存するに比して、二條家の態度は、俊成・定家の歌風及遺著の正しい繼承者を以て自任し、最も保守的であつた。後宇多上皇は、かゝる二條家師範の爲世に學ばれたのであり、兼好は二條家の歌風の中に育ぐまれたのである。かつ、その二條家の形勢が、やがて、京極家を壓迫してしまつたことは言ふまでもない。例の四天王はすべて二條派であり、源有房の如きも二條爲世の直接間接の弟子であつた。こゝで今少しく、後宇多上皇・爲世・頓阿等の歌調を回顧して見よう。「此の頃の歌は、一節をかしく言ひ叶へたりと見ゆるはあれど、古き歌どもの樣に、如何にぞ

や。言葉の外にあはれに、けしき覺ゆるは無し」これ晩年におけるわが兼好の和歌を評した言であつた。しかし、この批評は、特に兼好の徒然草着筆時代のみでなく、その時代に廣く通じて見るべき評言であらう。「をかしく言ひ叶ふ」といふことは、技巧の妙味をさし、「言葉の外に、あはれに、けしき覺ゆるなし」とは、餘情の存せないこと、言ひ換へると、詠歌が生活と隔離して形式的に墮した點を摘發したのである。歌は、生活の中から出でゝこそ、誦する者を動かす力も出で來べきである。三代集時代の空氣が、南北朝の環境と甚だ遠いものであることは申すまでもない。然るに、之を省ることなしに、擬三代集歌を諷詠することは、いかにも疎い話ではないか。單なる三代風を模倣した歌から、三代集から與へられる如き生命觀が與へられよう筈がない。尤も、延喜・天暦時代の生活氣分を研究の結果、感得した屈指の歌人――例へば頓阿の如き人は、假令古今調との一致は免れない迄も、平淡無味の詩界を開拓して、後世の追慕を受けてゐる。それは、歌壇における禪的世界であり、耽美的・幽玄的で艶な新古今調とは趣を異にしてゐるとはいへ、技巧的・套習的の上に一致があつて、やはりそこに超生活的の點があるといふことは斷言して憚らない。兼好が、「此頃の歌は、一節をかしく言ひ叶へたりと見ゆるはあれど」と評したのは、この技巧的方面を認めたのであつたが、しかも「氣色覺ゆるは無し」とこゝに一面またこれを批難せざるを得なかつたのである。さりとて、この理想は容易に兼好によつて實現され得なかつた。兼好は、西行の如く、生得の歌人でなく、むしろ批評家であつたのである。

さて後宇多天皇の御製は、すべてゞ二百卅餘首の外に長歌が一首傳はつてゐる。多くの歌人の中に伍しさすが逸色のある御作である。爲世が御指導申し上げたのに係らず、京極家的なのも面白い。

河霞といふことをよませ給うける

音はしていざよふ浪もかすみけり八十うぢ川の春の曙(新後撰集)

梅を

きさらぎやなほ風寒き袖の上に雪まぜにちる梅の初花(風雅集)

花を

山櫻さかりになれば枝かはす松の常磐もみえぬ春かな(續現葉集)

題しらず

春くれば雪とも見えず大空の霞をわけて花ぞちりくる(新後撰集)

花をよませ給うける

なべて世の春の心はのどけきに移ろひやすく花のちるらむ(玉葉集)

これらを見るに、何れも調子が高い。描線が太い。兼好は、どうして、かうした歌風の影響すら受け得なかつたのであらうか。わたくしは、つぎに、かれの詠歌の實際について更に研究をして見よう。

現存の兼好法師集には、青年時代のものとして年代の明瞭なものは傳はつてゐない。それは、卅歳以後の作、いな、四五十歳以後の歌の集と見ても不當ではない。このことは、兼好の歌を研究する上に、甚だ以て、遺憾としなければならない點である。

武陵雑筆云、古人の評に兼好は文ばかりにては名人なり。いらざる歌にてあしきとなり云々。

と、嘉良喜隨筆の中に幸允が述べてゐるさうである。「いらざる歌」とは、それにしてもあまりに酷評であらう。かれの歌にも、多少の佳作はある。これらの遺詠をとほして、わたくしは、次に出來るだけ徒然草の作者の肺腑に接して行かなければならぬ。

兼好の歌風には、およそ、三種の別が立て得られる。それを、極く大まかに言へば、二條家風・新古今調および古今調（西行歌風の一面）の三方面とすることが出來る。

さて、二條家風に屬するものは、縁語懸詞の小さい技巧に捕はれたもの、宗教的題詠的の故に歌調の著しくすくんでゐるもの、及び一般に散文的調子のものが多い。この種に屬するものが全體の半數をも超えてゐるが、多くは拙作である。

世の中危ふき樣に聞えしも、程無く立ち直りにしかば中納言殿に

世々を經て治むる家の風なれば暫しぞ騒ぐ和歌の浦浪

先づ、この作は、大覺寺統の方々が南都におち給ひ、二條家の基礎も一時危險に頻したけれど、事故

無く終つた時の祝意を表したものである、しかし、二條派が次の如き作風をのみ生むものであつたら、必ずしもその普及をわたくしは喜びたくない。

いかだを

大井河つなぐ筏もある物をうきてわが身の寄る方ぞなき

五百弟子品の心を

あま衣なれにし友にめぐりあひてみぬめの浦の玉藻をぞかる

深夜夏月

更くる間も有りけるものを寢ながら明けぬと聞きし夏の月影

世の中思ひあくがるゝ頃、山里に稻刈るを見て

よの中をあき田かる迄なりぬれば露もわが身もをき所なし

何れの歌も、あまり言葉の技巧に捕はれすぎてゐるではないか。それがあまりに嫌味を與へてくれる。その他に、なほ寄顏戀・寄淵戀・寄野戀・寄橋戀等、題詠的戀歌が、はなはだ多い。また物名の作などもある。しかし、これらの作に、立派なものがあらう筈が無い。

爲兼の歌には、一般的に、主觀的傾向のものが多い。そして客觀的・敍景的のものが、きはめて少ない。爲兼は、後に述べる樣に、鋭利な觀察眼を持つてゐる、さりながら、かれは、觀察の結果をそのまゝ

に投捨てゝおき得なかつた。どうしても、主觀で染めあげせずには居られない性分を持つてゐた。この傾向は、頓阿や淨辨などにも見られるものである。そこには後宇多上皇の御製に伺ひ得られる如き彈力性が、まるで無い。

石山にまうづとて曙に逢坂をこえしに

雲の色に分れもゆくかあふ坂の關路の花の曙の空

嵐の山の花をみて

大井河下す筏師早き瀬にあかでや花の陰を過らん

侍從中納言殿にて人々題をさぐりて歌よみ侍しに、木殘雪。

山深み梢に雲や殘るらん日陰に落つる枝の下露

風前夏草

うち靡く青葉涼しく夏の日のかげろふまゝの風立ちぬなり

五月雨

最上川早くぞ優る天雲の上れば下る五月雨の頃

しかし、これらは、差し當つて難のない方である。相當にリズムも出てゐるし、しつかりした詠振り

でゝある。思へば西行の自然を詠出した歌も主觀的着色を免れ得なかつたのであるが、しかし、その主觀たるや一見、西行をすぐ髣髴せしめる極めて個性的のものであつた。リズムにも闊達自在の西行の姿が溢れ出てゐた。兼好の歌人としての生命が、西行に到底匹敵されないのはこの點である。兼好の歌に表はされた主觀は、陳腐にすぎてゐる。紫式部は、小說家であつた。西行は純歌人であつた。かくてわが兼好は、隨筆家であつたことを、こゝにもわれ／＼は思はざるを得ないのである。

　さりながら、兼好は當時四大歌人の一人と數へられたに就ては理由がなければならぬ。これ迄、かれの短所をのみ指的して來たわたくしも、またかれの晩年、圓熟した時代の詠吟に接すると、自ら頭をさげざるを得なくなる。そこには、やつぱり西行の長所と符合してゐるあるものがある。それは古今調と概括すべきであるが、すべてが、ありのまゝの生活を、まじめに歌ひ得たものであつた。しかも、そこに萬斤の力が籠つてゐる。そのこと／＼くは、詞書きを見ても分る樣に、すべて五十歲前後の作とのみ言つていゝ。

　　その頃、やむごとなき人の、訪らひおはしたるに

訪はれぬる露の命はつれなくてもろきは袖の涙なりけり

　　冬の夜、荒れたる所の簀子に尻かけて、木高き松の木の間より、

　隈なく洩りたる月を見て、あかつき迄物語りし侍ける人に

思ひ出づや軒の荵に霜さえて松の葉分の月を見し夜は

たのもしげなることといひて、立ち別るゝ人に

はかなしや命も人の言の葉も頼まれぬ世を頼む我かは

さだめがたく、思ひ亂るゝことの多きを

あらましも昨日に今日は變る哉思ひ定めぬ世にし住まへば

山　家

山風のたまらぬ床も住まれけり身を習はしの庵結びつゝ

すべてに何となく、床しい詠振りがあるではないか。素直な歌ひ振りがあるではないか。なほ、この他に光つたかれの所詠は二三十首ばかりあるが、それは本論の中に隨時挾み得るであらう。なほ、徒然草に、

「降れ〳〵粉雪、たんばの粉雪」といふ事、米搗き、篩ひたるに似たれば、粉雪といふ。「溜れ粉雪」といふべきを、誤りて「丹波の」とは云ふなり（下略）　　百八十二段

と、言ふ樣な童謠に關した話も出てゐる。これらにも、歌謠に對する兼好の觀察の態度が覗はれて面白いけれど、それもかれがいかにも些細な點に、よくその注意を向けたことを語るのみであらう。惜しいかな、そこに情熱の奔放の跡を辿りうる性質のものはない。かれには嫡妻と稱すべきものもなか

つた。されば、かの西行の如く、年若く家庭の幸福にまどろむことも許されなかつたとはいへ、あまりにかれの青年時代は、平板で凡庸に過ぎてしまつたのではあるまいか。それは、理知的なかれの性格を語ると共に、歌人的天賦の乏しい事實をも示すものである。

文の血を受けながら、武士となつた兼好は、一度は矛と盾を手にしたものゝやがて文界の人に立返らなければならなかつた。かれ兼好は、和書や漢書を渉獵してゐる間に、いつか幻想に耽る子となつてしまつたのである。かれには、矢叫びの絶えしない間にも、王朝の幻がまづ先きに立つた。海道を武家が往還するに急がしい世にも、六朝の盛時が忍ばれた。わが文學者に、兼好ほどよく延喜・天暦時代の雰圍氣を感得した人は少なからう。かれは、徒然草中に、源氏物語についてはわづか一段、枕草子については三段ほど、筆を觸れしめたに過ぎないが、徒然草全篇を歷してゐる描寫の妙趣は、何物より王朝憧憬の心を傍證してくれる。第十九段の「をりふしの移り代るこそ物事にあはれなれ云々」の一段を繙讀してゆくと「言ひ續くれば、皆、源氏物語・枕草紙などに、こと古りたれど、同じ事又今更に言はじとにもあらず云々」と、秋と冬との叙景の間に、唐突な挿言が出てくる。熟考すればその場合における、かれの心理もよく諒解されるではないか。思ふにかれは、この一文を物しながらも、源氏物語や枕草紙中の自然描寫が、あたかも次々にと寄せ來る波のやうに記憶によつて來たのであらう。

そして、かれ自身いつか御堂關白時代の人の心になりゆかうとしたのではあるまいか。しかし、野卑な武家時代の町民、武骨な下侍などの亂棒な口遣ひは、程もなくかれの甘夢を破らずには居らなかつた。かれは、王朝と現實と、そのあまりにも懸け隔つた事實を見せつけられた時、尠からず驚いた。かくてかれは、いよ〳〵、分秒を惜しんで甘美な追憶と憧憬の中に、すべてを忘れ、王朝の夢に生きようと努めるのであつた。

ひとり、燈火のもとに、文をひろげて、見ぬ世の人を友とする事こそ、こよなう慰さむわざなれ。文は文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子の言葉、南華の篇。此の國の博士どもの書ける物も古へのはあはれなる事多かり――十三段

しづかに思へば、萬づ過ぎにし方の戀しさのみぞ、せん方無き――廿九段

此の短かい言葉にも、兼好の書を愛讀する性癖、考古癖が、いかにもよく躍如として出てゐるではないか。かれは貪るやうに、古酒を傾けてその陶醉を貪つた。四月の賀茂ノ大祭の時、飾つた葵の葉が、どうかすると秋迄、簾などにそのまゝ殘つてゐることがある。その枯葵による祭の追懷――そのほんの些細な事にさへ、兼好は殊の外の喜びを見出した（百卅八段）況んや、末世とは言ひながら、當時の九重の奥や、神祭し給ふ齋宮の用語が、昔の習ひに從つて、神さびてめでたいのを、兼好は無上に樂母しく思ふのでもあつた。（廿三段廿四段）「文の言葉などぞ、昔の反古どもはいみじき。たゞいふ詞も、

口惜しうこそなりもてゆくなれ（廿二段）と、かれの鋭鋒は、現代語の野卑な點の上にも向けられる。すべてかれは、紫式部と同じく、「世づく」といふ事を批難してゐる。かれには、流行を追うて世間流になることが何より不快だつた。（廿三段）例へば、木立も物古らず、殊更らしい庭樹など植ゑた「今めかしく、きらゝかな」建築など、かれの最も擯斥したもので、これを「見るも苦しくいと侘し」とさへ言つてゐる。（十段）いかに當時の名工が美しい調度を作り出そうとも、かれにおいてそれは、到底時代のついた古代の器の美に比較すべくもなかつたのである。（廿二段）

何事も、古き世のみぞ慕はしき。今樣は無下に卑しくこそなりゆくめれ。（廿二段）

從つて、そこに、

改めて益なき事は、改めぬをよしとするなり。（百廿七段）

といふ結論が見出だされてくる。この二節の言葉こそ、かれの尚古癖、懷古的の性情を、何物より白證するものである。かれは、所謂ハイカラなるものを心から嫌つてゐた。

こゝに、新と古との第二の對立がかれの胸裏に窺はれる。

さて、復古思想や反動思想などは、ある意味で公家精神の基調だと言つていい。徒然草二百四十餘段の中に、四十段近くにも亘つて、有職故實に關した敘述がある。これは、讀者のかならず氣付く點であり、同時に不審にする一事項だらうと思ふ。北山抄・西宮記（百九十六段）延喜式（百九十七段）律

令（百八十三段）政治要略（百九十八段）など、到る所に、古い斯學の書名が、麗々しく出てくる。しかしこれも、時代の一思想であり、同時にまた、かれの尚古、考古の性癖のためだとすれば、ほゞそれが會得されるだらう。先きの「降れ／＼粉雪」の童謡においても、「たんば」の原詞が「溜れ」であつたことを極めただけでは、なほ、滿足されず、「讃岐典侍日記」によつて、この歌の、すでに宮中にさへ謠はれてゐたといふ考證を附け加へずには居られなかつた心理がやはりそれである。しかもそれには、懷舊的情味を超えて、すでに學究のための研究となり切つた程度のものが多い。しかし、かれが、單なる骨董癖を以て、すたれた有職をかつぎ出して時代の人に強制しようとしなかつた點だけは、辯護の必要があらう。かれは、必ずしも、盲目的に古習に泥みはしなかつた。さうした場合にも、かれの觀照性は働いて、古法の當と不當とを明瞭に選りわけてゐるのである。

例へば、急場に當つては、光親卿が供御を食ひちらしたまゝ、でその衝重を御簾の中に差し入れて退出したとか（四十八段）下毛野武勝が、雉の進物を持參する仕方を述べる話の中にある、雉の羽の一部を先方の御所の欄干の所に落すといふ如き習ひ（六十六段）又、御前の火鉢に、火をおく時は、火箸にて挾まず、土器から直ちに移せよといふ戒（二百十三段）の如き、何れも無意味な慣例ではない。それは多數の人の樣々な經驗の結晶して成立したものである。もつとも、多くの慣習の中には、全然根柢のない盲從的のものも交つてゐる。兼好は、これらに就ては誠に無遠慮な酷評を浴さしてゐる。六十三段に

おいて、後七日の御修法に、武士を警護せしめるに至つた例を難じてゐるごときその一例にすぎない。

さらに、またかれは、秘事口傳についても、これを無遠慮に摘發した。和歌の秘傳などに對する態度がそれである。われ〳〵は、そこに、いよ〳〵兼好が單純な因襲の人でないことを知り得るのである。すでに前掲の十三段の引用においても分るやうに、兼好の書籍の渉獵は、多く漢學のものに及んでゐた。これは、紫式部に近く、西行に遠いかれの性格だと見ることが出來る。

萬づの事は、月見るこそ慰むものなれ。

ある人の「月ばかり面白き物はあらじ」と云ひしに、又ひとり「露こそ、あはれなれ」と諍ひしこそをかしけれ。折に觸れば何かはあはれならざらん。月花は更なり。風のみこそ人に心はつくめれ。岩に碎けて淸く流るゝ水の景色にこそ時をも分かずめでたけれ。

沅湘日夜東に流れ去る、愁人のために止まる事暫らくもせず。

と云へる詩を見侍しこそ、あはれなりしか。

嵇康も山澤に遊びて魚鳥を見れば、心たのしぶと云へり。人遠く水草淸き所にさまよひありきたるばかり、心慰さむ事はあらじ　二十一段

文選・白氏文集・三體詩などの句の聯想が、胸を突いて出てくるところ、源氏物語や枕草紙の場合に劣らない。しかも、沅湘日夜や嵇康山澤云々の句は、兼好の趣味をぴつたりとよく示してくれてゐるて

はないか。それは、卅段の「人なきあとばかり悲しきはなし」の最後に、「さるは、後訪ふ業も絶えぬれば、何れの人と名をだにしらず、年々の春の草のみぞ、心あらん人は哀れと見るべきを、はては、嵐に咽びし松も千歳を待たで薪に碎かれ、古墳は鋤かれて田となりぬ。その形だに無くなりぬるぞ悲しき」と、その中に文集と文選を借り來つた巧妙な筆致と好一對をなしてゐる。その他、徒然草中には、漢書（百七十五段）三國史（百卅九段）等史書の故事を適宜に案配し、曲禮（百卅一段）書經、老子（百卅段）の章句を巧みに引用して、文に力あらしめてゐるものも尠少でなく、論語に關しても、七段に亘つて見えてゐる。もつてかれが如何に、故事故語を使驅するに長けてゐたかを知り得よう。さらに、かれの行文の神妙さに思ひ至れば、それには暫し筆をすてゝ嘆賞の聲を發せしむるものが多い。

惟ふに、兼好は、源氏物語・枕草子を若い時代に、限なく恣讀した人ではなからうか。かれは、若くしてかの西行の樣に、言々句々盡く詩語となるといふが如き、歌人では無かつたかも知れない。しかし、かれが、青年時代を藝術から遠ざかり、武にのみ走つたものとは肯んぜられない。それは、かれの素質そのものがよくそれを立證してゐる。ここから、かれが散文的文學に興趣を抱いたであらうといふ推察は、極めて妥當になると思ふ。

徒然草のもつリズムと、兼好の觀照力との關係といふ大きい問題は、こゝに措いて、まづ、かれが漂泊の身になる頃までの生活について、出來るだけの探究を重ねて見ることにしよう。

上皇の御落飾なつた時、兼好は廿五歳だつたが、その翌年には後二條天皇の崩御があつて、十二歳の花園天皇の御卽位を見るに至つた、花園天皇も十二ヶ年に亙つて御在位ましましたが、すべてその前後、天下に寧日無く公武の間にも、陰慘な氣が漲りきつてゐた。さて都に、興福寺僧徒が神木を石清水の神人が神輿を奉じて寄せ來る噂が立つと、邊土からは元兵再寇の警報が傳はつて來た。鎌倉にあつては師時、貞時が相ついで歿したのみならず、大火が數年をおいて再發した。藤原爲兼は、北條高時のために六波羅に引致される。兼好が兄と共に神詠部類を編して、花園天皇から左兵衞尉（尊卑分脈の左兵衞佐は誤記）を頂いたのは、かれが廿七歳（延慶二年）の交と傳へられてゐるが。かれはその間もなほ後宇多法皇の院にも出入して居つたものらしい。

しかるに文保二年、後醍醐天皇が皇位を御繼承なし給うた翌々年、かれは辭官して、一兼好になり下つたのであつた。寵愛を被つた上皇の三度執政し給ふ幸な時代に至つて、享年旣に四十歳に近い兼好は、左兵衞尉を振りすてゝ一漂泊者となり至つたのである。かくて法皇が、正中元年六月廿五日崩御なると共に、「世の中を秋田刈るまでながむれば露もわが身もおきどころなし」と、いしくも悲しい歌をのこしてかれは、四十二歳の壽齡で、横川において出家を遂げた。俗名兼好をそのまゝ法名として兼好と稱したのである。

出家前の兼好について、われ／＼はかれの遺作を通じ、更に多少深入りすることが出來る。兼好自讃七條の最後の話に、

一、二月十五日、月明き夜更けて、千本の寺に詣でて後ろより入りて、ひとり、顔深く隱して聽聞し侍しに、優なる女の姿、匂ひ、人より殊なるが、分け入りて膝にゐかゝれば、匂ひなども移るばかりなれば、便惡しと思ひて、すり退きたるに猶ゐよりて同じ樣なれば立ちぬ。其の後ある御所樣の古き女房のそゞろ言いはれしついでに「無下に色なき人におはしけりと見落し奉ることなん有りし、情無しと怨み奉る人なんある」と、宣給ひ出したるに「更にこそ心得侍らね」と申して止みぬ。此の事後に聞き侍しは、かの聽聞の夜、御局の内より人の御覽じ知りて、侍ふ女房を裝り立てゝ出だし給ひて「便よくば言葉など掛けんものぞ、其の有樣參りて申せ、興あらん」とて、計り給ひけるとぞ。——二百三十八段

これは、どうしても院に仕へてゐる時代の出來事としか考へられない。思ふにそこでこの小話は、兼好が異性に對してそれまで生眞面らしくしてゐたことゝ、今一つ、（兼好の心持は、兎角く異性に誘惑されがちであつたが）かれの自制力が、ついにさうした試煉にも打ち勝ち得たことゝの二つの事實を語つてくれてゐるものではあるまいか。

異性の魅力に弱かつた兼好の心——わたくしは、何等の躊躇もなく、この一句を記す。この小逸話

においても、假に兼好が性の問題を超越し得てゐたなら、（考へ樣によつたら自讃といふさへ不思議な）かゝる小事件を麗々しく描き出す譯がないではないか。およそ徒然草中に、男女のことについて筆を費した話が、十二ヶ所にある。例の通り、その觀察は互に矛盾もし、また輻湊もしてゐるが、各々について兼好の面目が躍如として出てゐる。あるは、戀愛を是認し、あるは、女性の弱點を列擧してこれを罵り、また、戀して相逢はない心の妙味を述べて行く。

しかし、作者の出家前をもつとも痛々しく想像せしめるものは、つぎの廿六段の短い敍事であらう。

風も吹き敢へず、移ろふ人の心の花に慣れにし年月を思へば、あはれと聞きし言の葉毎に忘れぬものから、わが世の外になりゆく習ひこそ、逝き人の別れよりも優りて悲しき物なれ

されば白き糸の染まんことを悲しび、路の衢の別れん事を嘆く人も有りけんかし

堀河院の百首の歌の中に、「むかし見し妹が垣根は荒れにけりつばな交りの菫のみして」寂しき景色さる事侍りけん

かゝる失戀からうけた悲嘆こそ、作者自らの體感したものでなければならぬ。それは何といふ飾りのない表現だらう、何といふ自然的表現であらう。それは、まことに、兼好自身の追憶が、ひとりでに漏した獨語である、心の眞の相の複寫である。眞實との爭ひには、これに克ちうる何物もない。われ／＼はこの短かい一章を再讀三讀、いよ／＼いひ知れぬ眞實的妙味に蠱惑されざるを得ないのである。

兼好傳のあるものは、兼好が伊賀權守橘成忠の女（中宮少辨）に對する失戀哀話を傳へてゐる。西行と堀川局とのはかないローマンス　傳記者は、この兼好と一國守の女（やはり後宇多院奉仕の女房）との關係を、そのローマンス以上にも果敢無いものとして語り傳へてくれる。すなはちその成忠の女は、父の赴任と共に伊賀につれ行かれたまゝ、程もなく、その地において黄泉へ旅立つてしまつたのであつた。しかも兼好には、ついに戀の心の一はしも現はさないまゝで。

　人にものいひそめて

通ふべき心ならねば言の葉をさりとも分かで人や聞くらん

　深草に通ひし頃曉砧打つを

衣うつ夜寒の袖やしぼるらむ曉露のふかくさの里

　つらくなりゆく人に

今更に變る契と思ふまではかなく人を頼みけるかな

　たのもしげなること言ひて、立ち別るゝ人に

はかなしや命も人の言の葉も頼まれぬ世を頼む別れは

　わするゝ戀

我ばかり忘れず慕ふ心こそ慣れても人に習はざりけり

これらは、何れの年何れの所でかれの詠じたものかはわからないが、何れも兼好法師集に見える戀歌である。これら詠歌から與へられる韻律感も、前揭の文のそれと全く、同一のものではあるまいか。それは、われ〳〵に對し、あまりにも、打碎かれた淋しい心の相のありのまゝを見せてくれる。

古來、徒然草を釋き、作者兼好論に筆を及ぼした書は、源氏物語の註釋書に比してなほ多數に登るかもしれぬ。しかるに、そのほとんど、兼好を聖賢になぞらへ、徒然草を勸戒の書としてしまつたことは、どうした心理からであらうか。伊勢貞丈の如く、兼好をたゞの凡人と見る說（洗革記）は、無論容れ難い暴說であるが、まづ徒然草著筆中の兼好法師は、人生における戀愛の價値を認め、それに關し一家言を持つてゐた人であつたことだけはこゝに言明してよい。

徒然草を、最初より繙讀してゆく者は、まづ一枚目に、容貌美の解說をきき、さらに數枚ならずして、「萬づに甚優じくとも、色好まざらん男は、いとさう〴〵しく玉の卮の當なき心地ぞすべき」と、戀愛の情味を經驗しない男性を、眞向から難じてゐる文に出遭ふであらう。「露霜にしほたれて所定めず惑ひ步き、親の諫め世の謗りを包むに心の暇なく」かれは、まことに戀愛美論者のよい味方である。しかし、なほ「會ふさ離るさに思ひみだれ、さるは獨り寢がちにまどろむ夜なきこそをかしけれ」と讀み下してゆくと、どこ迄も美しいものを美しいとして傍觀してゐる物靜かなかれの姿が思ひ描かずには居られぬ。その結びである「さりとて、ひたすらたほれたる方にはあらで、女にたやすからず

思はれんこそ、あらまほしかるべきわざなれ（三段）との名言を、讀みおはると、更に、かれの持つ深い用意のほどが知られてくる。兼好は決して鹿爪らしい道學者ではなかつた。たとへば（四十にも餘りぬる人の、色めきたる方、自ら忍びてあらむは、いかゞはせむ）（百十三段）など、これらにも、かれが四十歳の人にさへ好色を許し認める寛大さが見えてゐるではないか。さらに兼好は、さかんに、寄雲戀四首、恨絶戀一首、いのりてたづぬる戀一首など、題詠的の戀歌をも作つてゐるのである。一例をあげると、

寄野戀

契りあらば又や結ばん一夜ねし新手枕の野邊の若草

と言ふ樣なものもある。また、

こよひと賴めける男のあらぬ方へまかりければ、女のよませ侍りし

はかなくぞあだし契を賴むとて我ためならぬ暮を待ちける

といふ如き、代作の戀歌さへ集中に混つてゐる。假に、傳說のやうに、事實、兼好が高師直に戀文の代作をしたとしても、われ〳〵は何も怪しむことはない。かれはかく同輩に戀歌の代作をしてやつたやうに、平氣で師直のために戀文の代作をしたのであらう。百七十三段に小野小町に關する考證が數行あるが、兼好は小町をたゞ一枚の花と見てゐる。戀は、かれにとつて人生を彩る花と思はれた。二百四十段の一文などには、自由戀愛論者の如き態度さへ覗はれるではないか。

しかし現實生活は、永久に傍觀的態度のみを許さない。「誠に、愛着の道その根深く源遠し。六塵の樂欲多しと雖も皆厭離しつべし。その中に只かの惑ひの一つ止め難きのみぞ、老いたるも若きも智あるも愚なるも變る所無しとぞ見ゆる」九段書中に、色欲・愛欲の根強さに就て說いたものは方々に見えるけれど、この一節の如きは、全く作者の肺腑から迸り出た儘のものらしい。しからば、かゝる情欲の難關をかれは、いかに切りぬけて行つたか。

思ふに、兼好は、性の蠱惑を覺つた結果、却ていたづらに女性から離れようとは努めなかつたものらしい。そこに、かれの獨創がある。兼好主義がある。

久米の仙人の、物洗ふ女の脛の白きを見て通を失ひけんは、眞に、手、足、膚などの淸らに肥え、あぶらづきたらんは、外の色ならねばさもあらんかし——八段

何といふ強い肉感の表はし方であらう。

女は髮の目出度からんこそ人の目立つべかめれ。女の稈、心ばえなどは、言葉うちいひたる氣配にこそ物越しにも知らるれ（下略）——九段

何といふ微妙な女性に對する觀察であらう。これだけで、作者は肉的蠱惑のいかに強いものであるかを充分言ひつくしてゐる。しかるに、かれは、また百卅七段に及んで、

萬づの事、始め終りこそをかしけれ、男女の情もひとへに逢ひ見るをばいふ物かは。あはで止みに

し憂さを思ひ、徒なる契をかこち、長き夜を獨り明かし、遠き雲井を思ひやり、淺茅が宿に昔を忍

ぶこそ色好むとは言はめ　　百卅七段

と、好色、卽ち戀愛の眞義をかく述べてゐるのである。なほ他に一段。

しのぶ浦の蜑のみるめも所せく、暗部の山も守る人繁からんに、わりなく通はん心の色こそ、淺か

らずあはれと思ふ節々の忘れ難きことも多からめ。――二百四十段

さて思へば、何れもそれはかれが、肉欲を轉換して、氣分化せしめようとしてゐるものではあるまい

か。かつかれ自らがその實行者であつた。「妻といふ者こそ、男の持つまじきものなれ云々」（百九十段）

の所論も、結極、この要求に所以したわけで、兼好自ら、萬人に妻帶を止めしめようとしたものでな

いこと、論ずる迄もない。純ロマンチストの態度に立てば、戀人を正妻として同棲し、戀人をして主

婦らしく振舞はしめることの、幻影の破壞に終るべきことは、あまりに當然の歸結である。百四段の

描寫のうまみは、徒然草を一讀したものゝ誰しも忘れ難い所のものである。それも兼好の胸にもつ一

幅の幻影の印象描寫だと言ひ得よう。時は初夏の朧夜、荒れはてた宿に女を尋ねて一夜をあかす戀人

同志及周圍の模樣は、王朝の光景そのまゝである。最後を「隙しろくなれば、忘れ難き事など言ひて

立出給ふに、梢も庭も珍しくすみわたりたる。卯月ばかりの曙、艶にをかしかりしを覺し出でゝ、桂

の木の大きなるが隱るゝまで今も見送り給ふとぞ」と結んだ技巧は、淸少の筆致よりもなほ優雅味に

富んでゐると評すべきか。戀愛の幻影化――兼好は、いつかさうした境地にまでさまよひ込んでゐたのであつた。現實の女性、さてつぎの兼好の現實的女性觀を見よ。

――女の性は皆ひがめり。人我の相深く、貪欲甚しく、物の理を知らず。只、迷ひの方に心も早く移り、詞も巧みに、苦しからぬことをも、問ふ時は言はず。用意あるかと見れば、又淺ましき事迄、問はず語りに言ひ出だす。深くたばかり飾れる事は、男の智慧にも優りたるかと思へば、その事後より現はるゝを知らず、素直ならずして拙きものは女なり（中略）只、迷ひをあるじとして彼れに從ふ時、優しくも面白くも覺ゆべき事なり（百七段）

これは何といふ女性に對する奇矯な皮肉觀であらう。兼好が出家前、異性との交誼が多かつたか、はたまた、さうでなかつたといふ疑問に就ても多少、これは解決の鍵となり得るやうに思はれる。

こゝに西行と兼好の比較――愛欲の情を根絶しようとして、苦しみあがいたのが西行のプロセスであり（否定的）愛欲の心を、人間生活の中に、如何に生かすべきかに、思ひ惱んだのが兼好のプロセスであつたのではあるまいか。（肯定的）

世の亂れに亂れた果てとはいへ、兼好の時代は、上に英主後醍醐帝がましまし、朝廷に參議日野資朝の如き英傑があり、地には、新宗教が普及して、すべてに新國民精神の萌芽があつた。これを西行時代の武家的勢力の齎した新精神に比すると、なほ一層、大きく且つ強いものがある。かゝる時代思

潮が兼好の態度にも、より深く出て來たものだとすれば、甚だ、これも面白い現象ではないか。

現存の西行の木像と、兼好の畫像とを比較する時、そこにわれ／＼は更に種々なる暗示を與へられる。それらの像は、或ひは實際と、かなり遠いものかも知れないが、しかし何と兩者の間には著しいコントラストが存することであらう。兼好の畫像は、西行の木像に反して、如何にも僧正とでも呼ぶに適して居り、その顏面・體軀は肥滿し、僧服をつけた手は印を結んでゐる。太い眉毛、親炙し難い兩瞳――その姿態全部には、ある氣むづかしさが漂つてゐる。前述のやうに、兼好の中には特殊の批評的精神が育んでゐたが、その傾向は、自ら、かれをして批評家的態度をとらしめるに至つたのではあるまいか。男女の交はりを稱贊しつゝ一女にたやすからず思はれむこそあらまほしかるべき業なれ　と最後になほ誡めを以て結ばずに居られなかつた彼れである。第一段を見ても

ありたき事は、まことしき文の道、和歌、管絃の道、また有職に公事の方、人の鏡ならむこそいみじかるべけれ。手など拙からず走り書き、聲をかしくて拍子とり、痛ましうする物から、下戸ならぬこそ男はよけれ。

といふ樣に始めから、心得善きを述べた彼れである。

しかし、かゝる態度が兼好において始まつたものでないことは附記しておきたい。王朝の殉情的精

神を超越しようとするあがきは、すでに前述の山家集の中にも見えた。十六夜日記・海道記等の日記紀行文、大鏡・今鏡・水鏡・増鏡等鏡物、保元・平治・平家等の戰記物等、それ〳〵その中に批判的態度が見えるし、まして、方丈記・古今著聞集・宇治拾遺物語・今物語・古事談・續古事談等の隨筆傳說物には、著しく教誡的筆觸が覗へる。十訓抄の如きは、まさに堂々と銘を打つて書かれた教訓ものである。

わたしは、こゝに新精神の根據を深く尋ねる餘裕はないけれど、ある論者の如くこれを單なる反動思想としてのみ解釋するに異論を挾むものである。この點については、西行論の際も、多少觸れて來たことであるが、數百年間における人口の增加と、地方產業の發達とは、どうしても組織上に革命を必要としたのであつた。その制度の不備といふことが、識者に認められる程それ丈け、社會の大小事が批判的眼識によつて見られてくる。それは、大鏡の中に出て來て翁の史談に差出口をする青侍(あをざむらひ)の態度にも現はれてゐる。史書それ自身がすでにある種の批評書となり來つたのであつた。

さて批判の標準をなしたものに關しては、所謂、內學と外學――佛學と漢學とを、まづあげなければならぬ。王朝の始めにも、空海大師の如き、學の古今內外に通じた博學者もあつたけれど、平城天皇嵯峨天皇の漢學勃興の御代と雖も、學的精神の民族的普及の程度は極めて貧弱のものであつた。天暦時代の如く、婦人にして史記を讀み白氏を誦するが如きは、到底望み難い事情にあつた。しかし、大陸の制に從つた考試の方法と、太平安逸の結果文物の流布と、更に、天台宗延暦寺の學的精神の尊重の思

想と――この三つが混淆して、儒學と佛學とを王朝末期には意外に地方に迄普及せしめたのであつた。
その當時、地方にあつて、地方文化を形成しつゝあつた人々には、賜姓された皇族の苗裔が多かつた。かれらは大宮人氣質に加ふるに、武道的精神をも養成してゐた。また、かれらのある者は、地方に古く居住する豪族乃至、鎌倉武士と血縁を結んだものの子々孫々であつた。かれらの生活規範は、自ら在京の公家と異なるものがあつて、かれらが上京の機を得た後にもその生活様式はそのまゝに保存されて行つた。これ、すなはち武士道の基礎をなすものであつて、儒佛二教に新たに對立し得た新道徳である。しかし武士道は、儒教の應用とも見るべき程、儒學を取り入れたものであつたに係らず、わが文化史上影響するところは深大であつた。その精神は、上、幕府の政治の骨子から、下、一靑侍の日常生活にまで殘らず影響していつた。これは、東鑑中の諸記録の、すでに明示するところである。新文化の規範は、紫式部時代の一般が、形式的、虚飾的傾向を存してゐたに反し、專ら内容的、實際的であることをその旨としてゐる。西行時代においても、すでにかゝるの兆候はあつたけれど、未だ明確でなかつた。それが、北條氏の施政方針には、嚴乎とした形を取つて現はれた。兼好時代は、むしろ、やゝそれが弛緩して、再び王朝精神の復古を見初めたのである。
國の爲め、君の爲めに止む事を得ずして爲すべき事多し（百廿三段）
と言ひ、善政思想を説く兼好の君臣問題も、かれ獨特の立論で無いことはこれを知り得られよう。

——兼好は吉田の家に生れたる人なれども、巫學を以て名を稱せられず。法師に成たれども、佛學を以て名を稱せられず。又、佛法の德行を以て名を稱せられず。唯、歌の上手なるを以て、世に名を稱せられたるのみなり。（下略）　安齋隨筆

さてこれに依れば、兼好はいかにも名譽を追求して限なかつた者の樣に考へられる。卅八歳にて辭官したのが、假に佛徒として名を得ようとするのであつたとしても、かゝる下根の人に、十年後徒然草の如き大著がどうして大成され得ようぞ。わたくしは、兼好の青年時代を説くに、始めに戀愛と兼好、後に批判的精神と兼好とに關して述べたとはいへ、こゝに必ずしも、かれが愛戀の情と批判性の矛盾から、辭官出家したといふ結論を引き出さうとするものではない。

しかし、この場合において、兼好の世俗的希望を拋棄し得た態度と、西行の青道心になり得た態度とを比較して頂きたい。前者は、卅八歳でなほ無妻の左兵衛尉であつたし、後者は、妻子ある身で、いまだ廿三歳、すでに檢非違尉の榮官をも與へられようとした境遇であつた。兼好の現世的執着は、西行のそれに比してあるとも、優るべき性質のものでは到底なかつた。しかし、これだけ青年的の一時的情熱や、輕率な行爲からの出家でなかつたことは斷言され得る。分別盛りの年齢として、辭官するにはかなりの果斷を要したことも、この場合臆測することが出來る。われ〳〵は、家集から、かれの詠歌をこゝに選り出して見ると、

世を反かんと思ひ立ちし頃秋の夕暮

そむきては如何なる方に眺めまし秋の夕も浮世にぞうき

さだめがたく思ひ亂るゝ事の多きを

あらましも昨日は今日に變るかな思ひ定めぬ世にし住まへば

ともすれば鳰の浮巣の浮きながらみかくれ果てぬ世を嘆くかな

とにかくに思ふ事のみあれば

盡きもせぬ涙の玉の無かりせば世の憂き數に何をとらまし

本意(ほい)にもあらで、年月經ぬることを

うきながらあれば過ぎゆく世の中を經難き物と何思ひけむ

つぎは、辭官後、修學院に籠つてゐたと傳へられてゐるから、その時の詠歌かと思はれる。

修學院といふ所にこもり侍りしころ

遁れても柴の假庵の假の世に今幾程か長閑(のどけ)かるべき

逃れ來し身にぞ知らるゝ憂世にも心に物の叶ふ試しは

身を隱すうき世の外は無けれども逃れしものは心なりけり

如何して慰さむものぞ世の中をそむかで過ぐす人に問はゞや

そこには。何等か恐ろしい現實生活における壓迫から遁れ出て、暫しの隱れ場を見付けたものの樣な態度が見えるではないか。西行の場合の如き悲劇的でないだけそれだけ痛々しさが感ぜられる。しかし、辭官と出家との間には、五年近い日子がある。かれは、その間、海道を下つて鎌倉比企が谷の妙本寺にゐたり、また、武州金澤に住んでゐたりした。（集中の歌の調書による）しかるに、元享元年法皇は、萬機の政を天皇に御託しあつて、その翌年、嵯峨の大覺寺に仙洞を移し給うた。兼好は、その頃すでに歸京して（或ひは、法皇に呼び返されて）仙洞に伺候してゐたが、正中元年（兼好四十二歲）法皇の御崩御を機として、出家の志を遂げたのであつた。例の物に係はぬ性質から、兼好を音讀して一兼好法師になり切つたのである。それも、辭官した時すでに遁世者の氣持でゐたのを、この機會に圓頂緇衣の身となつたまでの事であらう。しかし、かれがいよ〳〵こゝまで來るには、幾多の谿谷がその途上になければならない。傳へられるが如く出家の理由は、一神官を望んで與へられなかつたが如き單純な原因からでは無かつた。まして、貞德抄や吉野拾遺中の松翁の話の如く、法皇の崩御のみからでもあるまい。（法皇が兼好に殊更御愛顧を給うたといふ如き資料はこゝに殘つてゐないのである）

春のころ哀傷

侘び人の涙に慣るゝ月影は霞むを春の習ひとも見め

見し人も無き古里よ散りまがふ花にもさぞな袖はぬるらむ

歸り來ぬ別れをさても歎くかな西にとかつは祈るものから

これは、いつの頃いかなる場合の詠とも知れないが、かれ兼好の出家前の胸には、かくの如き濃い哀愁が漲つてゐたのであらう。しかも、眞理を求める心は鐵石のやうに強い。觀察し、觀照し、自照し、批判する

人事多かる中に、道をたのしぶより氣味深きはなし――百七十四段

これは、かれの瞑想が、最後に、かれを、恆に拉してゆく結論であつた。この一語――また何といふ強い表現であらう。たのしぶといふ述べ方も、氣味といふ表はし方も、實にいゝではないか。兼好の個性が、そのまゝに現はされてゐる。そこにはまた

世に從へば、心、外の塵に奪はれて惑ひ易く、人に交れば、言葉、よその聞きに隨ひて、宛ら心にあらず。人に戲れ、物に爭ひ、一度は怨み、一度は喜こぶ、その事定れる事なし。分別濫りに起りて、得失止む時なし。惑の上に醉へり、醉の中に夢をなす。走りて急がはしく、ほれて忘れたる事皆かくの如し、未だ誠の道を知らずとも、緣を離れて身を閑にし、事に預らずして心を安くせんこそ、暫らく樂しぶとも言ひつべけれ。生活、人事、伎能、學問等の諸緣をやめよとこそ摩訶止觀にゐ侍れ――七十五段

といふ樣な消極的理論もそこに手傳つて來たからであらう。かの、「心更に、起らずとも佛前にありて鈴

を採り、鐘を採らば、怠る内にも善業自ら修せられ云々（百五十七段）の事理歸一の說も面白いが、かゝる兼好が、散亂の心ながら繩床の上に坐さうと身を挺したのは、當然の行き方と見なければならぬ。

顧ると、天下の風雲急を告げる樣々の兆は、京師の間にも漲つてきた。元亨元年、御醍醐天皇御親政と共に置かれた記錄所其他の制は、やがて中興の大業の遂げられる豫報であつた。御宇多法皇の崩御は、公武の背馳を一層促進する機となつて、その年すでに、藤原資朝・同俊基の執へられて關東下向の悲劇を生じ、翌、正中二年には資朝流罪（佐渡）を見るに至つた。帝は、北條高時を責め給うたが著しい效果なく、嘉曆二年（兼好四十五歲）の如き高時咒咀の事さへ宮中に行はれ始めた。鎌倉軍入京といふ元弘の大亂は、實に、その後四年のことに屬してゐる。

紫式部・西行は共に、數奇な時代に生れ合はしてゐるが、兼好の時代も、またエポックメーキングの時世であつた。兼好は、湊川合戰の時、五十四歲、四條畷合戰の時、六十六歲の老軀を携へてなほ在世してゐたのである。北朝に對する南朝の存立は、武家に對する公家の最後の反噬と考へることも出來る。兼好は當時、京都附近にあつて、北朝に恩顧を被つてゐたとはいへ、變り行く世相、移り行く權勢の、夢幻にも似た慌しい有樣を、痛々しい氣持で見つめずには居られなかつたらう。かうした所にも、人の產む時代の存すると共に、時代のつくり出す人といふことを、しみ〴〵と思ひ見ずには居

られない。

現實の樣〻の痛手に傷き、悲しんでゐる人々に、如何に、盡きせぬ自然界の眺めが慰安になるか――われ〳〵はこの實例を、最もよく西行に見ることが出來た。寂寥と悲しみは、自然の眞相を觀照する鍵であるといふ言葉は決して、誇張ではない。出家當時の兼好の淋しみは、かくて、かれの自然觀がよく傍證してくれる。

吉野拾遺の記事によれば、兼好は木曾に隱遁したことになつてゐるが、その後暫らくの間、かれもこゝやかしこと流浪して、自らの安住地を求めかねてゐたものらしい。西行の出家した翌年、保元の大亂が兆したやうに、兼好の出家後程もなく、天皇の鎌倉追討の御陰謀が漏洩してしまつたのであつた。

世をのがれて木曾路といふ所をすぎしに
思ひ立つ木曾のあさぎぬあさゝのみそめてやむべき袖の色哉

かれは、木曾馬籠の東北、御阪（神阪とも）にゐたところ、偶々、國守が鷹狩にやつてきたゝめに、次の歌をよんでその地をも逃れ去つたとも傳へられてゐる。（集には「心にもあらぬやうなることのみあれば」との序のみあり）

こゝも復浮世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがな

西行が東國に再度下行したに似て、兼好も再度（少くとも）阪東に下つてゐる。その折の詠歌は、十首一團になつて集中に入つてゐるが

みちにてよめる

峯の嵐浦わの波もきゝなれぬかはる旅寢の草の枕に

東國にて宿のあたりより富士の山いと近う見ゆれば

都にて思ひやられし富士の嶺を軒端の岳に出でゝ見る哉

海の面のいと長閑なる夕暮に鷗の遊ぶを

夕凪に浪こそ見えね遥々と沖の鷗の立居のみして

武藏國金澤といふ所に昔住みし家のいたう荒れたるに泊りて、月あかき夜

故郷の淺茅が庭の露の上に床は草葉と宿る月影

一年夜に入りて宇津の山をえ越えずなりにしかば、麓なるあやしの庵に立入り侍しかど、この度は、その庵の見えねば

一夜ねし萱のまろ屋の跡もなし夢か現かうつの山越え

以上、十首の中から、五首を抜萃した。

兼好は、西行や芭蕉ほどに旅好きだつたとは考へられぬ。かれは、自身を動かして環境の推移と共に、新しい刺撃を享受しやうなどゝはしなかつた。かれは、むしろ平靜な心を準備して、外象をすなほに直覺しようと待つてゐる人であつた。從つて、旅途における言々句々がそのまゝ歌となり俳句となるといふことも無かつたのである。

兼好には、吉田とか双が岡とか横川とかにおよそ、暫してもわが身を置き得る住居があつた。さうして近郊遠郊をそこから尋ねて歩いてゐる。歌詞や、その詞書を見れば、嵯峨・大原は言はずもがな、大和にしては初瀨、葛城を、但馬にしては但馬溫泉を、攝津にしては藤江の浦を、紀伊にしては玉津島を踏破してゐることが分る。

花の盛り、但馬の湯より歸る路にて、雨にあひて

しほらしよ山わけ衣春雨に滴も花も匂ふ袂は

この一句にも風流人兼好の姿が、言外に現はれ出てゐるではないか。

いづくにもあれ、暫し旅立ちたるこそ目醒むる心地すれ。その邊(わたり)こゝかしこ見步(あり)き、田舍びたる所、山里などは、いと見慣れぬ事のみぞ多かる。都へ便り求めて文やる。「其事彼事、便宜に忘るな」など言ひやるこそをかしけれ。さやうの所にてこそ萬づに心遣(づか)ひせらるれ。持てる調度まで佳きは佳

く、能ある人、形よき人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ（十五段）

旅の心を全然、氣分化してそれを玩味してゐる人の様である。

紀行でなくて單に、妙味深い敍景文を篇中に求めるなら、かなり、それをあげることが出來る。「折ふしの移り變るこそ、物毎にあはれなれ」の段では、何と言つても冬の描寫が一番巧い。これは、秋の描寫に天賦的妙味を見せた紫式部と、面白い對照をなしてゐる。

さて冬枯れの景色こそ秋には、をさ〳〵劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散り止まりて、霜いと白うおける朝、やり水より煙の立つこそをかしけれ。年のくれはてゝ人毎に急ぎあへる頃ぞ、又無くあはれなる。凄まじき物にして、見る人も無き月の、寒けく澄める二十日餘りの空こそ、心細き物なれ…………

かゝる文例は、なほ多い。しかし、四十三段「春のくれつ方」、四十四段「あやしの竹の編戸の」などの描きぶりもこゝに見逃しがたい。

春の暮れつ方のどやかに艶なる空に、賤しからぬ家の奥深く木立物古りて、庭に散り萎れたる花、見過ごし難きを、差入りて見れば、南面の格子皆おろして淋しげなるに、東に向きて妻戸の良き程に開きたる御簾の破れより見れば、形清げなる男の年廿ばかりにて、打とけたれば心にくゝのどやかなる様して机の上に文を繰展げて見ゐたり。いかなる人なりけん尋ね聞かまほし

さて、この一段、つぎの四十四段などの叙事的叙景文で分る樣に、これらの行文には折々印象的筆致は交つてゐると言つても、どこ迄も客觀的のものでないことが明言出來る。それは、たゞ、自然美の攝取抱擁の心そのまゝの流露である。

現世における一切のほだしは斷ち得たに、たゞ、折々に變る空の美しさのみ思ひ切れぬ――と言つた醇乎たる心の持主である世捨人。(廿段)

沅湘日夜東流去。不爲愁人住少時。といふ三體詩中の詩をあはれと思ひ、岩に碎けて淸く流るゝ水の景色を、時分かず目出度く思つた人。(廿一段)

明月の夜の、雲に閉され、花咲く春日の雨に暮れゆくことにかへつてものゝあはれを覺え、すべて肉眼によらず心眼にて美を感得しようとする人。(百卅七段)

暗き夜の綺羅裝飾に却て特殊の美を感じ、さしてこともない夜更けに、殊に淸げに裝つて來るやうな者、また、かゝる時鏡とり出し顏つくろふ女に趣を感ずる人。(百九十一段)

秋月は限りなく目出度いが、月の虧ける點にも趣きを感じうる人。(二百十二段)

九月廿日頃の夜、客を送り出して、そのまゝ妻戶を少し細目にあけ、月に眺めいる女主人(三十二段)

すべてかゝる人々は、兼好の好尙を現はしてゐる雅び人なのであつた。戀愛を幻想化し、美化し、氣分化して官能からの解脫を說いたやうに、兼好はこの自然愛にあつても、かく心眼、心耳で感ずる美の

存在を提唱したのである。
雪の面白う降りたりし朝、人の許言ふべき事有りて文を遣るとて、雪の事何とも言はざりし返事に「此の雪如何見ると一筆宣はせぬ程のひが〳〵しからん人の仰せらるゝ事、聞きいるべきかは。返す〳〵口惜しき御心なり」と言ひたりしこそをかしかりしか。（卅一段）
これは、ずつと後の「花はさかりに」（百卅七段）の段であるがこゝと好一對であらう。
望月の隈なきを千里の外迄、眺めたるより、曉近くなりて待出たるがいと心深う、青みたる様にて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、打時雨たる村雲隱れの程、又なく哀れなり。椎柴白樫などの、濡れたる様なる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがなと都戀しう覺ゆれ…………
何と自然愛に透徹した人の心境であらう。兼好は、また、かうした逸話に譯もなく興趣を持つたのである。
次に、兼好と西行との間には、月と花との耽美者であつた意味に不思議な共鳴があつた。
正中二年春宮より歌合の歌めされ侍りしに、山路花
今日もまた行手の花に休らひぬ山分け衣袖にほふ迄
西山の花見ありきしに

遭ふ人に又誘はれて立返り同じ山路の花を見るかな

朝毎に立ちそふ峯の白雲の行き來も見えぬ花さかりかな

花のちるを

待つ程の花の心のつれなさも咲きてはあだになど變るらん

遍智院宮より召されしによみて奉りし歌

朝な〳〵咲きそふ花の白妙に峯の霞の色添はれゆく

ひとり花のもとに尋ね入りて

見る人に咲きぬと告げむ程だにも立去り難き花の陰かな

遠く花を尋ね

僞りの雲の幾重にこりもせで遂に紛はぬ花を見つらん

花を見て

花の色は心のまゝになれにけりこと繁き世を厭ふしるしに

池に花のうつりたるを

影うつす花の靑葉となりにけりむら〳〵見ゆる池の浮草

花の雪

やま高み紛はぬ花の色なれや和ぎたる空に殘る白雲

月に向ひて思ひつゞけし

思ひおく事ぞ此の世に殘りける見ざらむ後の秋の夜の月

春植物

久方の雲居長閑に出る月の光に匂ふ山櫻かな

たかがり

鈴の音は近く聞えてはしたかの茂みの木ゐに隱れけるかな

はしたかの木ゐにかゝりて暮す日は我も家路に還りかねつゝ

和歌所にて初聞鶯といふ事を

きくからに春ぞ長閑き打羽振き都に出づる鶯の聲

遍智院宮より仰されしによみて奉りし歌

さだかにと思ふ心にほとゝぎす聞く一聲をなほ辿るかな

夏野ゆくたなれの駒の胸分けになづむばかりも繁る草かな

生駒山嵐に浮きて行く雲の隔てもあへずなる時雨かな

海邊の春曙といふ事を

花ならぬ霞も浪もかゝるなり藤江の浦の春の曙

春　風

みなと河散りにし花の名殘とや雲の浪立つ春の浦風

これらの歌によつて、誰しも、一面に新古今調の濃厚な點を觀取し得るであらう。正平の頃、兼好は京にあつて、公家達に新古今和歌集を講義したと例の園大曆に出てゐるが、さうもあつたらうと思はれる節が多い。徒然草に現はれた兼好の態度は、どこ迄も生活の藝術化夢幻化にあるのであるが、そこはまた新古今調と一致した箇處てある。

さて、こゝあたりで、わたくしは、問題を、徒然草着筆の動機といふ樣な點におちつかして行かねばなるまい。まづ着筆の時代について、上卷を建武三年以前、下卷を建武三年五月以後と考證したやうな說もあるが、こゝには五十歲前後數ヶ年に書いたものとこれを概觀しておかう。しかし、筆を染めた日から、筆を擱いた日まで、態度、所見の上に殊更な推移はなかつたとしても、わたくしはその間、相當の日子のあつたことを信ずるものである。つぎに、草文の順序の問題であるが、流布本の原書に近いものといふ說をとり、（三光院實證の崐玉集にあるとかいふ）壁紙とされたものを剝ぎ取つて秩序

なく輯めたものといふ説には同意しかねる。もちろん、歌をかき集めたものが伊賀に傳はつて居り、徒然草の草稿が吉田の寓居に遺つてゐたといふのは事實かもしれない。また、原稿の一部が、その感神院とやらの壁紙となつてゐたり、經典を寫した紙の裏に書き込んであつたといふことはあり得ることでもあらう。さりながら、現存徒然草が、亂雜無用意に集錄されて出來たものでは全然無い。少くとも大部分は、兼好の編んだまゝであることはこれを信じてよいと思ふ。

さて、つぎに、わたくしは、當時の暗瞻とした天下の形勢を思ひ返す。それは、まづ以て如何に兼好の心を暗くしたことであらう。それを、われ／＼は徒然草の中にも見出だすことが出來る。

飛鳥川の淵瀨常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、樂しび悲しび往きかひて、華やかなりし邊りも人住まぬ野良となり、變らぬ住家は人改りぬ。桃李もの言はねば、誰と共にか昔を語らん……

廿五段

かうした淺ましい樣々な光景を目前にしつゝ、筆を急がして著述をすゝめ、熱意を籠めて纖巧を極めようなどと、到底、かれにも期し得なかつた所であらう。

まづ、序段の「つれ／＼云々」の言葉やりである。その文體よりして、「つれ／＼草は枕草子をつぎて書きたるものなり」と稱ふる釋正徹あれば（正徹物語）一方に、また「つれ／＼なるをり、よしな

し事におぼえし事どもかきつけしに云ふ（和泉式部集）の語を模したといふ入江昌憙がある（久保之取蛇尾）しかしこれらの詮索は、要するに無駄な勞力にすぎない。兼好は、あながちに古文を眞似て筆を起し古典に模して書を作らうとしたのではあるまい。結極かうした臆説は、源氏物語を以て史記の筆法に模したものとする說の類である。

篇中、兼好が自身の著述について多少とも言ひ及んでゐる言葉は、

一、つれ〴〵なるまゝに、日ぐらし硯に向ひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物狂ほしけれ――（初段）

二、おぼしきこと言はぬは腹太るゝわざなれば、筆に任せつゝ味氣なきすさびにて、掻破り捨つべき物なれば、人の見るべきにもあらず。――（十九段）

三、筆をとれば物かゝれ、樂器をとれば音を立てんと思ふ。――（百五十七段）

さてこの三章を玩味して見るに、その文致がいつか、われ〳〵自らを、兼好の着筆心理に融和せしめて行くのを感ずるではないか。初段が、序の形において始めに書き添へられたものだといふ說は、どうしてもその筆觸の上から、搖かし難い所だと思ふ。そこでわたくしは、洛北吉田あたりの閑居に世を避けてゐた一法師を思ひ描く。かれの一身こそ、すでにあらゆる俗世的系類と絕緣したものながらも、後醍醐帝の笠置行幸、楠正成の來援（元弘元年）帝の隱岐蒙塵（同二年）更に、義貞の入京と北條氏

の滅亡、帝の御還幸（同三年）護良親王の鎌倉御幽閉（建武元年）北條時行の亂（同二年）足利尊氏の來襲、湊川合戰、帝の更に吉野行幸（同三年）と、目覺ましくも移りゆく世相が、かれの耳に入らずにはすまない。あたかも中興の遂げられた建武二年、內裏に、千首歌の講筵が行はれた時など、兼好は題（春植物、夏動物、秋天象、冬天象、戀天象、戀植物、雜地儀）七つを賜はつて帝に歌を奉つてゐる。（家集）その中最後の作、

雜地儀

せり河の千代の古道すなほなる昔の跡は今や見ゆらん

の一首にも、時世に對し感慨深い兼好の心持がよく出てゐるではないか。しかし、この建武中興の業は、遂にはかない夢に過ぎなかつた。

いつ方にも又行隱なればやと思ひながら、今は身を心に任せたれば中々ことたりてのみぞすぎゆく

反く身は流石に安きあらましをなほ山深き宿も急がず

これが、まさに、當時におけるかれの感懷ではなかつたらうか。もちろん、そこに世紀末的の（[illegible]も手傳つたであらう。しかし、紫式部などの王朝末期のそれとの間には、自ら差別がある。わたくしは、それを、はつきり徒然草のもつリズムに依て直感する。少くとも、徒然草執筆中の兼好の心持は、

決して無爲沈滯その物ではなかつた。かれが、

蟻の如く集りて、東西に急ぎ、南北に走る。高きあり、賤きあり、老たるあり、若きあり、行く處あり、歸る家あり、夕に寢ねて朝に起く。營む所何事ぞや、生を貪り利を求めて止む時なし——（七十四段）

と觀じた如き醜なる現實に、ひたすら面接する時、ましてや亂麻の如く兩軍對峙して極まる時ない時世を思ひみる時「言葉少なからむには如かじ」（二百卅三段）と口も閉され、文教にて一世を治むる事漸くおろかなるに似たり」（百三十二段）と筆も投ぜられて、虛無的思想に同感されることもあつたであらう。しかしそれは、刹那々々におけるかれの心理にすぎない。見よ。

つれ〴〵なるまゝに日ぐらし硯に向ひて、心に移りゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物狂ほしけれ

と、渾々と泉の水の如く奔騰し來る創作欲を如何にともなし難かつたかれではないか。かくて、かれは時に夢見心地に、筆を走らす刹那を持つた。この序段から、一段の冒頭語「いでや」に連なつてゆく氣持も、極めて自然的な主觀の流れではないか。

しかし、更に、その一段を讀みつゞけて行くと、かれが鋭く人生における希望、目的の如何に平民

的であるかに駭かされざるを得ない。名聞ある攝家、淸華の生活を讃美し、法師の一生を嘲り、容貌姿態の美を賞で、さて最後に、男子は、儒學、詩文、和歌、音樂、有職故實、書道に通じ、かつ聲美はしく拍子もとれ、多少酒も飲める方がいゝと結んだところ、どうしても、常識だけのものとしか思はれない。しかるに、さらに、これを、再讀して見ると、誰しもそこに怪しげな態度を見せしめられる。すなはち、名門の生れは樂しいけれど、太政官なら判官以下、諸省なら次官あたりの役人は駄目だと云ふかれの結論である。法師にしても官位についてるのは駄目だが、却て世捨人になつてしまへばよいといふかれの見方である。容姿の美、それはもちろん望ましいが、その美は、善心と善才が附隨して始めて眞美を發輝して來るといふかれの考へ方である――それらが強い暗示を讀後、われ／＼の腦裏に印して行く。讀者は、こゝに到つて、作者の巧みな言葉のまはし方に一杯くはされた感を抱くであらう。つぎに、二段にあつては更に眞面目な質素論をきかされ、三段に入ると例の戀愛美論を持ち出される。かくて、段を重ねてゆくと、前段で肯定したものを、後の段では戒飭してゐる樣な矛盾にしば／＼出あふ。一方では飲酒、情欲を戒めながら、他方ではそれらの趣あるところを平氣で描いて行く。人生の長閑かさを述べた口で、無常迅速な點を主張する。雜談の有害無益なことを說述しながら、又、閑談の妙味深いことを讃へる――すべてがかうした行き方なのである。そこで、徒然草の中に、作者の人生觀社會觀についての論理的統一的斷案を求めようとする者は、すべて失望せしめ

られる。しかし、そこに却て、われ／＼は、徒然草を通じての作者兼好の人生觀、社會觀、否宗敎觀を見ることが出來、またそれらを敎えられる。二百數十段――その各段は內容の長短、種類等樣々ではあるけれど、わづか一行の段にも、その刹那における兼好の相がそつくりと現はれてゐるではないか。そこに徒然草のもつ無上の妙味がある。本朝遯史などに、徒然草の文脈を評して、「固是倭文之尤者也」と言つてゐるなど、とても、かうした點に目をつけて言つたのではあるまいと思ふ。

「我身のやんごとなからむにも、まして數ならざらんにも、子と云ふ者なくてありなん」――六段

「世の人の心を惑はす事、色欲には及かず」――八段

「家居のつき／＼しくあらまほしきこそ、假の宿りとは思へど興あるものなれ」――十段

これは、各段の筆の書出しを列ねたまでゞあるが、これだけでも各段の面目が、ほゞ、覗れるではないか。兼好のもつ刹那々々の心持が、そつと讀者の身邊近く寄り添つてくる、それがやがてその肺腑をも破つて這入て來る。呼吸の一揚一抑をもそのまゝわれ／＼に聞かしてくれてゐるかのやうである。

こゝに至つて、小說家の紫式部、歌人の西行、隨筆家の兼好と思ひ合して比較すると、興味深い樣々な問題が生ずるであらう。特に、西行と兼好はよい組合せになる。誰かゞ、建設と破壞の循環こそ世相史である――と言つたことが思ひ浮べられる。情熱の兒西行が、破壞を事とすれば、睿智の兒兼

好は建設を天命とする。詩人は多く、非妥協的で自由を生命とすれば、批評家は、社會、國家的背景に立つて、普遍妥當的な觀察を披瀝する。兼好、必ずしも評論家ではないが、つねに觀照的立場から、種々な世相を觀取抱攝して、萬事をその着くべき位置に着かしめようとする。わたくしは、次に、かれの觀照の態度を深く尋ね入つて見ることにしよう。紫式部の自己觀照に比して、いかにそれが細微にしてなほ、廣汎に亙つてゐるかが分るだらうと思ふ。

百八十五段に、ある乘馬の名人は、少しでも勇んだ馬、少しでも鈍い馬には注意を拂つて乘らなかつたといふ逸話が出てゐるが、まづ、己が身を謹しむといふことが兼好の第一のモットーであつた。

「おろかにして謹めるは得の本なり。巧みにして恣なるは失の本なり」（百八十七段）

かうした態度に、兼好を置いて見れば、かれの心理描寫における巨細な注意深さ、綿密さが想像されて來るであらう。

名を聞くより、やがて面影は推量らるゝ心地するを、見る時は、又豫て思ひつる儘の顔したる人こそなけれ。昔物語を聞きても、此の頃の人の家の、其處程にてぞ有りけんと覺え、人も、今見る人の中に思ひよそへらるゝは、誰もかく覺ゆるにや。又、いかなる折ぞ只今、人の云ふ事も、目に見ゆる物も、我が心の内も、かゝる事の何時ぞや有りしがと覺えて、何時とは思ひ出でねど、正しく有りし心地するは、我ばかりかく思ふにや――七十一段

何と深い自己心理の解剖ではないか。虚言を聞いてゐる人様々の心理を分析して、

達人の、人を見る眼は、少しも誤まる所あるべからず。例へば、ある人の、世の虚言を構へ出して、人を計ることとあらんに、

すなほに眞と思ひて、言ふまゝにはからるゝ人あり(1)

餘りに深く信を起して、なほ、煩はしく虚言を心得添ふる人あり(2)

又、何としも思はで、心をつけぬ人あり(3)

又、いさゝか覺束なく覺えて、頼むにもあらず、頼まずもあらで案じゐたる人あり(4)

又、眞しくは覺えねど、人の云ふ事なれば、さもあらんとて止みぬる人もあり(5)

又、様々に、推し心得たる由して、賢こげに打ち領き頬笑みて居たれど、つや／＼知らぬ人あり(6)

又、推し出して、あはれさることありと思ひながら、なほ、誤もこそあれと怪しむ人あり(7)

又、異なる様もなかりけりと、手を打ち叩きて笑ふ人もあり(8)

又、心得たれども知れりとも言はず、覺束無からぬは、兎角の事なく、知らぬ人と同じ様にて過ぐる人あり(9)

又、此の虚言の本意を始めより心得て、少しも嘲かず、構へ出したる人と同じ心になりて、力を合はする人あり(10)

愚者の中の戯れだに、知りたる人の前にては、此の様々の得たる所、詞にても顔にても隠れなく知られぬべし。まして、明かならん人の、惑へるわれ等を見んこと、掌の上の物を見んが如し――百九十四段

かゝる各人の心理各様の區別觀も、近代の科學的見地から批判するならば、兒戯に類するものかも知れないが、鎌倉末期の一法師の業と考へるなら、かれ兼好の頭腦に對しある敬意を表せずには居られまい。それは、紫式部の觀照力にも到底、求め難い精致さである。わたくしは、すでに、兼好の女性觀の一部を紹介したが、かれの鋭利細微な批判に至つては、また、西行の如き詩人に求め得がたいものであるのみか、そこには紫式部の觀察すら及び難いものがある。十二段の「同じ心ならん人としめやかに物語して云々」の章の如き、精緻な觀方に、いかにもと首肯されざるを得ない。

つぎに、叙事描寫におけるかれの特色如何。徒然草の中忘れ難い名文に、伊勢の國から鬼になつた女の京に上つて來た話（五十段）仁和寺の法師が酒興にすぎて足鼎を頭に冠つた話（五十三段）丹波の出雲大社に詣でた聖海上人が後向の高麗犬を拝跪した話（二百卅六段）などがある。（こゝに引用することは省略するが）何れも何といふ緊張し切つた筆やりであらう。試みに、その中の一句を取り除けば、すべてが壊れかゝつてきさうな巧みな組立で出來てゐる。その一部を叩けば全部が反撥する樣にさへ思はれる。これには、必ずや作者の觀照力の鋭利さが條件とされねばならぬ。かゝる叙事法に

は、紫式部も、源氏物語の中に、しば〳〵その巧妙な手腕の程を振つてゐたところのものであつた。世の學者にして、兼好と淸少納言の文學を比較して、兼好を以て淸少より劣つてゐるとする者が少なくない。わたくしは、その比較において、鳥の飛翔力と、魚の游泳力とを比してその優劣を定める者に對する樣な不審を抱くのである。世以て、枕草子と、徒然草とを同質の隨筆とするけれど、兩作家の個性には甚しい徑庭が存してゐるではない。しからばその個性を拔きにして、形式的の文致のみを以て、眞價を批判することは出來まい。世の人の概ね賞する徒然草中の文は、十九段の「折節の移り變るこそ」の四季描寫の段や、百七十五段の「世には心得ぬ事の多かり」の宴席の描き振等であるらしい。かゝる印象的描寫の量においては、徒然草は、到底、枕草子の敵では無い。のみならず、かの淸少納言の輕妙洒脫の才能を自負し、己が恩寵に誇るが如き口吻は、更に、徒然草の中に見るを得難い。しかも淸少納言は、たゞ印象的、耽美的文學者にすぎないけれど、兼好は立派に觀照的、批評的作家であるのではないか。

兼好を更に、紫式部に比較すれば、兼好は式部以上に、より體驗的道德と體驗的宗教の上に立つてゐることが言ひ得られる。そこに、兼好獨特の人生觀、處世觀が編み出されてゐる。かれは、徒らに、言うて行はれ得ない德目を並べはしなかつた。述べて無意味な修行の仕方を語つてはゐない。夢想的であつたり、無鐵砲であつたりしない。すべての言葉は體驗といふ網を潜り出たものであり、その些

細なことの中にも、眞珠の樣なかゞやきが出てゐる。突飛であつたり、好奇的であつたりしない。すべてが反芻されて觀照といふ裏打ちを施されてゐる。

「ありたき事は、實しき文の道」（一段）「人の才能は、文あきらかにして、聖の敎を知れるを第一とす」（百卅二段）

かく、かれは儒敎主義者であつた。しかし、兼好に限つて、これが單なる裝飾やをどしで無いことを知らなければならない。世には、某主義、某學派を奉ずれば一も二も、盡くこれを盲信し盲從すべきものだと考へてゐる者が多い。盡く書を信ずれば、書無きに如かずと言ふのは、まことに、かれ等に與ふべき訓言である。兼好にあつては、かれの道德的要求の大部を、儒學が充たしてくれゝばこそ、儒學に共鳴したのであつた。

さて、徒然草には、道話的小話がかなり澤山挿入されてある。それが噂話であれ、實驗談であれ、すべてが作者兼好には非常な興味を與へたものであつたらしい。あるものは、兼好に大きい魅力を與へて、その感應がそのまゝリズムとなつて文の表面に現はれ出てゐる。

そこで、それらの道話的小話の味は、すべて相通じてゐるが、あへて分類して見ると、およそ、つぎの各部類に屬する例話であることが知られる。

一、人は、自己を反省して、自己の價値を知り、つねに謙遜な心を持つべきである。　これに關

した説話は、かなり多い、某律師が、鏡に映つた面相の醜くいのを見て、その後、堂に籠りきりて、外出しなかつたといふ話（百卅四段）ある乘馬の名人の自戒が、乘るべき馬の强き所、弱き所を觀取し、轡鞍に缺陷があつたら必ずその馬を馳せないといふことにあつたといふ話（百八十六段）碁に巧みな人が、われに劣る碁打ちを、もつて愚かものと考へる話（百九十三段）園の別當入道といふ料理の巧者に、鯉料理を願つたところ「此程百日の鯉を切り侍るを、今日缺き侍るべきにあらず、まげて申請ん」と返事したその態度について、西園寺公經が「切りぬべき人なくば賜べ、切らん　と宣給ひたらんは、尙ほ、良からん。何條、百日の鯉を切らん」と批評したといふ話（二百卅一段）さる見樣のよい御子息が偶々父の前で人と話をするに、殊更、史記や漢書の文を引いて賢者がましく語つたといふ話（二百卅二段）など、色々の意味で謙虚な德を暗示してくれる。

かしこげなる人も、他人の上をのみ計りて、己れをば知らざるなり。我を知らずして外を知るといふ理あるべからず。されば、己れを知るを物知れる人といふべし　　百卅四段

兼好の道德觀の基調は、この一點に存するやうである。なほ、徒然草中には、老人が身の老いたのを忘れて、俗世に望を抱くことを卑しとしてゐる段が多いが（七段、百十三段、百卅四段、百五十一段）結局、これも上述のものと同方向の考へ方である。

二、人は、つねに自己を捉へてゐて、たとへば興にすぎたりして、物嗤ひの種になることがあつて

はならぬ――この一節で、徒然草の讀者は、直ちに仁和寺法師の鼎さわぎを思ひ浮べられたであらうが、全く、あの文章は巧く出來てゐる。いつ迄も、讀者の頭に、泌みついてゐる樣な書振りである。これは次の五十四段の、兒騷ぎの話と同じく、興に乘りすぎての失敗であつて、自己についての注意が不足したに出來してゐる。「興なき事をいひてもよくわらふ」人は下品な者だと、つぎの五十六段にも兼好は、かゝる人を批難してゐる。仁和寺法師といへば、老法師が石清水八幡に參るとて、案內者なしにゆき、極樂寺、高良神社を岩清水と誤つて參拜し、得々として歸つたといふ話もこの部に屬すべきであらう（五十二段）かうした點から實は、氣むづかしげな兼好の面相が、讀者の眼前に浮び來るのも止むを得まい。兼好の事物の底に徹してやまぬ眼識は、瞬時にして事物の是非曲直を道破する。百七十一段においては、貝おほひや、碁はじきの祕法を述べて、「萬づの事、外に向きて求むべからず。只、此處もとを正しくすべし」と結論し、更に政道の祕鑰に骨子を移してゆく。かうした場合に、それとなく論語などを隱引してゐるのであつて、それが全體七八ヶ所に迄及んでゐる。つぎに上げる一段は、泥醉の結果失敗を演ずるといふ話で、この場合適例ではないが、兼好が如何にかうした心理狀態を會得して巧に表現してゐるかがそれで分るであらう。

下部に、酒飮ますする事は、心すべき事なり。

宇治に住みける男、京に具覺坊とて艶めきたる遁世の僧を、小舅なりければ、常に申し睦びけり。

ある時、迎ひに馬を遣はしたりければ

「遙かなる程なり。口つきの男に、先づ、一度せさせよ」

とて、酒を出だしたれば、差し受け／＼よゝと飲みぬ。太刀うち佩きて甲斐／＼しげなれば、頼若しく覚えて、召具して行く程に、木幡の程にて、奈良法師の兵士数多具して遭ひたるに、此の男、立向ひて

「日暮れにたる山中に怪しきぞ止まり候へ」

と言ひて、太刀を引抜きければ、人も皆太刀抜き、矢はげなどしけるを、具覚坊、手を摺りて

「現し心なく酔ひたる者に候。まげて許し給はらん」と、言ひければ、各嘲りて過ぎぬ。此の男、具覚坊に逢ひて

「御坊は口悔しき事し給ひつるものかな。己れ酔ひたる事侍らず。高名仕らんとするを、抜ける太刀空しくなし給ひつること」

と怒りて、ひた切りに切り落しつ。さて、

「山賊（やまだち）有り――」

と罵りければ、里人起りて出であへば、

「我こそ、山賊よ」

と言ひて、走りかゝりつゝ切りまはりけるを、數多して手負ほせ、打伏せて縛りけり。馬は血つきて宇治大路の家に走り入りたり。あさましく、男共數多走らかしたれば、具覺坊は、梔原に、によび臥したるを求め出だして、擔ぎもて來つ。からき命生きたれど、腰切り損ぜられて片端になりにけり。——八十七段

いかにも口取男の態度が活寫されてゐるではないか。これで兼好がありふれた道話者でもなければ、この文が飲酒戒の例話としてのみ書きやられたものでないことが、誰にも諒解され得よう。わたくしはこゝに思ふ。五十歳に近い作者兼好の胸奥にこそ、かの口取男の如き盛んな心、勇める心、燃えようとする心が潜んでゐたのではないかと　兼好の文脈は、時に平野の上に突兀たる山嶺を形作る。かれは、急に若返つた者の様に、燃えつく様な筆を紙上に走らしてゆく。

若き時は血氣、内に餘り、心、物に搖きて情欲多し。身を危ぶめて、碎け易き事、珠を走らしむに似たり。美麗を好み寶を費し、是を捨て苔の袂に窶れ、勇める心熾りにして物と爭ひ、心に恥ぢ羨み、好む處日々に定らず。色に耽り、情に賞で、行を潔くして、百年の身を誤り、命を失へる例願はしくして、身の全たく久しからん事をば思はず。好ける方に心ひきて、長き世語りともなる、身を誤つことは若き時の仕業なり（下略）——百七十二段

ロマンチックな青年の心理を描いて餘蘊がないではないか。兼好なればこそ、五十歳にして、なほ、

この矍鑠たる文を成し得たと、わたくしは思ふ。

三、迷信は、どこ迄も迷信にすぎない、人は正しい信念に生くべきである　これに屬するものには、赤舌日（しやくぜつにち）が無意味であるといふ話（九十一段）放れ牛の檢非違使別當の座に上つたのを、怪異とするものがあつたが何の變化も起らなかつたといふ話（二百六段）龜山殿の敷地に、無數の蛇塚があつたが、その上に家を建築しても別に凶事もなかつたといふ話（二百七段）等の諸段がある。

四、諸藝優勝上達の心得について――兼好は、「己れが境界にあらざる者をば、諍ふべからず、是非すべからず」（百九十三段）と言つてゐるが、一般の疑問に對してよく諄々と答へやるべきを自ら戒めてゐる樣に（二百卅四段）、かれが競技等諸藝における心得書きは、中々親切を極めてゐると言つてよい。ある説經師を目的とした青年が、その豫備として馬術（馬を以て導師に請ぜられた場合のため）や早歌の謠ひ方（佛事の後の宴會の隱し藝のため）等を學んでゐる間に、年が長じて、遂に最初の目的を達し得なかつたといふ話は、まづ意味深い諷諭譚である。さて碁を打つて勝つには、一手も徒らにせず、十一の石をとるためには十の石をも潔くすてる考を持てよ（百八十八段）つぎに、双六に優るには、勝たんことを思つて打つてはならない（百十段）博奕の心得は、相手が負けて殘りなく打入れようとする時手を引くにある（百廿六段）弓道において的に向ふ時、必ず二本の矢を手挾まないこと（九十二段）ある高名の木登りが、その手下の者の、高い梢から下り來る時、軒長（のきたけ）ばかりになつて、始

めて「過ち（あやま）すな」と戒めたといふ逸話（百九段）――なほこれに類した話はその他にもあるであらうが、何れも玩味すれば、無限の趣がある。特に、人知れず藝を身につけて世に出ようとする人々に對する次の戒飭は、わたくしをして身にしむばかりに共感せしめる。

――かくいふ人、一藝も習ひ得る事なし。未だ堅固、片端なるより上手の中に交りて、謗り嗤はるゝにも恥ぢず。つれなく過ぎて嗜む人、天性其の骨なけれども、道に泥まず、濫りにせずして年を送れば、堪能の嗜まざるよりは、終に上手の位に至り、徳長け、人に許されて並びなき名を得る事なり（下略）　百五十段

この外に、五、細心な順備心のために名をあげた話、六、有職故實の心掛の大切な話　などゝ項目を列擧することが出來るが、こゝには省略しておく。

こゝで、わたくしは一寸、兼好と、紫式部、西行との比較問題に立歸りたい。およそ教訓的態度の有無は、人間の性格を二大別してゐるものだと、わたしは思ふ。西行は、一僧侶でありながら、全然說教などの出來ない意味に、兼好と對角線上にある。しからば紫式部は、兼好的であつたらうか、はた、西行的であつたらうか。式部はその日記では、甚だ言を謹しんでゐる如く見えるが、もし式部をして男たらしめたら、父も惜しんでゐた樣に、兼好的に仕立上げらるべき型ではあるまいかと思ふ。

さて、岡西惟中は、徒然草を賞揚して「兼好一代の學問の歸するところは三教一致に落着せる也」

(直解)と言つてゐるが、わたしは本論で未だ、かれの佛教觀や道教觀に、何等觸れようとしたことはなかつた。これからその方面に延びてゆくべき兼好論はいよ／＼その時にさしかゝつた譯である。

主ある家には、すゞろなる人、心の儘に入來ることなし。主なき所には、道行く人濫りに立入り、狐、梟やうの物も人氣にせかれねば、所え顔に入棲み、木魂などいふ怪しからぬ形も現はるゝ物なり。(中略)我等が心に、念々の欲しき儘に來り浮ぶも、心といふ物無きにやあらん。心に主あらましかば、胸の内に若干の事は入來らざらまし――二百卅五段

兼好は、徒然草の終り近くに、かゝる一段を殘してゐる。思ふに、かれ兼好の心に、主の鎮座するまでには、かれも、またかなりな精神的險峻を、幾重ともなく越えなければならなかつたのであらう。人間の心と心との微妙な交渉――それが直觀されてくればくる程、又、一層、愛憎の矛盾が、かれを捉へていつたのではあるまいか。

兼好は、西行程の濃い情熱を持たぬために、かれ程、純一に、率直になれなかつたかも知れない。また、西行の逸話として傳へられた多くの強くて生一本な性質――例へば、天龍渡事件で折角隨いて來た西住を京に追返したとか、射術をしてゐる際に娘の頓死を耳にして、さりげない態度をつゞけたとか――は、兼好の到底眞似たになし難い所のものであつた。しかし、これも結局、兼好の博大な愛

情からではないか。西行の如く娘の訃報に對し平然としてゐたその心も豪くはあらうが、悲嘆に際して前後を失ふ程の人の心にも懐しみが感ぜられる。

いま、兼好の家集などから、かれの出入した公家を檢べて見るに、比較的に多方面に亙つてゐる。西行の交友が小範圍に限られてゐた事實と、そこにまた甚しいコントラストが見える。「御國讓りの節會行はれて、劒璽、內侍所渡し奉らるゝ程こそ限なう心細けれ。新院の下りゐさせ給ひての春、詠ませ給ひけるとかや「殿守のとものみやつこよそにして掃はぬ庭に花ぞ散りしく」今の世の事繁きに紛れて、院には參る人もなきぞ淋しげなる。」云々（廿七段）と述べた新院は、花園上皇かと思はれる節があるが、同情深い兼好の心持がその間によく出てゐるではないか。かれは、持明院統の方々、伏見天皇皇子尊圓法親王、後伏見天皇皇子尊胤法親王などの處にも出入して歌を詠んでゐるし、無論、大覺寺統の方では、後宇多天皇の御弟寛尊法親王や、同天皇の皇子承覺法親王の許に出入して、時に歌を召されたり、御催しの歌會に加はつたりしてゐる。從つて、二條家の爲世や、爲時爲定等との交はりもあれば、一方また冷泉家の大納言の歌合にも出るといふ風である。西行には、そんな不偏不黨の態度をとるやうな自制心はなかつた。かれは恩寵ふかい主家をも、見すてる程に俠量であつた。徒然草に一箇所、西行の事柄にふれた段がある。西行論において、一寸述べてはおいたが引用すると、

後德大寺大臣が寢殿に鳶居させじとて、繩を張られたりけるを、西行が見て「鳶の居たらん、何か

は苦しかるべき。此の殿の御心、さばかりにこそ」とて、その後は參らざりけると聞き侍るに、綾小路宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩を引かれたりしかば、かの例し思ひ出でられ侍りしに「眞や、烏の群れゐて池の蛙をとりければ、御覽じ悲しませ給ひてなん」と、人の語りしこそさてはいみじくこそ覺えしか。德大寺にも如何なる故かありけん　十段

この一文は、いかにもよく、思慮の深い兼好と、刹那的感情に支配され勝の西行との性格別を語つてくれてゐるではないか。もちろん、西行が德大寺家を疎くしたのは、他に充分の理由があつたので、或は、この逸話は、全くの假託のものであるかもしれないが、それにしてもこの話は、人をしていかにも西行的だと頷かするに充分であらう。兼好が、御宇多上皇の御弟性惠法親王（綾小路宮）の話をひいて、最後に、「德大寺にも如何なる故かありけん」と、輕く言ひ切つた所に、いかにもはつきりかれ自身の面目が出てゐる。兼好には、（この傳說を事實とすれば）西行の、感情に走りがちなやり口がどこまでも氣に入らなかつたものと見える。

西行は、他人によく憤り、他人をよく毛嫌ひした。しかも、容易に自然美に陶醉を求め、すべてを忘れてその美觀に見とれることが出來た。

兼好と自然美

それに關しては、前にも述べておいたが、こゝに至つて西行の態度との間に大きい相違の存することに氣付かれたであらう。西行の方は、既に、自然美を感じすぎて、その蠱惑を怖れ、その幻妖から離脱することを努める人であつた。兼好の方は、

反對に、自然美の靈醉を求めながら、なほ屢々そこから醒め出て人間愛に飢ゑる人であつた。世に、兼好をもつて、あらぬ拗者的隱者の如くに詰るものがある。わたくしは、かゝる批難者に、ぜひ、この隨筆を再讀して玩味するやうに勸めたい。さうして、如何に兼好が人を愛しようとして惱みつくしてゐたかを讀んで貰ひたい。かれの一言一句、それは幾度、自己叱責のために吐かれてゐるか。かれは、己が弱さを餘りに見知ればこそ、筆を持つてなほも、それを鞭に鞭打つのである。かれは、頓阿や淨辨等とは、互に暖かい友誼を結んで得た。しかし、世俗の人々すべてに對しては、必らずしも同轍には行かなかつた。方角を異にした心と心との銀線は、しかくた易く共鳴になし得なかつた。それは、西行の抱いた惱み、そのまゝのものである。家集より――

人に知られじと思ふ頃、古里の人の横川迄尋ねて來て、世の中の事どももいふ、いとうるさし。

年ふれば訪ひ來ぬ人も無かりけり世の隱家と思ふ山路を

されど歸り出る後はいとこう〳〵し

山里は訪はれぬよりも訪ふ人の歸りし後ぞ淋しかりける

いかなる折にか戀しき時もあり

あらしふく深山の庵の夕ぐれを古里人は來てゝ問はなん

心にもあらぬやうなることのみあれば

何とかく蜑の捨舟すてながらうきよを渡るわが身なるらん

山里の垣ほのまゝ葛今更に思ひすてにし世をば恨みじ

あはれなる夢を見て打駭ろきたるに語るべき人もなければ

醒めぬれど語る友なきあかつきの夢の涙に袖はぬれつゝ

見ずもあらで夢の枕に別れつる魂の行衛は涙なりけり

これらには、何れも兼好が、西行と共有してゐる心境が窺ひ得られる。また徒然草十二段の「同じ心ならん人としめやかに物語りして、をかしき事も世の果敢無き事も、裏無く言ひ慰まんこそ嬉しかるべきに、さる人あるまじければ云々」の一文にも、如何にもはつきり兼好自らの體驗が出てゐるではないか。しかも世俗の社交の殆んどが、心と心との交りでないことを指摘して、最後に「[illegible]逈に隔たる所のありぬべきぞ佗しきや」と結んでゐるその「佗しきや」の一句を讀み終る時誰しも生の底に潜む寂寥に對し、根強い戰きを感ぜずには居られないであらう。

しかも、ぴつたりと胸と胸を合はせ得た友に對し、兼好が如何に、暖かい抱愛の情を送り得てゐることか。歌集中「冬の夜、荒れたる所の簀子に尻掛けて、木高き木の間より隈無く洩りたる月を見て曉迄物語りし侍りける人に」とか「秋の夜、鷄の鳴く迄人と物語りしに歸りて」とかいふ詞書きを讀

むと、隨筆中の、百卅七段、百七十段、百七十五段などの心持迄、はつきり思ひ浮べられて來るではないか。百七十段の如き始めに、雜談を戒めておきながら、

同じ心に向はまほしく思はん人の、徒然にて「今、暫し、今日は心靜かに」など言はんは、此の限にはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべき事なり。その事と無きに人の來りて、長閑に物語りして歸りぬるいとよし。また、文も久しく聞えさせねばなどばかり言ひおこせたるいと嬉し――

百七十段

と、親しき仲らひには、特に例外を設けてゐるのもかれらしくて面白い。

百七十五段の方は、さらに酒飲相手に就いてゞあるが、これらを以て、すべて兼好が經驗を語つたものであると斷言しても異論は出まい。

世の中ありしにもあらず、移り代りて慣れ見し人も無くなり行くをかたるべき友さへ稀になるまゝにいとゞ昔の忍ばるゝ哉

これは、大覺寺統の方々の吉野落、すなはち、南北兩朝分立による悲劇をさしたのであらうが、かゝる間にも暗い社會相は、遠慮會釋なく、氣弱い法師の心を傷めたのであつた。愛を友に求めてやまない兼好の心の痛ましさや思ふに餘りある。

さて、兼好の宗教觀が、極めて學的性質のものであつたといふことは、動かし難い處である。かれが、佛教においては天台派を奉じ、神道においては南部派的であるのも、この傍證となすに足りる。

さて、神道との關係を索めると、これは世の兼好論者の云ふ如く、明瞭に、書中に現はされてはゐない。まづ四ヶ所においてのみこれを拾ひ出すことが出來るが、それによつてわれ〳〵の考へ得るかれの神道上の知識は、せい〴〵延喜式を繙いた程度のものではなかつたらうかと思はれる。例へば、神樂こそなまめかしく面白けれ（十六段）、齋ノ宮の野宮におはしますありさまこそ優しく面白き事の限とは覺えしか云々（廿四段）の二首しか殘つてゐない。歌集にも、わづか鹿島神社に奉納したものと、貴船神社を詠んだものと程度の讃美的見方であつて、そこには到底、西行の敬虔さは求め得難い。かれに見る如き心からの尊崇さは、徒然草に表はされてゐないのは、世ノ兼好論と違つて甚だをかしい。

しかし、佛教學に對するかれの知識は、決してその程度のものではなかつた。行者用心集（存海著）に見える兼好に對する、天台學の無双の道心者であるといふ賞讃も、あながち棄てたものではない。かれが、最初から比叡山や横川に縁の多かつたことは、諸方面からこれを考證することが出來る。

一、長兄は天台の大僧正であつた。

一、かれは、横川で出家を遂げた。

一、兼好法師集に、比叡山で詠んだ歌二首、横川に身を隠してゐる時によんだ歌二首がある。

一、かれは、横川の靈山院で、生身供の式に就いての文を書いた。（法師集中の詞書きによる）

一、兼好法師集で、兼好が歌を召された方々の中、尊圓法親王や尊胤法親王は、何れも天台座主についた方々であり、その他友人の頓阿などもすべて天台關係の者であつた。

これらは、何れもその理由をなすに十分足るものであらう。

こゝに、わたくしは、天台的素養の上に、厭離穢土欣求淨土の他力本願の信仰を加へていつた紫式部を聯想するのである。かく台宗の環境にあつた兼好は、果して法華經の供德に由て、一實圓頓の妙旨を解了し、得たであらうか。少なくとも、當時の比叡山延曆寺の中にあつて。止觀明靜の妙行を修し了つたであらうか。

わたくしは、すでに、兼好の宗教觀（徒然草に現はれた）は、かれの體驗の結果であることを斷言しておいた。全く、かれは學的に宗教を詮議しながら、隨筆の中には教理的理想論に關し、ほとんど、一言の筆を加へてもゐない。わたくしは、兼好が人間相互の愛情について、いかに眞劍に考へたかを前說した。われ／＼人間生活には、自ら警戒を要する樣々の欲望がある。第一、名譽欲。第二、色欲。第三、利欲。第四、生命欲。これらは、何れも、愛他の精神に反した我欲の世界であり、永く宗教の、調和を計つて來た人間性にほだした矛盾性であつた。宗教に頭を突込めて入つた兼好を惱ます問題も、ほどこの域を出てゐない。かれは、欲望の海に喘ぐ俗界の人々を、たえず鋭利な眼識で凝視して

ゐる。
蟻の如くに集まりて、東西に急ぎ南北に走る。高きあり、賤きあり、老いたるあり、若きあり、行く處あり、歸る家あり。夕に寢ねて、朝に起く。營む所何事ぞや。生を貪り、利を求めて止む時なし。

身を養ひて何事をか待つ。期する所、只老と死とにあり。其の來る事速かにして、念々の間に止まらず。是を待つ間何の樂みかあらん云々――七十四段

それは何といふ力強い筆致であらう。かれは俗世を思うて憤激する。しかも、そこに止むに止まれぬ憐愍の情の横溢が感ぜられる。

名利に使はれて靜かなる暇無く、一生を苦むるこそ愚なれ。

財多ければ身を守るに拙し。害を買ひ災を招く媒なり。身の後には金をして北斗を支ふとも人の爲めにぞ災はるべき。愚かなる人の目を喜ばしむる樂び、またあぢきなし。大なる車、肥えたる馬、金玉の飾りも心あらん人は、うたて、愚かなりとぞ見るべき。金は山に捨て、玉は淵に投ぐべし。利に惑ふは、すぐれて愚かなる人なり云々

と、かれの語調は、漸次に荒らかになつてゆく。

智慧と心とこそ、世にすぐれたる譽も、殘さまほしきを、つら／＼思へば、譽を愛するは、人の聞

を喜ぶなり。譽むる人、誹る人共に、世に止まらず。傳へ聞かん人、亦々速かに去るべし。誰をか恥ぢ、誰にか知られん事を願はん。譽は、亦毀の本なり。身の後の名、殘りて更に益なし。此れを願ふも次に愚かなり。……卅八段

かれの言や、まことにその當を得てゐるではないか。

惟ふにかゝる人生觀に到達し得た兼好が、どうして、ぼんやりと一左兵衞尉として永らへ得るであらう。もちろん、他人の昇進に對する嫉妬心も時に、生じたかも知れぬ。自分の貧乏さを託つ氣も時に、催うしたかも知れない。しかし、もつと深くかれの胸底を搔き攫つてゆくものは、もつと本質的もつと根本的の疑惑であつた。かくまでも、日常生活の氣持を左右する人間の名利欲の本體は、抑も何物であるか。そこに、かれは、佛祖の說きのこした教理の尊とさ、意味深さを、しみじみと感ずるのであつた。それは、崇高深遠の沒我の世界であつた。無抵抗の世界であつた。

友とするに惡き者七つあり。一には高くやんごとなき人。二には若き人。三には病無く身强き人。四には酒を飮む人。五には猛く勇める兵。六には虛言する人。七には欲深き人。良き友三つあり。一には物くるゝ友。二には藥師。三には智慧ある友。　百十七段

これは五十歲の兼好の隨筆とはいへ、隨分、大膽な口吻ではないか。しかし、かれが如何に、自省心の無

い自惚者や社會上の强者を惡んだかゞ、これらの中によく現はれてゐる。かの一段において、陣笠連の尊大振を嘲弄し、二段に移つて權者の贅澤さを誹謗した心持も、この點から推察されるし、「物に爭はず、己を枉げて人に從ひ、我が身を後にして、人を先にするには如かず」（百卅段）と云ひ「身死して財殘る事は、智者のせざる處なり」（百四十段）とこれに留めを差してゐる所にも、無欲、無我の世界に、漸次涅槃の俤を認めて來るかれの心持が次第に顯出してゐるではないか。かくて、かれの始め、分に應じて努力すべきことを主張したこと（百卅一段）は、どうしても「他に優る事のあるは大なる失なり」（百六十七段）といふ結論を導いて來「人に優らん事を思はゞ、只學問して其の智を人に優らんと思ふべし」（百卅段）といふ考も、やがて、「おのれ知りたることも、さだかにも辨へ知らず」（百六十八段）と答へるがいゝといふ如き消極的態度の推讃に及ぶのであつた。

かれの沒我的傾斜は、かくて一歩々々と深くなつてゆく。「我身のやんごとなからむにも、增して數ならざらんにも、子といふ者無くてありなん」（六段）といふ產兒忌避說も、その次の段に述べられてある通り、子孫のために我欲增長を來すを怖れるものにとつて當然の結論でなければならぬ。いふ迄もなく、これ、佛門においても僧侶に妻帶を禁じた主因であつた。

かくて、かれは、更に市塵を離れ、幽靜閑雅の地に隱遁生活を營む趣致を說き、進んで出家脫俗、圓頂緇衣の信仰生活の意味深き點を力說する。無常觀は、人生の歸趨を訓へ、かれの燃え立つ內生命

は、驀直に急端を流下する。それは目も綾な程の往相廻向の相であつた。しかし、見よ。兼好の蹠は、ひたと佇立する、かれの日に焼けきつた額は、ふと後に向く。その刹那におけるかれが態度の轉換の目ま狂ほしさ。叱咤は撫言に、いきり立つた瞳は笑ひに、のばされた兩手は輕く膝の上に　かくてかれは、洒々たる溫容をもつて、世相の中に自然の上に靜かに立歸るのである。下卷に及んで、「いやしげなる物　家のうちに子孫の多き」（七十二段）「妻と云ふ者、男は持つまじきものなれ」　「子など出で來てかしづき愛したる心憂し」（百九十段）など、同じく產兒否定說を繰返しながら、如何にその語感の弱々しく低徊的なることよ。かれは、どこ迄も傍觀的に述べ去つて、しかも己れの言葉に醉つてゐるもの丶やうに思はれる。兼好の肖像畫に現はれたユーモアーは、すなはち、この瞬間を寫したものと言つてよい。扶桑隱逸傳の著者は、兼好の文を評して「少有俳體」と言つたのもこの點を押さへてのことではあるまいか。

「飛鳥川の淵瀨常ならぬ世」（廿五段）　特にも、五濁盛り熾つて、干戈の響やむ時なく、末代の觀念自ら、人心に生じた鎌倉末期である。「身を養ひて何事をか待つ。期する所、只老と死とにあり。その來る事速かにして、念々の間に止まらず」（七十四段）と、かれの憤ほりは、昂進する。「近き火などに、逃ぐる人は「暫し」とやは云ふ。身を助けんとすれば、恥をも顧ず。財をも捨てゝ逃れ去るぞかし。命は人を待つ物かは。無常の來る事は、水火の攻むるよりも速かに、逃れ難き物を、その時老いたる親、

稚き子、君の恩、人の情、捨難しとて捨てざらんや」(五十九段)と次に債は怒號に變る。更に「一都の中に多き人、死なざる日はあるべからず。一日に一人二人のみならんや。(中略)若きにもよらず、强きにもよらず、思ひ掛けぬは死期なり。今日迄逃れ來にけるは、有難き不思議なり。暫しも世を長閑には思ひなならんや(中略)靜かなる山の奥、無常の敵きほひ來らざらんや。その死に臨める事、軍の陣に進めるに同じ」(百卅七段)と、われ〳〵は、更に、「世に從はん人は、先づ、機嫌を知るべし」(百五十五段)の項に、日を移して行く時、「死期は機を待たず。死は前よりしも來らず、豫て後に迫れり。人皆、死ある事を知て、待つ事而も急ならざるに、覺えずして來る。沖の干潟遙かなれども、磯より鹽の充つるが如し」といふ結びに接してゆく時、冷水の背筋を傳はる如き戰慄を感ぜざるを得ないではないか。翌日賣拂ふ契約をした牛がその前夜に死んだといふ諷話(九十三段)木の股に登つて居眠りする物見法師についての譬喩(四十一段)人間の業を、雪佛に金銀珠玉の飾をなすに比較した話(百六十六段)など、例の事ながら無常に關する巧みな說話である。

わたくしは、こゝで、再び兼好の心裡に立返つて行かう。人間の持つて生れ出た生存欲、がむしやらに生きようと足掻く本能欲、病、死の神の不意な出現に依る畏怖、――それらは、色欲、名利欲以上に强く深いと言ひ得る。しかも兼好は、果して、その畏怖心から解脫し切つたのであらうか。徒然草の、至る所に、宗教問題に關して死魔の暴力を描いたかれ――そのかれは、己を一抹の煙に消してゆ

く死神の白眼に無關心であり得たのであらうか。わたくしには、どうもさう思はれない。

老來りて始めて道を行ぜんと待つ事勿れ。古き墳、多くは是れ少年の人也。計らざるに病を受けて、忽に、此の世を去らんとする時にこそ、初めて過ぬる方の誤れる事は知らるなれ。（中略）人は、只、無常の身に迫りぬる事を、心に犇と掛けて束の間も、忘るまじきなり。さらば、などか、此の世の濁りも淡く、佛道を勤むる心もまめやかならざらん　――四十九段

と、死の強い意識から信佛への道を說いた一節を讀み、それから

日暮れ途遠し。吾生既に蹉跎たり。諸緣を放下すべき時なり。信をも守らじ、禮儀をも思はじ。此の心をも得ざらん人は、物狂ひとも言へ、現なし情なしとも思へ。譏るとも苦しまじ、譽むるとも聞き入れじ　……百十二段

といふ惰弱な己が心に鞭打する憤激したかれを見る時、怒れるかれの形相の前に、死神の亂舞する幻を感ぜしめられるのである。もし、この百十二段のこの一節をも、徒然心の餘沫、筆の遊びと解釋する人があるならば、遺憾ながら、わたくしはこれ以上、その人と兼好論を共にすることは出來ない。なほ、五十九段の「大事を思ひたたらん人は、去り難く心に掛らん事の本意を遂げずして、さながら捨つべきなり云々」（内海弘藏氏は、この大事を專門的職務として解釋してゐられたやうであるが、さうではあるまい）百八十八段の「一事を必ずなさんと思はゞ他の事の破るゝをも痛むべからず。人の

罵りをも恥づべからず。萬事に換へずしては、一の大事成るべからず云々」といふ如き節にも、信教の境地、すなはち、大事の前に、兼好の主觀の激しく燃燒する樣を見ることが出來る。しかり、かれの心は燃えに燃えてゐるのである。

この場合、一寸先きに言ひ及んだ賣約中死んだといふ牛の話を玩味して見るとまた、無限の味が出てくる。特に、あの話の中の第二の批判者は、兼好自身ではないかと思はさしめるものがあるのである。それは――

されば人死を苦まば、生を愛すべし。存命の喜び日々に樂しまざらんや。愚かなる人、此の樂しみを忘れて煩かはしく外の樂しびを求め、此の財を忘れて危く、他の財を貪ぼるには、志滿つ事無し。生ける間、生を樂しまずして、死に臨んで死を恐れば、此の理あるべからず。人皆、生を樂しまざるは死を恐れざる故なり。死を恐れざるにはあらず。死の近き事を忘るゝなり。若し又生死の相に預からずと言はゞ、實の理を得たりと言ふべし　九十三段

わたくしは、この一節を讀むごとに、磬鐘を耳にするが如きある畏れを覺える。「若し又、生死の相に預からずと言はゞ云々」――それは口にこそ容易に表はしうれ、分秒の隙なく、生死解脫の境界にあることは、われ〳〵にとつて難い〳〵事でなければならぬ。

徒然草の讀者は、また書中のエピソードの中に、非常識な人物を題材にしたものゝ多いことを認め

るであらう。例へば、馬洗ふ男が、あし／＼と馬を叱りながら洗ふ聲を、阿字／＼と聽いて、大に尊とがる栂尾上人（百四十四段）自分の馬を堀へ落したある馬ひきに對し、徒らに難しい佛語を以て罵りながら得々としてる證空上人（百六段）親芋を好んでつねに食した盛親僧都（六十段）など高僧の逸話、それから、兒を思うてくさめ／＼と稱へながら清水に參詣する一老尼の話（四十七段）大根を藥として愛用してゐた一武士が、危險に瀕した時、大根の精が顯れて助太刀した話（六十八段）などもその類似の奇談である。殊に百五十二段から百五十四段迄の藤原資朝の逸話、二百十五段、二百十六段の北條時頼の逸話、これらは悉て、あまりに常識を脫した話ではないが、これらをもつて、無意味なきゝがきとのみ解釋するのは、はなはだ誤つてゐると言はねばならぬ。むろん、かうした說話の中には、化けそこなつた狐の話の如き只それ迄のもので、何等比喩的意味のないものもある。しかしそれら、單純な噂咄の記錄についても、考へるなら、何故、兼好が特にそれを書きとめたかといふ疑問が生ずるだらうと思ふ。それは兼好を知るには意義深い手がかりとなる。況んや、畸人脫俗者とも見るべき人々の奇行に對し、兼好のかくも、興味を持つたことは面白い問題となりはしないか。

　兼好、常識的の兼好に、所謂奇行の眞似すら出來かねたらうといふことは、誰にも首肯出來るであらう。しかし、わたしは思ふ。自分自身の理性的桎梏を自認したと同樣、兼好は、生一本に、殉情的に、非常識的に、奇行家的になり得ない自分を、こゝでも知り切つたであらう。そして餘りに生眞面

円な自分を、時に誘つても見たてあらう。そこで自ら常軌を脱し得ないがために、畸人の奇行にひそかな憧憬を抱きかくは書きとめたのであらう。しかし、かれが信仰生活においてのみ、前說の如く熱中したことを思うて、そこにまた兼好の兼好たる點を、はつきり思ひ描かざるを得ないのである。八百煩惱から解脫せしめて、光明遍照の境地に、われ〳〵を導かうとする兼好は、また親切を極めてゐる兼好であつた。

まづ、世上一般の隱逸者に、出家の意味を述說する。兼好が、辭官後放浪の身となつて出家入道するまで、かなりの年月のあつたことは、既に述べたけれど、あらゆるトラジションから離れて、己れ獨り純眞な生活を拓いて行かうとする時、宗教の形式方面が眼中に入らぬことは當然である。出家それ自らに何の意味がある、袈裟そのものに何の價がある。「道心あらば住所にしもよらじ。家にあり、人に交はるとも、後世を願はんに難かるべきかは」（五十八段ノ某ノ主張）自分は自分であるのみ。兼好もかう考へられた時代があつたに違ひない。西行の如く出家になつても、結局、貪る心の根は終生絕えなかつたではないか。俗衆に交り、俗服を纏ひ、そのまゝに、悟脫するこそわれ〳〵の望むべき所ではあるまいか。しかし、その主張にも、自ら誤謬がある。これは兼好にも覺悟されて、進んで辭官の決意を果した譯であり、後には出家をも遂げてしまつた譯である。

――さればとて、「反けるかひなし、さばかりならば、なじかは捨てじ」など言はんは、無下の事な

り。流石に一度、道に入りて世を厭はん人、假令望ありとも、勢ある人の貪欲多きに似るべからず。紙の衾、麻の衣、一鉢の設け、あかざの羹、幾何か人の費へをなさん。求むる所は安く、其の心早く足りぬべし。形に恥づる所もあれば、さは言へど惡には疎く、善には近づく事のみぞ多き。人と生れたらんしるしには、如何にもして世を逃れむ事こそあらまほしけれ。偏に貪る事を努めて、菩提に赴かざらんは、萬の畜類にかはる所有るまじくや —— 五十八段

しかし出家といふことが、四十男に容易に出來るものではない。やはり始め憧憬されたのはかの「水をも手して捧げて飲みける」許由や、「冬月に衾無くて、藁一束ありけるを」床とした孫晨（十八段）の生活、「山澤に遊びて魚鳥を見れば心樂しむ」んだ稽康（二十一段）の心持だけであつて、かれは、「人遠く水草清き所に逍遥ひ歩きたる許り、心慰むる事はあらじ」と、隱者の無垢淡恬とした態度をのみ羨望してゐる。出家せずとも乞食生活、託鉢生活 —— それで充分、生活の純化が出來るのだと思はれたのであつた。

身を隱す宿の垣ほの篠薄忍ばすほにも出でにける哉

山風の溜らぬ床も住まれけり身を槇柴の庵結びつゝ

山深み待たれし鳥の聲をだに聞かで幾夜の寢覺めしつらん

やまざとの住居もやう／＼年經ぬることを

淋しさも習ひにけりな山里に訪ひ來る人の厭はるゝまで

かれはかくて様々の苦行、寂寥にも絶え續けた。そこに、外相（形式）が如何に内相の圓熟に有意義であるかゞ、僅かづゝ分つて來た。事實、當時の佛教界の混沌さは想像以上で、各宗各派戲論妄語を事とし罵詈雜言を相戰はした。若し然らざる者は仁和寺の法師的に、舞曲を事とし連歌に耽るといふ風で、「人多く行き訪ふ中に、ひじり法師の交りて、いひ入れ佇みたるこそ、さらずともと見ゆれ」（七十六段）と、兼好をして顰蹙せしめる樣な俗僧を以て、至る所充たされてゐたのである。特に叡山の亂脈は、慈圓座主の德を以てすら、これを革淸することが出來なかつた。しかも、その間にかれ兼好は、なほ外相の意義を十分認めてゐるのであつて、つぎの一段は、この意味に何といふ妙味深い一節であらう。かれ兼好が、髮を剃る迄に至つた強い要求が、これによつて、はつきり會得出來るではないか。

筆を取れば物書かれ、樂器を採れば、音を立てんと思ふ。盃を取れば酒を思ひ、釆を採れば攤打たん事を思ふ。心は必ず事に觸れて來る、假にも不善の戲をなすべからず。あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。卒爾にして多年の非を改むる事もあり。假に今、此の文を廣げざらましかば、此の事を知らんや。是、則ち觸るゝ所の益なり。心、更に起らずとも、佛前にありて鈴を採り、鐘を取らば、怠る中にも善意自ら修ぜられ、散亂の心乍らも繩床に坐せば、覺えずして禪定なるべし。事、理もとより二ならず。外相、若し反かざれば、内證、必ず熟す。強ひて不信といふべからず。仰ぎて此れを尊むべし——百五十七段

なほ、出家を遂げる機會に就いて述べた次の一節のことばも面白い。

所願を成じて後、暇ありて道に向はんとせば、所願盡くべからず。如幻の生の中に何事をかなさん。悉て所願皆、迷想なり。所願心に來らば、妄心迷亂すと知て一事をもなすべからず。直ちに、萬事を放下して、道に向ふ時、障りなく所作なくて、心身永く靜かなり——二百四十一段

辭官、彷徨、隱遁、出家道心——それは、兼好の次々へと追ひ詰めて行つたプロセスであつた。しかし、われ／＼の知る兼好法師は、ついに、一山一寺に籠り、詩歌をすてゝ讀經三昧に耽り、友人をすてゝ瞑想にのみ浸つて居る如き人ではなかつた。後宇多上皇の御三年忌の御法會と言へば都に出て來たり、弘融僧都に誘はれて伊賀方面へも出かけて行くといふ人であつた。次の一段は、伊賀にゆく途中、かの栗栖野を經た時の記事であらうと推測される。かうした短文にも、兼好の相が躍如としてゐるのが面白いではないか。

神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入る事侍りしに、遙かなる苔の細道を踏分けて、心細く棲しなしたる庵あり。木の葉に埋もるゝ筧の滴ならでは露音なふ物なし。閼伽棚に菊紅葉など折散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、あはれに見る程に、彼方の庭に大きなる柑子の木の枝もたわゝになりたるが、周りを嚴しく圍ひたりしこそ、

少し興醒めて此の本無からましかばと覺えしか。　十一段

行脚姿の兼好が、山中の草庵を、横に眺めながら歩いてゐる様が、そのまゝ目前に浮び出される。

なほ、五十餘歳の頃、紀伊の玉津島に參詣したことは、吉野拾遺に出てゐる。吉野拾遺にして誤がないならば、兼好はその時、その書の著者松翁と、舊交を改め得たのであつた。

世に、兼好を一双の岡の兼好と呼ぶ。兼好は、生家の關係上、吉田山附近にもゐたが、晩年は洛西の双の岡に草庵を結んでゐた。そこで、かれは一童と共に棲み、赤貧のためむしろを、あんで以て生活の料にしてゐたと傳へられてゐる。しかし、そこへ頓阿などが遊びに行つたこともあり、兼好自ら、京にそこから出かけることも多かつたらしく察せられる。

　　訪らふべき事ありて京に出でゝ

立歸り京の友ぞ訪はれける思ひすてゝも住まぬ山路は

この作は、双の岡時代のものであらう。

　　ならびのをかに無常所まうけて、片端に櫻を植ゑさすとて

契りおく花とならびのをかの上にあはれ幾世の春をすぐさん

この作は、世に喧傳されたもので、興國四年（北朝では康永二年）春、兼好六十一歳の詠とされてゐる。契りおくの頭句を、植ゑおきしと傳へた異本もあるが、興國四年とは、北畠親房が神皇正統記を書き、

かゝ關城や大寶城をすてゝ、吉野に馳せ來つた年に當つてゐる。兼好が双の岡を如何に愛したかは、無常所を設けてかゝる歌まで詠んでゐるので充分わかるだらう。

最後に、兼好は北朝の方々の處にも出入してゐたので、これは左大臣藤原公賢の日記「園大暦」の證する處である。二條系の歌人が、北朝の人々に親昵して來た以上、歌人として兼好の朝廷に參內することはありうる事である。明惠上人が、かつて「山寺の法師臭くば居たからず心淸くばくそふくなりと」と詠んだ心持を、こゝに思ひ浮べる。

すなはち、晩年の兼好の生活は決して特異な隱者や遁世者のそれでなく、どこ迄も、普通の歌人的のものであり、世間的生活であつた。もと／＼、徒然草は兼好の寂後、たゞちに廣く行はれたものでなく、元祿の時世に至つて、唐突に全國的に愛讀されたものだといつていゝ。さうして註釋書も相繼いで出たやうな譯であるが、多くは、これを教訓書的に解釋したゝめに、兼好の言行不一致の態度や、書中の矛盾した內容や、不合理の文を指摘するに止まつてゐた。從つてそれらによつて、正しい鑑賞や批評を得ることは、到底、不可能な事に屬してゐるのは、如何にも遺憾である。

しかし、わたくしは、こゝに還相に立つた人　味のある兼好を、より敬慕せずには居られない。獅子吼するかれの姿より、解剖刀をとるかれの手つきより、人生のスープ皿から、出來るだけの佳味を吸ひとらうとするかれの態度に心を惹かされるのである。

わたくしは、それを第一に、かれの文の調子（リズム）と陰影（ニユアンス）に感ずる。まことに徒然草の半ばは、かうしたかれの心持の所産である。それを「觀賞の世界」とも「樂しむ境地」とも名づけることか出來よう。「筆をとれば物か丶れ、樂器をとれば音を立てんと思ふ」とは、外相がゆがめられずその儘、官能の世界に入つて來るのを、觀賞の作用が待ちひかへてゐる有樣ではあるまいか。「人事多かる中に、道を樂しぶより氣味深きはなし」とは、不可不の世界に隨喜し、法悅を覺える境地を現はしてゐるのではあるまいか。そこで、つぎには、一、無常味の觀賞。二、不完全味の觀賞。三、隱棲味の觀賞。四、自然的簡樸味の觀賞。五、可憐味觀賞の五方面にこれを分けてこれらを述べることにする。かう竝べて見ると、すぐ感ぜられる樣に、兼好の觀賞は、人生の可憐さ、人生の持つ淚の上に、差し向けられ、それに熱い抱擁を捧げようといふのであつたことが察せられる。

一、無常味の觀賞。 無常觀こそ信仰生活の基底をなすものである。紫式部、西行の懊惱が、すべてこの無常觀を中心にして渦卷いてゐたことは前說した通りである。兼好の明鏡にも似た頭腦に、まづ映出されて來たものも、人生の無常相にあつたに相違ない。しかし、かれは同時に、無常の持つ妙味をも見逃さなかつた。假に人生に死といふ事實がなかつたら――

仇し野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立去らでのみ住み果つる習ひならば、如何に物のあはれは無

からむ。世に定め無きこそいみじけれ――七段

さり乍ら、なほ、無常を嘆かずに居られないのが人間である。涙の中に眞に甘き汁を吸ひ取りながらも。わたくしは、かく兼好の無常觀を、書中から引用しつつしかも、法成寺の頽廢について「建設者道長が「我が御族のみ、御門の御後見、世の堅めにて、行末迄と覺し置きし時、如何ならん世にもかばかり衰せ果てんとは覺してんや云々」（廿五段）と述べゆく兼好の筆致、愛情の滅じゆきつゝある相愛者の中に醸された無常悲劇を語り、さて最後に、「堀河院の百首の歌の中に、『昔見し妹が垣根は荒れにけり、つばな交りの菫のみして』淋しき景色さる事侍りけん」と、筆を結んだ兼好の情味に富んだ文藻そこに、わたくしは、かれの觀賞玩味の心持を見落すことが出來ないのである。卅段の「人の亡き後ばかり悲しきはなし」の筆觸の如きは、確かに甘いセンチメンタリズムを以て全段が溢れてゐる。春の賀茂祭の時、几帳にかけた葵の葉の萎れたまゝ秋まで殘つてゐるのを、ぢつと手にして、そこに思ひ出の春を嗅ぐ兼好は、また純眞のセンチメンタリストでなければならぬ。

かれは、移り變るものの上に病的な愛着を持つてゐた。四季の推移に對する惜別觀の如きその顯著な一つである。かれはすでに、眼前の春を春として、眼に入る秋空を秋空として愛することの出來ない人であつた。

春暮れて後夏になり、夏果てゝ秋の來るにはあらず。春は夏の氣を催ほし、夏より既に秋に通ひ、

秋は則ち寒くなり、十月は小春の天氣、草も青くなり、梅もつぼみぬ。木の葉の落つるも、先づ落ちて芽ぐむにはあらず。下より兆しつはるに絶えずして落つるなり。むかふる氣下に設けたる故、待ち採る序甚だ早し――百五十五段

すべてを時間の世界において見る。過去と未來の中において現前の物を觀る。然ればこそ、自然界の美も一折節の移り變るこそ、物毎にあはれなれ（十九段）で、その四季叙景の妙味の源泉は、この氣持からでなければ捕捉されない。これを逆にすれば、沙石集に、無住法師が言つてゐるやうに、月の盈虧、花の開落、四季の推移によつて無常をも觀取されるといふことになる。雪と散りかふ花に、無常の影を觀ずれば觀ずるほど、落花の妙趣は增してゆくのである。

二、不完全味の觀賞。不完全味といふ言葉は、こゝにやゝ不適當であるが、これも結局は、前項の觀賞的態度に一致するものである。すなはち、完全美の極限、絶頂において、われ／＼は整齊とか圓滿とかいふ如き快美を味はひうるが、爛熟した物、頹廢した物、不整な物、鈍重な物、不確定な物等に、さらに異なつた美を味はひ得てゐるのである。思ふに、圓滿無缺極上の物に對する時、われ／＼の心は、官能美に奪はれやすく、また、飽滿な滿足感のために對象の中核とは離れがちになる。この理は、たゞに事物に對した場合でなく、一般の事柄にも適應して考へることが出來る。

花は盛りに、月は隈無きをのみ見る物かは。雨に向ひて月を戀ひ、垂れ籠めて春の行方知らぬも、猶ほあはれに情深し。咲きぬべき程の梢、散り萎れたる庭などこそ見所多けれ云々。――百卅七段

萬づの事も始め終りこそをかしけれ。男女の情も偏に逢ひ見るをば言ふものかは云々――同段

夜に入りて物のはえ無しといふ人いと口惜し。萬づの物の綺羅、飾り、色ふしも、夜のみこそ目出度けれ――百九十一段

神佛にも人の詣でぬ日、夜參りたるよし――百九十二段

何れも、想像上の美を味ははうとする心持の現はれではないか。

うすもの丶表紙は、疾く損ずるが佗しきと人の言ひしに、頓阿が、「羅は上下はづれ、螺鈿の軸は貝落ちて後こそいみじけれ」と、申侍りしこそ、心優りて覺えしか（中略）。弘融僧都が、「物を必ず一具に整へんとするは、拙なき者のする事なり。不具なるこそ宜けれ」と、言ひしもいみじく覺えしなり。悉て何も皆、事の整ほりたるは惡しき事なり。爲殘したるを、さて打置きたるは、面白く生き延ぶる業なり云々――八十二段

佳き細工は、少し鈍き刀を使ふといふ。妙觀が刀はいたく立たず。――二百廿八段

何と、妙趣深い物語りではないか。滋味など稱する趣もこれに準ずべきであらう。兼好の、一面、妻帶を拒避し、（百九十段）四十歳位の死を最も適當とし、（六段）子孫を殘すことの不要を說いた如きも、

かれが成熟結實の境地を回避した結果だとも言へる。抑も、趣味觀は、時間的意識を必須條件とする。現前の事象が、過去、未來の時間の中にもり上つて、特別な想像を齎してくるそれを指すのである。

三、隱棲味の觀賞。 現實社會の俗臭、喧閙、混亂の巷から逃れて、谿谷に入り山寺に隱れる人々も、また等しく敗北者の名をうけなければなるまい。兼好の心持、兼好の撫愛の心は、それらの人々の生活を傍觀し、觀賞する。つぎの如き態度が、この點においても、いかに西行とかれとの間に懸隔があるかを教へるではないか。兼好の辿りついた餘裕の世界　それは、紫式部の情緒佛教とも異なつてゐるものである。兼好は、信仰界を全然氣分化してゐる。

不幸に愁に沈める人の、頭おろしなど、不束かに思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、待つ事もなく明かし暮らしたる、さる方にあらまほし。顯基中納言の云ひけん、配所の月罪なくて見んこと、さも覺えぬべし――五段

こゝにおいて、宗教と藝術は、容易に融和する。兼好晩年の互融無碍の境地には、かゝる觀賞的餘裕があつたと斷言してよい。されば、かれは必ずしも一宗の長所を立てゝ、他を邪教視しない。念佛宗のことにも話を觸れてゆけば（卅九段、百卅四段）禪宗の書の引用もする（四十九段）法師程、羨ましくないものはないといひ乍らさらに出家すべきを說き、また「ひたぶるの世捨人は中々有らまほしき方もありなむ」（一段）と評し去るに及ぶ心の推移に、兼好の面目がはつきり現はれるではないか。

四、自然的簡樸味の觀賞。 一既に趣味好尚と言つても、そこには、甚だしい階段がある。世に、惡趣味と呼ばれてゐるものを考へて見るに、自然性を沒却し、簡樸味を缺いてゐるが爲めだと言つても、それは敢て獨斷ではないと思ふ。自然味に富み、簡樸味を愛した兼好は、從つて、智的、技巧的なものを排し、奢侈で華麗なものを惡んだ。「智慧出でゝは僞なり、才能は煩惱の增長せるなり（卅八段）すべて人は無智無能なるべきものなり（二百卅二段）——これは、かれの自戒である。しかし、誰しもそこに、老莊道（道敎）についての聯想なしにはすむまい。また、日野資朝が「たゞ素直に珍らしからぬ物には如かず」といつたその言を讃へ（百五十四段）屏風、障子など持物について「さのみ佳き物を持つべしとにもあらず。損ぜざらんためとて、品無く見惡き樣にしなし、珍らしからむとて用無き事どもし添へ、煩はしく好みなせるをいふなり云々」とことごとしい裝飾を排し「わざとならぬ匂濕やかに打薰（卅二段）るを殊更に愛し「人の名も、目慣れぬ文字を付かんとする、益無き事なり。何事も珍らしき事を求め、異說を好むは淺才の人の必ずある事なり（百十六段）とて、自ら法名を兼好と稱したかれの性格を案ずるに、道敎や神道の自然道味に共鳴する點が甚だ多いことが知られる。

自然味の最も現はれてゐるもの——それは言はずもがな、簡樸なるすべてのものである。物質文明は、便利經濟的の名のもとに、すべてを複雜化する。そして不要な虛飾が、その間に蔓延し、人間の遊戲性は徒らにその非實用味（華美）を愛するやうになる。實に、衣、食、住の進步は、人間の原始性を失

はじめて、人間を自縄自縛に墮さしめたものと言つてよい。虚飾的文明に對する反噬は、わが文化の一大潮流で、われ〳〵は兼好の後に、茶人利休や俳聖芭蕉等多くの人々をあげることが出來る。八重櫻を愛好したのは淸少納言であつたが、兼好は「一重なるよし」（百卅九段）と言つてゐる。秋の紅葉を讃へたのは額田の女王であつたが、兼好は、「若楓、すべての花紅葉にも優りて目出度きものなり」（同段）といふ。かれの單純に對する嗜好はこんな點にも出てゐるのである。松平定信が、源氏物語を櫻に、徒然草を「菊もて作りたる藥玉」に譬へてゐるのも、一寸面白い。

さて兼好は、衣食住の單純美を說くと共に、武家文化の德に倣つて、しば〳〵質素の德を說き、また、赤貧生活の妙趣をも語つてくれる。しかも、それは、單なるかれの空想說や幻想觀ではない。隱者といひ、道心といひ――われ〳〵は、兼好をもつて、とかく實生活に緣遠い人間と考へる癖がある。しかるに、かれが華美豪奢な生活者を誹謗し、また、徒らに、費途を考へず貯蓄する守錢奴を嘲弄し、さらに「人極りて盜みす。世治まらずして凍餒の苦あらば、とがの者絕ゆべからず。人を苦しめ、法を犯さしめて、それを罪なはん事、不愍の業なり」（百四十二段）と社會制策の缺陷に論及するを見るとき、いかにかれの觀察眼のひろく且つとほく及んでゐたかに想及されるのである。

兼好は、京都文化に比して鎌倉氣風のあまりに、粗雜で武骨的なのを不愉快だとした。しかしその單純味だけは嬉しく思つた。松下禪尼が障子紙の切張をして、義景に質素の必要を說いたとの話（百

八十四段）は、質素談だけのものであるが、最明寺入道時頼についての逸話は、よく衣食における單純趣味を語つてくれるものである。酒の肴に味噌を以てしたとか（二百十五段）足利産の染物を以て女房の小袖に間に合はしたとか（二百十六段）、すべて時頼の儉約を證する諸例は、必ず頼朝や、この時頼等に就ての事のみではなく、當時關東一般の士風であつたに相違ない。「何事も邊土は卑しく頑くな」（二百廿段）といひ、鎌倉の人々の故實に疎いのを難ずる（百七十七段）兼好が、この質素の點にのみは感じ入つて、特に記載したその心理を思ふべきである。

　しかるに、京都文化の内容は、賀茂祭における使廳の下部の乘る馬の飾さへ、はなはだ、贅澤を極めてゐた如くに、萬事が過差なつてゐた。師直兄弟が如何に豪奢を極めたか。また、公家達の酒宴が如何に、贅澤に流れてゐたかは、太平記の記事もこれを傳へてゐる（卷廿一及び卷卅三）。もろこし船が、かゝる貨物を「所せく渡し持て」來たのである。久我雅實が、質實な性格から、貝製の飲器で水を飲んだといふ事實さへ、兼好には珍らしい例として考へられたのであつた。（百段）しかもそれら單純さの中に、棄てがたい趣が存するではないか。兼好は、住居に關して「家居のつき／＼しくあらまほしきこそ、假の宿りとは思へど、興あるものなれ云々」（十段）と述べてゐるほど、日常注意をしてゐたことは、五十五段の家の建方についての説明でも分る。しかし、多くの大工の心を盡して磨き立て、唐の、大和の珍しくえならぬ調度ども竝べおいた大厦高樓は、もちろんかれの同情を買はなかつた。

たゞ小さくて質素であるのが何よりもいゝのであつた。

今めかしくきらゝかならねど、木立物古りてわざとならぬ庭の草も心あるさまに、すのこ、透垣(すいがい)の便りをかしく、うちある調度も昔覺えて安らかなるこそ心にくしと見ゆれ」——十段

といふ樣な、條件がその上に加はつて居ればなほ申分無い。兼好はどこ迄も、民衆の味方であつた。

五、可憐味の觀賞。 兼好が、如何ばかり弱き者、可憐なる者に味方してゐたかは、色々の方面から述べて來たが、最後に當つて總括的に、更に再論しておかう。兼好は、系圖の示すが如く藤原氏の子孫、大宮人の一人として生を享けた。しかし既に固着した武家時代の精神は、かれをも一武士たらしめずには置かなかつた。かれは、先天的の大宮人精神と、後天的の武家精神との間に立つて、その取捨に甚ゝ悩んだ一人であつたのだ。しかし、物のあはれを知る心、をかしさを感ずる心を尊ぶ先天性が、ついにかれを支配せずにはおかなかつた。兼好は、ひたすらに王朝時代を追慕した。しかも、今更殉情的な延喜、天暦時代の生活をするには、かれの理念は、餘りに澄み切つてゐた。自己意識は、いたづらにかれの憧憬を壞すのみで、業平や光源氏の放膽さは到底かれの思ひも及ばないところであつた。

しかし、兼好の個性の價値は、同時に、その一點に憑據してゐることを知らなければならない。われ／＼は、わが文學史上、眞に自照の文學を求めるなら、やはりこの徒然草以往に遡ることは出來ない。可憐味の如きも、物のあはれ精神の一部分にすぎないものである。しかし、兼好は、はつきり可

憐味の價値を認識して語つてゐるのである。そこに、批判性の作はない王朝精神とは、根本的相違の存することが知られる。おようそ、可憐な擧措によつて、兼好の筆に上つたものは、つぎのやうな人々であつた

一、久しく訪れぬため、ひどく怨んでゐるだらうと思つてゐた女から、別に恨みがましいことも言はず、「手すきの下男が居りましたら一寸」などゝ賴んで來る女　　卅六段

一、朝夕隔てなく親しくしてゐるに、どうした調子でかに、禮儀正しい態度を自分に現はす友――卅七段

一、興味ふかい話を多數の人の傍で話す樣な場合、極くのどやかに、只一人の相手に話しかける人　　五十六段

一、漢の國から天竺に渡つて行つた法顯三藏が、古鄉の扇を見て淚を催うしたといふ話をきいて、かへつて三藏の人間らしい處をほめた弘融のやうな法師　　八十四段

一、他人から何事か依賴されると、斷つていなむことの出來ない氣弱な京人――百四十一段

一、傍輩が、子供が無いと言ふのをきいて、子供を持たなければ物のあはれも知るまいと返事したある荒夷　　百四十二段

すべて、かくの如き類に依つて全部が推測されるだらう　それは一面、謙讓美と言つてもよいかも知

れない。この方面については前説もしたことであるからそれを御參照ありたい。

わたしは、もう、このあたりで兼好論を結ばねばなるまい。かれ兼好は、詩文、和歌、管絃、唄、書道、手工、繪畫などの學ぶべきをあげて、藝術の人生に必須な點を明らかにしてゐる かれの描いた繪は、現今にまで傳へられてゐるが、それほど、かれの藝術生活の豐富さを想像出來よう「命あるものを見るに、人許り久しきは無し。蜻蛉の夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つく〴〵と一年を暮らす程だにもこよなう長閑しや（七段）と、かれ自身がかいてゐる人生を、その長閑な心持で靜かに心豐かに送るのが、かれの晩年のすべてゞあつた「其の物に付きて其の物を費し害ふ物、數を知らずあり。身に虱あり、家に鼠あり、國に賊あり、小人に財あり、君子に仁義あり、僧に法あり」（九十七段）この言葉は、兼好においてのみ、諧戲に終らず戒となつたのではあるまいか。かれ位、一法師で、法に害はれず、しかも出家生活をして意義あらしめたものは珍らしくはあるまいか。

人は天地の靈なり。天地は限る所なし。人の性何ぞ異らん。寛大にして極まらざる時は、喜怒是に障らずして、物の爲に煩はず ——二百十一段

何といふ偉大な宣言であらう。西行は、彼岸の者とはいへ、寛裕の點には終生、兼好の驥尾にも附すことが出來なかつた。

延元元年（兼好五十歳）正成の戰死するあつて、後醍醐帝の吉野御蒙塵となつた以後、とかくに南風は競はず、翌二年には、金崎城陷り、尊良親王は薨去し給ひ、同四年には、帝、御躬ら吉野行宮においで御崩御遊ばされた

「陰晴不定、兼好法師來、和歌數奇者也、召簾前謁」とは、その年から十年後の貞和二年（南朝正平元年、兼好六十四歳）閏九月六日のことで、例の園大暦中の一節である、その日兼好は、公賢の邸を尋ね歌談など交へたものと見える。なほ、同年に出來た風雅和歌集（花園上皇の御旨で、藤原公蔭、同爲基、同爲秀等の寄人の撰進したもの）に、兼好の歌が一首選入されたのも、かゝる交らひの結果からであらう。さて、かれの生活について最後に、

佛になりても何かせん、道を成しても何かせん、一切、求め心を捨てはてゝ、徒ら者に成りかへりて、兎も角も、私にあてがる事なくして、飢ゑ來れば食し、寒來れば被るばかりにて、一生はて給はゞ、大地をば打はづすとも、道をうちはづす事は有るまじき

かうした明惠上人の如く大陰朝市にあつて、しかも自由無碍な境地が、そのまゝ兼好にあつたといふことは、こゝに斷じかねるが、それと程遠からぬ心境であつたとだけは再び繰更して言つておきたい

正平四年（北朝、貞和五年）兼好は、横川において、法華經を寫し、また、顯基中納言記をも著作

した。そして頓阿と伊勢旅行に出かけたといふのが、一般の傳へとなつてゐる。時に、齡はすでに六十七歲ではあるが、さうした旅もかれにはありさうな事に思はれる。伊勢といふのは、阿野明神参詣のためだつたが、歸途、伊賀の田井の庄に立寄つたことが、計らずも臨終の地を定めることになつた。

兼好の身體は、生來蒲柳の質であつた樣に思はれる。かく無常觀を強く抱くに至つた理由も、これと關係してゐるかもしれぬ。かれは、四十歲位で死ぬるのを得として、老軀を抱いて長命する人を嘲けり、また、人命の塵の如くはかないことを口にしながら、しかも驚くべく醫藥に關して神經質であつた。徒然草中に、醫藥を衣食住と竝べて四大必須品としてゐることで（百廿三段）、すでに全般が推されるけれど、さらに、學ぶべき物の中に醫學を加へ（百廿二段）友とすべき者に醫師を入れ（百十七段）輸入品は藥物のみ必要であると述べ（百廿段）空地あらば藥草を植うべきを勸めてゐる（二百廿四段）かれ自ら、醫書を繙いてゐたことは、百七十一段に依つても知られるけれど、ともかく、かれの衞生法がよく、六十餘歲の長命をかれに與へたものとして推斷される

田井の庄に立寄つた翌年、すなはち正平五年（北朝觀應元年）二月、天はかれに、なほ以上の命をかさず、かれの生命を黃泉に送つた。かくて、かれは伊賀の三國山の麓の土と化したのである。そこは、言ふ迄もなく（傳へにかれの戀人だつたといふ）成忠の女の墳墓の地であつた。

芭蕉

紫式部と西行、西行と兼好の間には、共に前述した樣に一世紀宛の間隔があつた。しかるに、兼好の寂後、一百年、われ〳〵は、なほ、文聖の出生に會することが出來なかつた。その後約三世紀近い時代を經た十五世紀半にして、われ〳〵は、始めて伊賀上野の地に、呱々の聲をあげた俳聖芭蕉を持つたのである。

顧れば、兼好寂後足利氏の崩壞を見るに及んで以後、天下にはさらに一日として寧日を見ることが出來なかつた。戰國時代は、安土桃山時代に連り、そこにやゝ統一を見たけれど、なほ元和偃武（十五世紀の始め）の代迄は、庶民の心はそのおちつきを得難かつた。

兵燹の絶えない亂世に、却て、特色ある文學の存すること、すでに西行論や兼好論において、見て來た所である。故に、この三世紀の爭亂時代が、その騷擾のために、文學を生み得なかつたといふのではない。否、われ〳〵は藝術の綜合的天才の世阿彌や、第二の西行と見るべき宗祇などを、その間

に認めることが出來る。しかし遺憾ながら、かれらの藝術には、自照の精神がなほ缺除してゐた。換言すれば、未だ、かれらの藝術にはかれら自らの生活の裏づけが足らなかつた。かれらは、混沌たる世相の内底に徹しようとする餘裕を持たなかつた。

思へば、徳川の三百年の泰平を生むまでには、わが民族は、かなり長い陣痛の時代を過ぎて來たのである。わたくしは、兼好の時代を説明するに、對立といふ一語が最も恰好であることを言つておいた。西行時代そのものがすでに、公武の兩立時代ではあつたが、それは寧ろ、武士興起の時代と稱すべきである。一度、公家精神を壓迫した武家精神に對し、更に公家精神の再起對立をなしたのが兼好時代に外ならない。

しかるに、わが民族は、いつ迄も、この一國の運命を公武の二階級にのみ委ねておくことを快いとしなかつた。恰も、公武の鬪爭、武と武の内訌の隙間に乘じて、新勢力を延ばし得たのは、新興の庶民階級であつた。一草履取りの身から天下を取り得た豐太閤の一生こそ、よく、この趨勢を語つてゐるものである。なほ、清正は鍛冶職であつたといひ、正則は桶屋職であつたといふ。もちろん、かれらは庶民的精神を以て武家階級に入り、武家で終つたものであつたが、庶民的血を享け、庶民的生活を續けながら、なほ勢力と位置とを確保する、いはゆる、町人階級の萠芽は、安土桃山時代から存續して來た。公家には、公家として與へられた賦性がある。武家と庶民にあつても同樣である。そして

鼎立した三勢力が、各々その着くべき地位に着かうとする試練の時代こそ、元和偃武から元祿に及ぶ七十年の間隔に外ならぬ。

人間精神の一生が、絶えざる理知と情意の闘ひの連續である如く、時代思潮の推移と展開にもまたそれがある。しかし、精神生活におけるこの運命的矛盾が、却て、精神向上の動機をなしてゐる事實は、また、何といふ人生の妙味であらう。かくて時代も、その惱みを續けながら、紫式部時代、西行時代、兼好時代――と時代を經過して、こゝに芭蕉時代迄辿りついて來たのである。これを人間一生に比するならば、童貞時代、青年時代、壯年時代を經て、始めて成年時代に入つたものとも思ひ得られるのであらう。それはまた中世浪漫主義時代の第一期、第二期、第三期を經過して、近世初頭に文藝復興時代を持つ泰西文明史の足跡にも、それを準據せしめることが出來るであらう。

元祿時代の特色は、實に、既存の要素も新來の要素も、すべてが渾然として、かの南北朝時代や院政時代の如く、對峙してゐない所にある。もちろん江戸中心に武家精神があり（意思的）京都中心に公家の情操的精神があり（理知的感情）大阪中心に町人の情緒的精神があつて（感覺的感情）、その生活基調も、武家は道、公家は學、町人は官能欲にあつたやうに、差別は立てられるけれど、三者は互に自らを立てながら、他の特色を抱擁する寛大さを持つて居た。わが芭蕉の藝術は、かゝる背景を取り離しては到底、了解しがたいものである。

わたくしが、この短かい芭蕉論において、なほ、かれの環境を多少とも明確にしておきたい要求を持つことを、諸君もかならず會得して下さるに相違ない。

第一、意志的環境について。

時代的意識の上に、意力の明瞭に顯現されるものは、まづ政治と道德との上においてゞある　われ〳〵は、元祿時代の誕生において、すでに元和偃武から半世紀餘を經てゐるとはいへ、その武家政治武家道德の持つ、殊に强い意思力を認めざるを得ない。
家康は、新に江戸に幕府を開いて、そこに譜代の家臣を移した。かれはそこで、武家精神を中心にした文化を打立てようとしたのである。

かれが既に、文祿中、名護屋の陣中に、藤原惺窩を召して儒道をきき、また後には、林道春や舟橋秀賢等をも引見したりして、文教に力を注いだことは人皆の賞する所であるが、かれが學問を保護したことは、すべて政治のためであつたことを知らなければならぬ　僧崇傳をして珍書を傳寫せしめ、紅葉山文庫の成つたのも（寛永十六年）金澤文庫を江戸に移したのも（慶長七年）伏見に學校を建てたのも、また江戸に書家や樂人を集めて祿を與へたのも、すべてある意味ではかれの政策の一つであつたといふに憚からない。幕府の顧問となつた儒者林道春の如きも、律令制度を作つてゐるのも、やはり

それがためである。家康には、秀吉の如く藝能を藝能として愛玩する心の餘裕さが無かつた。鷹揚さが缺けてゐた。こゝに、一面　德川氏三百年の基礎も造られたのであつた。

かくて家康は、武士の據るべき道德を樹立して、天下の庶民にこれを規準たらしめようとした。古來武士道として認められた德目に、服從、武勇、廉潔、質素等がある。しかし、未だそれらの基礎をなすものがなかつた。幸ひ、惺窩が長崎で朱子の大學の註を見て以來、程朱の學を奉じてゐたので、家康はその朱子學を幕府の官學とした。すなはち、この新しい儒學を利用して、武士道的新道德の根本たらしめたのである。惺窩の門人に林信勝があり、かれが朱子學を以て幕府に仕侍して以後、林家は代々官學の家として、湯島聖廟の傍の昌平校に教鞭をとり、林信篤の時、大學頭の地位を得た。かくて家康の政策は、巧みに圖星に當つたのである。諸侯の間にも（藤堂家や加藤家の如き）爭つて名儒を招く風を生じて來、後光明天皇すら程朱の學を講ぜしめ給ふといふ有様で、他方には孔子家語や貞觀政要などの印刷をも見、その印刷術の發達と相俟つて、宋學は博く內地に普及していつた。

德川時代の特色を以て、道德中心の時代とした學說もある。道德が果して時代精神の中心になり得たか、否かは、多少疑問とすべきであるが、わが文明史において道德的意識の最も明確になつたのはこの時代を始めとする。それは上述の樣に、家康の文教奬勵の政策に負ふ所が多かつたのである。いはゆる道德書と稱すべき書物が、後を追うて著述された。惺窩の假名理性、羅山の三德抄その他、藤

井懶齋の大和爲言錄など、すなはちそれであつた。これはやゝ後の時代に屬すけれど、室鳩巣の六諭衍義和解や、貝原益軒の益軒十訓の如き庶民に及ぼした影響は、絶大である。世にいふ心學が興されたのは、石田梅巖からであらうが、その以前すでに存する心學五倫書や心學教訓書、心學問答などといふ如き心學の文字を冠する書に、心學の前驅と見るべきものも少くない。

小説の構想に、教訓を加味せしめることは、古來からあることとて、さして珍らしくは無い。しかし小説を全然道徳の方便として描いたのは、やはりこの徳川時代の初期からである。かの假名草子中の教訓物と稱せられる一類がそれで、その多くは、善玉惡玉的の極く低級卑近な教訓物語であつた。

元祿時代の文學者として芭蕉と比肩される近松。かの近松の作に現はれた道徳觀も、甚だ幼稚なものである。芭蕉の周圍の庶民は、始め虐げられた善玉が、漸次に擡頭して惡玉を墮してしまふ筋に、やんやと喜んで拍手したのであつたらう。しかし、俳諧それ自身にさへ、かゝる世相の反映がある。芭蕉の前において心の俳諧を立て得たかの鬼貫の俳論は、立派なものであるが、その「まこと」論はあまり、道徳的傾斜を持ちすぎてゐる。文學を道徳的規範の中に押込みすぎてゐる。かく如何なる事柄に於いても、これを五倫の道にあてはめて、見ようとするのが、當時一般の思潮であつた。

しかし、われ／＼はこゝに、一歩立返つて考へさせられる。武士的道徳は、無論、武士の生活に與へらるべき規範であるけれど、武士自身の本領は、その武力乃至その決斷力にあるので、干戈の間に

超人的武勇を現はしてこそ、自己の滿足も得らるべきものである しかも元和偃武以後、太平の世に處して、徒らに道德的掣肘を被る日常生活の望ましくないことは言ふ迄もない。かれらには、武士道を遵奉する所にも滿足があつたけれど、何物の束縛もこれを受けず、己が意力を十分に發揮せしめる生活に對する讃美の念がやまなかつた。この性向は、當時、武士階級においてのみならず、宏く庶民の胸中に迄、浸潤していつてゐた。

われ〳〵は、その反映を、文學の間に十分認め得る。假名草子中の、お家騷動、敵討、武者修行等を題材とした幼稚な武家物、浮世草子の時代物等それであつて、元祿時代は人の呼ぶやうに遊惰な時代とはいへ、かの爲永春水の作に寫された世相に比較すると、如何に武士的氣分の餘薰があるかを知り得るであらう。慶長見聞集といひ、備前老人物語といひ甲陽軍鑑といひ、軍書的著述が續々出されたのも、社會的要求に應じたものに相違ない。

江戶は、上方に比して、この色彩が殊更、濃厚であつた。江戶淨瑠璃は長く、十二段草子的の武家物で、岡淸兵衞の金平本がいつ迄も愛誦された。江戶歌舞伎の市川團十郞が荒事物を以て、名を立て得た理由もこゝに存してゐる。庶民の德目の一つとして重んじた意地の精神や、吉原遊女の特色となつた張りの氣持なども、盡く、武士的精神を引いたものであること言ふ迄もない。

文人などゝ言つても、當時は、武士の末であつたものが多かつた。如儡子、正三といふ如き假名草

子作者も武士の出であり、貞徳、宗因、近松、契沖など、何れも武士の血を享けたものであつた。從つて、かれらの筆致には、自ら武人的の張りがある。かれらの性格には武人的の意地がある。(西鶴は町人であつたが、その筆意における鋭利さには、時代的反映と認むべきである)しかるに、かゝる武家的精神は、文學の上に影を淡くして行つたのみか、年と共に時代の風尚の中から取り去られて行つた。將軍吉宗の改革、松平定信の革新、水野忠邦の英斷などは、何れも、沒落してゆくかゝる武家的氣質を再燃せしめようとする足搔きに外ならなかつた。

わが芭蕉も、また、田舍侍の末であつた。(「繪詞傳」等)かつかれの祖先には、源平三烈士の一人である平宗清があつた。わたくしは、こゝで、直ちに西行を聯想する。二人の間には、何といふ著しい暗合が存することであらう。俵藤太秀鄉の子孫である西行の生涯が、武士的精神によつて始めて、完全に解釋出來ることは、その際論じたのであつたが、八九歲(この年齡については一定しない)の時、すでに上野城主藤堂良精の嫡男良忠の近侍として仕へ初めた芭蕉の一生も、武士的濟勁味によつて一貫されてゐる。芭蕉は、古人の中、西行を最も私淑した。追慕した。五百年に近い時代を隔てゝ、兩者の肝膽は互ひに相照らしてゐるのである。

しかし、西行は禁裡に奉侍するちやき／＼の都人であつたが、芭蕉は伊賀の山奥に生れた浪人者の子にすぎなかつた。芭蕉の性質には、西行の持つ幹竹を打割つたやうなすなほさが無い。どうかすれ

ば鈍重になりがちな武家魂が殘つてゐる。その生地、城下の上野といふ町は、どこか京都に髣髴たるものがある。芭蕉は、その生れ故郷で良忠の小姓といふ生活から門出したのであつたが、次郎兵衛物語によれば、十五歳の時元服をさして貰つて半七郎の名を與へられた。田舎侍、しかしそれは、輕蔑したものでもない。宗因にしろ、近松にしろ、何れも芭蕉に劣らぬ田舎出であつた。元祿文化の大成は、既に輕薄な都人のよくなし得る所でなく、口さがない京童(わらべ)に嘲笑された田舎者の始めて、これを遂げ得た所であつた。

寛文時代といへば、かの元和偃武を遠ざかること、早くも半世紀である。儒者によつて諸法度は定められ、制度は漸く完備していつたけれど、ずでに時世は王朝時代の如く泰平無爲な社會を顯出しなかつた。一方では、オランダ印度商會使のフリシユウスが音訪れてくる（芭蕉六歳の年）と他方ではまた鄭成功が援を求めてくる（芭蕉十五歳の年）。內では內で、幡隨院長兵衛が旗下に殺された噂が立てば（芭蕉七歳の年）、その翌年には由井正雪が叛いて誅された事實が報せられる。將軍家光が薨じたのは、恰もその年に當つてゐるが、かれに殉死した武士數名が出た。元和の代迄、長い亂世に育てあげられた士風は、寛文延寶の御代にも、機會毎に勃發しかけた。

しかるに、芭蕉が二十三歳の年（寛文六）、かれにとつて寵恩の厚かつた主君良忠が頓死したのであつた（自殺？）。芭蕉は、その時たゞちに殉死しようとしたとも傳へられてゐるが、さうしたことは、

武士的芭蕉にいかにもありさうな事實である。ともかく、當時殉死の禁令は藤堂家からも、また、幕府からも重ねて出てゐたといふ風で、その望みは到底遂げられなかつた。芭蕉は詮なく出家しようとしたが、それも藩主及び父に障ぎられて、かれは遂にその年（？）辭官して鄕里を出奔したのであつた。二十三四歳と言へば、丁度西行遁世の年齡とこれも符合してゐる。

かれは、遁世後數年の間、京都、難波、或ひは西國にと漂泊に近い月日を送つてゐたが、寛文十二年（二十九歳）志を抱いて、江戸に下つていつた。それから、かれはその江戸を第二の故鄕とするに至つたので、世人はかれを江戸の俳聖とさへ呼ぶ。芭蕉が、かく江戸にわが居を定めた理由には、京都での歌の師匠の季吟が江戸の和學所に來てゐたとか、季吟門下の知人が江戸に多かつたとか、新興の都市で糊口の資が得安かつたとか、樣々の原因をあげることも出來ようが、第一には江戸の持つ氣分に、芭蕉自身が共鳴したこと、それは忘れることは出來ない。後年蕉風はむしろ、濃美中心に普及していつたけれど、芭蕉は「秋十とせかへつて江戸をさす故鄕」で、つねに江戸に歸つてゆくことを忘れなかつた。かれは、遂に京都の文人でも無く、難波の文人でもあり得なかつたのである。

更に、傳によると、芭蕉が江戸に下つた時の伴れに、定林寺の默宗和尚があり、かつ、伏見の任口上人から佛頂和尚へ宛てた紹介狀を持つてゐたといふ「次郎兵衞物語」この眞否の考證はこゝに別と

して、芭蕉と禪宗の關係の多いことは、諸方面から考證され得る。禪と武士との關係は、また甚だ深い。武士道の祕奥が禪悟であるとせられ、澤庵和尚がよく柳生十兵衞をすら禪力に依つて意の儘にしたといふ傳説もある。のみならず、林道春が家康に仕へる迄は、武家の顧問といへば、多く禪僧であつた。すべての點から、芭蕉が臨川寺において佛頂和尚と禪話を替し、佛頂から與へられる所が多かつたといふ因緣の偶然でないことを思ふ。天台的の紫式部と兼好、淨土的の西行――かう並べて禪的の芭蕉に思ひ及ぶ時、やはりかれの特質がそこにも現はれてゐるやうに思ふ。

芭蕉の初期の句中にさへ、われ／＼は多くの禪的臭味を見出だすことが出來る。しかし、連歌は里村紹巴時代から武家の心得べきものとなつてゐたが、偃武の世となつても俳諧は武家の遊びの一つとなり、かつそこに禪坊主で同時に連歌師であつたものの多かつたことを思へば、野狐禪的の言辭を弄する輩も少なくはなかつた。そこで芭蕉の延寶二年出家の時詠んだといふ「散らば散れ千里(イ草一條)一風の鐵線歌」(芭蕉翁句鑑)といふ句の如き(？)大悟徹底を證するものだといふ説は以ての外である。

ある知識の宜はくなま禪大疵のもとひとかや。いとありがたく覺えて

寄李下

稻妻に悟らぬ人の貴さよ

稻妻を手にとる闇の紙燭哉

庭はきて雪を忘るゝ箒哉

或ひは、虚栗の跋文の中に「栗といふ一書其味四あり、李杜が心酒を嘗て、寒山が法粥を啜る、これに依て其句見るに遙にして、聞くに遠し云々」といふ類、さては、付句に「一棒に打たれて拜む三日の月」的の禪味、すべて同程度のもので、かれが敢て俳諧禪を樹立しようとしての上のことではない。佛頂や默宗などといふ手合ひも隱逸な雅人で俳諧の一節も分つたので、芭蕉はこれと昵近し、また自分の好きな禪話にも耳を傾けた迄のことであつたらう。

芭蕉談といふ本を見ると、「ある日幻住庵にして、終日丈草に對して芭蕉の物がたり有けり、正秀かたはらに在て、是を聞に、一事として其意を會せず、其後龍が岡にまかりて、其事を丈草に問、丈草云、我問ところは言語の芭蕉にあらず、禪の芭蕉なり、正秀問、禪の芭蕉とはいかん、丈草云、山は唯青山、雲はたゞ白雲、はせをは實に、達摩なるはといへり」とある。いかなる方面においても、祖師たる人が門下から神祕化されることは止むを得ないが、芭蕉は達摩の第何世と呼ばれることを以て喜ぶやうな人間ではなかつた。しかし「佛離祖室の扉に入らんとし」た若き日の志を全うしたら、かれもまた一禪僧になつてゐたことはこれを想像して餘りある（澤庵の死んだのが芭蕉の三歳の時であり隱元の支那から歸つて來たのが十一歳の年にあたり、禪宗は益々流布してゐた）宗長、宗鑑は一休と

其角は大巓と、嵐雪は濟雲と、丈草は玉堂と、杉風は大龍寺和尙(？)と、蓼太は白隱と、園女、捨女はそれ〳〵雲虎並びに盤珪と、關係があつたやうである。其角が大巓和尙から殊更允可など與へられなかつたことは、芭蕉の參禪と同程度のもので、大巓の力によつて其角が始めて芭蕉の一弟子となつた譯でもない。他の俳人の場合もすべてこの類であつて、われ〳〵は、俳味と禪味と共鳴する點を示されたらそれで十分である。さりとて、わたくしは、芭蕉を以て禪的悟境を知らないものと言ふのではない。結跏趺座の方式を會得しないものに、却て、禪境の存するといふ所に、禪宗の妙趣もあるのではないか。

芭蕉の持つ滔勁で鋭利な方面――それを詮策すれば、その他、かれの文章に現はれた強いリズム、かれの句に現はれた主觀の燃燒、かれの性行に現はれた意思力等をあげることが出來るが、最後の節に、これを讓つてこゝには說かない。

路通の芭蕉行狀記といふものを見ると、「兼好も終を伊賀國にとりて侍と傳へしに、此人やふたゝび世に生れて、末の風雅を起しけんと、いとゞしたわるゝ」と、芭蕉を以て兼好の再生の如く解釋してゐる。全く兼好の寂した土地と稱せられる田井の庄は、芭蕉の生地とは、その間數里許しかない。芭蕉は、貞享四年歸國した時も、萬菊丸(杜國)と同道で兼好の故跡を尋ねてゐる(芭蕉翁全傳)。

芭蕉と兼好の間には、また共感さるべき性格の一致がある。しかし、芭蕉にあつて兼好にないものは、かうしたディオニサス的態度であつた。兼好の追憶の世界は、王朝時代に終始してゐた。然るに芭蕉の憧憬は、むしろ、武家時代の人の上に存してゐた。そこに個性上の溝渠が出てゐる。芭蕉のもつ兼好的傾斜を說くのは、これをつぎの節に讓るのが穩當であらう。

第二、情操的環境特に尚古的精神について。

元祿時代を以て、文明史家の、泰西の文藝復興期（ルネエサンス）に比較してゐることは、大體その當を得たものといつていゝ。如何なる時代においても、多少共尚古的復古的精神の現はれないことはないが、われわれは既に兼好においても見たやうに、その多くは、淡い憧憬的のものであつて、智的に古代的精神を認識しようとする程度のものではなかつた。どうしても、眞に、文藝復興期を期待するならば、ある點迄の理知的精神をそこに必要とする。元祿時代は、この意味に、有史以來學究的態度の最も確立した時世である。單に詩的な尚古的保守的態度だけのもので無くして、すべての物につきその根元に遡上り、その本質的なもの、素朴なものを把握しようといふ強い要求が擡頭した時世であつた。

漢學にあつては、江戸の官學（朱子學）に對し、京都の明經博士舟橋秀賢が、古注を採つて對抗したのは、單に公武的感情の齟齬だけの原因ではなかつた。かの伊藤仁齋父子が、同じく京都において、

古學を樹立した精神にも、強い復興的要求が充分窺はれるではないか。

同樣、國文學にも復古運動が行はれた。その中、和歌において、かの下河邊長流の寛文十年林葉累塵集を撰出したのは、堂上家に對する手ひどい挑戰であつた。元祿時代にはその鋒鋩も顯著になつて戸田茂睡は、梨本集の中に堂々と祕事口傳的態度の無意味なことを批難した。これは、契沖の萬葉集研究に力を添へたものであつて、荷田春滿、德川光圀といふ樣な復古思想に諒解ある學者や後援者が次々にと現はれ出た。やがて、眞淵や宣長の萬葉集、古事記等に對する眞面目な研究の出るに及んでわが國民全般の被つた影響は實に大きいものであつた。古典全部に亘つた註釋、紹介の業は、寛文頃を轉機として、勃然と興つて來た。かの惺窩が、徒然草野槌をかいて、徒然草を平易に解いてから、貞門あたりの俳人の手によつて、續々、古文の註釋書が作られた。貞門の俳諧は、その特色として、古歌や故事を付合に利用した。かうした關係から梅盛とか季吟といふやうな一廉の學者が出たのも當然で、その他にも古典を民衆化するに力あるものが多かつた。この間に、源氏物語の梗概をかいた「雅源氏」的のもの、儒學を物語化せしめた「清水物語」また、訓點づきの漢籍を刊行した鵜飼石齋などの書も交つてゐた。また、その書名にさへも、尤の草子（枕草子に出づ）仁勢物語（伊勢物語に出づ）犬つれ〴〵（徒然草に出づ）といふ如きパロディーがあるといふ風で、學界は靡然として、古典尊重の氣勢に向つたのである。貞門の將貞德や、談林派の將宗因が各々俳諧を弄びながら、なほ、自らは歌

入乃至連歌師であるといふ慢りを棄てなかつた理由は、かうした世相を背景にして始めて會得され得る。林道春が弘文館において本朝通鑑を編纂すれば、德川光圀は彰考館において大日本史編輯の事業を始めるといふ如き、すべてかゝる文藝復興精神の反映でなくて何であらう。

次に、宗教上において古神道の稱道されて來たのも、これらと同等の一現象に外ならぬ。「本朝は神國なり」との思想は、鎌倉末期時代から兆したものであつたが、それが系統化されて來たのは、やはりかの契冲以後である。伊勢の度會家の人々、荷田春滿それ〴〵古神道の研究者であり、また山崎闇齋は、所謂、垂加流神道を創始した。これらが、一般國民生活に、深く結びつく迄には、なほ、相當の日子を要したけれど、かうした復古思想が足を揃へて一時代に興つたことは、如何にも愉快な現象ではないか。

われ〳〵は、最後に一般的藝術にあつても同樣に、箏曲、箏歌の復活や、土佐派の繪畫の隆盛等を見ることが出來る。殊に、土佐派の分派なる、住吉一派（如慶や具慶）の擡頭は、狩野探幽や英一蝶などの江戸畫家的の行方に對し、古い純日本味の繪畫を復古せしめるに預つて力があつた。恰も、江戸の朱子學に對し、上方に古學の隆盛を見たと、好一對の狀を見せてくれる。なほ、土佐派の本系からは、土佐光起の輩出して、漢畫派に對し大いに氣勢をあげ得た。また、次節に述べる浮世繪の勃興の如きも土佐派と離すことの出來ない關係を持つてゐる。

さてかゝる時代精神は、芭蕉の性格の上にいかに反映して來たか。われ〳〵は、直ちにその多くのものをそこに見出だしうるのである。

こゝには、まづ芭蕉の文學的門出から語り出さなければならない。文學的天賦において、西行がその一族の中に孤立してゐたやうに、芭蕉も、その近親の間に藝術的稟賦の者を持つてゐない。多數の兄弟もあつたやうであるが、何れも凡庸であつたらしい。只、芭蕉より長生した一人の兄は書に長じてゐたと見えて手蹟の師匠などを片手間にやつてゐたやうである（芭蕉正傳）。その血統からであるか、芭蕉の書も近侍時代から主君に知られたほど立派なものであつた（次郎兵衞物語）。かれ自らも「筆は半學なり」と言つてゐるが、その後も雲竹に師事したこともあつて、かれ獨特の妙境を見せてゐる。嵯峨日記には、書を練習して日を暮らしてゐる所がある。江戸に出た時、執筆になつたとか筆耕をしたといふ傳へのあるのも、萬更な虚傳ではあるまい。芭蕉は、假名の方に巧みであつたが、あの氣骨のある筆威は、よくかれの個性を表はしてゐるではないか。しかるにまた、漢字に於いては、むしろ、假名に近い婉曲さを持たしめてゐる所、どこ迄もかれの趣味と合致してゐる。

それはさて、こゝにかれ芭蕉が、文學界の人として延び出たに就いて、忘れることの出來ない恩人があつた。それは前説の幼君良忠その人である。兩者の關係は、西行と後鳥羽上皇、兼好と後宇多上

皇のそれと餘り違からざるものであつた。すなはち、良忠は、藤堂良勝の嫡孫ながら、風流の道を娯しみ、和歌を冷泉家に學んでゐた外、芭蕉を殊に愛して、自ら蟬吟と號し、貞門下の季吟の流を受けてゐた。芭蕉も、その因緣から、早く句作する機會を持つことが出來たのである。

しかし、貞門派の俳諧は、後の蕉風に比して、殆んど文學的價値に乏しく、重んずる所、連句では詩歌附、發句では緣語といふ風で、文學とはいへ機智を鬪かはす遊戲にすぎなかつた。當時の作として傳へられる芭蕉の句は幼稚見るにたへないものである。それでも、かれはいつか、文學青年らしい氣持に誘はれていつた。蟬吟の死に遭つて、身の振り方に困じたかれに、最も蠱惑を持つてゐたのは、やはり、この文學の世界であつた。郷里を出奔したかれは、蟬吟の關係から京都に季吟の門を叩いたり、伊丹に、伊丹風の開祖鬼貫を尋ねたり、また漸く新流を樹立しようとしてゐる難波の宗因の門に馳せ參じたりした。季吟は、當時萬葉集訓點注釋を續けてゐた時代で、芭蕉の助力をうけたといふ芭蕉談などの傳も、まづ信じて然るべきであらう。

かつ、季吟の藏書には、多くの古書があつたらう。芭蕉はそこで、未知の古歌集に接し、耽讀することも出來たであらう。芭蕉ほど、古人を拉して來て、それらに純眞の禮讃を捧げ得た人は珍らしい。歌人では西行、定家、實朝、詩人では樂天、李白、杜甫を最も私淑した。「はるかに定家の骨をさぐり西行のすぢをたどり、樂天が腸を洗ひ、杜子が方寸に入るべき族」が、俳人の中でも最上のものと、

かれは言つてゐる。

かれが、西行に對する追慕には、ほとんど、狂的のものがあつた。素堂は、それを「此翁、年頃山家集にしたひておのづから粉骨のさも似たるをもつて、とりわけ心とめ云々」と書いてゐる(甲子吟行跋)先づかれは西行の畫像を人にかゝせて持參してゐ(雪外老人の書翰)、書法も西行の跡を學び、山家集はこれを身から離さず愛誦した。また、西行の遺跡といへば、どこ迄も尋ね入るといふ風で、

露とくとく試に浮世すゝがばや

芋洗ふ女西行ならば歌よまん

西行の庵もあらん花の庭

柴の戸の月やそのまゝ阿彌陀坊

蠣よりは海苔をば老の賣りもせで

西行の草鞋もかゝれ松の露

又越えむ小夜の中山初かつを

といふ如き、西行に關した發句も多い。後年の奥州旅行でもほど西行の足跡を辿つていつたといふ風である。芭蕉談中惟然記によると死床にあつて喘ぎつゝも、なほ「西上人の道心をしたひ云々」と、繰更えしてゐる。しかも、われ〳〵の氣付かれる兩聖の相違は、西行は歌人であり、芭蕉は俳人であ

つたといふことだ。その間には、嚴乎とした個性の差別、到底乘り越すことの出來難い障壁がある。芭蕉が如何に、西行の心境を憧憬しても、その境地は、俳句的リズムにこれを盛ることは不可能なのである。西行の心は單純、しかも芭蕉の賦性はもつと複雜だつた。芭蕉は元祿といふ環境を脊負つて、終生純一を目指して悶ゆべき人の運命にあつた。しかし、われ／＼は、西行を私淑した芭蕉の方に、西行以上の偉大さを認めずには居られないのである。

風になびく富士の三里に灸すゑて行方もしらずあるく西行

この狂歌は、芭蕉自身が西行の「風になびく富士の煙の空に消えて行方も知れぬわが思ひかな」を綟つて作つたものであるが、こゝに愈々兩聖の特色が見えるではないか。芭蕉には、到底西行のもつ幻妖的奔放が存し得なかつた。芭蕉は、あまりに冷たかつた。かれの焔は、水の上にのみ燃えた。かれの行脚は、決して西行のそれの樣に、「行方もしらず」歩いたものではなかつた。

芭蕉は、歌學には興味を持てなかつたらしい。芭蕉の態度として、勿論さうあるべき筈である。嵯峨日記によれば、その際持ち合はしてゐる書物に、世繼物語、源氏物語、土佐日記、松葉集等の名が見える。尤も、これは、庵主去來の物かもしれない。「見て惡き書とてはなし、儒佛より國書、其外、謠、淨瑠璃本もみるべし」（俳諧芭蕉談）と、かれ自ら北枝に言つてるやうな譯で、かれは暇にまかして手あたり書物をよんだものらしい。しかしまづ、その書が國文に緣の多かつたことは當然であ

らうし、徒然草や土佐日記を丈草や乙州に講義したことも、俳諧芭蕉談に出てゐる。殊に、徒然草について支考と議論したことなどあつたらしく、支考がそれを「つれ〴〵草の讃」といふものゝ中に記してゐる。元來つれ〴〵草は、前述の徒然草野槌が出た頃から、急に普及したものであつて、その後汗牛も只ならぬ程注釋は出たが、芭蕉にもあまり愛讀されはしなかつたらしい。徒然草は詩味に乏しい。そこにその短所がある。

芭蕉が、當時、難波において宗因と會したかどうかは問題である。傳說としては、芭蕉が鄕里出奔後、直ちに宗因を尋ねたともいひ、芭蕉は宗因と一緒に筑紫旅行をしたとも言はれてゐる。しかし、ともかく廿四五歲の一文學靑年が、宗因のもとに押しかけに尋ねてゆくやうなことは、ありがちなことゝて、直ちにこれを虛傳として卸けるのはどうかと思ふ。（一說には、蟬吟と宗因とは交際の間柄であつたとも云ふ）

宗因が談林派の主將として名をあげたのは、怖らく大阪獨吟集の判者となつた以後であらうから、當時は未が一介の連歌師と見る方が適當かもしれない。ともかく、かれが談林門を確立して以後の働き振りには目ざましいものがあつた。貞門の定めた規約を全然無視し、主として心附を以て、縱橫無盡にかきなぐつた。一日四萬の句をよんで四萬堂の名を得た西鶴は、實に宗因配下の猛將であつたのである。しかも、芭蕉の江戶に下つていつた翌々年は、江戶談林の創始された年でもあつたが、その

頃の芭蕉の句は、甚しく談林調をおびてゐる。

　　お靜かに御產れ夕陽いまだ殘んの雪

といふのが、宗因自讃の句であるから、これで談林調の句の全般が推測されるであらう。未だ十四歲であつた其角が、芭蕉の弟子として最初に入門して來たのも、その延寶二年（芭蕉卅一歲）の事であつたが、其角の詠む句まで、ほとんどその談林調であつたのである。

なほ、芭蕉の初期の句を通じて注目される點は、漢學の影響である。その一つは漢詩的表現法、その二は老莊的思想。

かれが、樂天、李杜の輩を賞美したことは前述した通りであるが、かれは詩作を學ぶ機會を、始め田中桐江に、後には門入素堂に得ることが出來た。同じくこの兩唐詩人の中では、杜甫の詩をより多く愛してゐた。それは、旅人としての西行を追慕するかれの心持に一致する所である。（尤も、李白のことも、何かに言つてはゐる虛栗跋の芭蕉洞桃靑といふ署名などに、全然異國趣味を知りうるけれど、その桃靑といふ別號は、どうもその李白といふ號からの思ひつきらしい「室鳩巢の說」）その虛栗といふ集は、天和三年（芭蕉四十歲）の年、其角が編輯したもので、芭蕉の初期、所謂次韻時代と呼ばれてゐる俳風を最もよく代表するものである。前揭の「李杜が心酒を甞て云々」の跋文をなほ、追つて見れば「侘と風雅のその生（つね）にあらぬは西行の山家をたつねて人の拾はぬ蝕栗（むしくひぐり）也」とあり、署名の下

には「皷舞書」とまで書き添へてある。芭蕉の氣概を思ふべきと共に、その俳風はこゝに一層注意を要する。

憂方知酒聖貧始覺錢神

花にうき世我酒しろく食黑し　芭蕉

眠を盡す陽炎の痩　一品

鶴啼て靑鷺夏を隣るらん　嵐雪

童子礫を手折る唐梅　其角

月を濁す汀の蓼を芦かりて　嵐蘭

浪のさゞれにたなご釣る影　執筆

かく連句の味は、ほとんど七部集第一の冬の日などと優劣を見ない程である。しからば、かれはどうして談林調から身を早く、かくも蟬脫せしめることが出來たのであらうか。

わたくしは、これを談林派の常用した佶屈な漢詩調と、晦澁な老莊思想の內化にあつたと言ひたい。一種磊落な調子で贅牙な漢語を竝べることは、等しく談林派の用ひた所であり、芭蕉の初期の句にも甚だ多い。しかし、それは必ずしも李杜の詩心に觸れ得た內容的のものではなかつた。いはば豪勢な時代精神を文の上に反映せしめた程度のものに過ぎなかつた。西鶴の筆致に見うるかの逸宕的氣分を

漂はしめる程度に過ぎなかつた。

しかるに芭蕉は、漢詩を心讀し得たがために、それらの詩心を俳諧の中に移植し得た。殊に、前述の杜子を愛誦したことは、虚栗の中に「老杜を懐うて」との題で、「髭風を吹て暮秋嘆ずるは誰が子ぞ」と詠んでゐることで全般が知り得られる。（これは、杜甫の詩の「杖レ藜嘆レ世者誰子」による）しかし今少し例をあげると、

あふみ路を通りけるに比日野山のほとりにて、胡麻といふものに上のきぬとられて

剝れたる身には砧のひゞきかな

（これは、杜詩秋興八首の一、寒衣處々催二刀尺一白帝城高急二暮砧一によるか）

俤も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷て時のうつるまで涙を落し侍りぬ

夏草や兵（つはもの）どもが夢の跡

（これには、勿論、かの春望の國破山河在、城春草木深をとつてゐる）

その他の文致に就て見ても、鹿島紀行の「頗る人をして深省を發せしむ」といふ句（これは、遊二龍門奉先寺一の令二人發一深省一に出づ）奥の細道紀行の「負へるあり、抱けるあり、兒孫愛するが如し」といふ松島の叙景（これには、諸峰羅立似二兒孫一の暗示見ゆ）等は、何れも杜詩に關係がある。芭蕉は奥州行脚の際にも杜子の詩集を携帶してゐたらしいが、この松島の叙景が杜詩に負ふ所あることを思

へば、奥の細道全部が持つ潙勁簡結な妙趣を以て、漢文と緣の深いことは斷言してよからう。「老杜は痩せたり」（幻住庵記）「杜子が方寸に入る云々」（曲水への書）といふ樣な芭蕉の片言をその他に求めるなら、なほ少くない。

さて、こゝに「枯枝に烏とまりたりや秋の暮」（後に、とまりけりと改めた）の句が、寒鴉枯木の熟語の飜案であるか否かは、直ちに斷じ難いが、わたくしはこれを、一片の談林調の句であると排し去る說には同意しかねる。芭蕉が、未だ、五七五といふリズムに落付き得ずに、止まりたりやとしたことは、必ずしも機智的遊戲的にこの句をなしたといふ理由にはならない。かれの十分治定し得ぬ粗剛な精神生活は、却て、止まりたりやといふ強い韻律を要求したのではあるまいか。こゝに若し、雪舟の硬く強い線を以て枯木に寒鴉が配せられた作があつたとするならば、それを、止まりけりと叙するより、止まりたりやと表現する方が、この場合適當ではあるまいか。

廿日餘の月かすかに見えて、山の根際いとくらきに馬上に鞭をたれて數里いまだ鷄鳴ならず。杜牧が早行の殘夢小夜の中山に至りて忽驚く

馬に寢て殘夢月遠し茶のけふり

これは、虛栗の出來た翌年、東海道を下つていつた紀行（甲子紀行）の中にある一節である。杜牧云々は、積翠抄にもあげられてある通り「垂レ鞭信レ馬行、數里未ニ鷄鳴一、林下帶ニ殘夢一、葉飛時忽驚、霜凝孤

鶴廻、月曉遠山横、僮僕休レ辭レ險、何時世路平」といふ詩を指したもので、馬に寝ての句は、なるほど殘夢月遠しなどごつ〳〵はしてゐるが、如何にも漢詩味を餘分に含んでゐる。われ〳〵には、表現上から、（直観内容は別として）この句に對し何等持ち出すべき抗議を有さない。こゝに、「馬に寝て朝日淡く茶のけふり」と改めた方がいゝといふ人があつたとしても、それはこの場合、論ずべき事柄ではない。見よ、「ひとり芳野のおくにたどりけるに、まことに、山深く白雲峯に重り、煙雨谷を埋て、山賤の家、處々にちひさく、西に木を伐ル音東にひゞき、院々の鐘の聲心の底にこたふ云々」（甲子紀行）の吉野山の叙景、「高山奇峰頭の上におほひかさなりて、ひだりは大川ながれ、岸下の千尋のおもひをなし、尺地も平らかならざれば、鞍の上しづかならず云々」（更科紀行）といふ木曾谿の描寫、さらに「江山水陸の風光數を盡して、今象潟に方寸をせめ、酒田の湊より東北の方山をこえ磯を傳ひいさごを踏て其際十里、日影やゝかたぶく頃、潮風眞砂を吹上ゲ、雨朦朧として鳥海の山かくる」云々（奥の細道」といふ象潟の眺望の文脈。しかも、誰かよくその漢文脈の存するものを嗤ひ去り得るであらうか。わたくしは、たゞ、顯然として芭蕉の持つ漢文漢詩の體驗を知るのみである。

そこで、「虚栗」の後に出た「冬の日」を以て、芭蕉が漢詩的影響を洗ひすてゝ獨自性を開いたものであるといふ説は、餘り早合點したものではあるまいか。かれが、歿した前年（元祿六年）かれは、弟子の荊口に次のやうな書を送つてゐる。

時鳥聲横ふや水の上　　聲や横ふか

一聲の江に横ふやほとゝぎす

水光樓天白雲横江の字横句眼なるべしや、ふたつの作いづれにやと推敲難定所云々。

この一例は、かれが如何に晩年迄、漢詩的技巧、しかも文字の使用法に迄、緻密な注意をしたかゞ分るではないか。そこにわれ〳〵は、古文辭學的な修辭的用意と共に、かれが漢詩の持つ奇峭味を愛する一面を是認しても差支へはあるまい。

芭蕉と老莊道、次ぎに生ずるこの問題は、かなり複雜なものに相違ないが、これをも、わたくしは大膽に前同樣な解決をしたい。なるほど次韻時代迄のかれの句は（發句にしても付句にしても）、隨分亂棒に生噛りの故事漢語を竝べた樣に、老莊味を書きなぐつてゐる。たとへ、すでに芭蕉自身が、莊子の說に共鳴を見出だし得てゐたとしても、かれは、それを文學內容に移して、その味を出すことを考へてはゐない。其角が先頭に立つて、その奔放な態度と奇警な用語に基いて、吐き散らしたのが延寶時代全般の風調であつて、田舍の句合（延寶八年）の其角の序を見ると（この句合の判詞を芭蕉が書いてゐる）

――章のふつゝかに、語路の巷のまがり曲れるをもつて、田舍とは名付たるなるべし。仍以てこれに翁の判を得たり。判詞莊周が腹中を呑で希逸が辨も口にふるす。遠くきく大江の千里は百首の

詠を詩の題にならひ、近所の其角は芭蕉に詩をのべたり。あゝ千里同腹中なることを知る。しるといへば我是をしるに似たり。しらずしてこゝに筆をとる、又是しらざる也。

とある。「判詞荘周が腹中を呑て」の句は、句評の最後が「栩々齋桃青漫採毫判」となつてゐるその栩々齋の號の意味を説明してくれてゐる。判詞はまして、老莊味たつぷりで、常盤屋之句合の一例をあげると、

第三番

左　持

芹とる翁碧潭に望んでこはいかに

右

防風ゆるく吹て青酢漸く垂(タレ)り

碧潭に望んで芹とる翁、薄氷をふむかと危きに、防風ゆるく吹て、青酢の氷解初たるも、のどけしや。左右のけぢめいづれかと筆をかざして、はるかなる向うの畦道をみれば、髭むさ〳〵と生たる老人、早わらびの杖にすがり、忽然と来たり、芹をあなどるべからず、ばうふうを捨べからず、我は是此山にかくれ住む野老先生と云ものなりと云て唄う[illegible]

これは必ずしも、老莊味の明瞭なものではないが、芭蕉自身の持つ幻想性を見るにこれて十分であらう。思ふに、未だ若いかれは、一種の妖怪趣味、悪魔趣味、强盗などの句が多い。などを抱いてゐて、

それが幻妖的老莊道と一致して、春りに筆端に出たものと考へられる。

しかし、遂にかれの老莊的共鳴は、一時的のものでなかつた。かれが田中桐江に莊子を學んだ機緣は、連綿として、かれが歿後、大津無名庵に遺した品の中に、莊子の一卷をさへ見出だすことが出來得た程となつた。

莊子の書讃

もろこしの俳諧とはん飛ぶ小蝶

といふやうなかれの句も傳はつてゐる。嵐蘭の誄をかいては「老莊を魂にかけて風雅を肺肝の間にあそばしむ」といひ、蓑虫跋をかいては「其無能を感ずる事は、ふたゝび南華の心を見よとや」といひ、更に閉關說の中には「南華老仙の唯利害を破却し、老若を忘れて閑にならむこそ、老の樂とはいふべけれ」とも記してゐる。こゝに老莊思想はすでに、かれの完全な精神的糧となりきつたのである。わたしは、なほ惟法に與へたかれの書簡中の逍遙游の文を參照して見たい。

逍　遙　游

道に逍遙の二字あることは、心に天游有て世におもしろがらんといふことなり、天はこれをえて月清く、地は是をえて花咲り、鳶と魚とはひらめきて遊ぶもの也、野馬は風にうかれて遊ぶものを、草くふ牛の飽てしづかなる、虻は其の尾に遊んとすれば、うしのぬしはとまらせてうたん事を思ふ、

はたとうたれて悲しからんは、遊ぶ時の心にかへよ、其ぬしの牛にはぢかれて二なき鼻のかけたるためしもあらん、すべて遊ぶことは先にして、苦ぶことは後なり、誰か遊んでくるしまざらん、苦しまずして遊ぶ人は世にありて何人ぞや、世に實あり、虚あり、實に遊ぶ人は虚にくるしぶ、誰か實なく虚にすゝむ人はある時のあるにぞ、いとど苦しむべき、虚に實あり、實に虚あらば虚實は虚にして自在なるべし、むかし莊周が夢に胡蝶と遊びしも、觀音の花によめ入せられしも、素より虚もて虚をとかねば、まして實をもて實をとかず、かゝる聖人の虚をさして、今の人もいうて遊ばざらんや、此故に春に成ては、川狩に遊ぶ、茸狩の時は浪人をあそばしめ、鷹狩の時には大名を遊ばしむ、寔よく天の遊ぶものにして、貴賤貧福は人の苦しぶなり。

一、逍遙遊先書は反故に可被成候書直し進候我もこれに遊ぶものに候へば深く苦しみも候はず候故おもしろき事なくお約束の茶はいかゞに候哉まち申候以上

この文はいつの時代芭蕉の草したものか不明である上、自ら斷つてゐるやうに草稿のまゝである。なほ、芭蕉論には誰も引用する一節であるが、わたくしは、今少し立ち入つてこれを考へて見たいのである。それは、この一文がまづ

花に遊ぶ虻な喰ひそ友雀

起よ〳〵我友にせんぬる胡蝶

といふ様な芭蕉の句の聯想から出立する。それから、

はひ出てよ飼屋の下の墓の聲

むざんやな甲の下のきり〴〵す

などゝいふ句の想起に及び、さらにかれが一般の遊樂的精神に考を及ぼす。この精神は、芭蕉が俳諧を遊びてあるとか、俳諧は老後の樂しみであるとかいふ俳論的方面からと、沒我愛と幻住の實生活の方面からと兩面から見得られるけれど、これは、最後の項目に讓つてこゝには說かない。

なほ、今一つこの項目について、總括的に見ておきたい芭蕉の精神は、かれの歷史的興味である。尙古癖は、恐らく文學者一般に共通した特色であると言つてもよいが、紫式部の古代めいた物に對する趣味、兼好の王朝時代の憧憬の如く芭蕉にはそれがはつきり現はれてはゐない。少くとも、かれは口に出して、末世觀を語つてはゐない。しかし、かれは古往の文學者を追慕したやうに、由緒ある事物には、殆んど骨董的の態度を見せてゐる。かれの書簡集の中にある、

今宮村天神のまつり見申候、扨々古風成事に御座候右天神の由來貴庵に御座候由今承り少(シバラク)之內御かし可被下候以上（梅石へ）

大松戸井戸がへに而(て)錢三百文ばかり出候と承ル みな古錢のよしめづらしき事に御座候、先年も山

田にて左樣な事御座候と承候、明日納所へ御かり、私にも御見せ願入候（梅石へ）

これらの文は、共に、兼好に見たかの考古癖を忍ばしてくれるではないか。しかし、芭蕉はその點に兼好程の熱心さを到底持つことは出來なかつた。芭蕉の旅行が、聖者の跡を辿り、伽藍建立の喜捨を受けに歩いた西行の旅と異なる點は、かゝる歷史的趣味にある。かれの紀行文は、海道記や東關紀行的の記錄的なものではないが、しかも、かゝる芭蕉の癖は自ら、その文の行間に洩れ出てゐる。

まづ甲子吟行の旅であるが、その間伊勢神宮、西行谷、當麻寺、吉野藏王堂、西行草庵跡、後醍醐帝御廟、山中常盤の墳墓、熱田神宮、奈良二月堂等所謂名所舊蹟を歷訪し、すべて述懷を凝らしてゐる。

御廟年を經て忍は何をしのぶ草

義朝の心に似たり秋の風

しのぶさへ枯て餅かふやどり哉

水取や籠りの僧の沓のおと

何れもいゝ出來榮で、次韻時代に到底求め難い作ではないか。

かれには年とる丈、かうした癖が募つていつたのであるらしい。次の「笈の小文」の旅については、惣七に宛てた次の樣な書簡さへ殘つてゐる。

三月十九日伊賀上野を出て三十四日、道の程百三十里、此内船十三里駕籠四十里歩行路七十七里雨に逢ふこと十四日

瀧の數七ッ　龍門、西河、蜻蛉、蟬、布留、布引、箕面

古塚十三　兼好塚、歌塚、乙女塚、忠度塚、清盛石塔、敦盛塚、人丸塚、松風村雨塚、通盛塚、越中前司盛俊塚、河原太郎兄弟塚、良將楠塚、能因法師塚

峠　六ッ　琴引、臍峠、野路小佛峠、樫尾峠、クリカリ峠、當麻嵓屋

坂　七ッ　粧坂、西河上ちいか坂、うはかり坂、宇野坂、かふり坂、不動坂、生田小野坂

山峯六ッ　國見山、安禪嶽、高野山、てづかいが峰、勝尾寺の山、金龍の山

此外橋の數、川の數、名もしらぬ山は書付にもらし候、

最後の「書付」といふ言葉によると(笈の小文には、すでに「其處々々の風景心に殘り、山舘野亭の苦しき愁も、且つは話の種となり、風雲の便りとも思ひなして、わすれぬ處々跡や先やと書侍るぞ、猶醉ル者の妄語にひとしく云々」と言つてゐる)この紀行文は、全部の拔萃だけのものにすぎない。熱田神宮や伊勢神宮にも重ねて參詣してゐる。その他、伊良古崎(「いかなる故にや萬葉集には、伊勢の內にえらび入レられたり」と考證してゐる)俊乘上人舊跡、初瀨、三輪、多武峰、吉野、高野、和歌招浦、唐提寺、須磨、木曾、姨捨山、善光寺なども江戸歸參迄に訪うた主要な名所古寺の數々であつた。

丈六に陽炎高し石の上（俊乘上人舊跡にて）

若葉して御目の滴ぬぐはゞや（唐招提寺鑑眞和尙の像に）

須磨寺やふかぬ笛きく木下闇

これらは、多くの述懐句の中に光つてゐる句である。

おくの細道の紀行文は。三大紀行中第一位にあるが、また、芭蕉の古跡趣味が最もよく出てゐる。俳人ながらも歌名所に對しては、また殊更の興趣を持つてゐた。途中尋ねた古跡の主なるものは、室ノ八島、犬追物跡、玉藻前古墳、那須八幡宮、殺生石、西行柳、白河關、かげ沼、安積沼、黒塚、もぢ摺石、佐藤庄司舊跡、武隈ノ松、宮城野、野田の玉川、沖の石、末の松山、鹽がま、松島、平泉、羽後の三山等なほ多い。

等躬が宅を出て五里ばかり、檜皮の宿をはなれてあさか山あり。道よりちかし。此あたり沼おほし。かつみ刈ころもやゝ近うなれば、いづれの草を花かつみとは云ぞと人々に尋ね侍れども、更にしる人なし。沼を尋ねて人にとひ、かつみ〳〵と尋ねありきて日は山のはにかゝりぬ。鐙摺白石の城を過、笠島の郡に入ば、藤中將實方の塚はいづくのほどならんとへば、これよりはるか右に見ゆる山際の里を、みのわ笠島と云、道祖神の社かたみのすゝき今にあり、とをしゆ。此頃のさみだれに道いとあしく、身つかれ侍れば、よそながらながめやりて過る、簑輪笠島もさみだれの折にふれたりと。

笠じまはいづこ五月のぬかり道

壺　碑

市川村多賀城に有

西羅國界の數里を記す。此城神龜元年按察使鎮守府將軍大野朝臣東人之所里也天平寶字六年參議東海東山節度使鎮守府將軍惠美朝臣朝獦修造也十二月朔日と有り。聖武皇帝の御時に當れり。昔よりよみおける歌枕おほく語り傳ふといへども、山崩れ川落て道あらたまり、石は埋て土にかくれ、木は老てわか木にかはれば、時うつり代變じて其跡たしかならぬ事のみを、こゝに至て疑ひなき、千載のかたみ今眼前に古人の心を閲す。行脚の一德存命の悦び羇旅の勞をわすれて泪も落るばかりなり。

この最後の古跡を尋ねることを以て、「行脚の一德存命の悦び羇旅の勞をわすれて涙も落るばかり」と迄叙した芭蕉の心持――そこには寸分の誇張すら混つてゐない。

夏山に足駄をがむ首途かな（修驗光明寺行者堂にて）

早苗とる手もとや昔しのぶ摺（忍もぢ摺石を見て）

さみだれの降殘してや光堂（中尊寺金色堂にて）

むざんやなかぶとの下のきりぎりす（齋藤實盛の遺物を見て）

月清し遊行のもてる砂の上（氣比明神にて）

これら各所における述懷の句もその一例證となるであらう。

殊に、細道の讀者をして感ぜしめるものは、かれがこの大旅行をおへて大垣に入り、多くの弟子に迎へられた時のことである。かれは、ある人から近日伊勢神宮の遷宮式の行はれることを聞いた。そこでそのまゝ、

旅のものうさもいまだ止ざるに長月六日になれば伊勢の遷宮拝まんと又舟にのりて

蛤のふたみにわかれゆく秋ぞ

と何を殘して、いそ／＼と出立した。これは宛ら忘水に記された話と好一對であらう。それは、

一年大和法隆寺にて太子の開帳あり、其比太子の冠見落し侍るとて後の開帳にまた趣かれしなり。かゝる古代のものを心にかけて旅立たれし師の心の程、思ひやるべし。

といふので、これらから、われ／＼は、芭蕉が歿年西下した理由は、「長崎にしばし足をとめて、唐土舟の往來を見つ聞馴れぬ人の詞も聞んなどゝ遠き末をちかひ、首途せらける云々」といふ陸奥衛の一節をも信じたくなる　全く、かれは幾度か旅中遭遇すべき危險をも物とせず、多病頽齢の身ながら、更に、九州路を辿らうとして、その途中、難浪で遂にあへなくなつたのであつた。

兼好が、一寸した民謠の原義といふやうなことに、注目してゐたこと兼好論中に述べた通りであるが、この傾向は芭蕉には殊に著しかつた。その一二例をあげて見ると、

風流の始めや奧の田植歌　（おくの細道）

これは奧州における特殊の田植風俗について述べたもの。

其夜（注、芭蕉の鹽竈に宿つた夜）目盲法師の琵琶ならして、おく淨るりと云ものかたる。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる調子うちあげて枕ちかうかしがましけれど、さすが邊土の遺風わすれざるものから殊勝に覺らる。（おくの細道）

最後の一句よく芭蕉の好尙を語つてゐるてはないか。かれは、また、鉢叩きをきくのを非常に喜んだ。かれの俳句の中にも鉢叩きについての句が二三出てゐたと思ふ。これはその一つ。

鉢叩き聞にとて翁のやどり申されしに、はちたゝきまいらざりければ、「箒こせまねてもみせん鉢叩」去來、明けてまいりければ、

長嘯の墓もめぐるかはち敲(たゝき)

諸君は、本論の始め、わたくしが芭蕉に潜む武士的精神を說明した時、第二節のために言ひ殘した方面を思ひ出されるであらう。これについては、本節でも多少觸れて來たことであるが、なほ、かれが古戰場において如何に武士的な感慨を抱いたか、また、いかに義仲に對して追慕の情を持つてゐたかについて述べ、以て、本節を結ぶことゝしよう。これは必ずしも。かれが古往を謳歌したとか憧憬したといふ意味でなく、むしろ、悲劇的美への陶醉であると解釋される。生の格鬪において一は勝ち一は負け、かくして繰更される流轉相に對し、感懷の淚を灑ぐといふ詩人の心がそこにある。「笈の小文」中の鐘掛松より一の谷內裏やしきを瞰下して叙した文、「奥の細道」中の高館の上から眺めた平泉の描寫の如き、いかに短かい詞藻の中によく全景が躍如として出てゐることか。平泉の文は誰も知る處であらうが、この機會に今一度こゝで默讀して貰はう。

三代の榮耀一睡の中にして大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野に成て、金雞山のみかた

ちを殘す。先、高館にのぼれば、北上川南部よりながる大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて高館の下にて大河に落入る。康衡等が舊跡は、衣が關を隔て南部口をさしかため、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐりて此城に籠り、功名一時の草むらとなる。國破れて山河あり、城春にして草靑みたりと、笠打敷て時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢のあと

「笠打敷て時のうつるまで涙を落し侍りぬ。」芭蕉は、ほんとうに、こんな場合に泣きえた男であつた。なほ思ふ、かゝる素諄な文章を、式部、西行、兼好の誰が果して書き得たであらうか。やはりそこは芭蕉獨自の境ではあるまいか。それは時代的影響からのみてはない。よく芭蕉の個性の然らしめたものである。芭蕉には、西行程の決斷力と情熱性はなかつた。しかし、兼好のやうなおちつきに籠りつどけることも出來なかつた。かれの胸中は、靜平のやうて、いつも、ざは／＼と小波が立つてゐた。

芭蕉は、遺言して遺骸を義仲寺に葬らしめた。かれが義仲寺を選んだことには、少くとも二つの理由が考へられる。琵琶湖の眺望を愛したこと、今一つは、義仲に對する追慕の情とてある。所謂凡兆日記といふものは、眞僞の疑はしいものであるが、その中に、芭蕉は幻住庵の閑寂眺望この上ないことを弟子に語つた後、

我歿後、魂の休處は木曾寺と兼て各に申置侍る。人生不定なれば明日にても鬼錄につかば、此事は

達へ給ふな、去來、丈草別て大津の若き人々、能く聞置給へかし。

と言つてゐる。凡兆もこれを許して「幻住庵と木曾寺と咫尺同席の間、魂魄うつる間もあらじ。嬉はしと給ひけり」と言つたが、芭蕉の口吻にも大津附近の地に、江戸の地とまた特別なおちつきを見出し得たことが窺はれる。義仲寺の所在は、殆ど湖畔と言つてよい、その附近は芭蕉がそれ迄佳句を得た思ひ出の多い地である。また、元祿三年の七八月頃から同四年三月頃までゐた庵も木曾塚無名庵と言はれるやうに、その寺の境内にある。しかし、わたくしは、芭蕉の胸中になほも、ある義仲を求めてやまないのである。たゞ、こゝに便るべき資料の乏しいのは、何にして遺憾と言はねばならぬ。例の「木曾殿と背中合せの寒さ哉」の句が、芭蕉の作でないことは言ふ迄もない。敢て他に求めるなら

義仲の寝覺の山か月悲し

これは、おくの細道の旅で芭蕉が、燧山の義仲の遺跡をよんだものである。それには、殊に深い感慨も出てゐない。元來、義仲は武人中でも殊更無風流者とされてゐるやうに、その意味では、俳人の同情を得る筈もないが、それ丈一面かれの心はシムプルであつた。まるで子供のやうな可愛さがあつた。結極そのためかれも敵の術策におちたわけで、その點、頼朝などゝ比して、芭蕉のやうな人間に一掬の涙を灑がれる値があらう。かれは、全然山出しの武士を代表して生れたかの様に思はれる。後節でいふが、六祖五平や佛五左衛門の無知を愛した芭蕉が、かゝる義仲と同じ地に葬られることを、床し

く思つたといふことは、極めて自然な事ではあるまいか。

以上、わたくしは、過去の世界が芭蕉を作り出した領分について、大體これを纏めて述べ得たつもりである。その芭蕉の俳句に現はれ出た點は、これを、官覺とか強い情緒とかいふより、むしろ、情操的とでもいひたい世界であらう。しかし芭蕉が若しそれだけの世界に止まつてゐたら、遂にかれも俳聖と呼ばれるに至らなかつたであらう。わたくしは、なほ、かれの他の境地について進んでこれを述べなければならない。

第三、官能的及情緒的環境について。

ペエタアが云ふ文藝復興の精神は、古典研究の念と同時に、現實尊重の念があつて、始めてその運動が完結され得たのであると。わが元祿文化の特色もその通りであつて、古典尊重の精神と共に實證的精神の横溢が、いかにも鮮かであつた。平家の沒落後、程遠からぬ内に、その榮枯盛衰を詠つた敍事詩平家物語が世に現はれ出た。夢の樣に權力が崩壞したといふ點に、秀吉の一生はまたかの清盛に比較すべきである。しかも、大阪城の餘燼を見ながら、その人々には、すでに平家の興亡を目にした人々の樣に、かくも詠嘆的な詩心が湧かなかつたのである。特に新興階級の人々にとつてさうだつ

た。それは、結極、かれらにとつて過去よりも、現實の方がいかにも興味多いものだつたからである。これには、經濟界の變動といふことが大きに關係を持つてゐる。

群雄割據、小國分立の時代の國家經濟は、殆んど地方的であつた。しかるに元和偃武以後、殊に參覲交代制の設けられてより、經濟狀態は地方的から益々國家的に移つていつた。かくて色々の關係から、大阪北濱には米相場所が成立し、それが全國の相場の中心をなすに及んだ。この物資融通の發達といふことは、諸物價の騰貴を來し、殊更見る〳〵米價の高騰を見るに到つた。さうしてかゝる時世に實力を十分發揮し得るのが、實業階級(町人)であり、最も打擊をうけるものは、俸給生活者でなければならなかつた。この理は、明治維新開港後のわが國狀においても認め得られる。德川時代の俸給生活者の大部はいふ迄もなく武家である。矢叫びのきかれる戰亂の世こそ武を以てかれらは立ち得たれ、偃武時代には立つ瀨を知らない。そこに、武を以て天下をとつた德川幕府の政策は、われ自ら己が入る墓を堀つてゐるやうな矛盾を內包してゐた。武士の中には、鎧を質入れして貧乏をしのぎ、漸く軍談物や江戶淨瑠璃に昔を忍び慰安を得てゐるものも多かつた。かの仙臺藩が貧困のため參覲交代の費用にさへ窮してゐたといふことは、いかに武家が町人の術策の中におちてゐたかを想見せしめる。町人にとつては貨幣が萬能なのである。かれらは、漸く「手習指南所」的の處に入り、數字と算盤の術を知つてゐる程度の文盲であつたけれど、貯蓄の術にはどの階級よりもたけてゐた。「家にありたきは、梅櫻松楓それよ

り金銀米錢ぞかし（永代藏）といふ一節は、よく町人の生活振を語つてゐるではないか。大阪が、殷盛を極めた樣はこれらで思ひやられるであらう。總じて北濱の米市は、日本第一の津なればこそ一刻の間に五萬貫目のたてり商もある事なり（永代藏）といふ風で、おさむらひそこのけの豪勢さであつた。さればかれら町人に、歷史も傳統もあつたものではない。追慕も尙古もあつたものではない。裸物語といふ名の物語のある如く、かれらは何等のためらひもなく身を赤裸になし得た（この氣合には、禪の力も加はつてゐる）。また、當時の物語の表題を見よ。いかに當世、浮世、世間、今樣等の冠辭がそれ〴〵についてゐるか。悉てが現代的でなければ、町人階級には通じなかつたのである

しかし、貯へただけではその金のはけ場がない。かれらは貯蓄と共に、これを使用した。その使用にかれらは、如何なる方法をとつてゐたか。かれらは、それを悉く自分の享樂のために用ひた。特にわが官能欲の滿足のために使つた。しからば、そこに顯現される世界は如何なる社會であつたであらうか。いふ迄もなく、放逸無賴な歡樂的修羅場で、すべてが「好きなことして遊ぶに若かず」阿蘭陀二番船序」といふことをモットーとする。たとへば、蓮如上人が、世人に無常を悟らしめるために、「朝は紅顏あれど夕は白骨」と戒め給うたものを、當時の人々は、かくも短かい人生なればこそ、利那も惜んで享樂せずに居られようといふ考へを、それから導き出したのである。そこには、これ迄あまりに虐げられて來た平民階級の反動的態度も勿論ある。幕府は、慶安二年、延寶二年といふやうに

幾度も儉約令や奢侈禁止令を發布してゐる。しかし、それらの効果は、殆んどなかつた「内裏樣にも見せたし」といふのが、難波江の豪奢な舟遊びで、京の難波屋十右衞門妻と、江戸の石川六兵衞妻との衣裳較べの贅美な樣は、武家を始め一般庶民をしてその舌を卷かしめた。その他、紀文、奈良茂といひ（以上江戸）、中村屋といひ（京都）、或ひは茨木屋といひ淀屋といひ（以上大阪）大名に大金を融通する大富豪が三都の界に澤山あつた。

しからば、かれらの享樂の世界は、如何なる種類のものであつたか。文學に遠い町人に、兼好のいふ讀書の趣味など分りやうがない。結極、手つ取り早いものは、肉的の快樂であつた。西鶴の書いた一代男の主人公は、浮世之介の名通り肉的享樂者であつた「我は後家を靡ける事度々なり」といふ樣な點に、淫靡極りのない風が燒り切つた事實が想像されるが、「今時の娘さかしくなりて、仲人を問かしく、身拵取り急ぎ駕籠待ちかね、尻輕に乘り移りて悦喜鼻の先にあらはなり」と一代女にも書かれてゐる、その通り、女性自らの貞操觀がすでに變つてしまつたのである。これでは、男性の方からまづ三舍を避けなければならなかつただらう

しかし、町人の一般的享樂といへば、かうした戀愛でなくて、一つは遊里の中にあり、二には歌舞伎並に淨瑠璃等の演藝の上にあつた　遊女を以て女郎樣と樣づけて呼ぶのが當時普通であつたが、これは遊里の世界の權威あつたことをよく現はしてゐる。さうして、遊蕩の果ては「島原通ひすぎて家

貨流るゝ「男色大鑑」で、商ひて利した財や親讓りの富も、二三月の間にはたき出す者も少なくなかつた。どこ迄も、當時の人々は「人間遊山のうはもり色里に增すことなし」（好色二代男）といふ調子であつた。これには、一般庶民の貞操觀が弛んだとはいへ、なほ現代などゝ異り、男性は容易に戀の機會が與へられなかつたに反し、遊里が甚だ自由寛大にその機會を提供したといふ理由も存してゐる。しかも、經濟界の變動は、昨日の大商店も今日は炊煙をさへ立てかねるといふやうな樣々な悲劇を生むに到つたため、身賣女も增して來た。しかも、朝に大阪新町の後朝を惜しみ、夕には、京島原の夕月を眺めるやうなことは、西行も知り得ない娛しみなどゝ、遊客はしやれてゐたのである。遊里に出入するものの大部分は、致富の町人であつたが、武家にても地領を持ち富有な者は、豐後節をも口荒み、投節の一鎖でも歌ふといふやうになり、やがて遊里に通ふものすら出來た。遊里においては町人と雖も武士とよく平等の地位を保ち得た。そこは、金と戀の世界で、階級といふやうな儀禮は役立ち得なかつた。榊原侯や尾張侯の如き大名さへかゝる廓內に出入したと噂されたが、その實否の問題は別として、これらで遊里が如何に享樂的別天地を形成してゐたかゞ推測され得るだらう。

歌舞伎並びに淨瑠璃も、かゝる世相を背景にして始めて發達し得たものである。歌舞伎は最初專ら女歌舞伎と言つて女役者のしたものであつたが、ために劇場は變態的遊里となり、幾多の弊害を生じたゝめに禁止の厄に遭つた。しかし、それに代つて出た野郎歌舞伎にも、かなりの弊害は伴つて來

た。ともかく、芝居は享樂的世相に投じていよ／＼熾になり、江戸の市川團十郎に對し、上方では坂田藤十郎が出るといふ風で、殊に難波では道頓堀三座といつて、互ひに出し物を相爭つた。しかし、淫蕩的思潮には所謂ぬれ事が歡迎されて、傾城買ひの場面のある戲曲が多く演出された。觀客は、舞臺上の遊冶郎を見てやんやと喜んだのである。淨瑠璃といへば、誰しも大近松を連想する。近松が作物において重きを置いたものが、時代物であつたことは言ふ迄もない。しかし、その時代物がやはり元祿時代を環境として生れ出たものであることは、その一曲を點檢した者の直ちに首肯する所である。かれの作中の時代的人物には、殆んど、時代的心理が出てゐない。元祿時代人が、王朝時代や鎌倉時代の服裝をつけたまでのものが多い。かくて、かれが一度世話物、情死物、すなはち巷說を脚色化してこれを世に出すや、忽ち沸騰するやうな大好評を博した。かゝる結果の生ずることについては世相を考察すれば、分りすぎた程自明な理であらう。

さて、元祿藝術の第一特色を、寫實的にあるとする論は、異論のないことであるやうに思はれる。わたくしもこれを否定するものではない。例へば、歌舞伎における貞享以後の寫實風（坂田藤十郎の所作の如き）繪畫における浮世繪風の隆盛（菱川師宣や鳥井淸忠の作の如き）、俳諧における談林派の寫生的態度、浮世双子に見る寫實的筆致——何れとして、寫實的といふ提案の實例とならないものはない。しかし、寫實の眞義が、沒主觀的に存することは言ふ迄もない、その態度は、先づ冷靜を要し、

凝視の力を大切とする。われ〳〵は、寫實の態度におけるかのフロォベルの如き嚴肅さを思ふ。しからば、元祿の諸藝術家に果してかゝる鋭利さと嚴肅さがあつたか。遺憾ながら、描寫のための描寫といふやうな態度は、未だ、かれらには考へ得られなかつた。

談林派についても、前節で數言を費した所であつた。貞門派あつて談林派の出來たことは言ふ迄もないが、もと〳〵俳諧と稱するものは、近々、貞德が犬子集を出した寬永十年からのものである。かつその俳諧の主眼となるものは、自由に、滑稽機智を詠むといふことにあつた。貞門の勢ひが談林に奪はれた理由も、結極、この主眼が不徹底だつたからである。貞門の俳諧は、未だ連歌の影響を蟬脫せず、法式めいたものに拘泥して、俳諧の主旨に戾るものがあつた。しかるに、談林派は、殆んど心附的の連ね方で、專ら奇拔、滑稽で人の度膽を貫かうとした。かうした態度のもとに、喜ばれる材料が現代のものであるべきことは述べる迄もない。元來、貞室は鑑屋某であり、西武は綿屋某であり、未得は兩替屋、玄甫は人形細工師といふやうに、相ついで町人生えぬきの俳人も出たからでもあるが平民階級を題材にして詠み出す者も多くなつた。西鶴などは、遊女などをも俳諧の材料にとり入れてゐる。遊女を詠めば、所詮、遊里の生活の一端を叙することになる。しかし、それはどこ迄も俳諧を詠む上の餘沫として寫された迄で、寫生のための寫生ではない、寫實のための寫實ではない。この點は十分省慮すべき事項ではあるまいか。かつこの事は押して、西鶴の人情本や、近松の世話物の本質を

考へる上にも參考になる。時代々々の人情風俗が說明された書、また遊里や劇場についての案內的な本を以て、直ちに寫實的のものとするのは大きい謬見ではあるまいか。西鶴以外の人情本作家で、その著書から世相の說明文と、拙ら䘮話の筋を取除けば、後に何物も殘らぬものが多い。要するに、元祿文學の寫實性には、基礎が無い。ぐらついてゐる。嚴肅な文學者には、滿足し難い遊戲性が溢れてゐる。

さて、かゝる環境の中に、わが芭蕉は如何やうに生ひ立つたであらうか。これは、頗る興味ある問題である。紫式部を庭園に、西行を河流に、兼好を野原に譬へるならば、芭蕉は崇高な山岳乃至茫洋たる大海である。かれが如何に、動きない山の樣な個性を築き得たかは、次節で述べるとして、その資料といふものは、この元祿時代の雰圍氣からでなければならない。また、かれの素質の持つ力でゐなければならない。

世に多く、藝術的才能は天稟であると考へられてゐる。全く、その適例は尠くない。しかし、わたくしは天稟と共に、努力が如何ばかり人にとつて重大であるかを忘れたくない。芭蕉の藝術は、その大部が努力精進の結果であるかの如く考へられる。かれは珍らしいほどに、晩成的の文學者であつた。一般に西行のやうな韻文作家は早成的、式部や兼好のやうに散文作家は晩成的と言はれてゐるが、芭蕉は例外で、かれの靑年時代における文學的効績はほとんど無いと言つてよい。かれは、ひたすらに

遲々としてその歩を運んで向上を謀つた。

假に廿三歳の出奔の年から、俳諧文學に多少とも心身を傾けたと推定しても、七部集の初集を編み得た貞享元年（四十一歳）まで、その間十八年間の歳月がある。この十數ヶ年をかれは、「寢たる萩や容顏無禮花の顏」（續山井）――廿六歳「きても見よ甚べが羽織花ごろも」（貝おほひ）――廿九歳「行雲や犬の欠屎(かけはり)むらしぐれ」（六百番發句合）――卅四歳「愚にくらく棘(いばら)をつかむ螢哉」（東日記）――卅七歳などゝ、貞門風や談林風の句を得々として詠んでゐたものである。しかもかれの幻住庵の記に「つら／＼年月のうつりこしつたなき身の科(とが)をおもふに、或時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛籬祖室の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、しばらく生涯のはかりごとゝさへなれば、終に無能無才にして此一すぢにつながる」と懺悔してゐるやうに、かれの最初の目的は文筆をとる身になるのではなかつた。仕官懸命の地を羨望して止まない時もあり、その到底求めて與へられないことを知ると、また佛籬祖室の扉に入らうかとも考へたかれであつた。鄕里亡命後十年間の消息は、杳として殆んど推知し難いが、要するにかれにとつて迷ひの時代であつたのである。あるひは言ふ者があるであらう。「寛文十二年（廿九歳）かれが鄕里伊賀にあつて、かれ自身の序及び判詞を以て「貝おほひ」集を上梓してゐるのは、俳諧宗匠を以て自任してゐたのではないかと。また、その年江戶に下つたのも、必ず（俳諧革命に大抱負をもつてゐたためであらうと）しかし、これらは當時の俳人生活の

性質を熟知しないものの考へで、詠句といふことは、いまだ生活の餘業餘事遊び事だけのものであつて、正業とは考へられて居なかつた。貞德や宗因さへ、なほ自ら連歌師を以て任じ、俳諧を輕視してゐた理由もそこにあるし、難波あたりに俳諧宗匠は多かつたけれど、それ／＼本業は別に持つてゐるといふ有様で、點者の點料などゝいふものは、なほ些細なものであつたらしく思はれる。

芭蕉の江戸に下つた理由、これらも、季吟門關係、藤堂家關係の者が多く江戸にゐて、かれを招いた程度のものではなかつたらうか。もちろん、江戸の文化も家康の施策以來、頓に發達して、特に民衆的の俳句も日に／＼隆盛に赴かうとしてゐる。いよ／＼江戸に下る迄には、かれ芭蕉も、さうした點に着眼を怠らなかつたであらう。

かれが江戸に下つた翌々年（延寶二年）、かれは最初の入門者を見た。それが後年の其角であるが、その入門者は僅かに十四歳の子供ぶとりの者であつた。そのまた翌々年、杉倉嵐蘭が入門してゐるが入門といふことが果してどの程度の師事であるか、思ふに晩年芭蕉の俳名が高くなつて、「自分こそ早く師の偉大を見ぬいたのだ」と慢りがに、入門々々と自稱した者も多かつたことと思ふ。ともかく、芭蕉は些少の點料や、二三の入門者を以て、糊口して行くことは出來得なかつた。江戸に下着した當座こそ、杉山杉風や小澤卜尺乃至、默宗和尙の許にも寄寓したれ、その事情は何時迄も許されることではなかつた。（殊に、遠慮深いかれの性格上からみても）こゝに、芭蕉の傳記者は、かれがその後駿

河峯の中の坊家（藤堂氏の家臣と云）の文庫番をしたといひ、高野幽山（貞門流の重鎮の門人）の執筆になつたといひ、あるは、關口水道工事の吏員をしたといひ、市兒に手習讀本を敎へてゐたと傳へてゐる。なほ、かれが乞食をしたと記された書もあり、水道工事では勞働者であつたと傳した本もある。今、この場合、これらに就いて一々詮議立てする餘裕はないが、わたくしは、その何れをも、虚傳ではあるまいと思ふ。かれ自らが告白してゐるやうに、俳句の一筋以外にこれといふ俗才を持ち合はさない、身を以て、單身江戸の眞中に、どうして、易々と生活の資をかち得られるであらう。現今でも情熱を抱いて上京した文學青年が、直ちに幻滅の悲哀を經驗し、一寸會社に腰を据ゑ、つぎは新聞の廣告取りになり、さて一方では雜文をかいてパンの足しにし、切齒つまつては植字工をもして見るといふ閱歷を重ねること、それはそのまゝに芭蕉の姿ではなかつたらうか。三十四五歳の頃から、「[illegible]二百韻」「江戸三百韻」と連句集を出し得て、やゝ俳壇に認められるに及んできたが、かれにとつて、俳諧の中に眞に自己の生命を見出だし得ることは、それからなほ容易なことではなかつた。未だ、かれは貞門談林の一亜流にすぎなかつた。宗因輩の足跡を嘗めるものにすぎなかつたのである。

世に、蕉風開眼を、貞享三年（四十三歳）春の「古池や」の句を以て劃するものがある。その取るに足らぬ妄說であることはいふ迄もないが、もと／＼作風の轉向を、明瞭に某年、某作といふやうに定めることそれ自身が不可能事である。しかし、敢てこれを芭蕉の生長の中に求めるならば、上述

もしたやうに、貞享元年（四十一歳）甲子旅行を以て劃するのが、もつとも適宜ではあるまいか。かれは、江戸を後ろにすると同時に、江戸俳壇がかれを捉へてゐた束縛の手を脱し得て、始めて、かれの素質かれの本性を透視し得たやうに思はれる。試みにこの旅行で得た多くの句を、前年の天和三年の收穫と比較して見よ。兩者の間には、何といふギャップがあるであらう。一躍してといふやうな言葉は無論用ひられないとしても、この旅で蕉風確立の基礎が据ゑられたことは明言すべきである。わたくしはこゝに、古く西行、新しく石川啄木の如き早熟的天才歌人を思ふ、しかも、四十餘歳にして自我を見出だし得た芭蕉を以て、どうして非天才呼ばはりをすることが出來得よう。これを思ふ時、わたくしは、芭蕉が運命的に背負はされて來た時代環境にいよ／＼思ひ至るのである。

環境にからまつた人間の運命、わたくしはそれを、本書の始めから幾度か繰返えして來た。時代に對し終生反噬を續けるもの、時代の醜惡を指的しつゝその救濟を信じてゐるもの、時代を超越し、宗教や諄美の境に生命を見出ださうとするもの――われ／＼はこの場合樣々の人を考へ得るけれど、あらゆる場合において、不斷に自己を凝視するといふことが、最も肝要ではあるまいか。たとひ、無我の境地を志しつゝも、自照の刹那を拔け／＼て、始めてそこに辿り得られるのではあるまいか。かつその自己の中における自分と社會は、一枚の紙の表裏であつて、自省は結構、自餘の他を考へるこ

とになるのではあるまいか。

芭蕉の事業本位の時代相は、芭蕉の素質と對角線上にあつた。こゝにかく斷言するのを、諸君は餘り事實と思はれるかも知れない。若しさうであつたなら、何故に、かれの反抗はもつと早く現はれなかつたか――この疑惑は一應正しいけれど、これには、芭蕉の素質における反抗的要素の有無を考へて見なければならない。かれは如何に、天賦的に侘びを持ち合はしたとしても、かれに強い抗爭的意力が無かつたなら、それもそれ迄である。否、眩惑的世相の蠱妖が、かれの弱いいたいけな心を捕へてしまへば、結句かれの天性も蔽はれる迄である。しかし、その天性が根強く巣喰つて居れば居るほど、ともすれば間隙を求めて突き出てくる、最後には曝露されないとも限らない。

まことに芭蕉は晩成的であつた。蕉風開眼までの道程は苦しく惱しいものであつた。しかし、かれが時代の波の中に浮沈して、遲々としてその道程を辿つていつたことは、かれにとつて決して無意味なことではなかつた。偏頗になり得ない、温順で理知的な性格は、すべてその特色を見出だし、そのすべてに隨順することが出來た。しかし、多包的といふことは、一事に邁進し難いことを語る。そこに多包性の人の惱みがなければならぬ。芭蕉は、妥協がちな自分の生活を回顧する時、西行の純一的態度を追慕し、それを求めてやまなかつたのである。かれは、佛籬祖室の扉に入らうとも志したが、そこにもかれは到底西行の如き殉教的精神を持ち得なかつた。

かれは、甲子吟行にも伊勢詣の際の旅姿を記して、

腰間に寸鐵をおびず、襟に一嚢をかけて手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵有り、俗ににて髪なし。我僧にあらずといへども（髪なきものは）浮屠の属にたぐへて神前に入事をゆるさず云々。

と言つてゐる。所謂「僧にもあらず、俗にもあらず、鳥鼠の間に名をかうふり（蝙蝠）の一で、一種の不即不離的不徹底さがそこにも出てゐるではないか。

これも世相の一つの現はれでもあつたらうが。儒佛神の三教一致論といふやうなものが、當時一思想となつて現はれた。その反映は、大佛物語など物語の中にも見られ、また可笑記や他我身の上（この二書は多少禪味を重んじてゐるが）にもその三教融和の説が叙述されてある。さて神道は、その成立上多包的融合的の特色を持つてゐる。それかあらぬか、芭蕉の敬神思想は、かの西行以上に顯著である。俳諧世說に芭蕉の文として、

貞享五年きさらぎの末伊勢に詣づ　我此白州の土踏こと既に五度に及び侍りぬ。一つ／＼年の加はるに從ひて、畏くもおほん光りも思ひ優れる心地して、かの西行の跡を慕ひ、增賀の誠を悲しびて内外の御前に額き乍ら袂をしぼる許になん侍り。

何の木の花とも知らず匂ひ哉

かういふのもある。かれが、西行の崇敬厚かつた伊勢神宮に詣で、そこで西行を追懷し、「何事のおは

しますかは知らねともかたじけなさに涙こぼるゝ」といふ西行の歌から、「何の木の」と詠んでゐるところ、芭蕉が西行を追うてゆく心持が見えると共に、かれが、西行を乗越さうとする態度すら見うけられる。その一節中の「増賀の誠云々」については、その機會に、

裸にはまだきさらぎのあらし哉　（笈の小文）

の句を得てゐることで一層證せられる。かれは四十歳から五十歳の間に前後七回の參詣を遂げてゐるのみか、筑紫を志したといふ元祿七年の旅行にも、難波から引返し今一度伊勢に詣でたいことを弟子に言ひやつてゐる。（杉風への書簡）

早朝鹽がまの明神に詣づ。國守再興せられて宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに石の階九仭に重り、朝日朱の玉がきをかゞやかす、斯る道の果テ塵土のさかひまで、神靈あらたにましますこそ吾國の風俗なれと、いと貴けれ。（奥の細道）

これ奥州の旅で鹽竈神社に詣でた感想の一片である。また以てかれの敬神思想を見るに足る好材料ではないか。敬神といふことは、既述の武士的尚古的精神などとも相通ふもので、かれの心裡を敬神の一事を以て解決することは不可能であるが、かれが儒教とか淨土宗とか天台宗とかいふやうに一教に偏し得なかつた態度と、この事實との間には共鳴する點が存するやうに思ふ。

甲子吟行の中に、つぎの一節がある。

富士川のほとりをゆくに三つばかりなる捨子のあはれげに泣くあり。此川の早瀬にかけて、浮世の波をしのぐにたへず、露ばかりの命まつ間と捨て置きけん、小萩がもとの秋の風、こよひやちるらんあすやしをれんと、袂よりくひ物なげて通るに、

猿を聞く人捨子に秋の風いかに

いかにぞや汝ちゝに憎まれたるか、母にうとまれたるか、ちゝは汝を惡むにあらじ、母は汝をうとむにあらじ、只これ天にして汝が性のつたなきをなけ。

この態度こそ、世相に對する芭蕉の態度の全幅を語るものではあるまいか。かれは、醜い世相に對しても、直ちにむきになつて憤り得なかつた。かれは、人力以上の天命の力を深く觀照した。その他に「霜を着て風を旅寢の捨子哉」といふ句の味などもこれと同一である。しかるに、この場合、かの天龍川で弟子の西住を京に追ひ返したかの一徹の西行を、この捨兒の側にあらしめたらどうだらう。かれには到底、「ちゝは汝を惡むにあらじ、母は汝をうとむにあらじ。只これ天にして汝が性のつたなきを泣け」など、「袂からくひ物なげて通る」餘裕は持ち得なかつたであらう。あるひは、かれは哀れさのあまりに捨兒を抱きとつたかも分らない。しかもこの芭蕉の冷靜な態度には、西行の情熱と異つた意味に、博大な愛憐の情が潜んでゐるのである。

またかれが古人を敬慕して止まなかつた心も、かゝる心理の現はれと見得られよう。かつ、かれは

西行宗祇竹齋と共に、宗鑑守武の如き遊戯的俳人をも敬した。

宗祇宗鑑守武三聖人ノ圖

月花のこれやまことのあるじたち

山崎宗鑑畫賛

ありがたき姿拜まんかきつばた

同時代の貞徳、宗因に對しても、かれは心からの尊敬を表してゐるではないか。

貞徳翁の姿に對して

おさな名やしらぬ翁の丸頭巾

宗因に對するつぎの追慕を見よ。それは、去來抄の一節であるが、

先師常に曰、宗因なくんば、我々の俳諧今以、貞徳の涎をねぶるべし。宗因はこの道の中興開山なりといへり。

かれは言ふ迄もなく、蕉林門の一異端者であつた、しかし、萬物をそのありのまゝの姿、その本性の上に認めたかれは、他門と雖もこれを悪むことは出來なかつた。卯七が師に、「他門と交りて苦しからずや」と尋ねた時、かれは直ちに、

苦しからず。交りて悪き物は、博奕と盗人なるべし。（俳諧世說）

と答へてゐるが、全く、かれ自身の言行はその主張と一致してゐる。同じく卯七が、「見てよき書は何ならん」と尋ねた時も、また芭蕉は、

見て惡き書としてはなし。儒佛より國書、其外、謠、淨瑠璃本も見るべし（俳諧芭蕉談）

と明言した。尤も、この芭蕉談は、その盡くを信じることの出來ない書であることは附記しておく）

徒然草の持つ氣分には、達觀的超世的のものがあつて、一面元祿時代に迎合される點があつた。しかし、さすが兼好も、芭蕉ほど大膽に言ひ切ることは不可能だつたらう。かれに淨瑠璃本を讀ませたら恐らくその顏を顰蹙せしめたに相違ない。ましてや、芭蕉に多い盜賊を詠じた句などを讀ましたら、それを非文學呼ばりをしたかもしれない。芭蕉の座右の銘と稱せられるものゝ中、「人の短を言ふ事勿れ。己が長を說く事勿れ」とある一節は、かれが葬儀の引導の中に「五十一年一字不說」とある句とよく一致してゐる（銘なるものが僞作だとしても）かれの胸は宛ら大海のやうな寬裕さであり、かれはたゞ默々と實行を以て衆を導いていつたのであつた。

從つて芭蕉の歿後、其角、嵐雪、杉風、去來、許六、支考、丈草、野坡などが、各自の特色を延ばし、江戸座（其角）雪中庵（嵐雪）美濃派（支考）などゝ流派を立てゝ、角逐するに到つたことも止み難かつた。特に其角の如きその當初から、芭蕉の本性と別途の行方をしてゐるもので、芭蕉は生前、すでにそれを認容してゐた。芭蕉歿後の亂脈について、かの俳諧談に、次のやうにある、

佛教さへ一宗〳〵と分てば、其宗に執して他を誹す。况して俳諧の小岐をや。一道をたて侍へば、無學の人の習ひ、名をなさんとおもひて、しかともなき事にほこり、他をなみし、我レ發句したり、集作りたりなど、人にほこるは、眼前に聞ゆが如し。路通を遠ざけし一つは此ノ謂れなり。爰に嘆かしきは、其角也。百日とたゝぬうちに、句に少し變風をきく云々。

しかし、これも生前の芭蕉の寛大な態度に對し當然の結果と言はなければならない。許六の賞してゐる、

師は諸門弟の得たる所々も缺きたる所なし。師に得たる所は、一所も癖なき故に、牆壁を立てたる如し（[illegible]問答）

といふ俊越の異彩こそ、芭蕉を芭蕉たらしめ得るゆゑに充分な點ではないか。されば佛門の各流は、異を立てゝ爭ふけれども、釋尊を崇める點にすべて一致してゐるやうに、芭蕉は歿後と雖もよく、各流各座から一樣の敬慕と尊崇とを受けることが出來た。俳聖芭蕉の偉大さ、また思ふべきである。

さて、われ〳〵は、芭蕉のかゝる延び方と、環境とを照合して考へることはこゝに到底出來得ない。芭蕉は、西鶴や近松と同じくやはり元祿時代の人であつた。

すてはてゝ身はなきものと思へども雪のふる日は寒くこそあれ花のふる日は浮かれこそすれ

この狂句は、芭蕉自身が西行の畫像に讃として作つたものである。これ西行が緇衣の身ながら終生自然の魅力を脱し得なかつたその愛着心に、芭蕉自ら共感したのである。しかし、なほ芭蕉の實生活を顧るとその洒々落々とした天地は、西行のそれと比較すべくもない。かれの一生はむろん貧賤なものであつたが、佛徒に倣つて無所有の生活味を主張するやうなことはしなかつた。嵯峨の落柿舍にゐた時も、

机一、硯、文庫、白氏文集、本朝一人一首、世繼物語、源氏物語、土佐日記、松葉集を置ク。唐の蒔繪書キたる五重の器にさまざまの菓子をもり、名酒一壺盃をそへたり。夜のふすま調菜の物ども京より持來てまづしからず。我貧賤をわすれて淸閑をたのしむ。(嵯峨日記)

と、普遍流通の心持を見せてゐる。堀立小屋の芭蕉庵に住めばそれでよし、落柿舍にあればそこに又淸閑を樂しみうるのがかれであつた。芭蕉の

和ニ角ガ蓼螢ノ句ニ

あさがほに我は食(めし)くふをとこ哉

の句は、其角の大酒を諷諫したものだと稱せられてゐる。しかし、芭蕉は自ら禁酒したり節食したりすることはしなかつた。酒に關する句も多い。

花にうき世我が酒白く食黑し

乙州が一樽をたづさへ来りけるに

草の戸や日暮てくれし菊の酒

雪をまつ上戸の顔やいなびかり

夕顔や酔て顔出す窓の穴

これらは未だ平淡であるが、

鼓書の句

頼むぞと寝酒なき夜の紙衾

尾張の人より淡酒一樽木曾の獨活茶一種送りし門人にひろむとて

飲明ケて花生ケにせむ二升樽

「――。物もいはず、ひとり酒のみて、心にとひ心にかたる。庵の戸おしあけて雪をながめ、又は盃をとりて筆をそめ筆をすつ。あら物ぐるほしの翁や」(閑居箴)

酒のめばいとゞ寝られぬ夜の雪

からうたと大分かれ自らの好酒家の俤が出てゐる。その他、芭蕉書簡集を見れば、「――油のやうな酒五升といふは富貴の沙汰なり云々」(素堂へ)、「酒二升御こし頼入候」(茂作へ)などいふ節があり、更科紀行、鹿島詣、奥の細道、嵯峨日記などつぎ／＼に思ひ浮べられるかれの文中にも宴飲のことがあ

り、かれが酒を好んだことは確かである、かれには、また、

川舟やよい茶よい酒よい月夜

といふ如き、元祿氣分の享樂味を詠んだ句さへあり、事實、茶を愛し、煙草を喫んでゐた。食物に關しては、

あら何ともな昨日はすぎて河豚汁

の句を始め河豚を食した句や文が、數ヶ所見えるがさうした嗜好もあつたものらしい。鳴雪氏は、芭蕉は大食のため胃病を發したものかと疑ひ、子規は、芭蕉は多情的で、しかも獨身であるから肉體の慾を他に伸ばし得ず、食に充たしたのだらうと想像してゐるが、それ迄の臆斷は如何かと思ふ。かれの青年時代はいざ知らず、かれの四十歳後はむしろ早老の人で、さして肉慾の旺盛の人だつたとも思はれない。要するに、鳴雪氏や子規の想像の起因する所も、芭蕉がピユリタンでないことを傍證する。かれには、來りよるものを盡く攝取してゆく一面があつたのである。その他、食物に關しては、

蒟蒻と柿とうれしき草の庵

といふやうな句もあつて、蒟蒻、ふろふき大根、にうめんなどの嗜好も強かつた。やはり、かれは、

濱はわづかなる海士の小家にて、侘しき法華寺あり。爰に茶を飲み酒をあたゝめ　、夕ぐれのさびしき感に堪へたり、

さびしさや須磨にかちたる濱の秋

などゝいふ一文でも分るやうに、味覺そのものに訴へる茶や酒でなく、茶を喫み酒を飲む氣分を味はふ興味につながれる所が多かつたのではなからうか。

しかし、かういふ疑問も、ある年代のみを以て解決するのは拙い。由來、芭蕉を聖賢の列に祀りこめて、亡命を以て釋尊の入山の如く貴々しく神秘化するものがある。否、かれが亡命後少くとも十ヶ年は、時代の波と共に浮沈した期間であつたのであらう。支考が例の調子で「むかし西行、宗祇など食好も長閑も、今日の芭蕉も、酒色の間に身を混じ風雅の道心とはなし給へり」（露川責）と言つてゐるが、酒色の間といふ表はし方は別としても、この事實は誰より最も芭蕉にあてはまつてゐるやうに思ふ。同じくかれの書簡と稱へせられる杢子に宛てたものに、

御手紙被下候昨日は知人に誘はれて四條の芝居見物にまゐり一日遊び申候又々氣も晴候而おもしろく御座候俳諧などとはちがひ是にては俳諧もやめにして遊興斗がよく候（當流遊興致候而芭蕉文集）

「俳諧もやめ」には一座の戯言にすぎないが、宗匠連の芭蕉觀には多少參考にならう。何故に、われ〳〵は歌聖や俳聖その他君子達も、生れおちたその時から、並の人で無いものであるかのやうに考へがちなのであらうか。たとひ、弘法大師が襁褓の中で文字をかき得た聖者であつたとしても、われ〳〵はむしろ、かれを以て、少年時代には偉彩はなかつたが努力精進の結果、解脱を得た大師として考へたいのである。一般に傳記の不明な時代ほど、それを神秘化し靈驗化して仕舞つたものが多い。芭蕉が

伊賀を出奔後暫らくの間は、恐らく一般青年並みに（特に元祿時代を背景にし）酒も飲めば小唄も歌ひ芝居見にも出かけたであらう。それが自然なのだ、そこに芭蕉の人間味がある。

あたかも芭蕉が、奥の細道の旅を無事におへ、江戸に歸つてきた年であつた。かれは暫らく庵の扉を閉めて閑居を味はつたことがある。その時に書いた閉關説といふ文に、

色は君子のにくむ所にして、佛も五戒のはじめにおくといへども、さすがに捨テがたき情のあやにくに、あはれなるかた〴〵もおほかるべし。人しれぬくらぶの山の梅の下ぶしに、おもひの外の匂ひにしみて、忍ぶの岡の人めの關ももる人なくば、いかなるあやまちをか仕出でむ。あまの子の波の枕に袖しをれて、家をうり身をうしなふためしもおほかれど、老の身の行末をむさぼり、米錢の中に魂をくるしめて、物の情をわきまへざるには、遙にまして罪ゆるしぬべく、人生七十を稀なりとして、身の盛なる事は、わづかに二十餘年也。

といふ一節がある。誰しもこの文の調子が、芭蕉の一般のものと變つてゐるのに氣付かされる。かつそれは、どことなく徒然草の文脈を傳へてゐるやうには、思はれないであらうか。もとこの閉關説といふのは、老後なほ實利のために使はれてゐる知人に、閑居の趣を述べたものであるといふに「色は君子云々」と筆を立てた所もけゞんである。しかし、ともあれかれは戀愛の中にある詩眞さを認め得てゐたことが分る。この事實を知るにはかれの連句を見るのが一番近道であらう。そこには、源氏

物語や徒然草中の戀愛描寫、山家集中の戀歌的場面に劣らぬ、當時世態の詠出もあつて、まことに闊達自在の詠みぶりである。一寸「冬の日」を繙いて、その中から、多少とも愛に關はつてゐるかれの連句を求めても、それはかなり多い。

我庵は鷺に宿かすあたりにて

髮はやす間をしのぶ身のほど

床更て語ればいとこなる男

緣さまたげのうらみ殘りし

月にたてる唐輪の髮の赤かれて

戀せぬ碪臨濟をまつ

雪の狂呉の國の笠珍らしき

襟に高雄が片袖をとく

かれが、どんな風に戀の連句をつけてゐるか、そこを、全般にわたつて、まだわたくしも檢べてゐない。しかし、この四つの例だけでもそれ〴〵特色があつて面白いではないか。その他なほ、他の集には、

宮に召されしうき名はづかし

手枕に細きかひなをさし入て　（奥の細道拾遺）

殿守がねぶたがりつる朝ぼらけ

兀げたる眉を隱すきぬ〴〵　（初懷紙）

細き筋より戀つのりつゝ

もの思ふ身にもの食へとせつかれて　（ひさご）

あや憎に患ふ妹が夕ながめ

あの雲は誰が涙包むぞ　（曠野）

足駄はかせぬ雨のあけぼの

きぬ〴〵やあまりか細くあてやかに　（曠野）

と、きわどいものも見える。かうした奇拔な連ね方を芭蕉のものから求めるなら、他にもかなり多からうと思ふ。

貝おほひの判詞の中に「今こそあれ我も昔は衆道好きのひが耳にや」とある。それも戲談だけの言葉ではないやうである。

前髮もまだ若草の匂ひかな

梅櫻さぞ若衆哉女かな

こんなかれの句作さへも傳はつてゐるから。

全く、かの甲子吟行にある、

其日のかへるさある茶店に立チよりけるに、蝶と云ける女あが名に發句せよといひて、しろき絹出しけるに書つけ侍る、

蘭の香や蝶のつばさに薫(かきもの)す

或は、「月見する座に美しき顔もなし」「團扇もてあふがん人の後ろつき」等の句を以て、芭蕉に關する珍らしい艶話位に考へてゐるものは、七部集中の連句や、貝おほひの判詞によつて啞然たらしめらるべきであらう。

以上て、ほゞ元祿を環境としての芭蕉の態度を見て來たが、われ／＼はこれから更に環境を絶したかれの天賦的方面にも入つてゆかなければならない。

さて、芭蕉の最後十ヶ年、卽ち蕉風確立後のかれの生活を考へてみるに、われ／＼は、それを全く「閑居か、旅か」と言ひたい。かれは、その間よく最小の生活に滿足し、弟子と俳諧をよみ、弟子を愛しうることに無上の生活を見出だして行つた。この場合女性觀とか宗教觀とか、乃至道德觀社會觀などを、はつきりかれから索めがたい點も、芭蕉型と兼好型の差別の存するところである。

しかし、史を案ずると、かの五代將軍綱吉の現はれたのが延寶八年（芭蕉三十七歲）て、西鶴が好色

一代男を書きあげたのは、正にその翌々年に相當してゐる。時世の奢侈に向つていつたことは勿論で、和蘭陀船の船載してくる珍品を購ふことの禁令發布（天和二年）、諸大名旗下の遊女町に遊ぶことの禁止（元祿六年）などは、一層浮世双子物の內容の事實であることを確めてくれる。もつとも、綱吉は始めから晚年の如く秕政を行つたわけでなく、當座は生母桂昌院に對する孝養から、護國寺などを建立し（天和元）、生類憐みの令を發する（貞享四）等、まづ善政をなしたのであつたが、柳澤吉保の權勢を擅にすると共に、綱吉の豪奢は增して、はては幕府自らをさへ困窮に陷らしむるほどに到つた。犬を愛するあまりに十萬餘頭の犬を飼養したなど沙汰の限りである。それらが民心に、如何ばかり惡い影響を與へたかは想像外であらう。

かゝる時世に、深川の場末に、わづかに膝を入れ得る草庵を與へられ、そこに滿足してゐた芭蕉を思へ。しかも炊事においても、淨求とか曾良とかゞ時折、手をかしにくるのみで、多くは獨り暮して、只淋しく茅屋から富士を遠望して足れりとしてゐたかれを思へ。正にかれは、大陰朝市に存するといふ語の實例を示した人のやうに思はれる。かれが、佛頂和尙に「道心を求めんとする者、若し市中の愴忙に飽きて幽谷に隱れむ。其初に飽くものは、又其終に寂寞に飽かむ云々」と言つたとも言はれてゐるが、結果から見れば正にそれに相違ない。芭蕉が古往の隱者生活を尠からず憧憬したことも想像されるけれど、かれが輕卒にその眞似をしなかつたところに、かれの偉大さがある。

芭蕉野分して盥に雨をきく夜かな

を始めとして、芭蕉庵閑栖中の句作は少なくない。かれは茅舍の縁からよく月を眺め得たやうに、かくこの庵中にあつて至妙の天籟をこと〳〵く聽取し得たのであつた。

こゝに思ひ至ると、芭蕉はついに元祿の一豎子で無かつたことが分るであらう。たとひ、かれが判詞の中に「伊勢のお玉はあぶみかくらかと云へる小歌なれば、たれも乗りたがるはことわりなるべし」といふやうなことを言ひ、「川舟やよい茶よい酒よい月夜」の句を詠むほど享樂的であつたとはいへ、かれはそれがために、己が素質を害なふことはしなかつた。かれの庵には、へつついが二つあつて、その上に二升四合入の瓢がかけてあつたさうである。杉風など門弟が庵を尋ねる時、それ〳〵いくばくかの米を持參してはそれに入れておくのが常であつた。芭蕉の「瓢の銘の後に」と題した句に、

物ひとつ瓢はかろきわが世かな

といふのがあり、また、

乞うて食ひ貰うて食ひ年の暮れければ

めでたき人の數にも入らん老の暮

米くるゝ友を今宵の月の客

などいふ句もあるが、何れも事實を詠んだものであらう。しかも、弟子が來て多く食つていつたりし

て、誰も米を持つて來ない内に、米が拂底することもあつた。そんな時は、芭蕉自身で米を貰ひに出かけたことであらう　それは何といふ懷しい生活ではないか。

皆々近く圓居し給へとて、茶漬一二杯さら〳〵と打ちしたゝめ、風雅はかくこそあらまほしけれ云々（俳諧世說）

萬事、庵に集まつた連中のやり方は、かう言ふ風だつたのだらう。あらば食ひ、なければすますといふあつさりしたやり方なのである。こゝに、

白露にさびしき味を忘るゝな

の句の味もはじめて生かされてくるわけである。

しかし、芭蕉にとつて閑靜の場所は深川の地のみでなかつた。かれは如何なる地、如何なる家にも閑寂を見出だし得た。そこがこの上もなく尊い。

蔦植ゑて竹四五本の嵐かな

芋植ゑて門は葎の若葉哉

三尺の庭も嵐の木の葉かな

我が宿を蚊の小さき馳走哉

注にいふ、我が宿とあるのは幻住庵にての句のためである

といふやうな句も殘つてをれば、題落柿舍の「深對峨峰伴魚鳥、就荒喜似野人居、枝頭今缺赤虬卯、靑葉葉頭堪學者」といふやうな詩作も殘つてゐる。つぎの數句の如き、明瞭に閑居を詠んではゐないけれど、閑棲を樂しむものにして、始めて詠みうる世界ではあるまいか。

折り〳〵に伊吹をみては冬籠り

秋近き心のよるや四疊半

冬ごもり又よりそはむこの柱

朝顔や晝は鎖おろす門の鍵

惟ふに、芭蕉の幼時、生家の松尾家は不幸つゞきであつた。かつ、極めて貧しかつたらしい。これらに對するかれの追憶は、いつまでもその胸裏から消えなかつたであらう。かれが二十五歲頃の句に、

武藏守泰時、仁愛を先とし政以レ去レ欲爲レ先

明月の出るや五十一ヶ條

などいふのがあるが、年々歲々奢りに向ふ世相を見て、はるかに泰時の節度の上に立つた善政を追慕したのが、この句の心ではあるまいか。深川生活にあつても、入貧の句あるほど赤貧であつたが、かれはどこ迄も洒々落々としてゐる。

米買ひに雪の袋や投頭巾

これは、八貧の一、米買の題で傳はつてゐるものである。もちろんそこには、杉風の如き、弟子にして保護者があつたからでも分るが、それに係らず餘分の物資や金員を持たうとしなかつたことは、どこ迄も清廉潔白の士であつた。かれの書簡集は、何れを繙いても愛讀さるべきものであるが、つぎに摘載した如き清淡な態度の窺はれる一節には、誰しも敬伏せしめられずには居れないたらう。

覺

一、もち米　一升
一、黑　豆　一升
一、あられ　見合セ

右今夕會之夜食に成申候間御いらせ、傳吉にもたせ御こし可被下候、茶は一森三井寺より澤山もらひ申候云々。（喜八へ）

昨日は渡紙澤山御惠存候、然處昨夜惟然一宿例之むだ書、剩へ筆の先棒になし困入申候、今四五枚申請度候、此人に御こし可被下候。（杉風へ）

一近日は芳野行脚立候間金子二分御かし可給候、押付もらひため返濟可申候、されど我等事に候へ

ば、えなすまじくも候以上。(去來へ)

芭蕉が、奥の細道から北陸道に出て來た時、加賀の萬子が餞した金子をかれの受けなかつたといふ逸話は、廣く喧傳されてゐるが、かゝる態度はこの時に限らなかつた。江戸を立つて上方に上る時にも、かゝる餘分の旅費を餞者に返してゐるので、そこにかれのかれたる面目がある。ある意味で、かれは默しながら只實行を以て、時代相に反逆した佗人なのであつた。

しかし、わたくしは、そこに淋しいかれの姿を思ひ見ずには居られない。晩年に及び、かれの個性が出てくればくるほど、孤寥の中にのみ存する純一の自我の相が盛りあがつて出てゐる。「訪ふ人も思ひ絶えたる山里の寂しさなくば住みうからまし」と詠じたのは西行だつた。抱愛の情と、寂寥の心が隣り合つて住む不可思議なわれ／＼の胸よ。

獨りすむ程面白きはなし。長嘯隱士の曰、客は半日の閑を得れば、主は半日の閑を失ふと。素堂常に此言葉を憐れむ。予も又、

うき我を淋しからせよ閑古鳥　(嵯峨日記)

何と愛誦してやみがたい一節ではないか。そこには芭蕉の素質の一端がそのまゝ裸出してゐる。しかし「獨りすむ程面白きはなし」て、芭蕉が孤獨の世界に安住しえたものと考へ、「主は半日の閑を失ふ」の語で、かれが全然客を卻けたとのみ考へるのは輕卒である。雲竹の後ろ向の自畫像に、かれが讃し

て、

　　こちらむけ我も寂しき秋の暮

と、嵯峨にゐた前年詠んでゐるが、誰人か靜かに自己を省る時、かゝる寂しさをわが胸底に認めずに居られようか。

　　此道や行く人なしに秋の暮

　　此秋は何で年よる雲に鳥

この二句はいふ迄もなく、最後の旅で奈良から臨終の地難波にゆく途中で出來たものである。わたくしはこの句によつて、眼前に髣髴と俳聖の姿をさへ思ひ浮べることが出來る。「憂き我を淋しがらせよ――」といふ如く、鋭角的の主觀は出てゐないが、何といふ大自然の波打つ寂寞さが、句の全面に波打つてゐることであらう。

　　此道や行く人なしに秋の暮

　　此秋は何で年よる雲に鳥

その平淡な語彙の中にいかに人間の本然的に持つ呼吸がそのまゝに蝕ひ込んでゐることであらう。なほ、つぎに。訪客にしても、かれは、必ずしもそれを好まないわけではなかつた。これは貞享三年の文ではあるが、閑居箴と題したものの中に、

あら物ぐさの翁や、日比は人のとひ來るもうるさく、人にもまみえじ、人をもまねかじと、あまたゝび心にちかふなれど、月の夜雪のあしたのみ友のしたはるゝもわりなしや（下略）

といふ一節が見える。これぞ雲竹自畫像への讃と同じく、人々の一樣に持つ心ではなからうか。同じく芭蕉書簡集の中に、

「草庵朝顏盛りに候間只今御入來まち入候」（梅石へ）

「五月雨うち降り殊の外淋しく御座候間靑山御誘ひ御出待入候」（新六へ）

などとある。詳しい時や所をこゝに知り得る由はないが、かれの閑居は嫌人病や遁世的性質のものではなかつた。かれは、語りたければいつでも、自分からも出かけ、また弟子をも招くほどの自由な態度を持つてゐた。かの嵯峨で「うき我を――」の句を詠んだ日の日記の書出してある。

二十二日、朝の間雨降。今日は人もなくさびしきまゝにむだ書して遊ぶ。其詞

喪に居るものは悲しみをあるじとし
酒を飮ものはたのしみをあるじとし
愁に住するものは愁をあるじとし
徒然に住するものは徒然を主とす

云々と。まさにかれ芭蕉も、その刹那つれづれに住してゐたものに相違ない。いな、かれは人生の煩

鎖の中に、いかに徒然の時間の尊ぶべきかを知り得た大偉人であつた。かれは元祿時代を環境にもつて、人一倍切實にこの念を抱いて、そのために鬪つた人でなければならない。

これから、わたくしは少し筆を轉じて、芭蕉と旅といふ問題に言ひ及ぼして行かう。

記錄の殘らない四十歳以前のことはまづ論外におく。芭蕉の晩年十ヶ年の生活は、その半ば、旅泊においてゞあつたといふことは、決して過言ではない。もつとも、その他の半ばを暮らした筈の江戸深川が果して、かれの住居であつたかといふにそれすら怪しい。そも〳〵その深川の草庵に尻のおちついたのが天和元年冬(三十八歳)、乃至その前年の冬に屬してゐる。しかるに、その翌年、天和二年十二月には、隣火のためかれの草庵も烏有に歸し、一時甲斐の知邊に身を寄せざるを得なくなつた。世の傳者が、この火災によつて、かれが一處無住の念をおこしたやうにいふのはをかしい。もちろん、其角が枯尾花に敍べた程度のショックはうけたであらうが、元來、芭蕉庵などと言つてもその規模は少さく一時的建築であつたことは、芭蕉の旅から歸つてくる度毎に、修築を要してゐることでも分る。天和二年草庵が燒け亡びた時、弟子たちにより、特に芭蕉のため再興されようなどとは、かれの意外とした點に相違ない。ともかく、その後草庵は、度々改築されたが、つねに深川であつたがため

に、この地が、芭蕉にとつて第二の故郷になつてしまつたのであつた。

しかしその頃、ある革命がかれの心に萠し始めてゐた。それは、漸く江戸に安居されようとする事實への、反逆心である。生活革命の要求である。かくてかれが旅の心に文學の本質を索め出すまでには、多少の時間を要したけれど、かれは、とりあへず行脚の身となつて、第二の西行たらうとしたのであつた。われ〳〵は、かれが甲子吟行の旅に出る前、物した笠張の説といふ一文を見ることが出來る。かれが初期の文中、わたくしのもつとも愛讀する一つである。

草扉にひとりわびて、秋風さびしき折々、竹取のたくみにならひ、妙觀が刀をかりて、みづからも竹をわり、竹を削りて笠つくりの翁となのる。心しづかならざれば、日を經るに物うく、工みつたなければ、夜をつくしてならず。あしたに紙をかさね、夕にほして、又かさね〳〵澁といふものをもて色をさはし、ます〳〵かたからんことを思ふ。廿日過ぐるほどにこそやゝいできにけれ。其かたちうらのかたにまき入り、外ざまに吹かへりなど、荷葉のなかばひらくるに似て、なか〳〵をかしきすがたなり。さらばすみがねのいみじからんより「ゆがみながらに愛しつべし。西行法師のふじみ笠か、東坡居士が雪見笠か、宮城野の露に供つれねば、呉天の雪に杖をやひかん、あられにさそひ時雨にかたぶけ、そゞろにめでゝ殊に興ず。興のうちにして俄に感ずることあり、ふたゝび宗祇の時雨ならでもかりのやどりに袂をうるほして、みづから笠のうらに書きつけ侍る。

世にふるはさらに宗祇のやどり哉

（注にいふ、この句は、宗祇の世にふるはさらに時雨のやどり哉をもぢつたもの）

かくて出來上つたのが、人も知るかれの檜笠であつた。この文致はユーモアの中に、いかにも爭はれぬ眞面目さがあるではないか。そこには將來、芭蕉のとらうとした方角さへ暗示されてゐる。この檜笠は、まことに、芭蕉の葉と共に、この俳聖のシムボルと言つていゝ。かくて甲子吟行の出發は、かれが再築の草庵に歸つて後一年足らずで實現された。

千里に旅立つて路粮を包まず。三更月下無何に入るといひけんむかしの人の杖にすがり、貞享甲子秋月、江上の破屋を立いづる程、風の聲そゞろ寒げなり。

野ざらしをこゝろに風のしむ身かな

これ言ふ迄もなく甲子吟行の冐頭である。現代の旅行を以て、三百年前の旅狀を想像することは、ほとんど不可能に屬する。それも、豐富な旅費と健康をかねての旅行であれば、面白をかしくも終へられたかもしれぬ。鬢髮すでに白毛を交へ、むしろ老衰の芭蕉にとつて、たゞ弟子千里一人同伴の徒歩旅は、決して容易のものではなかつた。かれが、「野ざらしを――」と、旅途においての死を覺悟して出發したことも、當然のことであつたらう。吟行の中に、

死もせぬ旅ねのはてよ秋のくれ

狂句木からしの身　竹齋に似たる哉

草枕犬もしぐるゝか夜の聲

年くれぬ笠きて草鞋はきながら

といふやうな流浪の旅の體驗が詠まれてゐる。しかし別に、野ざらしともならず、無事翌夏四月、江戸に歸着することが出來た

蕉風確立後の芭蕉の俳名は、頓に流布した。大抵の文人なら、多くの場合周圍の賞讃に甘やかされると、生活上の安定をのみ計らうとする。しかるに、わが芭蕉はその翌々年の貞享四年（四十四歳）、又もや、とぼ／＼と上方へ乞食旅行に出て立つた。（その際、送別の詩文を分類すると、詩九、和歌三百二、俳句三十五以て芭蕉の俳名のあつたほどが想像されよう）

神無月の初、空定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地して

旅人とわが名よばれん初しぐれ

この出立の句には、かの甲子吟行のそれのやうに、すでに悲壯な感じはないが、芭蕉が旅心の中に眞實諄粋なものを求めえたプロセスを語るに十分であらう。かれには。漸次に、旅心を味到しうる餘裕を持つことが出來た。

旅人とわが名よばれん初しぐれ

そこには苦痛多き旅路も既に非人情化されてゐる。客觀化されてゐる。なほさら某長太郎のつけた脇句

　　また山茶花を宿〳〵にして

と讀み合はしてゆけば、そこに一幅の畫面が現はれてくるではないか。

　　旅ねして見しや浮世の煤はらひ

　旅の具おほきは道のさはりなりと、物みなはらひ捨たれども、よるの料にと紙衣ひとつ、合羽（かつぱ）やうの物、硯筆紙藥等晝笥なんど、物に包てうしろにせおひたればいとゞ臑よわく力なき身の跡ざまにひかふるやうにて、道なほすゝまず只ものうき事のみ多し。

　　草臥れて宿かるころや藤のはな

　　送られつ送りつはては木曾の秋

かくかれの旅情の一端を語る句が、その旅で詠まれた。この旅の紀行は、笈の小文と更科紀行との二部に跨り、旅の期間はほとんど一ヶ年に垂んとしてゐる。

かくて、八九月の交（元祿元年）歸庵した芭蕉は、すでに翌年三月出立した奥羽北陸にわたる六百餘里、百六十餘日の長旅の門出に立つてゐた。なほ里程は六百といへ、未開の僻地を東海近畿のものに比較すれば、六百は千里にも相當するであらう。かつ、芭蕉の最も不安に感じたものは、近畿への旅と異り知己朋友のゐない點であつたらう。しかし、そこは西行がすでに行脚した地方であるといふ

ことが、どんなにかれには頼母しかつたことか。かれは、西行が「道の邊の清水流るゝ柳影しばしとてこそ立ちとまりつれ」と詠んだ芦野の宿の柳、「とりわきて心もしみて冴えぞわたる衣川みにきたる今日しも」と詠んだ衣川戰跡、「松島や雄島の磯も何ならずたゞ象潟の秋の夜の月」と詠んだ象潟の風光、「夜もすがら嵐に波をはこばせて月をたれたる汐ごしの松」と詠んだ汐越松等の趣を、まづ忍んで見た。かれはそしてそこに西行そのもののつよい香りをかがうとした。それにしても、この大旅行には十二分の決意が必要であつた。

月日は百代の過客にして、ゆきかふ年も又旅人なり。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへ、老をむかふるものは日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず。海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひ、やゝ年もくれ、春立つる霞の空にしら川の關こえんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取るもの手につかず。股引の破れをつゞり、笠の緒付けかへて、三里に灸すうるより、松島の月まづ心にかゝりて、住める方は人にゆづり、杉風が別墅にうつるに、

草の戸も住替る代ぞひなの家

これ言ふ迄もなく、「奥の細道」の冒頭である。「古人も多く旅に死せるあり。予も云々」にかれの大決意が見られるではないか。「そゞろ神の物につきて心をくるはせ——」も面白い。自然を愛

し、旅を好む人にとつて、未踏の地に門出する前の喜びは、また特別である「股引の破れをつゞり」ながら、かれが幻妖のために戰き「笠の緒付かへ」ながら、かれが空想のために疲れてゐる樣子が見えるやうではないか。その笠は、いふ迄もなく、「いかめしき音やあられの檜笠」と詠んだかの檜笠であつたらう。漢詩に長けた素堂が、

一笠一天地　一身一棄心　江山皆舊友　仰月臥花陰

と、巧くも銘したかの檜の笠であつたらう。

奥羽旅行の艱苦の程は、かれにも、想像以上であつたらしい。五月朔日の夜は、あたかも飯塚（福島市の北方）に泊つた。紀行中にその夜のことを「溫泉あれば湯に入りて宿をかるに、土座にむしろを敷いてあやしき貧家なり。灯もなければゐろりの火かげに寢處をまうけてふす。夜に入りて雷鳴雨しきりに降て、臥る上よりも、蚤蚊にせゝられてねぶらず。持病さへ發りて消え入るばかりになん」と苦しげに叙してゐる。しかも、その翌朝は勇を鼓して「遙なる行末をかゝえて斯る病覺束なしといへど、羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なんも是れ天の命なりと氣力聊か取り直し」て出立しなければならなかつた。おそらく、かうした夜はこの一夜に限らなかつたであらう。「十二日平和泉とこゝろざし、あねはの松、緒だえの橋など聞傳へて、人跡まれに雉兎芻蕘のゆきかふ道、そこともわからず、終に道ふみたがへて、石の卷と云ふみなとにいづ」――これは言葉通り、松島から平泉に

出る道に迷つて、石の巻に出たとの記事である。交通の開けなかつた元祿時代に、旅人はすべてかゝる失策を演ぜなければならなかつた。のだらう岩手から出羽に越す界は、ことに險岨て、强盗の出沒することは尋常のことであつた。

此路旅人まれなる處なれば、關守にあやしめられて、漸にして關をこす。大山をのぼりて日既に暮れければ、封人の家を見かけて舍りをもとむ。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

蚤しらみ馬の尿する枕もと

かの芭蕉の旅行に、引合ひによく出されるこの句は、この際の吟詠である。しかし、裏日本に出てからの旅もなほ容易ではなかつた。かれが、酒田から北行して象潟に行つたのをもつて、蝦夷島に渡る抱負を持つてゐたゝめだといふのは、やゝ臆斷にすぎるであらう。象潟は前說もしたやうに、能因西行と由緒ある歌名所で、かれが是非に行つて見たいと望んでゐた土地故に外ならない。かくて芭蕉が北國を經由して大垣に入いつた時のことを、

曾良も伊勢より來りあひ、越人も馬を飛ばせて如行が家に入り集る。前川子荊口父子其外したしき人、日夜訪ひて蘇生のものに逢ふがごとく、且悅び、且いたはる。旅の物うさもいまだ止まざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮拜んと、又舟にのりて、

蛤のふたみにわかれゆく秋ぞ

と、奥の細道には記されてある、そして、この紀行はそこで結末になつてゐる。しかしこの點は、かへつて何事かわれ／＼に暗示を殘さないであらうか。仰山な弟子どもの歡迎（？）を、よそにして、風のやうにすうと消えてゆく所に、「夏衣いまだ虱をとりつくさず」と詠んだ時代とは、大分徑庭があるではないか。

芭蕉はその後、翌元祿四年十月まで近江の湖畔を中心にして漂泊してゐた。

湖水のほとりに春を迎へて

誰人か薦着ています花の春

堅田にて

病雁の夜寒むに落ちて旅寢哉

いね／＼と人に言はれても、猶喰ひあらす、旅のやどり、どこやら寒き居心をわびて

住みつかぬ旅の心や置炬燵

幻住庵

旅癖やねびえわづらふ秋のやま

これらかれらの旅心を語る句は、その時代の作である。かやうにして、かれの作は漸次に、おちつきを待て來た。これは、同時に漂泊の氣に徹したかれ自身をも語るもので、われ／＼はその消息を、そ

の時代の書信の中に一層はつきり認め得る。木子への書一つ。

粟津草庵の事、先は御深切之至恭存候、兎角拙者浮雲無住之境界大望故如此漂泊いたし候間、其心に叶ひ候様に御取奉頼候、必ずこれにつながれ心をうつし過ぎざる様の事ならば、如何様とも御指圖可恭候、しばらく足のとゞまる所は蜘蛛のあみの風の間に間にと存候くば足駄の藏も藏ならず候云々。

まことに、粟津草庵（無名庵）は無論のこと、石山奥の幻住庵すら芭蕉をながく留める力はなかつた。

さらに小春への書一つ。

何處持參之芳翰落手御無事之旨珍重に存候、類火御のがれ候よし。是又御仕合難申盡候、殘生いまだ漂泊止めず、湖水の邊りに夏をいとひ候、猶、うら風に身をまかすべきやと、秋立つ頃をまかちけ候云々。

これまさしく歸東を意味してゐたものであるらしく、

行脚としなかされ、東武にかへりて

ともかくもならでや雪のかれ尾花

の句が、傳はつてゐる　かれは、旅瓣ある者を「風雲の情を狂ほす者」と越人を評し「更科紀行」「風雲に坐」せる者と嵐蘭を慕つたが、かれ自ら、「風雲に身をせめ」（幻住庵記）た好典型であつた　貞享

元祿にわたつたかれの生活は、碧空に浮く白雲の風吹くまゝに、あるは東しあるは西するに違はなかつたのである。

栖去之辨

こゝかしこうかれありきて、橘町といふところに冬ごもりして、睦月きさらぎになりぬ。風雅もよしや是までにして、口をとぢむとすれば、風情胸中をさまよひて、物のちらめくや風雅の魔心なるべし。家を放下して栖を去り、腰にたゞ百錢をたくはへて、柱杖一鉢に命を結ぶ。なし得たり、風情終に菰をかぶらんとは。

これは、元祿五年(四十九歳)を江戸に年を迎へた時の感想の一端である。かれの風情愛は、赤貧をも忘れしめ、かれを得々と流浪の街に立たしめ得てゐる。かれは、僧專吟を送る辭の中にもいふ。

此僧常に風雅をこのみ、市を避けて年々斗藪脚行の身となる。ことし又伊勢熊野に詣でんとて、身は雲外の鶴にひとしく、ながれに蔣をすゝぎ、千尋の岡に翅をふるうて、野にふし雲にとまるらん胸中の塵、いさぎよし云々。

これやがて芭蕉の心そのまゝを反映したものではあるまいか。かくてかれは、元祿七年五月ひとり江戸を門出した。相當の頽齢の上、俳聖としての尊崇を集めてゐるかれが、孑然、苦しい旅路に立つそのことは、そも〳〵何を意味するだらう。わたくしは、同年九月十六日、がれが去來へ送つたといふ

書簡でほゞかれの心理を洞察しうるやうに思ふ。

一、彌々御無異珍重存候、申合候通、爰元住吉市後は、直に橋立と志候、誰彼同伴之望も有之候得共、先、支考惟然迄と相究候、一類之者、別而半左衛門より、萬里の波濤を渡り候事、頻にとゞめ申候故、橋立迄と申斷出立候條、必々當分は御沙汰御無用存候、一年なりとも年若く、病もつのり不申中、薩摩潟見申度、ふり切て出申候乾、坤無無住、水上の泡沫、稻妻之境界に候故、行先野山草木之間にて、土を枕として、此生終り可申覺悟に候、是を心の樂に、彌々相決候得ば、天地の間、居所究申間敷と存候云々。（芭蕉談後篇）

芭蕉談中の記事には、信じ難い點も混淆してゐる。もしこの書簡がたとひ、僞作の一つであつたとしても、わたくしは、この書面を書くほどの芭蕉の心持を堅く信ずるものである。晩年のかれの旅姿には、いかにも雲水らしい趣が濃くなつて來た旅を心の樂といふにふさはしい態度が、かれの動作のすべてに漂ひ出て來たのである。

しかし、芭蕉の旅と西行の旅——その間には爭はれぬ相違がある。況んや一般の雲水の斗藪行脚と芭蕉の旅行とは、大分異なつてたものである。われ／＼はその點について十分熟慮しなければならぬ。こゝにその結果から見て、芭蕉は大旅行毎におよそ四大目的を達し得たことを知り得る。一、名所舊蹟踏査の目的。二、參宮と歸郷の目的　三、雅情養成の目的。四、蕉風宣傳の目的。

―東海道一筋をも見ざらんは、風雅の情にうとからん」(磯の波)
と、芭蕉が、かつて弟子に戒めたことは、人皆の知る通りで、いかにも芭蕉の所說として首肯され
る。これは俳材として地理的常識の必要を說いたものであると共に、旅心を感悟することの重要なこ
とを敎へたものであらう。俳人に對して旅の天地の存することは、宗敎家に對して神の殿堂の存する
が如きものである　芭蕉にとつて旅姿は、出家者の僧服姿にも相當してゐた。芭蕉は、行脚の中に生
命の流れを觀取した、かれの旅三昧は信徒の法悅の境地に匹敵してゐる。かれは、祭の前に立つ長老
のやうに、大自然に中に默禱を捧げつゞけた。かれは、正しく聖フランシスの如くにも、跣足で大地
に立つて造物主に感謝を捧げつゞけた。

和歌の道

行春に和歌の浦にて追付たり

紀三井寺

跪はやぶれて西行にひとしく、天龍のわたしを思ひ、馬をかる時はいきまきし聖のこと心にうか
ぶ。山野海濱の美景に造化のたくみを見、あるは無依の道者の跡をしたひ、風情の人の實をうかゞ
ふ。猶、栖を去りて器物のねがひなし。空手なれば途中のうれひもなし。寛歩駕にかへ、晩食肉よ
りもあまし。泊るべき道に限りなく、立つべき朝に時なし。只一日の願ひ二つのみ。こよひよき宿

からん、草鞋の我足によろしきをもとめんとばかりは、いさゝかの思ひなり。

これは、笈の小文中の一節であるが、まづ「行春に和歌の浦に追付たり」の句がユーモラウスだ「只一日の願ひ二つのみ」――それも思へば何と些やかな願ひであらう。よき宿と言つても、われ〳〵の想像する旅館をいつてゐるのでないことは勿論民屋か寺坊か、頼みよつた家のたゞ、快く、かれを迎へてくれることを祈つてゐるのである。かつてかれは、

世を旅にしろかく小田の行戻り

ともよんだ。かれの體驗は、いつ迄もこの程度の咏嘆に止まつてはゐることが出來なかつた。

しかし、行脚姿のかれが、蕉風宣傳の心持をすてえなかつたことは更に注意を要する。

一、俳談の外雜話すべからず。雜話出でなばゐねぶりして勞をやしなふべし。

とは、芭蕉の行脚掟として傳へられたものゝ第一要目である。この掟書は假託であるらしいが、內容は參考にしてよいと思ふ。全く、かれには俳諧に對し、かくもあつたらうと思はれるほどの眞面目さがあつた。かれの紀行は、どこまでも俳人の紀行である。その味は、兼好や西行には、とても求め得がたい。前揭の笈の小文を、もつと讀み下して見ると、

時々氣を轉じ、日々に情をあらたむ。もしわづかに、風雅ある人に出であひたるよろこびかぎりなし。日頃は、古めかしくかたくなゝりと、にくみ捨てたるほどの人も、邊土の道づれにかたりあひ

はにふ葎のうちにて見出したるなど、瓦石のうちに玉を拾ひ、泥中にこがねをえたる心地して、物にも書付け、人にもかたらんとおもふぞ、又これ旅のひとつなりかし。

と述べてある。蕉風の流布と浸潤とには、かうした處に芭蕉自らの苦心が加はつてゐるのである。かれが奥羽北陸の大旅行を決行した心の内にも、かゝる大計劃の存したことはまた、爭ひがたい事實である。しかし、貞門、談林の俳諧さへ、十分知られてゐない地方に、期待通り、蕉風宣傳の實のあげがたかつた事は、かれとして餘儀なかつた。

もがみ川をのらんと、大石田と云處に日和をまつ。こゝに古き俳諧の種こぼれて、わすれぬ花のむかしをしたひ、蘆角一聲の心をやはらげ、此道にさぐり足して新古ふた道にふみまよふといへども道しるべする人しなければと、わりなき一巻を殘しぬ。此たびの風流こゝに至れり。(奥の細道)

大石田住の高野一榮の宅で、漸く俳諧一巻をなし得て「此度の風流こゝに至れり」と言ひ得た事實は餘りに淋しいことではあつたらうが、これも仕方のないことであつた。

　此道や行人なしに秋の暮

　旅にやんで夢は曠野(あらの)をかけめぐる

臨終の床につかうとする間際によんだこれらの句を、再びこゝに味はつてみたまへ。そして、前の句句中の道が、單なる具象的通路としての道の意にのみ觀ぜられない如く、後句の旅が、かれの難波へ

の旅のみを語るものでないことが知られよう。それらは、もつと抽象的な感銘を以てわれ〳〵に迫つてくる。芭蕉においてのみは、全く容易に、つぎの等式が成立し得たのではあるまいか。

人生＝旅（自然）

然るに　人生＝風雅（文學）

故に　旅　＝風雅（文學）

また、芭蕉の寂滅の際、かれの遺骸の上に言ひわたされた引導の言葉は、はなはだその要を得てゐる。

雪月魂魄　風花精神　等閑一句　驚動人天

嗚呼奇哉芭蕉妙哉芭蕉　萬里白雲一輪名月　五十一年不説一字

「雪月魂魄、風花精神」――わたくしは、その事實をかれの句を以ても、明らかに證しうるのである。

明月や池をめぐりて夜もすがら

山路來て何やらゆかしすみれ草

山里は萬歳おそし梅のはな

鶯や餅に糞する緣の先

わが文學者にして、かゝる境地を表現しえたものが、これまで他に一人としてあり得たか。それは定

家西行のごとき歌人たちすら、到底、なし得なかつたところではないか。

素堂は、芭蕉の死を悼んで、

あはれさやしぐるゝ頃の山家集

と弔した。十七回忌(寶永七年)の際には、さらに、

旅の旅遂に宗祇の時雨哉

と追善の句を詠んだ。以て芭蕉も地下に瞑すべきであらう。全く、芭蕉は心の底から、西行や宗祇に私淑してゐた。しかも、芭蕉が西行宗祇のもつ世界の外に超然とした別天地を持つてゐたこと、これは誰しも見逃してはならない。それは、芭蕉の人として、及び藝術家としての煉磨の効績である。かれには十餘年間に二千人に近い弟子が蝟集して來た。歿後にさへその門人たらんことを望む者があつて、かれらは何れも芭蕉の墓前で入門のことを契つたのであつた。その光景、また西行や兼好に決して求めがたいところのものではないか。

芭蕉は、つねに智秀などの縫つてくれた茶色のつむぎの八德を着てゐた。「笈の小文」の旅などにも始終それを着通してゐたやうである。早老といふべきか、四十歳すぎてから白髮が澤山生えて、物ごしが萬事において少くとも十歳位は老けて見えた。顔には痘痕があつて、可笑しいことがあつても強

ひて大笑するのでなく、心に喜こびのある時は、只鼻をくん〳〵と鳴らしてゐた。初對面ではむしろ人好きのしない性格で、嵐雪なども俳談の外は師翁の前を避けてゐたと言はれてゐるが、弟子に對する慈父のやうな情愛には誰しもすぐ感激せしめられた。「一寸嵐雪の處へいくぞよ」などと、用事があれば弟子に言ひ殘し、自分で矮少の體軀を弟子の家に運んだ。かれの個性は磊落といふより、苦勞性に近いものがあつた。「はせを翁行脚の掟」といふものが傳つてゐるのを見ると、

一、船錢茶代忘るべからず

一、主あるもの一針一草たりともとるべからず　山川江澤にも其ぬしあり勤めよや

といふ如き項目があるが、これが西行の行脚掟と假定すると、いかにも不似合に感ぜられるではないか。しかも、芭蕉のものとすれば、それが當然のことのやうにしつくりと首肯される。

猿雖に對して

もろ〳〵の心柳にまかすべし

かれが、猿雖に訓戒の一句を與へたことは、思へば同時に自らの行爲に對する誡でもあつたらう。「物言へば脣寒し秋の風」の句は、芭蕉坐右之銘となつたものであるが、かれの批評眼はしば〳〵その鋭鋒を露出せしめた。これは去來抄などに寫された芭蕉の言葉を二三吟味したら誰にもすぐ分ることだらうと思ふ。嵐雪などが、時に師を煙がつて逃げ出してゆくやうなこともいかにもありさうなことで

ある。芭蕉の弟子に對する言葉が弟子の失策に對し頂門の一針の効を示してゐる場合も珍しくない。そこに芭蕉の頭惱の鋭さが顯出してゐる。

しかし批評眼の鋭利さと、弟子に對する情愛の念とは全く反比例してゐた。「呻吟の內用にてすてがたきことあれば中國に行脚する前に立寄らざるべからず」（北枝への書）とか、「ちと親類內用にて捨がたき事に御座候」（同）とかいふ如く、かれが俗事にも氣苦勞を重ねたことは一再ではなかつたやうである。杉風が、耳の遠かつたゝめ、かれは終生聾に關した句を詠まなかつたと傳へられるほど、芭蕉は遠慮がちな人だつた。仔細に傳へられた樣々の逸傳こそなけれ、芭蕉の人格に觸發された弟子の性格もずいぶん多かつたことゝ想像される。

芭蕉が、江戶を立つて上方へ行脚した目的には、歸鄉の一項があつたことは、これを前說した。かれの鄉里、上野には當時兄が一人生殘してゐたのみで、その他にこれといふ血族も無かつたらしいが、かれはいくたびも鄉里を尋ねてゐる。伊勢や近江あたりを中心に流浪してゐる時は、殊に上野に出入りしてゐるので、亡命の人といふ言葉の全然不當に感ぜられるものすらある。

代々の賢き人々も古鄉はわすれかたなきものにおもほえ侍るよし、我、今は、はじめの老の四とせ過し何事につけても、昔のなつかしきまゝに、はらからのあまたよはひかたぶきて侍るも見捨がたくて、初冬の空のうちしぐゝ頃より、雪と重ね霜と經て、師走の末伊陽の山中に至る、猶父母のい

なまそかりせばと、慈父のむかしもかなしくおもふ事のみあまた有て、

舊里の臍の緒に泣くとしの暮

これは、「笈の小文」の旅途、歸郷した際の感懷である。父母をおいて辭官出奔したことが、如何に暗い悔の嘆きをかれの胸に印してゐたことか。

家は皆杖に白髪の墓參り

この句は、續猿簑の言葉書通り、芭蕉が歿年（元祿七年）夏大津にゐた時、態々歸郷して盆會に列した時の詠である。こゝにかれの心裡を窺ふと、はなはだ、物あはれなるものがあるではないか。それはかれが臨終の時、伊賀に飛脚を立てようかと去來たちが言つた時、かれの答へた言葉と思ひあわされて、むしろ悲痛にさへ感ぜられる。「われ隱遁の身として、虛弱なる身の數百里の飛杖思ひ立ち、親戚よりとゞめけれども、心のまゝにせしはわが過なり。今大病と申し送りなば、一類中の騷ぎ、殊に主公の聞召もおそれなり。たとひ今度大切に及ぶとも、沙汰あるまじ」と言つたと、花屋日記には見えてゐる。この日記の中に疑ふべき個條のあることは、こゝに言ふ迄もないが、しかしその自責の念にこそ、かれが如何ばかり深く愛郷心に驅られてゐたかを知ることが出來る。その愛着心を凡庸として嗤ふものは、天竺に渡りながら、故郷の扇を見ては悲しんだといふ昔の高僧法顯三藏のことを思へ。また、法師の持つ人間味を、ひそかに讚美した兼好を思へ。

かくて情愛の泉のやうな芭蕉の心は、多くの弟子たちにとつて、共有の故里なのであつた。

　　いつか花に小車と見ん茶の羽織

とは、素堂が、旅中の師翁を待ちこがれて江戸で詠んだ句である。江戸に殘された弟子の淋しさは、素堂の上ばかりではなかつた。天和三年五月、其角等の招きで江戸に歸つた時の如き、草庵再建と共に素堂の勸化文といふものが、隨齋諧話の中に傳へられてゐる。それによると、五十餘人の弟子が身分に應じ、機に從つて、師翁に日用品を贈つてゐる。その中の、大瓢一柄などといふ贈物は、甚だ振つてゐる思付ではないか。「破扇一柄嵐蘭」など、それには多少ざされた意味もあるのであらう。芭蕉庵の附近には、淨求とか曾良とかいふやうな正直一遍の弟子があつて、しば／＼師のために薪水の勞を見てゐる。ある雪の朝、芭蕉はわがために、竈の下を炊きつける曾良を顧り見ながら、かう興じた。

　　君火たけよき物見せん雪まろげ

何とそれは平和な氣に溢れた庵の朝の光景ではないか。

されば、芭蕉にとつて遠い旅立ちは、樣々の悲別でもあつた。貞享四年江戸を立つて吉野の春を探つた折の如き、かれを送別する詩歌、計三百數十篇（詩九、和歌三百一、俳句三十五）に及んでゐる。舊友親疎門人等或は詩歌文章をもて訪ひ、或は草鞋の料を包んで志を見はす、かの三月の糧を集む

るに一斧の力を入れず、紙衣綿子など云ふもの、帽子したうづやうの物、心々に贈りつどひて霜雪」の寒苦厭ふに心なし。あるは小船をうかべ別墅にまうけし、草庵に酒肴たづさへ來りて、ゆくへを祝し、名殘を惜みなどするこそ、故ある人の首途するにも似たりと、いと物めかしく覺えられけれ。

とは、かれ自らその際のことを叙した紀行の一節である。かくて弟子たちが、師の門出を見送りし、別を惜しむことは、この後の「おくの細道」の旅の場合、最後の江戸出立の際、何れも變りはなかつた。

しかも、芭蕉の旅途においては、多くの場合、弟子知友が影の如くかれの伴侶となつてゐる。まづ甲子吟行の旅では「道のたすけとなりて萬いたはり心をつくして侍」(同紀行)つた千里があつたし、江州を彷徨ふ途中には、芭蕉の「名を聞て草の枕の道づれにもと尾張の國より跡をしたひ來」(同紀行)るやうな蛙が小島の一桑門も出て來、鹿島紀行の旅では、「伴ふ人ふたり」(同紀行)すなはち曾良と宗波が從ひ、笈の小文の旅には特に吉野須磨迄の旅を共にした杜國があつた。さらに更科紀行の旅には「倶に風雲の情を狂はすもの」越人が隨行し、奧の細道の旅には、いふ迄もなく師の「羈旅の難をいたはらん」と旅立曉、髮を剃て黒染にさまをかへ」(同紀行)た曾良があり、金澤からは北枝、福井からは等栽といふやうに、途中の弟子の暫らくかれの後に伴行してくるものもあつた。その他、旅

先きて暫らく一地に滯在すれば、幻住庵へは正州支考が來つて薪水の勞をとり、嵯峨の落柿舍へは、去來を始め京都の門弟が集まつてくるといふ風で、元祿七年、支考と桃隣を從へ最後の旅立ちをなし、難波で病床についた折の如き、方々から弟子が次々にと集まつてきてゐる。嵯峨日記に、弟子がある夜集まつて泊つたゝめ一蚊屋一張りに五人こぞり臥たれば夜もいねがたくて」云々とあるが、今度の混雜はその騷ぎの比ではなかつた。師弟間の厚い情愛の程が、いとも懷しく感ぜられるではないか。

こゝに、芭蕉の弟子でありながら、破門を命ぜられた路通と稱するものがある。かれは主を沽つたユダの如きものであつた。しかし、芭蕉が臨終の時、その路通を忍んで、その罪を許したといふのは、おそらく事實であらう。路通も芭蕉の死去をきき、夜を日についで馳せ來り芭蕉の墓前で前非を悔いて泣いたといふことである。芭蕉の臨終を記した花屋日記は、これをどの點まで信じ得べきかは問題であるが、芭蕉の葬儀を敍した、次の

晝の内より集まれる人は雲霞の如く、帳に控へたる人數凡そ三百人餘り、知る知らぬ近鄕より集まる老幼男女迄惜しみ悲しむ。

といふ文は、必ずしも誇張ではあるまい。杉風は芭蕉の死と共に、精進して特に深く喪に服し、惟然は、師の歿後、師の發句を鐘に合はして歌ひつつ行脚に日を送つたといひ、丈草は翁の墓守となり俗界と交りを斷つたといふ。いかに芭蕉の情愛が深い印象を弟子に與へたかを證してゐるではないか。

花に遊ぶ虻な喰ひそ友雀

むざんやな甲の下のきり〳〵す

芭蕉が一笑に贈つた書簡の一つには、小鳥を籠に入れて飼ふことを惡んでゐるが、芭蕉は全くそれほどの人間だつたのである

愛の芭蕉を說くものは、必ず、杜國及び壽貞尼との關係に筆を及ぼしてゐる。さうして杜國を以て芭蕉の衆道の相手の如く解し、壽貞尼を以て芭蕉壯年時代の愛人と臆測するものがある。こゝには、その眞否を考證する餘裕はないけれど、ともかく、芭蕉はこの兩人に對し、時に異常の愛を抱いたといふ丈けの結論は與へておいていゝと、わたくしは思ふ。しかし、その偏愛は、かれが公然と發表して憚からぬ性質のものであつた。そこが偉い。戀を經驗しても、誰しも何等恥づるところなく、それを公表し得るほどのものでありたい。次ぎの嵯峨日記の一節を見よ。

二十八日。夢に杜國が事をいひ出して涕泣して覺る。心氣相まじはる時は夢をなす。陰盡て火をゆめみ、陽おとろへて水を夢みる。飛鳥髮をふくむ時は飛鳥をゆめみ、帶を敷寢する時は蛇を夢みるといへり、睡枕記に槐安國莊周が蝶夢みな其理有て妙をつくさず。我夢は聖人君子の夢にあらず。終日妄想散亂の氣、夜陰に夢みること又しかり。まことに此ことを夢みること、いはゆる念夢なれ。我に志深く伊陽舊里までしたひ來りて、夜々床を同じく起ふし、行脚の勞をたすけて、百日がほど影

のごとく作ふ。片時もはなれず。或時はたはぶれ、或時は悲しみ、其志わが心裏に染て、わするゝことなければなるべし。覺てまた袂をしぼる。

讀み終つて、覺えず「呼！」とわれ／＼を嘆ぜしめるものがあるではないか。「寒けれど二人寢る夜ぞ頼もしき」「二人見し雪は今年もふりけるか」この兩句は、何れも越人に與へたものであるが、芭蕉の胸にはつねに、弟子の肺腑の底に愛情を注ぎこんでゆくやうな暖かさが充ち溢れてゐる。

かずなら（ィかりそめ）ぬ身とな思ひそ魂まつり

壽貞尼については、その歿した初盆に、芭蕉はかうした追悼の句をしてゐる。たとひ、壽貞尼が芭蕉の遊蕩生活の一つの片見（かたみ）てあつたとしても、われ／＼は何等怪しむを要しないだらう。かれは、また「一女性の俳友に親むべからず。師にも弟子にもいらぬ事なり」とも言つたさうであるが、それが事實なら、いよ／＼以てかれの心持の一端を捉へることが出來るではないか。（事實は、園女など女性の門弟もあつた）

性愛に對する芭蕉の態度――わたくしの結論は、はしなくも兼好のそれを繰更すに至りさうである。しかし、兼好の場合と同じく、終生を妻子の圍繞をうけず獨り寂しく生を終つた芭蕉を考へること、わたしはそゞろ襟を正さゞるを得ないのである。

さてわたくしは、これまで選んで、芭蕉の明るい方面をのみ尋ねて敍述して來た。しかし、とかくその筆は、芭蕉の持つさびの氣に觸れがちであつた。こゝに、わたくしは斷然と、筆を轉して芭蕉の人格の内部を剔抉しなければならない。かのさびとはそも〳〵何の謂であるか。

この解答には一見縁遠いやうであるが、わたくしは、まづ芭蕉の體質から逼つて見よう。かれがむしろ早老であつたことは反覆したが、かれは同時に又多病の人であつた。亡命の原因をかれの蒲柳の質におくものがあるが、これは俄かに同意しがたい。が、ともかく病疾として、痔疾、胃腸病を持つてゐたのは事實らしく、癪疾であると傳へた書もある。芭蕉の肖像には、幾種の別があり、しかもその相貌が必ずしも類似してゐないので、こゝに言明しがたいけれど、一般に健やかげである。特に眞を寫し得たものとして信ぜられてゐる杉風筆のものの如き、福相をさへ帶びてゐる。これは自ら瘦骨と稱してゐる點と、はなはだ符合しないが、これは何故であらうか。もつとも、かれが殊に健康を害したのは晩年であるらしくも考へられる點から、これら豐頰の像を四十歲前後のものとすれば納得されないでもない

師翁壯年の頃より顏色蒼黃にしてしかも羸瘦し、飯食も減少し給ひしが、十月二十日過より御不例也。何となく發熱し、御不食にて時々心腹痛也。

かうした一節が、元祿二年芭蕉が江州滯在中のことを記した凡兆の日記と稱するものの中にある。當

時病患に罹つたことは、

旅癖や寢冷患ふ秋の山

病雁の夜寒に落て旅寢かな

これらの當時の句でも傍證されるし、例の幻住庵の記の中に、「良病身人に倦て世をいとひし人に似たり」とあるのもこれを指したものかとも肯かれる。かつその疾痾が凡兆の記述した通りであるならば、甚い胃腸病で肉瘠せ老人めいてゐたといふ前說の正しい點を確めることが出來る。これは直ちに信ずることは出來ないが、芭蕉が醫術を本間道悅に學んだといふ形跡の誓文が傳はつてゐる。

相傳醫術啓廸院一流秘書秘語那豈漏他乎、若於違背者大小神祇別而生緣氏神可蒙御罰者也、仍而起請文如件

貞享三年丙寅四月十二日

物部道意㊞

松尾芭蕉㊞

本間道悅樣

思ふに芭蕉が醫術を學んだのが事實だつたとしても、それは醫術を開業するのが目的でなく、自己の疾病を癒す要求からであつたものらしい。乃至、かの兼好が學ぶべきものに醫術を數へた程度に、常識としての醫療法であつたものらしい。(その他、かれが江戶下向前、京都にあつた時、三條通の某醫

師について療法を訊いたことも傳へられてゐる」

たえず肉體上に疾患を以て惱む人の人生觀、これが健康體の者のそれと異なつてゐることは、必然的のことである。わたくしは、いま、芭蕉の郷里上野を尋ね、かの故郷塚のある愛染院の寺門をくぐつた日を想起する。そして、住職の御不在なため御内室の案内をうけ、「これが芭蕉さんの御像であります」と示された伊賀燒の高さ數寸の俳聖の座像を思ひ描く。その像は、やゝ瘠せ氣味でいかにも淋しいユーモラウスの表情を持つてゐた。わたくしは、その時振返つて、門側にある一叢の芭蕉――風のために葉の裂かれた芭蕉――を眺めながら、ふと不思議な感動に戰いたのである。

菊は東籬にさかえ、竹は北窓の君となる、牡丹は紅白の是非ありて世塵にけがさる。荷葉は平地にたゝず、水清からざれば花咲かず。いづれの年にや栖(すみか)を此境に移す時、芭蕉一もとを植う。風土芭蕉の心にやかなひけむ、數株の莖を備へ、其葉茂りかさなりて、庭を狹め、萱が軒端もかくるゝばかりなり。人呼で草庵の名とす。舊友門人ともに愛して、芽をかき、根をわかちて、處々に送る事年々になむなりぬ。「中略」その葉廣うして琴をおほふに足れり。或は半吹折れて鳳鳥の尾をいたましめ、青扇破れて風を悲しむ。たま／＼花咲けどもはなやかならず。莖太けれども斧にあたらず。かの山中不材の類木にたぐへて其性よし。僧懷素はこれに筆をはしらしめ、張横渠は新葉を見て修學の力とせしとなり。予其二つをとらず唯此陰にあそびて、風雨に破れやすきを愛す。

これ芭蕉が元祿五年芭蕉庵改築と共に芭蕉を移し植ゑた時の詞の一節である。最後の「二字其二つをとらず、唯此陰にあそびて、風雨に破れやすきを愛す」の一句を讀むとき、率然としてわれ〳〵に俳聖の骨髓に接しめられたやうな感じを抱かされるではないか。芭蕉の葉は、まことにこの俳聖の心を象徵しうる唯一のものである。さうして、わが松尾甚七郎（芭蕉の俗名）が、どこまでも文學者の天賦をもつて生れ來た事實をこの一文がよく實證するではないか。

百骸九竅の中に物あり、假に名付けて風羅坊といふ。誠に羅（うすもの）の風に破れ易からんことをいふにやあらん。かれ狂句を好むこと久し。終に生涯の計となす。或時は倦いて放擲せんことを思ひ、ある時はすゝんで人にかたん事をほこり、是非胸中にたゝかうて、これが爲に身安からず。姑く身を立てんことを願へども、これが爲にさへられ、姑く學んで愚をさとらん事を思へども、是が爲に破られ、終に無能無藝にして只此一筋につながる。

わたくしは、笈の小文のこの冒頭の文をも愛誦する。そこにも、芭蕉の俤が躍如として出てゐるからである。「つら〳〵年月のうつりこしつたなき身の科をおもふに、或時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛籬祖室の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、しばらく生涯のはかりごとゝさへなれば、終に無能無才にして此一すぢにつながる。樂天は五臟の神をやぶり、老杜は痩せたり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻のすみかならずやと、おもひ捨てゝふし

ぬ」といふ幻住庵の記の内容も、すなはち、そこである。芭蕉は、決して「無能無才」の語を形ばかりに使用してゐるのではない。それはかれの眞情そのまゝの言葉であつた。風羅とは何ぞ、幻のすみかとは何ぞ。それは、風を含んでゐる芭蕉葉によつて譬へ得られたかれ芭蕉の詩心でなくて何であらう。かれは、混沌膨大複雜な世相の中の、夢幻想といふ一點をのみ凝視した、さうして專念にそこを堀下げた。そして、かれはそこを堀り下げる以外に、自分の無能であることを知ることにより、却て眞に己れの天性を開いた人であつた。

ある時、一禪僧が芭蕉に漢詩のことについて尋ねると、かれは「詩の事は隱士素堂と云ふもの此道に深きすきものにて人の名を知れるなり云々」と答へて、さらに自説を述べようとはしなかつた「山里は萬歳遲し梅の花」の句について、去來が兩義に解せられるが何れに從ふべきかをかれに尋ねると、かれはそのことゝなく「去年の水無月五條あたりを通り候に、あやしの軒の看板を懸けて、「はくらんの妙藥あり」と記す。伴ふどち可笑しがりて、くわくらんの藥なるべしと嘲ひ候まゝ、それがし答へ候は、はくらん病が買ひ候はんと申しき」（去來抄）と去來に答へた。多少皮肉にすぎた態度ではあるが、ともかく、「我何を人に說くは我類がたちを人に云ふがごとし」（俳諧芭蕉談）とも他の場合言つてるやうに、かれは敢て自分を押賣りするやうなことは寸分これをしなかつた。かれが曲水に與へた書簡の一つに、「何を申してる」といふ言葉があるが、これはかれが終生、ついに自ら著書をしなか

つた事實とも一致共鳴する。また、自作に對し深い執着を持つてゐるやうでありながら、折角綴つた紀行を、旅先きに托して省ない恬淡とした態度などと等しく、そこには非凡のものがある。

多病、風羅坊、幻住、謙虚な心——かういふやうに顯著な點を辿つてゆくと、旅人芭蕉の氣持も自ら想像されて來るではないか。かれは、旅行くわが身を「風にまかす」と言つてゐる。(牧童への書簡)まことに飄々として漂ふものの姿である。

手にとらば消えん涙ぞあつき秋の霜

蝶のとぶばかり野中の日かげかな

陽炎のわが肩に立つ紙衣かな

かうした細い感じは、かゝる生活の中にのみこれを求め得られる。かれは、白光に對し、きはめて纖細な世界を直觀してゐるが、それもかゝる心の發露に他ならぬだらう。

白露にさびしき味を忘るゝな

海暮れて鴨の聲ほのかに白し

石山の石より白し秋の風

雪うすし白魚白きこと一寸

梅白し昨日や鶴をぬすまれし

月白き師走は子路が寝覺哉

ひとり尼わら家すげなし白つゝじ

先きにわたくしは、芭蕉が檜木笠を作つた話をした。しかも「すみかねのいみじからんより、ゆがみながらに愛しつべし」「笠張說」と、曲つたまゝの笠を愛した心持を述べたがそれも、思へば、風羅を愛する心に一致してゐるではないか。それは決して殊更風流ぶつた心からではない。また、熱田神宮の頹廢したさまを見て「蓬しのぶ心のまゝに生たるぞ、なか／＼にめでたきよりも心とゞまりける」「甲子吟行」と言つた氣持、京都嵯峨の古めいた落柿舍に入つた時、「落柿舍はむかしのあるじの作れるまゝにして處々頹破す。なか／＼に作りみがかれたる昔のさまよりも、今のあはれなるさまこそ心とゞまれ」「嵯峨日記」と記してゐる心理、これらも破れやすい芭蕉の葉を愛する情と通はして釋明される世界ではあるまいか。

初時雨猿も小蓑をほしげなり

人々をしぐれよ宿は寒くとも

しぐるゝや田の荒かぶの黒(くろ)む程

けふばかり人も年よれ初しぐれ

わたくしは、さらに、かうした芭蕉の時雨の句を三四思ひ浮べて見る。世に芭蕉の精神をさびにあり

とし、晩秋初冬の感じを聯想するのは謂れのないことではない。また「他門の句は彩色の如し、我門の句は墨繪の如くすべし」（一葉集）と言つた芭蕉の言葉から、墨色の感じの中にそれを求めることも謂れあることである　しかし、わたくしは、さびの本質を寂寥とか古寂とかいふ消極方面にのみ求めたくないのである。芭蕉が簑虫跋の中に、さる繪畫を評して「まことに丹青淡くして、情こまやかなり」と言つてゐるが、淡きはかれの好むところ、しかも、こまやかな情あつてその作は始めて、光を發するのではあるまいか。芭蕉が、白を愛したことは前掲の句で知られるとほり、しかも、その白光は嚴としてさびを内包してゐることが知られる。その白光は、チエンバレンの言ふやうに、單なる水彩畫味ではない。さりとて墨色の感じだけではない、そこには色ならぬ光が存せねばならぬ。

芭蕉は、晩年、近江の湖畔の眺めを非常に愛した。もと／＼關口芭蕉庵なども、その地の眺めが近江の瀬田に髣髴してゐるからと言つて選んだのであつた。水を好むのがかれの性格とまでは斷言出來ないが、かれが搖蕩とした水の光を愛したことだけは斷言してよい。

海暮れて鴨の聲ほのかに白し

これらの句のこゝろには、あたかも飄泛とした俳聖の呼吸がそのまゝ通じてゐる如くではないか。

しかし、搖盪は突如としてその鳴を靜めることもある。

當代の者で芭蕉が敬愛した人はまた尠くなかつた。それらの中で、顯著な數人について述べて見る

と、

一、六祖五平　芭蕉が天和二年、甲斐に流浪してゐた時身をよせたと傳へられる男で（潮中の芭蕉傳等）、六祖といふのは、かれが佛頂和尚の下僕として禪悟を得ての仇名である。目に一丁字は無かつたが、立派な人間であつたため、芭蕉はつねに敬してゐたといふ。

二、竹の内村の里長某。これは、芭蕉が貞享元年、弟子千里の郷里である大和國竹の内村を尋ねて相識つた人である。つぎの詞書きでその人の性格が察せられやう。

大和國竹の内といふ處に、日頃とゞまり侍るに、その里の長なりける人、朝夕間來りて旅の愁を慰めけらし。誠その人は尋常にあらず、こゝろ高きに遊んで、身は蒭蕘雉兎の交をなし、自、鍬を荷て淵明が園にわけ入、牛を牽て箕山の隱士を伴ふ。且その職を勤て職に倦ず、家は貧しきを悅んで、まどしきに似たり。唯是市に閑を偸んで閑を得たらん人は此長ならん。

綿弓や琵琶に慰む竹のおく

（註三、この村で[illegible]芭蕉[illegible]、[illegible]伊藏の行に[illegible]した話は、近世畸人傳の傳[illegible]）

三、佛五左衛門　これは奥州への旅で邂逅した人である。細道の中に、三十日、日光山の麓に泊る。あるじの云けるやう、我名を佛五左衛門と云、萬づ正直を宗とする故に人かくは申侍るまゝ、一夜の草の枕も打解て休み給へと云。いかなる佛の濁世塵土に示現して、斯る桑門の乞食順禮如きの人をた

すけ給ふにやと、あるじのなす事に心をとゞめて見るに、只無智無分別にして正直偏固のものなり。剛毅木訥の仁にちかきたぐひ氣禀の淸質尤尊ぶべし」とある。

四、淨求。これは、すでに說いたやうに、芭蕉庵に出入して芭蕉のため薪水の勞をとつた男である。別座敷の中に、「深川の邊に淨求といへる道心有り。慧智文盲にして、正直一遍の者也。常に翁に仕へて小さき草の戸を得たり。朝夕芭蕉の茶を煮ること妙也。門人餞別の句を綴るを聞き居て、愚も一句せんといふて、指折り文字を算へて、斯といふ。各々笑ひあへること止まず。されば愚なる者の心をはかりて記し侍る」とあつて、

餞や綜やさらばかしは餅　　淨求

といふ一句が記されてある

芭蕉は多士濟々の門弟に圍繞されつゝも、何故にかく樸訥仁に近い類にのみ心をひかれたのであらうか。わたくしにこれと共に聯想される事は、雪芝の亭後に植ゑられてあつた眞直な野松を見て、「涼しさやすぐに野松の枝の形」と賞した芭蕉の心持である。前は人、後は野松に對した嘆美であるが、結局同じ精神の現はれてはあるまいか。

芭蕉の心は、大愚と相通じ、童心と相通じ、時に虛空の如く透徹する。思へば、拙い手際で無心に笠を造るかれであつた。終日、子供のやうに水雞笛を吹きつゞけて悦に入るかれであつた（一笑への

書簡」。水雞笛を吹けば時鳥笛も欲しくなつて呉れよとせがむかれであつた。（同上）また、時に子供と遊んで、「雪の中に兎の皮の髭作れ」と一句よむかれであつた。一字一石經をかくために、幻住庵で子供に小石を拾はせ、菓子を與へたりするかれであつた。

買うて食ひ買うて食ひ飢寒僅かに遁れて

めでたき人の數にも入らん年の暮

年の市に線香買ひに出でばやな

宵のとし空の名殘おしまむと、酒のみ夜ふかして元日寢わすれたれば

二日にもぬかりはせじな花の春

いざさらば雪見にころぶ處まで

二人見し雪は今年もふりけるか

青畑に芹摘行男ども

いざともに穗麥くらはん草枕

うぐひすや柳のうしろ藪の前

菜に押分見たる園哉

杉風生更衣いときよらかに調じて贈りければ

いでや我よき布着たり蟬衣

ひや〳〵と壁をふまへて晝寢哉

初眞桑たてにやわらん輪にや切ん

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

稲雀茶の木畠や逃どころ

里ふりて柿の木もたぬ家もなし

車庸亭

面白き秋の朝寢や亭主ぶり

菊の後大根の外更になし

昨日からちよつ〳〵と秋も時雨哉

秋深き隣は何をする人ぞ

思はずも澤山かれの句を掲げてきた。しかも何れの句にもこと〴〵く洒脫の味が溢れ出てゐるではないか。芭蕉の句は、晩年のものほど、かるみを増して來た。元祿七年のものであるが、土芳への書簡中に「惣體かるみあらはれ大悅不少候」と言つてゐるのを見ると、そのためには自ら努めた點も多かつたことが思はれる。

さて、わたくしは、本論の最後において、芭蕉が俳句に對して抱いてゐた態度について檢討せなければならぬ。兼好は前說のやうに立派な人生批評家ではあつたが、われ〳〵はついに、徒然草の中に、かれが文學に對する定見を知ることを得なかつた。しかるに、わが芭蕉は、文學に對してのみは、嚴肅な意見を持してゐた。芭蕉が、許六の歸鄕を餞した柴門の辭については、前述もしたが、つぎにその全文を掲げて見ると、

去年の秋、かり初に面をあはせ、ことし五月のはじめ、深切に別ををしむ。其わかれにのぞみて、ひと日草扉をたゝいて終日閑談をなす。其器、繪を好み、風雅を愛す。予こゝろみに問ふ事あり。「繪は何の爲好むや」「風雅の爲好む」といへり。「風雅は何の爲愛すや」「畫の爲愛す」といへり。其まなぶ事二にして用をなす事一なり。まことや、君子は多能を耻といへれば、品二にして用一なる事感ずべきにや。畫はとつて予が師とし、風雅はをしへて予が弟子となす。されども師が畫は、精神徹に入り、筆端妙をふるふ。其幽遠なる處、予が見る所にあらず。予が風雅は夏爐冬扇のごとし衆にさかひて用る所なし。たゞ釋阿西行のことばのみ、かり初にいひちらされし、あだなるたはふれごとも、あはれなる處おほし。後鳥羽上皇のかゝせ給ひしものにも、これらは歌に實ありて、しかもかなしびをそふると、の給ひ侍りしとかや。されば此御こと葉を力とし、其ほそき一筋をたど

りうしなふ事なかれ。猶「古人の跡をもとめず、古人のもとめたる所をもとめよ」と南山大師の筆の迹にも見えたり。風雅も又これに同じといひて、灯をかゝげて、柴門の外におくりてわかるゝのみ。

さてこの文中の風雅とはそも〳〵何を意味してゐるのであるか。芭蕉の弟子たちは、風雅の語をしば〳〵、俳諧の別稱として用ひてゐるやうであるが。芭蕉のいふ所は、ひろく詩心の意味であつた。否藝術全體にわたつてその本質をさす言葉であつた。「笈の小文」の

西行の和歌における、宗祇の連歌における。雪舟の繪における、利休が茶における、其貫通するものは一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る處花にあらずと云ことなし。おもふ處月にあらずと云ことなし。像花にあらざる時は、夷狄にひとし。心月にあらざる時は、鳥獸に類す。夷狄を出、鳥獸をはなれて、造化にしたがひ造化にかへれとなり、

この文における風雅の用ひ方も、同様である。かくかれは、和歌、連歌、繪畫、茶道等に共通する大精神を認め、それを人間の本然性の光の中においた。かれは、曉山に與へた書簡の中に、

俳諧御熱心の由、先は珍重物しりにならむより、心の俳諧肝要に御座候、句者は澤山御座候得共、と心法を守る人はまれ〳〵なるものにて候。

言つてゐるが、實に鋭い訓言ではないか。名句を詠むためには、まづ、心の修養を第一とする、わ

たくしたちは本然の相を握んでそれから句作にとりかゝるべきである」俳諧は教へてならざる處あり云々」と、芭蕉は屢々、弟子の質問に答へてゐるが、全くその本質境は知識や技巧の人の窮知を許さぬ世界である。才幹においては、其角の方が、はるかに芭蕉を凌駕してゐたかもしれぬ。しかし、人として、かれは到底師の足元にもよりつけなかつた。そこに、俳文學においても師弟の間には、大きい懸隔が出來なければならなかつた。かれは曲水に書を致して風雅の三階段を論ずる。

一、風雅の道筋大方世上三等に相見候、點取に晝夜を盡し、勝負を爭ひ、道を見ずしてはしり廻る者あり。かれ等は風雅のうろたへものに似候へども、點者の妻子をはごくみ、店主の腹をふくらし候へば、僻ごとせんにはまさりたるべし。又其身富貴にして、目に立慰ば、世上をはゞかり人事いはんよりはと、日夜に二卷三卷點取勝たるものもほこらず、負たるものもしひて怒らず、いざ又一卷など、取かゝり、線香五分の間に工夫をめぐらし、終に卽點などゝ興ずる事ども、偏に少年のよみかるたにひとし、されども料理をとゝのへ、酒を飽までにして、貧なるものをたすけ、點者を肥しむること、是また道の建立の一筋なるべきか。又志を勉め情を慰め、あながちに他の是非をとらず、これより誠の道にも入ぬべき器なりなど、はるかに定家の骨を探り西行のすぢをたどり樂天が腸を洗ひ杜子が方寸に入べき族、都鄙をかぞへて十の指をふさず、君も則此十の指たるべし、能々御愼御修行專一に存候。

芭蕉のぢき弟子は、數百人に及んでゐた。しかも、かく俳人としての俳人は、十指に及ばなかつたのである。いはゆる蕉風は全國に流布したとはいへ、それに思ひ到る時、かれも「この道や行く人なしに秋の暮」と、寂しく口ずさまずには居られなかつたのであらう。

かの柴門の辭中の「絵は何の爲好むや」「風雅の爲好む」といふ問答は、そのまゝ「俳諧は何の爲好むや」「生活の爲好む」といふ問答に書きかへ得る　芭蕉の生涯は、文字通り、文學によつて築きあげられたものであつた。かれは、斷乎として「古人の跡をもとめず」とも「俳諧に古人なし」ともいふ。さうして實際にも「唐崎の松は花より朧にて」といふ如き切字無き句、「かちならば杖つき坂を落馬哉」といふ如き無季の句、「梅雨ばれの私雨や雲ちぎれ」といふ如き俗語交りの句をも作つた。これは、時にかれ自らの生活革命の氣概をそのまま表示したものに外ならぬ。(もつとも。かれは傳統を無視したわけでなく、上述の態度についても「今日の罪人たる事をまぬかれず」と己が態度を反省してゐる)その他、かれの立てた流行の說にせよ、「俳諧世に三合は出たり、七合は殘たりと申されたり」といふかれの語にせよ、かれが俳句の展開、自己の向上に對する信念の存するところを示してあまりある事柄ではないか。

山路來て何やらゆかしすみれ草

何の木の花とはしらず匂ひ哉

草臥て宿かる頃や藤の花

金屏の松の古さよ冬籠

菊の香や奈良には古き佛達

これらの佳句は、一見描寫だけのものに解釋されるかもしれぬが、決してさうでない。何れの句、何れの文字にも、かれの主觀が結晶してきらきらと輝いてゐる。

芭蕉は、また、恐ろしく自作に嚴密な推敲を重ねた。前揭の句について見ても、「山路來て」の句は始め、「何となく何やらゆかしすみれ草」と詠んでゐたものであり「金屏の」の句は、「屏風には山を書いて冬ごもり」と詠んで居り、菊の香や」の句は、「菊の香や奈良はいく代の男ぶり」とも作つてゐた。しかれば、かれの句の中には三變四改して始めて治定したものも珍らしくない。

名月や兒たち並ぶ堂の緣

名月や海にむかへば七小町

明月や座にうつくしき顏もなし

月見する座に美しき顏もなし

破風口に日影やよはる夕凉

唐破風や日影かげらふ夕凉

かやうにして、芭蕉自ら何れをとるべきか定め難い時に、しば〳〵弟子の意見をも聞いてゐる。從て數年後に改作された句すら珍らしくない。遺言の中にも「一、猿簑のうち座頭の句引直し」（一葉集）とあつて、臨終にさへ自作を氣にするところにかれの良心の程が察知されよう。かの猿簑を上梓した時、其角の「此木戸や鎖のさゝれて冬の月」といふ句が、誤つて「柴戸や」となつてゐたのを芭蕉が見て、改板まで命じたといふ逸話は、かれが自句にのみ神經的でなかつた端嚴さの程を語つてゐる。かれは俳席などにおいても、弟子を指導するに、「大木倒すごとし。鍔本にきりこむ心得。西瓜きるごとし。梨くふ口つき。三十六句みなやり句」などゝぐん〳〵押しせめつゝやつた由である。芭蕉にはわづかに十七字を並べるにすぎないこの小文學も、命がけの仕事だつたのである　かれにとつて生活と文學は全然一體であつた。（もつともかれは、俳諧は老後の娯といふやうな言葉も杉風や濁子に言ひのこしてはゐるし、俳諧に對する己が態度を妄執であるとも回顧してゐる。これは例の如く半面を視るかれの性格からである）。

芭蕉の俳諧の内容變遷は如何――わたくしの論は所詮つぎにこの問題にかゝるべきである。しかしこれを闡明するためには、どうしても俳諧史から出發しなければならない。こゝにわたくしはその餘

裕を持たない。なほ、かれの性格論の中で述べた通りであるが、それはその儘、かれの文學に反映してゐる。これ、かれが大蕉風の開祖として恥づかしからぬ偉大さをなす理由で、其角嵐雪去來支考等は、それ〴〵芭蕉のもつ一面宛を繼承したものと見ることが出來る。よつて、この小論では、かゝる芭蕉の文學内容に迄筆を及ぼすことを省かねばならぬ。

しかし、上述の芭蕉の性格論を補ふ意味、およびそれを追懷收約する意味において、なほ、二三項に亘つて補遺することを許されたい。

わたしは、さきに、芭蕉が句作に對する鋭い緊張さと堅い端嚴さについて述べた。その態度には、むしろ狂的に近いものさへあつて、さびの世界洒脫な境地とは矛盾した點さへ感ぜられないでもなかつた。しかし、われ〳〵は、西行や兼好の性格によつて指示されたやうに、眞に偉大な平靜は、その底に狂的動搖を抑へてゐるものでなければならぬ。芭蕉の晩年の生活は、さながら、明鏡に映る自己の相を見つめつゝ行くが如きものがあつた。しかも、わたしは、その生活の隙に搖ぎ出さうとする烈しい主觀の脈動を觀取せずには居られない。たゞそれは西行のそれのやうに、突發はしなかつたけれど。

狂句木枯の身は竹齋に似たるかな（芭蕉）

この「冬の日」の發句に妙な冠辭があることについては、古來樣々の疑惑を惹き起してゐる。しかし芭蕉自身が狂句といふ語をつけて最初に詠んだものであるといふことは、こゝに疑ふ餘地がない。し

からばその狂句とは、何を意味してゐるのであらうか。

わたくしは、この狂の文字から、芭蕉が自分を、狂夫、物狂ほしの翁などと呼んだことを聯想するのである。もちろんこれらの狂の字義は、いま世に用ひられる狂人の狂の意味と等しくないことはいふ迄もないが、單に風狂といふ意味のみとは思はれない。少くとも「あら物狂ほしの翁」やと咏嘆した言葉は、己が精神の動搖を内省して駭いた刹那のものでなければならぬ。去來が叙景のつもりで「岩鼻やこゝにもひとり月の客」といふ句をなして芭蕉に見せると、芭蕉は立ち所にそれを自稱の句とせよと言つた。去來は、はつとして「予が趣向は一等くだり侍りけり、先師の意をもて見れば少し狂者の感もあるにや」と嘆じてゐる。これらの狂は、主觀の灼熱である。突き出す動力である、輝く光である。否、それらの綜合である。かつ、かれのさびの生活に裏付をし、眞にさびをさびたらしめる礎である。

三十日、月なし千とせの杉を抱あらし
五月雨の雲ふきおとせ大井川
山も庭も動き入るゝや奥座敷
猪も共に吹かるゝ野分哉
吹きとばす石は淺間の野分哉

五月雨を集めて早し最上川
暑き日を海に入れたり最上川
あら海や佐渡に横ふ天の川
塚も動け我泣聲は秋の風
雲霧のしばし百景をつくしけり
木枯に岩ふきとがる杉間哉

われ〳〵は、芭蕉の柴門の辭などの持つリズムにより、ある遒勁なる芭蕉の主觀を窺つたが、これらの句には、もつと鋭く尖つたものを見せられるではないか。この諸句の中でも「山も庭も動き入るや」「木枯に岩ふきとがる」といふ種の表現には、純粹感覺を以て自然に對した者のみ感受される世界が見える。「あら海や佐渡に横ふ」の横ふの表象もしかりである。それは傳統的詩心で物象に對する人の到底到り難い境である。その點において、芭蕉の生活は孤立するもので、十哲の中一人としてそれを繼ぎ得た者はなかつた。その鋭利な感覺の力は、現代に至つて漸く鑑賞者を得たのであると斷じてよろしい。

しかるに主觀の滲り出た以上の句に反照されるのは、芭蕉の纎微な觀察による句である。しかし、それは必ずしも對照を作るものとも言へない。例へば、「猪も共に吹かるゝ野分哉」といふ句を、「初雪

や水仙の葉のたわむまで」といふ句に比すると、對照そのもの、強弱の差別はあるであらう。しかし感じ方の鋭利といふ點には上下がない。すなはち、共に芭蕉のもつ張りつめた主觀の、燃燒の表現である。「枯芝や、やゝかげろふの一二寸」の句の如き、何といふ纖細な官能の表はれであらう。しかもその小天地の寫實の中に、芭蕉の生命が躍如として息づいてゐるではないか。

雪間より薄紫の芽獨活哉

皿鉢もほのかに闇の宵涼

朝露によごれて涼し瓜の土

どむみりとあふちや雨の花曇

白露をこぼさぬ萩のうねり哉

春雨や蜂の巣つたふ屋根の漏

清瀧や波にちり込む青松葉

道細し相撲とり草の花のつゆ

これらは、かゝる點から、わたくしの愛誦してやまぬ句である。わたくしは、薄紫の芽獨活を凝視してゐる芭蕉の俤をそのまゝに思ひ描く。そして、わたくしの想像は、かれの心裡に迫り、かれの心に融け入ることが出來る。

芭蕉の句とリズムの問題、これも殘された大きい問題であるが限られた本論から、これを割愛することについて、親愛なる諸君よ、希くはこれをも諒とせられんことを。